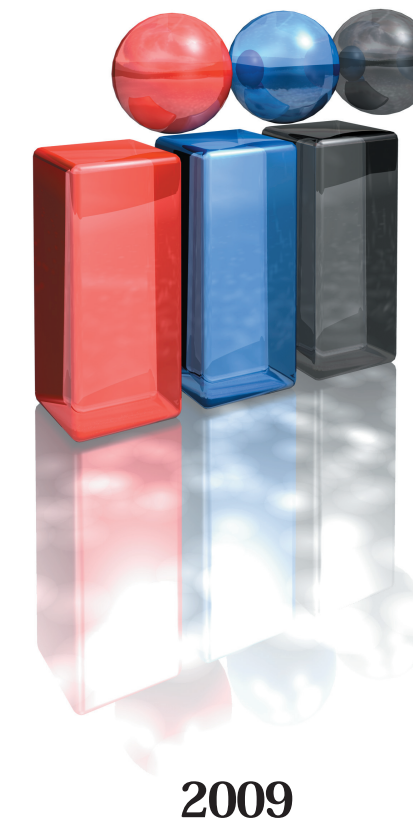


東京大学大学院情報学環・学際情報学府年報

Annual Report

第5号
(通巻37号)

Interfaculty Initiative in Information Studies
Graduate School of Interdisciplinary Information Studies
The University of Tokyo



東京大学大学院情報学環・学際情報学府年報

二〇〇九年度 第五号(通巻三十七号)

東京大学大学院情報学環・学際情報学府



東京大学大学院情報学環・学際情報学府

東京大学大学院情報学環・学際情報学府年報

Annual Report

Interfaculty Initiative in Information Studies

Graduate School of Interdisciplinary Information Studies

The University of Tokyo

第 5 号 (通卷 37 号)

2009 年度

東京大学大学院情報学環・学際情報学府

I. 現状と課題	1
1 組織説明	1
1.1 概要	1
1.1.1 政府予算に基づく大型研究・教育プロジェクト	3
1.1.1.1 文部科学省 21 世紀 COE 「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」	3
1.1.1.2 コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム	4
1.1.1.3 コンテンツ創造教育研究コア	5
1.2 理念と沿革	5
1.3 教職員数	8
1.4 財務	9
1.5 運営	11
1.5.1 情報学環教授会	11
1.5.2 学府委員会	12
1.5.2.1 社会情報学コース	12
1.5.2.2 文化・人間情報学コース	12
1.5.2.3 学際理数情報学コース	13
1.5.2.4 総合分析情報学コース	13
1.5.2.5 アジア情報社会コース	14
1.5.3 教務委員会	14
1.5.4 将来計画委員会	15
1.5.5 入試・カリキュラム委員会	15
1.5.6 施設整備委員会	24
1.5.7 情報セキュリティ委員会	25
1.5.8 情報ネットワーク委員会	25
1.5.9 情報倫理審査会	26
1.5.10 業績評価委員会	26
1.5.11 企画広報委員会	26
1.5.12 図書出版委員会	27
1.5.13 国際活動委員会	27
1.5.14 産学連携委員会	28
1.5.15 知的財産室	28
1.5.16 利益相反アドバイザー	28
1.5.17 ハラスメント予防担当者	28
1.5.18 社会情報研究資料センター運営委員会	28
1.5.19 総合防災情報研究センター運営委員会	29
1.5.20 駒場カリキュラム連携運営委員会	30
1.5.21 WEB 発表会運営委員会	30

1.5.22	学生・留学生委員会	30
1.5.23	情報学環教育部委員会	31
1.5.24	福武ホール運営委員会	32
1.6	事務組織	33
2	教育活動	33
2.1	概況	33
2.2	教育カリキュラム	34
2.3	カリキュラム支援体制	35
2.3.1	主指導教員・副指導教員の配置	35
2.3.2	修士・博士 研究計画書の作成	35
2.3.3	ウェブ発表	35
2.3.4	修士論文中間発表会	36
2.3.5	博士課程コロキウム	36
2.3.6	E-learning 授業 (iii online)	36
2.3.6.1	iii online の目標	36
2.3.6.2	iii online の概要	37
2.3.6.3	iii online の評価	39
2.3.7	ソウル大学大学院との大学院国際共同演習授業	39
2.4	学際情報学府への進学	40
2.5	修士論文及び博士論文の執筆	41
2.6	学際情報学府からの就職・進学動向	44
2.7	学際情報学府以外の教育活動	44
2.7.1	教育部	44
2.7.2	コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム	46
2.7.3	ベネッセ先端教育技術学講座 (寄附講座)	52
2.7.4	電通コミュニケーションダイナミクス寄付講座	53
2.7.5	OKI ユビキタスサービス学寄附講座	53
2.7.6	ユビキタス情報社会基盤学寄附講座	54
3	研究活動	54
3.1	概況	54
3.1.1	文理の相互作用と連携	54
3.1.2	流動教員制度	55
3.2	大型研究プロジェクト	55
3.2.1	文部科学省 21 世紀 COE 「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」	55
3.2.2	超高精細映像と生命的立体造形が反応する新伝統芸能空間の創出技術	59
3.2.3	平成 20 年度科学技術試験研究委託事業「運動性を考慮した強震動・津波予測及び地震・津波被害予測研究」	60

3.2.6	その他の大型研究プロジェクト	61
3.3	附属センターの役割	63
3.3.1	社会情報研究資料センター	63
3.3.1.1	新規教育研究事業「社会情報研究資料センターの高度アーカイブ化事業」	63
3.3.1.2	閲覧室の環境整備とデジタル化対応	64
3.3.1.3	貴重資料保存書庫の設置	64
3.3.1.4	新展示室の設置	64
3.3.1.5	新聞マイクロフィルムのPET化・デジタル化によるバックアップ作成	65
3.3.1.6	購入資料および資料の再配置	65
3.3.1.7	「情報学環アーカイブズ」構築に向けての試み	66
3.4	総合防災情報研究センター	66
3.4.1	災害情報研究の発信	67
3.4.2	災害情報教育プログラムの実施と社会連携	67
3.4.3	災害情報研究の推進と研究拠点としての活動	68
4	社会との交流	69
4.1	国際的委員会	69
4.2	政府・自治体委員会	70
4.3	学協会活動	72
4.4	セミナー・研究会・公開講座	73
4.5	出版活動	79
	東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究	80
4.5.1	『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』	80
4.5.2	『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究・調査実研究編』	81
4.5.3	『英文紀要』	81
4.6	定期刊行物・ホームページ	82
4.6.1	定期刊行物	82
4.6.2	ホームページ	82
4.7	国際交流	83
II.	資料	85
1	沿革	85
2	学環の教員（定員）	86
3	学府の学生数	88
4	教育部	89
5	コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム	89
6	予算	96
7	土地・建物面積	98
8	入試定数と受入数	99
9	年度別入試データ詳細	99

10	修了者数の推移	105
11	学生支援機構（旧育英会）奨学生数	106
12	日本学術振興会特別研究員数	107
13	リサーチアシスタント数	107
14	就職状況	108
15	ベネッセ先端教育技術学講座	111
16	電通コミュニケーションダイナミクス寄附講座	112
17	客員講座等	115
18	研究員（客員）等	116
19	学会賞など受賞者リスト	116
20	論文数	117
21	特許出願・公開数	118
22	東京大学 21 世紀 COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」平成 20 年度の活動	118
23	国際団体役員・委員数	120
24	政府関係委員会委員数	120
25	地方公共団体関係委員会委員数	121
26	ジャーナル編集・会議運営	121
27	定期刊行物一覧	121
28	留学生数の推移	121
29	留学生国籍別一覧	122
Ⅲ. 個人業績編		125
Ⅳ. 外部資金獲得状況		239

I. 現状と課題

1 組織説明

1.1 概要

東京大学大学院情報学環・学際情報学府は、従来の研究科とは異なる形態の大学院組織として、2000年4月に設置された。この大学院組織は、研究組織（教員が所属）である情報学環と教育組織（学生が所属）である学際情報学府という2つの対をなす機構によって構成されている。大学院の組織モデルとして、研究科が研究と教育の統合モデルであるのに対して、学環・学府は分離モデルだといえる。従来の研究科が専門深化と恒常性を基本的な特質とするのに対して、この大学院組織は、全学にわたる情報関連の諸領域をネットワーク的に連携させる横型の組織として設置され、情報学分野の総合的な教育研究を先端的かつダイナミックに推進するのに適した形態として考え出された。

その基本的特徴は、組織構成員の流動性と全学的連携、及び研究組織である情報学環と教育組織である学際情報学府の両立という点にある。すなわち、研究組織である「情報学環」は、固有の基幹教員と、学内既存の研究科・研究所等から3年ないし7年の期間をもって情報学環に教員枠及び身分を異動する多数の流動教員によって構成されている。ここでは、多数の分野横断的なプロジェクト研究を柱に据え、文系理系の区別を越えた情報分野の学融合を目指している。教育組織である「学際情報学府」における大学院学生に対する研究指導は、情報学環の基幹教員と流動教員が行うが、授業科目の担当は、これらの教員以外に他研究科・研究所等に所属する教員にも委嘱する。また、副指導教員制や副専攻制度の積極的な運用を図ることによって、情報関連の広範な学問分野を覆う幅広い学際的教育を目指している。

研究組織である大学院情報学環は、学際情報学圏と社会情報学圏という2つの学圏から構成されている。それぞれの学圏は、次のようにいずれも5つの学域からなっている。

大学院 情報学環

■学際情報学圏

情報生命・思想学域

情報システム・言語学域

情報表現・造形学域

情報環境・認知学域

情報社会・制度学域

■社会情報学圏

ジャーナリズム・メディア学域

情報行動・機能学域

情報法・政策学域

情報経済・産業学域

情報文化・歴史学域

東京大学大学院 情報学環・学際情報学府

Interfaculty Initiative in Information Studies & Graduate School of Interdisciplinary Information Studies



教育組織である大学院学際情報学府では、一方では情報現象についての文理を越境する幅広い視野を、他方では社会情報学からコンピュータ科学までの高度な専門的能力を、同時に身につけた人材を持続的に社会に提供していくために、それぞれの自律性と相互の連携をあわせもったカリキュラムを編成し、それを運営する以下のような4つのコースを設置している。このコース制は、教育効果を上げるために学生をコースに振り分けのものであって、教員がコースに帰属するものではない。教員は学環に帰属している。

また、学際情報学府は学際情報学の1専攻という形式をとってはいるが、この「専攻」は従来の研究科における専攻とは異なるものであり、そこに教員が帰属しているわけではない。

社会情報学コース

このコースでは、メディア、コミュニケーション、社会情報に関わる社会現象・文化現象を分析するための学識を養い、専攻分野における研究および応用の能力を培うことを目的とし、社会情報学の発展に貢献できる研究者を養成するとともに、社会人を受け入れて研究手法を身につけさせ、知識の高度化をはかる教育を行っている。

文化・人間情報学コース

このコースでは、情報学の視座から文化・人間科学の諸領域を体系的に再編し、生命現象や進化、身体知覚から現代文化、メディア、映像、テキスト、アーカイブ、リテラシー、学習環境までの21世紀的な諸課題に理論的かつ実践的に取り組んでいくことのできる深い学識と精緻な方法的能力をそなえた研究者や実践者を養成する教育を行っている。

学際理数情報学コース

このコースでは、21世紀の社会・産業・個人の情報環境の基盤となる専門的な理数情報学の知を深めるとともに、あわせて他分野と協調して学際的に情報学のフロンティアを切り拓いていくための幅広い学識を身につけた研究者及び表現者を養成している。

分析情報学コース

本コースは、平成18年4月に設立された。センサーから大量のデジタル情報を取得し、それを必要な場所や機器へ通信し、保存・解析したうえで、有効に活用する分析情報学の学際的な専門教育を実施している。

アジア情報社会コース

2008年に新設されたこのコースでは、情報通信技術の影響をますます受けつつある現代アジアの諸社会や国際関係に対する分析力や洞察力を養成する為の大学院教育を行っている。講義や指導はすべて英語で行われ、学年は10月から始まる。

これらの5つのコースそれぞれで、一般の入試と並び、実践的な経験や目的を重視し、社会人を主要な対象とした特別選抜を実施している。

情報学環教育部

また、学部生を対象とした教育カリキュラムとして、情報学環教育部がある。教育部では、大学2年次以上の在学者及び大学卒業生の中から、将来、新聞、放送、出版などジャーナリズムの諸分野で活動することを志す者、あるいはマス・メディア、コミュニケーション及び社会情報現象、さらには学際的な情報学の学問的研究に関心を持っている者を毎年50名程度研究生として受け入れ、一定のカリキュラムのもとに、修業年限2年で基礎的な専門教育を実施し、修了に必要な単位を修得した者には修了証書を授与している。

1.1.1 政府予算に基づく大型研究・教育プロジェクト

情報学環の中には多様な研究・教育プロジェクトが展開されているが、競争的政府予算に基づく大型の研究プロジェクトとして、①文部科学省21世紀COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」、②コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム、③文部科学省特別教育研究経費（教育改革）「コンテンツ創造教育研究コア」の3つがあげられる。

1.1.1.1 文部科学省21世紀COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」

東京大学大学院情報学環を核とした、文部科学省21世紀COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」（平成16年度～20年度）が20年度で終了した。本プログラムは、あらゆる分野や場面において、

デジタル情報、特に状況認識技術によって得られたコンテキスト情報を活用した、効率的で効果的な情報サービスが実現される、ユビキタス情報社会基盤の確立と課題の解決に向け、情報学を核とした理論基盤研究や技術基盤研究、社会基盤研究にわたる幅広い新たな学際的な学問基盤を確立することを目的としていた。

次世代ユビキタス情報社会基盤を形成する過程において、次の実績を上げることができた。研究面においては、従来積み重ねてきた組み込みコンピュータ、ユビキタス ID アーキテクチャを核としたユビキタス技術を進化させ、ユビキタス場所情報システムの確立や ucode によるトレーサビリティ技術、セキュリティ技術の確立を行った。そして、国際標準活動に関しても積極的に参画し、国連の下部組織である ITU-T の WG において、事業推進担当者が重要な役割を担い、その結果、日本発・本拠点発の技術を世界標準にまで押し上げることに成功した。また、デジタルアーカイブ分野においても最先端の技術によるアーカイブ構築技術を確立し、さらにはユビキタス・コンピューティングとの融合を実現することができた。また、教育面においては、総合分析情報学コースが中核となってカリキュラムの充実を図り、また、世界最大規模の実証実験を通じ大学院生並びに若手研究者の育成を実施した。また、最先端技術を用いたデジタルアーカイブ構築事業を通じ、デジタルアーカイブに精通したスペシャリストの育成にも貢献した。さらには多数の国内外のシンポジウムを通じ文系理系を問わずあらゆる分野の人々に対して情報発信を行い、思想啓蒙から政策提言までを行った。

1.1.1.2 コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム

コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム（以下、コンテンツ創造科学と記す）は平成 16 年度文部科学省科学技術振興調整費（以下、振興調整費と記す）における新興分野人材養成プログラムで採択されたものであり、平成 16 年度から 5 年間の計画として実施された。なお、平成 16 年度の振興調整費においては、548 件の申請のなかから、137 件がヒアリングを受け、最終的に 60 件が採択されており、採択率は約 11% である。特に、当該課題が採択されたプログラム（新興分野人材養成）においては、76 件の申請のなかから、34 件がヒアリングを受け、最終的に 18 件が採択されており、採択率は約 24% となっている。

コンテンツ創造科学が主眼とするのは、わが国におけるデジタルコンテンツ分野を率いる人材の養成であり、特に①プロデューサー、②技術開発者、③指導的教育者という 3 種の人材の養成を目標としている。

これらの人材を養成するために、本学において以前からデジタルコンテンツ分野の研究を推進していた研究者が大学院情報学環を中心として集結し、さらに産業界からコンテンツ産業の第一線で活躍する実務者を指導者として招聘することで人材養成を進めた。

このプログラムにおける被養成者は主として東京大学に所属する修士課程の学生を中心として選抜しているが、学部学生・博士課程学生・社会人であっても履修に十分な学力を有する場合には、選考の対象とした。また、修了年限は 2 年間であり、副教育プログラムという全学的な位置づけとなっている。

1.1.1.3 コンテンツ創造教育研究コア

コンテンツ創造教育研究コアは、文部科学省特別教育研究経費（教育改革）のもとで平成 17 年度から 5 年間の計画として実施されてきたものであって、東京大学としてのコンテンツ創造に関する教育モデルを構築し、横断型連携をおこなう教育研究体制を整備することを目的している。具体的には、上記の「コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム」における教育実践、ならびに学内外のコンテンツ関係者とも連携して、①コンテンツ創造へ向けた学部教育のありかた、②コンテンツ創造へ向けた大学院教育のありかた、③コンテンツ創造教育研究拠点の整備、の 3 項目について検討を進めている。

①の学部レベルのコンテンツ創造教育に関しては、新学科設立を含むさまざまな可能性について検討した結果、本学としては、従来の教育の枠組みに拘ることなく総合大学としての特色を生かした全学レベルでの横断型、開放型教育を目指すことが適当であるとの結論が得られた。この立場から、平成 18 年度より「コンテンツ創造学部横断型教育プログラム」の試行を開始し、これが全学授業カタログで学部横断型教育プログラムとして初めて紹介されるなど、学内的にも注目される試みとなった。この実績を基礎に全学的なレベルで横断型教育プログラムの取り組みが進み、平成 21 年度からは東京大学全学としての学部横断型教育プログラムが制度化され、全学的な教育体制の整備が進むことになっている。

②の大学院教育についても、コンテンツ創造分野の特質を活かした学際的な教育体制の整備を目指して、コンテンツ創造情報学教育へ向けたカリキュラムの詳細な設計が進められてきた。すなわち、わが国のコンテンツ産業界が必要とする人材は、知識・技能だけでなく、みずからコンテンツ産業界を先導し、コンテンツイノベーションを実現する人材、創造力に富んだコンテンツをプロデュースし世界的に活躍する人材、独創的なデジタル先端技術を開発する人材であるとする立場から、その教育カリキュラムの設計をおこない、学際情報学府における横断的な教育カリキュラムとして実現すべく、既存教育コースとの連携や外部資金の導入も視野にいたした検討が進められた。また、平成 22 年度以降に向けて、コンテンツ教育研究の国際的な展開を目指す発展的な取り組みが構想されていった。

③の教育研究環境の整備は、産学・地域・大学間連携、および学内連携によって教育研究を戦略的に行うための物理的な建物拠点の整備を目指すものであり、拠点となる建物建設に向けて学内の関連部局と連携した推進が模索された。また本事業では、関連して「文の京・大いなる学びシリーズ」を発足させ、地域連携の新たな可能性も追求している。

1.2 理念と沿革

* 情報学環・学際情報学府設立の経緯

情報学環・学際情報学府設立の背景には、次のような認識があった。近年にみられる情報技術の急速な発展と利用の拡大によって、「情報」が現代社会において果たす意味は、決定的に重要なものとなってきた。技術的体系だけでなく、人間の行動や意識、社会のさまざまなシステム、文化や芸術、産業や政治・国際関係など、人間社会のあらゆる側面が、「情報」の様式変化のインパクトによって、根本的な変革を促されつつある。21 世紀には、この情報様式のあり方が、地球上の生命や人間、社会の動向を大きく規定する基盤となることは確実だ。こうした状況を背景に、「情報」に関する、より総合的でよ

り高度な教育研究の社会的意義が高まり、それに応えうるような教育研究体制の整備が、喫緊に求められていた。

情報にかかわる教育研究は、今日、きわめて多様な学問領域で行われており、しかも、各個別領域に固有な対象や方法とも深く結びつきながら発展してきている。こうした実態を有効に生かしながら、相互間の有機的連携を促し、学際的な教育研究をすすめることが、情報学の総合的な発展のためには不可欠だと考えられた。また、情報学は、急速な発展途上にある学問分野であることから、一方では研究面で、先端的な学融合に就中に取り組みうる緊密な共同体制を設ける必要があると同時に、他方では教育面で、カリキュラム編成や研究指導體制の幅広さと研究内容の進展や時代の要請の変化に即応できる組織的柔軟性を確保する必要があった。こうした特性をもっている情報学の教育研究上の目的を効率的かつ実効的に達成するために、平成 12 年 4 月から、学校教育法第 66 条に定める「研究科以外の教育研究上の基本となる組織」として、東京大学大学院に、「情報学環」及び「学際情報学府」が設置されたのである。

「情報学環」と「学際情報学府」が両者一体となって構成されるこの大学院組織は、専門深化と恒常性を基本的な特質とする従来の研究科とは違って、全学にわたる情報関連の諸領域をネットワーク的に連携させる横型の組織として設置され、情報学分野の総合的な教育研究を先端的かつダイナミックに推進するにふさわしい形態をとった。

前述の通り、その基本的特徴は、組織構成員の流動性と全学的連携、及び研究組織である情報学環と教育組織である学際情報学府の両立という点にあり、その組織構造は次のように作られた。研究組織である「情報学環」は、基幹教員と流動教員によって構成された。基幹教員とは情報学環が固有のもつ教育枠で採用される教員であり、流動教員とは既存の研究科・研究所等から 3 年ないし 7 年の期間をもって情報学環に定員及び人が移され、それによって情報学環教員となる教員のことである。そこでは、多数の分野横断的なプロジェクト研究を柱に据え、文系理系の区別を越えた情報分野の学融合が目指された。

教育組織である「学際情報学府」における大学院学生に対する研究指導は、情報学環の基幹教員及び教育にも従事する流動教員が行なう。学際情報学府における授業科目の担当は、これらの教員が行うほか、他研究科・研究所等に所属する教員にも兼担当教員として委嘱する。

*** 社会情報研究所の合流、新組織設立に至る経緯**

このようにして設立された情報学環・学際情報学府は、2004 年 4 月 1 日、東京大学社会情報研究所と組織統合し、新たな一步を踏み出した。社会情報研究所は国立大学附置研究所であり、その歴史をたどれば約 75 年間にわたる伝統をもつ研究機関であった。

1929 年 10 月 1 日、東京帝国大学文学部に新聞に関する学術研究施設として新聞研究室が設置された。新聞研究室は、帝国大学の法学部、文学部、経済学部からそれぞれ 1 名の指導教授が横断的に参加し、1 名の指導補助、および 3 名の研究員が置かれるという、規模は小さいが、今日の情報学環のさきがけをなすような仕方で東京帝国大学を横断的につなぐ学際的な研究組織であった。またその運営は、渋沢栄一や阪谷芳郎、本山彦一、徳富蘇峰、杉村廣太郎といった、当時の財界、新聞界の名士たちが協力して募られた寄附金によってまかなわれ、今日の産学連携のさきがけをなす形態をとっていた。設立時の

新聞研究室の指導教授としては、法学部から南原繁教授が、文学部から戸田貞三教授が、経済学部から河合栄治郎教授がというように、戦前期日本の法学、社会学、経済学をまさしく代表する教授3名が参画し、指導補助として実質的な研究組織の中核を担った小野秀雄（初代新聞研究所長）を支えていた。

このような前史を経て、戦後の1949年に新聞研究所が正式に東京大学附置研究所として発足した。その根拠をなす国立学校設置法（49年5月31日公布）には、「新聞及び時事についての出版、放送又は映画に関する研究、並びにこれらの事業に従事し、又は従事しようとする者の指導及び養成」と規定されていた。すなわち、新聞研究所は設立の当初から、狭義の新聞に限らず、雑誌、放送、映画などを含むマス・メディア全般を研究対象とする学際的な研究組織として出発していたわけである。また、「新聞」という言葉そのものも、今日のように狭義の新聞紙だけを指していたわけではなく、ニュースや報道媒体全般をも含みこんだ概念であるという理解がその当時にはあった。

やがて、新聞研究所は20世紀後半の放送をはじめとするマス・コミュニケーションの発展を受けて組織の拡充と研究部門の再編を重ねていった。1957年度からは、基礎部門：マス・コミュニケーション理論、歴史部門：マス・コミュニケーション史、特殊部門1：コミュニケーション過程、特殊部門2：マス・コミュニケーション・メディア、特殊部門3：世論及び宣伝という5研究部門の構成となり、63年度からはこれに放送部門が、さらに74年度からは情報社会部門が、80年度からは社会情報システム部門が加わった。このような部門構成から明らかなように、東京大学新聞研究所は、マス・コミュニケーション研究を基本に据えながら、トータルな社会的コミュニケーション研究をも視野に収めつつ、日本の国立大学では唯一の現代社会の最も中枢的な研究課題たる情報の社会的側面に関する学際的、総合的な研究として発展し、高い評価を得た。

そして、このような実績を基盤にして、1992年4月1日、「社会情報の総合的研究」を目指して新聞研究所から社会情報研究所への改組が行われた。改組後の社会情報研究所は、情報メディア、情報行動、情報・社会という3大部門を置き、旧新聞資料センターを改称した情報メディア研究資料センターを附置するという体制をとって、1992年から95年まで続いた文部省科学研究費重点領域研究「情報化社会と人間」をはじめ、情報化社会に対する学際的な取り組みを本格的かつ先端的に進めた。1996年には外部評価を実施し、高い評価を得た。そのときの産業界パネルの委員は小池唯夫（毎日新聞社長）、川口幹夫（NHK会長）、関本忠夫（日本電気会長）、大塚信一（岩波書店社長）、福川伸次（電通総研所長）の方々であった。

高度情報社会の深まりのなかで、東京大学における情報をめぐる教育研究体制の再編が議論になるたびに社会情報研究所は、文系の研究所として、その流れに身を置いてきた。そして、情報学環・学際情報学府の設立構想の際には積極的に関わり、人的リソースの提供において文系部局としては最大の貢献を果たした。社会情報研究所は情報学環・学際情報学府の設立後も密接な関係をもち、学環・学府を支援してきた。そして、国立大学法人化を前にした、国立大学附置研究所の見直し方針のなかで、社会情報研究所は情報学環・学際情報学府との合併を選択し、大学附置研究所から大学院組織へと全面的に移行したのである。それは、文系のなかでの学際的研究から、文理相互浸透のなかでの学際的教育研究へのシフトであり、情報現象を研究対象として組織としてはある意味で必然的な流れであり、新たなスプリングボードであったといえよう。

1.3 教職員数

給与の財源が運営費交付金となっている教職員（常勤教職員）の採用枠は 71 人及び特別教育研究経費による教員は 1 名、計 72 人となっている。内訳は図 1-3-1 のとおり、教授等の常勤教員 58 人、常勤職員 14 人となっている。このほか、大学院情報学環は、外部資金に基づく特任教員や研究補助等の非常勤職員から構成される。

また、大学院情報学環の組織の一つとなっている基幹教員と流動教員の内訳について見ると、図 1-3-2 のとおりとなっている。基幹教員の定員数は 35 名、流動教員の定員数は 23 名とおおむね同数であり、両方の教員で情報学環の研究教育組織が等しく支えられていることがわかる。

図 1-3-1 教職員採用枠（全 72 人）の内訳
（平成 20 年 4 月 1 日現在）

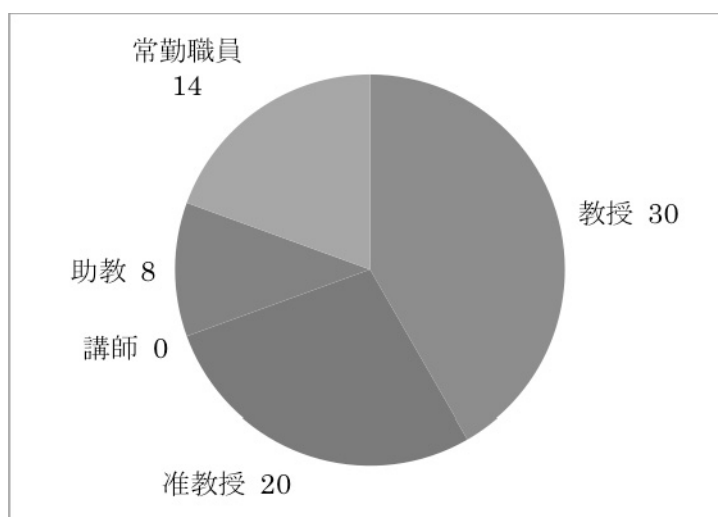
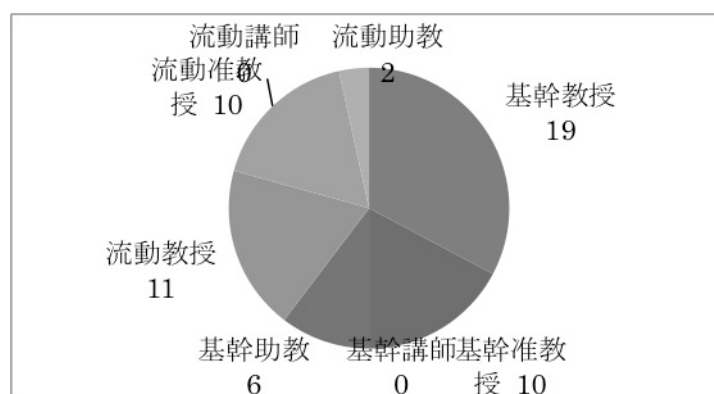


図 1-3-2 常勤教員採用枠（58 人）の内訳



1.4 財務

平成 20 年度予算に基づき、大学院情報学環の財務構造を説明する。なお、対象は、部局の研究教育に直接関係する運営費交付金と外部資金（科学研究費補助金等）とし、常勤教職員の人件費及び部局の管理が直接に及ばない授業料及び入学検定料については特に言及しない。

さて、具体的な数字を見る前に、学環財務の特徴である流動教員に関する資金の取り扱いについて説明する。資金計上の段階では、流動教員に係る資金及び基幹教員に係る資金のいずれの取り扱いに差がない。すなわち、運営費交付金及び外部資金のいずれも、一旦、大学院情報学環の予算として計上される。しかしながら、執行の段階に入ると、流動教員に係る資金は流動元部局に移る。そして、大学院情報学環に残るのは基幹教員に係る資金と社会情報資料センターなどの大学院情報学環固有の事務に関するものだけとなる。このため、教員の研究教育資金に付随する間接経費については、流動教員分は流動元で執行され、大学院情報学環に残り執行されるのは基幹教員分だけとなる。

それでは、数字に基づき、大学院情報学環の財務構造を概観する。平成 20 年度の収入総額は 1,006 百万円で、比率としては、運営費交付金¹が 2 割強に対して外部資金が 8 割弱を占めている。

次に、運営費交付金の使途内訳を見ると²、表 1.4.1 のとおりとなる。他部局にない特徴としてあげられるのが、流動元部局に移される資金（約 64 百万円）が全体の約 3 割を占めることである。したがって、運営費交付金のうち、大学院情報学環の裁量が及ぶのは、残り約 7 割の約 1 億 5 千万円となる。そして、約 1 億 5 千万円のうち約 5 割（全体の約 37%）が、消耗品等一般経費や非常勤職員人件費という事務管理の経費となる。残りの 5 割（全体の約 33%、約 7 千 1 百万円）が、直接の研究教育活動に充てられることになる。このうち、約 1 千 2 百万円は社会情報資料センター経費と約 1 千 2 百万円の図書費は、同センター及び図書室を維持するために必要な資料等の購入に充てられ、固定的経費の性格を帯びている。

経費区分	執行額(単位:千円)	備考
光熱水料	0	*間接経費より支出 (19,746 千円)
通信運搬費	3,175	
建物保守料	0	*間接経費より支出

¹ 本項では、運営費交付金のうちコンテンツコア分(58,218 千円)及び新規教育研究事業（社会情報研究センター高度アーカイブ化：36,450 千円）については外数として扱っており、収入総額等には含んでいない。

² 本段落では、部局長裁量経費（約 9 百万円）については、外数として扱い、割合の算出の際には分母及び分子のいずれにも含まれない。

		(3,464 千円)
業務委託料	10,699	*下記については間接経費より支出 (警備業務:3,464 千円) (空調・環境衛生:300 千円)
非常勤職員人件費(事務)	8,681	
非常勤職員人件費(教育教育)	27,828	
旅費交通費	1,334	
事務/教育研究一般用経費	27,352	
教員研究費	25,274	
各種委員会等経費	45,608	*委員会内訳
施設整備委員会		4,819
情報ネットワーク委員会		1,950
業績評価委員会		1,269
企画広報委員会		4,497
図書・出版委員会		9,280
社会情報研究資料センター 運営委員会		12,112
国際活動委員会		122
教務委員会		925
学生留学生委員会		0
入試実施委員会		3,212
教育部教務委員会		311
福武ホール経費		2,058
総合防災情報センター経費		5,053
小計	149,951	
流動教員分	63,832	
総計	213,783	
部局長裁量経費	8,940	

表 1.4.1 平成20年度実績(運営費交付金)

外部資金の収入内訳は、表 1.4.2 のとおりである。ここに計上しているのは、外部資金関係間接経費（学環分）を除いては、直接、研究教育に充当される資金の金額となっている。外部資金のうち、大学本部及び流動元部局の間接経費となる金額については計上していない。なお、外部資金についても、流動教員の外部資金に係る間接経費は流動元の部局に移され、大学院情報学環では計上されない点は同じである。

区分	総額	うち流動元執行分	学環収入分
寄附講座	129,000	0	129,000
寄附金	53,304	12,906	40,398
科学研究費補助金	110,680	56,950	53,730
受託研究費	382,747	162,542	220,205
共同研究費*	44,919	19,444	25,475
科学振興調整費*	90,454	0	90,454
COE 拠点形成	189,900	0	189,900
間接経費（部局分）	63,243	19,876	43,367
外部資金合計	1,067,247	271,718	792,529
*:一部に間接経費および実質的な間接経費を含む		(単位：千円)	

表 1.4.2 外部資金の収入内訳

大学運営費交付金が毎年度削減される一方で、学際的な情報学に対する研究及び教育ニーズが引き続き高いことを踏まえると、外部資金の積極的な獲得は極めて重要である。定常的な研究・教育のための資金であっても例外とは言えず、特に新たな資金を必要とする場合には外部資金の確保は不可欠となっている。また、外部資金は基本的に時限的という性格を有していることを踏まえると、現在進行中の研究等のプロジェクトで確実に成果をあげるにとどまらず、時代を先取りした研究及び教育テーマを設定していけるように、資金的なリソース配分についても常に見直しを行い、フィードフォワード的な対応を取っていくことが課題となる。

1.5 運営

1.5.1 情報学環教授会

大学院情報学環教授会が研究組織としての情報学環の意思決定機関である。教員が帰属するのは情報学環であり、情報学環教授会は基幹教員と流動教員によって構成され、両者の間に権利と義務において相違はない。教授会は月に1度開催され、重要事項を審議し決定する。人事に関しては人事教授会が開催される。

部局長たる情報学環長は教授会における選挙によって選任され、総長によって任命される。被選挙権は教授にあり、選挙権は講師以上にあるが、基幹教員と流動教員は同等の権利を持つ。学環長の任期は

旧情報学環と旧社会情報研究所の統合後の最初の学環長は2年、その後の、つまり2006年4月からの学環長は3年となっている。再任はない。

学環長が副学環長2名を指名する。学環長が主宰する総務委員会が、教授会と教授会の間で諸案件や方針について協議し、教授会にかけるとしての準備をする。また、総務委員会が決定し、教授会に報告すると定められた事項もある。総務委員会は学環長、副学環長、両学圏長、重要委員会の委員長、3コース長、学環長補佐などによって構成され、ほぼ週に1度開催される。これが実質的な執行部である。

1.5.2 学府委員会

教育組織としての大学院学際情報学府の決定機関は、学府委員会である。そこで教務関係、入試関係、学生の身分の異動などの重要事項が審議され決定される。学府委員会の構成メンバーは学府の教育に関わる教員であり、情報学環の教員のほか兼任教員がこれに加わる。学府のもとに学際情報学専攻の専攻長が置かれており、学環長が指名する。専攻長は教務委員会と入試実施委員会を組織する。

学府は社会情報学コース、文化・人間情報学コース、学際理数情報学コース、分析情報学コースに分かれて入試を行い、合格した学生はそれぞれのコースの所属となるが、それぞれのコースの運営に責任を持つ、コース会議および運営委員会が置かれている。各コース長が責任者を務め、適宜開催される。

1.5.2.1 社会情報学コース

社会情報学コース運営委員会の主な業務は、他のコース運営委員会と協力しつつ、入試実施委員会の指示下で修士課程入学試験および博士課程入学試験を実施することである。その際、修士課程入試問題のスケジュール作成、問題作成者の決定も大きな任務の一つである。また、入学試験同様、他のコース運営委員会と協力しながら、教務委員会の指示下で、修士課程学生の「修士論文中間報告会」、博士課程学生の「博士課程コロキウム」の実施に携わっている。

2008年度において社会情報学コースでは、修士課程、博士課程ともに、ほぼ前年の選考方式を引き継ぐ形で実施した

今後の課題として、(1)とくに修士課程入学試験において、他コースとの共通性を高めつつ、より適切な人材を選抜する入試方法のあり方を検討すること、(2)修士課程在学生在が効率的に社会情報学を学習し、質の高い修士論文を執筆できるよう、コースワーク・カリキュラムおよび論文指導を充実させること、(3)博士課程在学生在が在学期間内に博士論文を執筆できるよう論文執筆指導に関わる授業・演習を充実させ、段階的に無理なく論文提出できる教務スケジュールを構築すること、等が考えられる。

1.5.2.2 文化・人間情報学コース

文化・人間情報学コースは、社会科学系の社会情報学コースと自然科学系の先端表現情報学コース、総合分析情報学コースとをつなぐ中間の位置にあり、文理の融合を進めながら、新しい学際的な情報学の創造に正面から取り組んでいる。このコースを担当している教員には、基礎情報学、進化学、生態心理学、科学技術コミュニケーション、知覚情報論、記号学、映像学、カルチュラル・スタディーズ、歴史情報学、アーカイブ論、メディア・リテラシー、メディア表現、教授・学習設計、計量社会分析、統計学、脳神経科学などの諸領域の専門家が揃い、新しい融合的な知の地平を拓きながら授業や学生の指

導、いくつかの教育上のプロジェクトの実施に当たっている。このコースの教育は、①生命・身体・環境、②文化・表象・映像、③メディア表現・学習・リテラシー、④アーカイブ・歴史情報という、より理論的なものから実践的なものまでの4つの大きな柱を軸にしつつ、生命現象や進化、身体知覚から現代文化、メディア、映像、テキスト、アーカイブ、リテラシー、学習環境までの幅広い21世紀的諸課題に理論的かつ実践的に取り組んでいる。教員の専門分野、また学生の研究テーマも多岐に渡るため、基礎的な研究方法や学術リテラシーを涵養するために、コースの選択必修科目である文化・人間情報学基礎（4単位）と文化・人間情報学研究法（2単位）にはさまざまな工夫を凝らしており、上記の4つの柱に応じた基礎力増強のトレーニングとフィールドワーク型のグループ実習、量的・質的研究法の訓練、社会情報学コースとの合同科目などが用意されている。

1.5.2.3 学際理数情報学コース

学際理数情報学コースは、教員26名（学環基幹2名、流動7名、兼担・課程担当16名、兼担・授業担当1名）が担当しており、毎年修士（定員19名）と博士（定員9名）の学生を受け入れて教育している。

コースは、学際理数情報学コース運営委員会（コース会議）のもとに、コース長、副コース長、教務担当、入試担当がおかれ、他のコースと協力しながら運営されている。

このコースの特徴は、学環の基幹教員のみならず、関連部局（情報理工学系研究科、工学系研究科、総合文化研究科、生産技術研究所、情報基盤センターなど）からの多くの流動教員、兼任教員、さらには授業担当・併任・客員教員の協力によって運営されていることである。これによって、多様な背景と目的を持つ学生の教育が可能になっているが、一方で関係教員の負担が課題となっている。

今後の課題としては、(1)多様な背景を持つ学生を、「学際的に協調できる理数系情報学の専門家」として育成するための、入学試験選抜方法の検討、教育カリキュラムの検討、(2)幅広い部局からの教員の協力により成り立っているコース運営方法の改善、などが挙げられよう。

1.5.2.4 総合分析情報学コース

総合分析情報学コースは、平成18年4月に設立された新しいコースである。本コースでは、主にコンピュータサイエンスやコンピュータネットワークの基礎知識を基に、センサーや観測衛星から大量のデジタル情報を取得し、それを必要な場所や機器へ通信し、それを保存・解析したうえで、更に実社会において有効に活用する分析情報学の学際的な専門教育を実施している。分析情報学が有効に適用できる分野は多岐にわたり、農学や水産学、環境学、資源学、社会学、考古学といった学問分野をはじめ、災害支援や遭難救助、社会安全保障、国土や社会基盤の管理保全といった国レベルの施策、更には情報セキュリティポリシーの策定やインターネット等のサイバー空間の管理といった分野へも及ぶ。こうした現実社会に深く関わる技術課題とともにそれを支える社会制度までにも興味を持ち、膨大な情報を活用して確固たる決断を下すことが可能な人材並びに、分析情報学及び計算機科学の研究者を育成することを目標としている。

1.5.2.5 アジア情報社会コース

アジア情報社会コース International Master's/Doctoral Degree Program: Information, Technology, and Society in Asia (ITASIA) は、大学院情報学環と東洋文化研究所の協力に基づき、2008年4月に発足した、大学院学際情報学府の5番目のコースである。留学生、日本人を問わず、アジアや世界の舞台上で専門的職業人として活躍することを志す学生を対象に、情報通信技術の発達に大きな影響を受けている現代アジアの社会と国際関係に対する分析力と洞察力を養う大学院教育を目指し、2007年度から準備が進められてきた。

本コースの特徴は、すべての教育を英語で行い、学生に日本語能力を求めないことである。入学時期は10月に一本化し、入学者の選抜も、筆記試験ではなく、TOEFL・GREのスコア、推薦書、研究計画書やこれまでの業績などを含む書類選考に基づいて行い、さらに学内外の支援により上位合格者に与える奨学金枠を用意することで、とりわけこれまで英語圏に進学していたアジアの優秀な学生に対して、日本の東大で学ぶことを現実的な選択肢として提示している。

修士課程は、グローバル化するアジアにおける変容する政治的、経済的、社会的現実を把握できるよう、アジアの歴史と国際関係、メディア研究、社会科学方法論、情報技術という文理にまたがる4分野の必修基礎科目を軸に様々な関連科目を提供するとともに、修士論文完成に向けた段階的行事と個別指導を通じて学生を訓練し、それぞれの専門分野で適切な判断や提言を行える修士生を送り出すことを目指している。

博士課程は、アジア研究および情報学の研究における高水準の研究者・専門家の養成を目的としており、文理にわたる広範な知識とともに、政治学、経済学、メディア研究その他の社会科学における先端的研究に必要な調査研究法と理論的分析能力を修得する機会を提供する。

初年度である2008年度は、従来からの学際情報学府担当教員に加え、英語を母語とする2名の教員を含む新たな学府担当教員や協力部局教員の協力を得て教育運営体制を整えつつ、ウェブサイトやパンフレット、ポスターなどによる広報に努めて6月まで入学希望者を募り、7月まで選考を行った。その結果、第1期生として、修士課程7名、博士課程1名が10月に入学し、コースにおける教育が開始された。さらに、第2期生からは出願・選考時期を大幅に繰り上げることとなり、2009年1月から選考が進められた。

1.5.3 教務委員会

教務委員会は、大学院学際情報学府の教育運営の中核をなしている。大学院学際情報学府では、情報学環に属している基幹・流動の教員に加え、学内兼任教員、授業担当教員、客員及び非常勤講師などから成る教員スタッフが学生指導に当たっている。その数は、平成20年度現在で、基幹教員28(教授13、准教授15)、流動教員21(教授11、准教授10)、兼任・課程担当教員32(教授21、准教授11)、兼任・授業担当教員7(教授6、准教授1)、客員教員2(准教授2)、非常勤講師20、総計110名となっており、修士課程1学年約95名、博士課程1学年約50名、学府全体で約340人の大学院生を教育するにも十分な教師陣を備えている。教務委員会では、これらの多数の教員に協力をしていただきながら、カ

リキュラムの運営と改善、授業時間割の編成と講師の手配などの基本的な業務の他に、後述するような大学院生たちの教育研究促進のための諸々のプログラムを実施している。

1.5.4 将来計画委員会

将来計画委員会は、2004 年度に、大学院情報学環の長期的な戦略を検討する委員会として設置された。2008 年度は、新たに全学的に導入された新 RA 制度のあり方について、昨年度からの懸案として引き継がれた特任スタッフの組織内での位置づけや助教の業務負担減と関連させながら検討し、RA および学術専門員との業務切り分けを明確にした制度を設計した。

1.5.5 入試・カリキュラム委員会

入試制度、カリキュラム制度にかかわる問題を、学環・学府の組織運営体制の根幹にまで立ち戻って再点検し、必要があれば改善・見直しを提案する検討委員会として 2008 年度に設置された。関連する常設委員会との協議やヒヤリング、拡大検討会議をおこない、(1) 組織運営上の一般的問題点、(2) 教育体制上の一般的問題点、(3) 研究体制上の一般的問題点について議論を重ねた。その結果、7 月の教授会で「検討の指針」を提示し、9 月教授会では「改革の柱」を提示、11 月教授会では「改革の提案(その 1)」を提示して承認され、12 月教授会では「改革の提案(その 2)」を提示して承認、さらに翌 2009 年 2 月教授会で「改革の提案 (その 3)」を提示して承認された。3 月の教授会で以下の「入試・カリキュラム制度検討委員会」報告が提示され承認された。

「入試・カリキュラム制度検討委員会」報告 2009.3.13 (3.06 総務委員会了承)

委員長 石田英敬

委員 池内克史 澤田康文 石崎雅人 橋元良明 佐倉統 坂村健 田中明彦

事務 学務係

情報学環「入試・カリキュラム制度検討委員会」は、平成 20 年 4 月の発足以来、学際情報学府の入試およびカリキュラムの制度について、制度的な問題点を検討し、改善すべき項目を挙げ、改革の方向を提案する作業を行ってきた。

ほぼ一年間にわたる継続的な検討作業と検討委員会でのヒヤリング、各種委員会との懇談、教員によるブレインストーミング、総務委員会および教授会での改革の方向の提案と審議をへて成案を得てきたので、その全体を平成 20 年度最後の定例教授会の機会をとらえて以下に概略を報告する。

I. 検討の指針

「入試・カリキュラム制度検討委員会」は、平成 20 年度 7 月の情報学環教授会において承認された以下の指針にもとづき検討作業を行った。

1. 委員会の任務

「入試・カリキュラム制度検討委員会」は、入試制度、カリキュラム制度にかかわる問題を、学環・学府の組織運営体制の根幹にまで立ち戻って再点検し、必要があれば改善・見直しを提案することを目的とし、関連する常設委員会との協議やヒアリング、拡大検討会議をおこなう。

2. 検討作業の経過

定例委員会を月1回2回のペースで開催するとした。

将来計画委員会、教務委員会、入試委員会など常設委員会の関係者との懇談・ヒアリングを実施するとした。事務関係者のヒアリングを実施するとした。さらに教員全員参加による拡大検討会議を実施するとした。

3. 現状認識

委員会は、以下の現状認識のもとに、検討作業を行うこととなった。

2000年に発足した情報学環・学際情報学府では、2004年度の旧社会情報研究所との合併を経て、現在では1専攻5コースとなり、学生数の増加も著しい。新しい大学院組織としての創立以来紆余曲折をへてきたが、組織の発足と整備の立ち上がり期の約10年を終え、次の20年を準備すべき時期に差しかかっている。情報分野における新しい知の創出へ向かうという設立時の清新さを維持し発展させ、成熟と持続可能性の次の10年への布石を考えるときである。問題点を虚心坦懐に洗い出し、大胆に点検・見直しに着手すべきである。自己点検の眼差しは厳しすぎるほどに厳しくあるべきであり、そこから問題を発見し、制度設計に反映すべきである。

4. 問題点の指摘

委員会は以下の問題点を列挙した上で検討作業を行った。

1. 組織運営上の一般的問題点

(1) 運営の「ロード」の問題

組織整備を短期間に急速に進め組織を拡充した結果、「成功の裏面」として組織運営のロードが過度に増えていないか？とりわけ、いわゆる「若手教員」に過度な負荷がかかっているか？

組織運営のための委員会が重複・錯綜し、余計なロードが発生していないか？

(2) 運営の「合理性」の問題

組織の拡充を、「建て増し」方式で進めた結果、組織の構成ユニットが「分立」し、組織としての「効率性」を阻害していないか？とくに、「コース増設」を名目として組織の改組拡充が行われた結果、「教育運営」上のユニットである「コース」を、学環組織自体の「運営組織」として実体化し、結果として、学環組織の「合理的運営」を阻害していないか？6コース制が一応の「完成」を見たことを踏まえ、各コースにおいて行われている業務を、できるだけ整理統合し合理化することは可能か？

(3) 運営の「分かりやすさ」の問題

「すっきり」とした運営を行えているか？とくに、情報学環・学際情報学府の場合、「学環」と「学

府」の区別から成り立ち、基幹講座・流動講座という講座組からなり、二つの「学圏」を歴史的経緯から残し、寄付講座の充実などから特任教員が増大するなど、組織運営上の「分かりにくさ」が増大してきていないか？発足以来の運営実体をいまいちど振り返り問題を整序する必要があるか？

2. 教育体制上の一般的問題点

(1) 学力の問題

急速な組織拡充の結果、入試の応募倍率も鈍化し、学力低下を招いていないか？

(2) コース分属の問題点

学生の育て方が「たこつぼ化」していないか？基礎能力の養成と同時に、「文理融合」や「学際情報学」という理念にどのように近づきえているか？既存の研究科・専攻における人材養成モデルの「縮小再生産」に陥っていないか？

(3) 博士学位授与の問題点

学際情報学府における「博士学位授与」実績は現在までのところ極めて不十分である。この事態をどう評価するか？どこに問題点があるか？

(4) 「動機付け」の問題点

バラエティーに富む教育内容、多様な学術活動が、学生の「好奇心」の拡大に結びつかないのはなぜか？

(5) 「国際化」の問題点

学生の「国際化」、「留学」、「留学生との交流」などは十分に行われているか？

3. 研究体制上の一般的問題点

(1) 「学際研究」「文理融合」の問題点

2000年度における情報学環設立当初の「理念」の斬新さは維持され、明確な成果を上げてきているか？「理念」の斬新さの維持と新たな展開はどのようにしたら可能か？

(2) 研究協働体制の「新陳代謝」の問題点

各分野における「スタープレイヤー」を集めることで出発した情報学環だが、新しい人材が育ってきているか？

(3) 流動教員・特任教員の位置づけ

流動教員や特任教員を速やかに学環にとけ込ませ、有効な研究シ너지を生み出しているか？流動教員・特任教員にとって研究上十分に魅力ある組織となりえているか？

4. 具体的な検討課題および提案ポイント

以上の一般的な諸問題点の認識を踏まえ、具体的に検討されるべき課題は以下の通りである。

<テーマ1：「分かりやすい」組織と「合理的でシンプルな」運営のために>

以上の問題点を鑑みるに、浮かび上がる課題の第一は、いかに「コース」の壁を低くするか、である

う。そこで、より具体的に、次のような諸点につき論点整理の見通しをもつ必要がある。

(1) 「コース内」的発想をいかに打破するか？

コースとはあくまでも教育プログラムであり、教員の所属組織でも、学環の運営単位でもない。この認識を徹底する。教員は、「学環」に所属し、「学府」に教育を「出前」しているという認識スキームをしっかりと共有する。そのために「コース会議」は「コース担当者会議」とでも改称すべきであろう。

コースの「教育」単位としての特徴化のベクトルは十分に維持したうえで、「教育運営」体制のなにもかもを「コース」を単位として代表制的に積み上げる組織論はとらない。コースの運営に関する「ローカル・ルール」は極力排除する。

(2) 「入試」「教務」業務の合理化は可能か？

歴史的な経緯や個別の事情に拘らず、負荷の大きな通常業務としての入試業務は、共通化可能な部分は可能な限り統合し、合理的な運営をめざすことは可能か。「入試委員会」と「入試実施委員会」のような委員会の重複は避ける。両委員会は統合し、入試実行のあらゆる権限を集中する。コースに別れた教務の運営体制を改善し、「教務委員会」に権限を集めて「決定権限」をもたせ、合理的な運営をはかる。「入試委員会」および「教務委員会」と「学務」事務との協働による運営を強め、ルーチン化した作業の自動化をさらに促進する。そのためにもコース固有の「ローカル・ルール」は極力排除する。

(3) カリキュラムの合理化は可能か？

基礎能力の養成という目的を維持しつつ、カリキュラムの「大綱化」は可能か？ 限られた教員メンバーで、5つのコースを合理的に運営していく方法という全体的な視点から、カリキュラムを再検討する。5つのコースは、各コースがすべての単位を独自に構成するのではなく、必ず、一定の比率の科目に関しては、他コースと重複する科目編成をもつようにカリキュラムを編成することとする。

<テーマ2：教育の「質的向上」と、研究・教育の「成熟」のために>

上記の「合理化」が、院生達の教育の質的低下をまねくことがあってはならない。逆に、「質的向上」を引き起こすことができる合理的改革が求められている。カリキュラムの大綱化と同時に、コース間で「基礎科目」をある程度の比率で共通化し、院生たちがコースにまたがって切磋琢磨する環境をつくるべきではないか。「文理」にまたがる基礎知識を十分に教育できるカリキュラムになっているか？

<テーマ3：博士号授与数の増大のために>

博士課程在学者それぞれに関して、履修モデルおよび博士号取得にいたる道筋を明示させる。優秀な学生が、実力に応じて先に進める履修モデルを導入する。RA制度を活用するなどして、優秀な学生にインセンティブを与える。

<テーマ4：履修形態の多様化の必要>

英語科目の充実・必修化を行い、新設の「アジア情報社会コース」の科目として読み合いなどをおして、院生の国際的教育を促進すべきではないか？ 留学生の受け入れだけでなく、院生の留学は活性化しているか？ 留学しやすく留学が無駄にならずに復学しうる履修の柔軟性が確保されているか？

分野ごとの明確な経路を設計して、学位取得にいたる道のりをしめす必要があるのではないか？例えば「プロジェクト科目」を創設するなどして、特任教員を担当させ、院生の好奇心やモチベーションを育てられないか？（「必修基礎」＋「選択必修」＋「プロジェクト科目」などの新たなカテゴリ化ができないか）。

＜テーマ5：組織の活力の維持と更新のために＞

あらたに加わる流動教員、特任教員を、研究・教育に迅速に組み入れ、組織としての活力を維持・更新するためには、どのような工夫が必要か？具体策として、例えば、新入学生に対して、「オリエンテーション期間」を設け、学環第1期に実施されていたような「顔見せ講義」を教員全員参加で実施する。これは学生のためだけでなく、教員の相互啓発に格好のイベントとなる。

5. より一般的な検討課題

(1) 学府委員会および教育組織の構成は現状のままでよいのか

兼任教員の増大、教員カテゴリの多様化は、現在の組織運営を「分かりにくく」している最大の原因のひとつである。（「学府委員会」は他研究科における「研究科委員会」、「専攻会議」を他研究科における「研究科会議」、「コース担当者会議」を他研究科における「専攻会議」と読み替えうるように、制度を再調整すべきではないか）。

(2) 総務委員会の構成と性格は現状のままでよいのか

現在の構成はやや「重たく」なりすぎていないか。実施担当の常置・特別委員会との溝ができてきてこないか。「流動」・「基幹」講座など組織の根幹を扱う「幹部会」としての「総務委員会」の性格と、教育・研究の運営の元締め組織としての「総務委員会」の性格とが共存し曖昧であるが、今後そこをどのように定義づけていくかは大問題であろう。

(3) 会議日の固定と会議の定期的開催

教授会開催日である金曜日午後の会議時間帯の日程確保を全教授会メンバーに徹底する。主要な常置委員会の開催週、コース担当者会議の開催日などを固定して、会議開催がスムーズに行われるようにする。（教授会の前週の「総務委員会」・「(改革後の)学府委員会」、その前の週に「教務」など常置委員会など）。会議開催日の調整自体に無駄なエネルギーが使われないことが重要。

II. 「改革の柱」

7月教授会での「検討の指針」の承認をうけて、9月教授会では以下のような「改革の柱」が提示され承認された。

1. 基本認識

次期中期目標に予想される課題を実行するためには、着実に組織の「教育研究成果」を出すしかつ「明示的に示す」ことができる体制を整える必要がある（博士号授与率の向上、FDなどの活性化、学生に対する教育ケアの質的評価など、とくに教育に関する課題、分野融合や学際性の展開、研究成果の教育へ

のフィードバック、情報公開など組織としてのアカウントビリティへの対応など)。そのためには、有限な人的資源を有効に活用すべく、組織運営ロードの削減によってえられたマンパワーを、教育および研究展開のソフト面の充実へとシフトさせ、着実に成果を示すことができる体制を整備する以外にない。組織改革にとって、スケジュール的に急ぐ改革作業から列挙する。

(1) 入試の改革

入試委員会と入試実施委員会との統合。

入試の共通化と入試実施体制の単純化。

GRE など、世界標準の採用。

入試実施時期の再検討、など。

(2) 学術委員会の改革

学術委員会の「委員」規定の規則変更をおこなう（「専攻会議」と「学術委員会」という構成へ）

(3) 人事管理委員会の整備

流動教員および特任教員の人事のための委員会をあらたに設け、人事案件処理の作業を合理化する。

(4) 運営体制とスケジュールの ordering

100 におよぶ組織運営のための「委員会」を「系統化」し、教授会開催日を基本にして、会議日を規則づける(ordering)するなどして、合理的な運営をはかる。

(5) 教務の改革

カリキュラムをコース間で部分的に「共通化」「大綱化」「モデル化」する。（「必修科目」「選択必修科目」以外に「プロジェクト科目」など新カテゴリを導入する。コース横断型の「プログラム」などの導入による「分野横断」性の確立と「履修モデル」の明示化、など。）

(6) 博士課程教育の改革

博士号授与率の向上をはかるために、博士課程院生ひとりひとりについて、博士号取得にいたる「メニュー」を作成し、優秀な者には新 RA 制度を活用するなどして研究を支援する。

(7) FD および組織内分野交流の活性化

運営ロードを下げることにより、教育と研究の平面で、教員同士、学生・教員同士が、「交流」できる体制をめざす。「運営」の作業を通じた「交流」というモデルを、「教育・研究」の作業をとおした「交流」へと変容させる道をひらく。

(8) 情報公開への対応

上記 1 とも関わるが、迅速に対応できる体制を用意しておく。

III. 「改革の提案」(その 1) 学術委員会および人事管理委員会

9 月の教授会で了承を得た「改革の柱」(2008.09.19 文書)および 10 月総務委員会(10 月 10 日)を踏まえ、次の制度改革「改革の提案」(その 1) が 10 月教授会で提案され承認された。

1. 「学際情報学府委員会」の改革に関して

学府委員会の構成を、以下の「規則」改正および「内規」改正によって、変更する。

<現行>

学環・学府組織運営規則第6条（学府委員会）

- 3 学府委員会は、学府の課程担当教員により構成する。
- 4 学府委員会の組織運営その他必要な事項については、別に定める。
- 5 第1項に定める学府委員会の・・・略・・・することができる。

<改正案>

学環・学府組織運営規則第6条（学府委員会）

- 3 学府委員会の組織運営その他必要な事項については、別に定める。
- 4 第1項に定める学府委員会の・・・略・・・することができる。

<内規案>

大学院学際情報学府委員会組織運営内規（仮称）

第4条 学府委員会は、次に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 学府長
 - (2) 情報学環・学際情報学府に所属する課程担当教員（常勤の特任教員を含む。次号において同じ。）
 - (3) 学際情報学府に所属する課程担当教員（前号の者を除く。）（「若干名」or「のうち学府長が指名する者若干名」）
 - (4) その他学府長が必要と認めた者
- 2 前項第3号及び第4号の委員の任期は、1年とする。ただし、再任を妨げない。
 - 3 補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

この改正にともなって、別途「専攻会議」、「専攻長」について議論されねばならない。

2 「人事管理委員会」の整備

人事管理委員会に、担当副学環長を長とする、流動教員および特任教員の人事選考のための「流動教員人事選考委員会」、「特任教員人事選考委員会」を設ける。

上記の人事委員会は、学環長の委嘱を受けて人事選考を行い、総務委員会および教授会に対して人事の提案を行う。

IV 「改革の提案」（その2）入試実施体制の改革

平成20年11月の教授会において、以下の「改革の提案」（その2）が提案され承認された。

入試の確実な実施と作業の合理化のために、入試実施体制の「共通フォーマット化」、「合理的分担化」、「決定と実行の一元化」を促進する。さらに、「入試時期」、「外国人受験者」、「社会人特別選抜」、「教員と事務との連携」の諸点に関して引き続き検討する。

A 「共通フォーマット化」：作問、実施要領の作成、面接、採点のそれぞれの作業においてコース間で共通化しうる部分の最大限の共通フォーマット化を行う（例えば、作問、採点における、社情と文人の乗り入れ、理数と分析の乗り入れなどの可能性、設問形式の標準化の可能性などを検討し実行可能なものは、全体の合理化を極力押し進める。入試実施要領に記載するルールを厳選し極力統一する）。

B 「合理的分担化」：全体の作業の共通フォーマット化を行ったうえで、各コース単位で面接、採点教員を絞りこむなどして、最小限の教員ユニットで迅速かつ的確な判断を下しうるよう入試実施体制の「合理的分担化」を行う。

C 「決定と実行の一元化」：全学規則等に定められた監督責任体制を確実に担保したうえで、入試実施委員会と入試委員会の意思決定プロセスを統合し、入試実施委員会の決定がスムーズに実行に移されるように一元化する。

D 「入試時期」、「外国人受験者」、「社会人特別選抜」、「教員と事務との連携」の諸点に関して引き続き検討する。

以上の方針が承認された段階で、入試カリ制度検討委員長は、入試実施関係者による実施案作成 WG を立ち上げ具体案づくりに着手することとし、入試実施委員会より以下の提案がなされ、平成 21 年 2 月教授会において方針が了承された。

付録： 入試実施体制の改革の具体：

2008 年 11 月 28 日教授会提案、「改革の提案（その 2）」が承認されたことを受けて、その中に挙げられた諸点につき、以下のような方向で、改革の具体化の作業をすすめていく予定である。

A 「共通フォーマット化」：

【入試説明会は、毎年日程を固定する（6 月第 3 土曜日？）】

【共通の問題を利用する場合、採点は、各コースで行う（問題を作成した コースに依頼しない）。採点に当たっては、出題者が示した基準に沿って行うこと。】

【（継続審議）副問題の活用方法を検討する。】

【（継続審議）外部試験の利用の可能性を検討する（導入については、コースごとに判断を行う）。】

B 「合理的分担化」:

【陪席制度は廃止する（廃止による得失は、夏入試終了後、学環長・専攻長・入試実施委員長が検証する）。】

【入試関連行事へ教員が欠席した場合の対応は、入試実施委員会に一任する。】

【（継続審議？）特別な事情がない限り、学際情報学府外の教員に審査を依頼しない（依頼する場合は、依頼した教員が責任をもって、試問の方法の説明、スケジュールの調整を行うこと）。】

【入試関連行事は、特別な事情がない限り、平日に行うことにする。】

【入試業務を補助する非常勤職員を採用する。】

C 「決定と実行の一元化」: 入試実施担当者との協議をおこない、次期学環長が来年度からの委員会の構成に反映させる。

D 「入試時期」:

【（継続審議（10年度夏に判断））修論審査と博士入試の分離について検討する（内部生、外部生が条件に差がでないことを配慮する）。】

【（継続審議（10年度夏に判断））英語試験と筆記試験を同一日に実施することを検討する。】

【（継続審議）コースの状況の応じて、入試の回数、時期を選択する可能性を検討する（10月入学も視野に入れる）。】

・「教員と事務との連携」

【B項にともない採用した入試業務補助非常勤職員を介して改善を図る。】

V 「改革の提案」（その3）カリキュラムの改革

「改革の提案」（その3）が平成21年2月の教授会において承認された。

A. コースによる「専担/兼担」の廃止: 教員は「コース」に所属しているわけではなく、「コース」は学生の「教育コース」であるという認識を徹底する。

1 「授業科目」に関して、ひとりの教員の担当科目が複数のコースにまたがる開講科目として設置されうること(いわゆる「科目の読み合い」の関係をつくりうること)を原則とする。ただし、コースの担当科目に関してはコース会議が決定する。

2 「研究指導」に関して、合理的な理由があれば、ひとりの教官に関して複数のコースの院生の指導（現状の「コース間兼担」）が可能であること。ただし、コースの学生に対する研究指導が可能かどうかはコース会議が決定する。また、一人の教員の指導可能数については、基幹・流動等の教員の条件に応じて上限を設定するという原則は変わらない。

B. コース科目の体系性を十分に確保したうえで、コース間で重複する科目の整理統合と共通化を進める。コースの教務担当者間で協議して実現可能なものから実施する。

C. それぞれのコースから読み込める「横断プログラム」科目設置の可能性を検討する。設置のイニシアティブがあるようなので、構想案を出してもらって検討を開始する。

D. 「履修モデル」を明示し、一人一人の学生の「履修メニュー」を明確化して管理する。博士号授与率の向上という課題（別項）、「休学者」の問題、「新 RA 制度」の運用とも連動するので、教務委員会を中心として具体案づくりをおこなう。

E. 「英語科目」の必修単位化を検討する。当面、博士課程において2コマ程度の英語必修クラスを実施する方向で検討する。「アジア情報社会コース」の担当教員にその可能性について基礎検討作業を依頼する。

F. 「選択必修科目」「選択科目」以外に「プロジェクト科目」（仮称）を設置して、特任教員の教育参加への道を開く。具体的イニシアティブを募る

G. 「学際入門科目」の再配置を検討する。4月の「ガイダンス週間講義」を来学年度から実施する。通年の「学際情報学概論」については、ガイダンス講義によって代替する方向で検討する。

H. 学期中間発表および学位論文審査のあり方を検討する。現在の学期ごとの学生の中間発表やコロキアムのあり方、修士論文・博士論文審査の公開可能性などを検討する。

別項 博士課程教育の改革

「博士課程教育の改革」は特に喫緊に取り組むべき課題であることから、カリキュラム改革の検討においても別項として独立されて検討を行う。

博士号授与率の向上をはかるために、博士課程院生ひとりひとりについて、博士号取得にいたる「研究メニュー」を作成し、優秀な者には新 RA 制度を活用するなどして研究を支援する。

1.5.6 施設整備委員会

施設整備委員会の最大のミッションは現在の情報学環がおかれている最低必要面積も確保されていないという認識のもと、なんとか教育研究に必要な施設を確保することにある。これまで、護国寺にある東大病院分院跡地に学環プロジェクト共同ルーム、第二本部棟の3階、4階のフロアの一部を確保した上に、更に、平成20年3月には、以前より建設を進めていた福武ホールが竣工し、これらのスペースを有効に使って研究教育が実施できるようになった。しかしながらこれでもまだ、情報学環所属教員と学際情報学環の所属院生に十分な基準面積を準備できておらず、また確保されたスペースは小刻みに

様々な場所に分散しており、教育・研究の活動に支障をきたしている。したがって、施設整備委員会としては、今後も教育・研究に必要な施設を確保できるように、引き続き努力する。

1.5.7 情報セキュリティ委員会

2006年3月に東京大学情報セキュリティ委員会が、東京大学保有情報資産のセキュリティを確保することを目的として「東京大学情報セキュリティ・ポリシーの基本方針」とともに定めた「東京大学情報セキュリティ・ポリシーの対策基準」は、部局情報セキュリティ責任者（部局長もしくは部局長を補佐する役職に相当する職務の者）を委員長とする部局情報セキュリティ委員会の設置を求めている。これらの全学方針に基づいて2006年9月に各部局に依頼のあった情報セキュリティ調査への対応を機に、吉見学環長を部局情報セキュリティ責任者・委員長として情報学環情報セキュリティ委員会が組織され、10月から事実上活動を開始して部局調査のとりまとめを行うとともに、11月の教授会で承認され正式に発足した。

2007年12月20日の部局への説明会とその後の意見聴取を経て、2008年4月9日、全学の最高情報セキュリティ責任者（CISO）名で、「東京大学情報セキュリティ・ポリシー実施手順の作成について（依頼）」が発出され、情報学環情報セキュリティ委員会は、情報学環情報ネットワーク委員長でもある原田委員を実務担当として、要請された部局規則等を整備する作業に当たることとなった。ただ、ここで提示された雛型には、部局の観点から見ると、2008年1月18日に提出した部局意見でも指摘した必ずしも実効性につながらない過度の厳格さや形式主義に加え、業務実態との不整合や手順の実施に必要な設備整備等に伴う部局の財政負担など、適用に当たって検討を要する点が多数含まれており、部局において実効性と意義のある体制を構築する作業は難航した。部局内および全学側との様々な調整を経て、年度末までに関連内規等の修正・制定を終えることができたが、その過程で全学枠組みの変更が望ましいと思われる点も具体的に明らかになっており、部局における体制の運用と並行して全学体制の見直しを働きかけることも今後取り組むべき課題として認識された。

1.5.8 情報ネットワーク委員会

2000年の情報学環発足以来、所属教職員ならびに学際情報学府学生に対して、部局内 LAN、学内 LAN である UTnet、さらにはインターネットへの接続環境を提供し、また部局としての電子メール・サーバ、WWW サーバ等を運営することなどを中心とする、情報ネットワークに関わるサービス提供と管理が要請されてきた。しかし、これを専門に担当する委員会は当初は存在せず、部局ウェブページのコンテンツ管理等も含め、「HP・ネットワーク担当」の数名の助教授および助手が任に当たっていた。2002年6月になって、情報学環の広報及び情報システム等に関する事項の審議のため、「広報・情報委員会」が設置された。さらに、2004年4月の社会情報研究所との組織合併に際して機能分化が図られ、部局ウェブページのコンテンツ管理に当たる「企画広報委員会ホームページ担当」とともに本委員会が設置された。本委員会は、2002年11月に設置された情報倫理審査会が行う調査・審査等や、学生・留学生委員会その他が管理する個別端末、さらに2006年に設置された情報セキュリティ委員会の担当範囲等をも除き、インフラ等、部局の情報ネットワークに関して残る部分を、関係委員会等と協力しつつ、全般

的に担当している。

2005年4月に定めた本委員会の課題と目標は以下のとおりである。情報学環・学際情報学府の情報ネットワーク全般に関する情報を集約し、提供するとともに、関係各所との責任分担を明確にし、直轄部分については適切な対処を迅速にかつ正当に行えるよう、規則整備を含め、ガバナンスの体制を確立し、運用する。その際、利用者の利益および意見の尊重と、内外におけるアカウントビリティの確保に努める。

2005年度に委員会活動が本格化し、情報ネットワーク運営管理体制の明確化・強化、基幹ネットワークの更新・整備、サーバ室の環境改善、基幹サーバの更新などを行ったことを受け、2006年度は日常的管理・運営活動に加えて、従来まったく欠けていた、学環・学府の情報ネットワークに関するガバナンスの根拠となるべき諸規則の整備を行い、複数の基幹実務担当者の相互牽制と協力による管理体制の確立と情報セキュリティ対応の強化を図るとともに、情報基盤センターPKIプロジェクトと協力しつつiii-PKI(Public Key Infrastructure)を構築して安全な通信・情報共有のための基盤形成に努めた。2007年度は、新設された福武ホールの情報ネットワーク環境整備や、ウェブ発表等への協力を含む日常的管理・運営活動の他、iii-PKIを基礎としたVPNシステムや会議資料オンライン閲覧システムの構築・運用を行った。

このような経緯を受け、2008年度には、日常の実務に加え、PKI活用による利便性向上と省資源化をさらに進めるとともに、全学的な情報セキュリティ確保への取り組み強化の中で、アカウント管理の強化等、情報セキュリティ委員会における情報セキュリティ・ポリシーの実施手順作成に伴って必要となる施策を進めた。また、基幹実務担当者の一部変更に伴い、実務に必要な基礎情報の整理に努めた。

1.5.9 情報倫理審査会

情報倫理審査会は、東京大学の情報倫理委員会が定める情報倫理規則にもとづき、主査と委員3名において、情報倫理の遵守のための審査をおこなっている。2003年度の新情報学環の発足以来、構成員への連絡通知のためのMLをつうじてネットワーク利用者への注意喚起などをおこなってきた。2008年度は幸い情報倫理案件はなく、通常通り情報学環・学際情報学府構成員へのMLをつうじた注意喚起をおこなうにとどまった。

1.5.10 業績評価委員会

業績評価委員会は、情報学環・学府の研究・教育活動に対して行われる、学内外の様々な評価に関連する業務を遂行することが任務である。

2008年度は、国立大学法人評価現況調査表および情報学環・学際情報学府年報の作成に注力し、特に現況調査表に関しては各委員の尽力をもって2009年2月に最終版を完成、本部に提出することができた。

1.5.11 企画広報委員会

本委員会は、情報学環・学際情報学府の活動や行事（入試説明会、シンポジウム、ワークショップ、

教員研修会など)を企画・運営すること、および両組織の情報を、ニューズレター、ホームページ、メール等で、学内外に案内するなどの広報活動を行うために設置されている。さらに、よりインフォーマルな連携や情報共有のためのサポート、教員・学生の萌芽的な活動を支援することも進みはじめている。またそうした企画の実施に伴い、学環・学府内の多くのメーリングリストへの配信管理や、工学部2号館9階や福武ホールなどの施設の利用管理なども行うこととなっている。

1.5.12 図書出版委員会

2007年度から図書委員会と出版編集委員会が統合されて、図書出版委員会となった。

1. 図書室関係

情報学環図書室は、新聞研究所、社会情報研究所以来のマス・メディア、ジャーナリズム研究の資料に加えて、2004年度の情報学環との統合以降は、文系・理系を問わず、情報の学際的な研究に関する資料を幅広く収集し、利用に供している。

2008年度は前年度作成した図書購入方針案にもとづいて、①見計らいによる推薦、②基幹教員による推薦、③授業用図書の推薦、の3方式で図書を購入した。見計らい図書選定については、選定リストの改善によって選定参加教員が文系・理系双方で大幅に増えて、各分野の基本図書が選定されるなど機能し始めている。新たな予算措置に基づく大型資料費については、基幹教員の推薦によって主に複製版の資料集等の高額資料を購入した。

教育部研究生同窓会からの寄贈による「同窓会ジャーナリズム文庫」は、新聞研究所以来の研究生の足跡を記念して同窓会会員に寄贈を呼びかけたもので、最終的に23名の会員から954点の資料の寄贈をいただいた。この中にはジャーナリズム関係の図書のみならず、美濃部元東京都知事の取材テープ(利用制限有り)や映画DVD、スクラップブック等のユニークな資料も含まれている。整理作業も終了して、後輩の大学院生・研究生によく利用されている。

そのほか、新たに始まったITアジアコースの教科書・参考書類の整備を行った。

表1：2008年度図書受入冊数

	購入	寄贈	計
和書	145	957	1,102
洋書	363	90	453
計	508	1,047	1,555

表2：貸出冊数の年度推移

年度	2006	2007	2008
図書	4,919	5,332	5,601
雑誌	751	448	712
計	5,670	5,780	6,313

2. 出版関係

(4.5 出版活動を参照されたい)

1.5.13 国際活動委員会

情報学環への外国人研究員等の受け入れを審議し許可することが委員会の役目である。最近の受け入れ総数を見ると、平成14年度8、平成15年度7、平成16年度9名、平成17年度13名、平成18年度

15名、平成19年度15名、平成20年度14名と堅調である(ただし、15年度までは旧情報学環と社会情報研究所の合計)。情報学環の多様な研究背景を生かし、今後ともさまざまな教員を受け入れていくことがこれからの課題であろう。

1.5.14 産学連携委員会

産学連携委員会は、情報学環・学際情報学府における研究・教育活動を、産業界との連携を通して社会還元をすることを目的として設置されている。2008年度の産学連携委員会の活動は、職務発明特許やそれに類する著作権等の知財に関する規定の策定に関して、東京大学産学連携委員会を通して参加をしている。また、東京大学産学連携協議会に参加し産業界との交流も行っている。学環・学府において、寄附講座・社会連携講座・受託研究などを通じて産業界と連携するケースが増加しているが、そのために必要な内部の制度づくりや、連携する上で生じた様々な課題に対応していきたい。

1.5.15 知的財産室

知的財産室では、情報学環・学際情報学府の教職員が発明したり、著作物を作成した際に、届け出てもらおうところである。ここで、それらの発明や著作物が、職務上のものであるか、そうでないかを、届け出の内容から判断する。

1.5.16 利益相反アドバイザー

現在、東京大学の教職員は、東京大学が定める規定の範囲内で、様々な立場を学外において持つことが可能である。例えば、学会の役員や政府委員、他大学の非常勤講師、産学連携のための民間企業の兼職などがある。こうした立場に立って、様々な活動を行うと、東京大学の構成員としての利害と、学外の立場における利害がぶつかる場合がある。そのようなケースを利益相反と呼ぶが、利益相反アドバイザーは、情報学環内において、利益相反が心配されるときに相談を受け、本部事務とも連絡を取りながら、利益相反に関する対応をアドバイスする役割を担っている。今後、産学連携が進む上で、起こることが予想される利益相反の問題に対して適切に対応していきたい。

1.5.17 ハラスメント予防担当者

ハラスメント相談員は、アカデミック・ハラスメントあるいはセクシャル・ハラスメントなどの問題に対応するために設置され、引き続き活動を行っている。現在のところは、ハラスメントに関する相談はうけていないが、今後は男女共同参画室やハラスメント相談所と連携を取り合いながら、具体的な相談を受けた場合に対応できるように体制を整えている。

1.5.18 社会情報研究資料センター運営委員会

社会情報研究資料センターは、新聞資料を中心に、各種メディア情報資料を研究のために収集、整理し、それらの資料を学内外の研究者に提供することを目的としている。現在、本センターの所蔵資料は製本済原紙約20,000冊、縮刷版約8,000冊、マイクロフィルム約45,000リールに達している。

本センターの沿革は、1964年に当時の新聞研究所に開室された「プレスセンター」が1967年、新聞研究所附属施設「新聞資料センター」として正式に発足し、1992年4月に新聞研究所が社会情報研究所に改組されるにあたって「情報メディア研究資料センター」と改称された。その後、2004年4月、大学院情報学環・学際情報学府と社会情報研究所の統合にともなって、「社会情報研究資料センター」と改称した。センター運営委員会は、この社会情報研究資料センターの運営にあたっており、2007年度からは新規教育研究事業「社会情報研究資料センターの高度アーカイブ化事業」を推進している。

なお、本センターの現在の年間利用者数は2,000人を越えており、2008度における月別利用者数は、下記の通りである。

表 1-5-1 社会情報研究資料センター月別利用者数（2008年度）

(開室日数)	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
学内	144	193	248	162	100	144	257	224	181	160	88	103	2,004
学外	40	45	47	64	76	65	81	55	82	32	44	94	725
不明	0	0	2	0	2	0	5	0	0	0	2	0	11
合計	184	238	297	226	178	209	343	279	263	192	134	197	2,740

1.5.19 総合防災情報研究センター運営委員会

総合防災情報研究センターは、2008年4月1日に、情報を核に災害の被害軽減を目指す文理融合型の研究センターとして設立された。分野を超えた社会情報学、地震火山学、防災工学の協働により、防災情報研究における新しい地平を切り開くとともに、東京大学の理学、工学、社会学、法学、経済学、医学など様々な分野の防災関係研究者をネットワークし、行政、マスコミ、企業、NPOとも連携することにより、防災に関する知の結節点として機能する新しいタイプの研究機関を目指している。

情報学環附属のセンターであるが、地震研究所、生産技術研究所と連携して運営されており、本センター運営委員会も3部局長および各部局から選出された委員各1名の合計6名から構成される。平成20年度は2回の運営委員会を開催しており、第1回は平成20年5月12日（月）に開催し、6月2日に開催された開設記念式典の進行の確認、外部資金獲得状況ならびに人事案件1件を審議、了承した。

第2回運営委員会は、平成21年3月17日に開催し、平成20年度の活動報告を受け、平成21年度の事業計画について審議、了承した。下表に示した記念式典出席者の期待等も踏まえ、学内防災への貢献、共同研究の推進や国際的な展開、センターの人員の整備などセンター運営に関する基本方向について議論した。

今後の総合防災情報研究センターの活動に期待すること（複数回答）

	人数(人)	全体(%)
1) 理学、工学、社会学、医学、経済学など多様な研究領域との連携	40	60.6

2) マスコミ、民間企業、NPO など社会との連携	38	57.6
3) 災害情報の利用についての情報発信	41	62.1
4) 防災制度についての情報発信	21	31.8
5) その他（以下にお書き下さい）	6	9.1

1.5.20 駒場カリキュラム連携運営委員会

駒場カリキュラム連携運営委員会は、総合文化研究科・教養学部における、大学学部前期、学部後期の教育と情報学環・学際情報学府の教育に関する連携を協議し、連携に関わる授業科目を円滑に運営する目的で平成20年度から設置された。平成20年度は、教養学部前期課程で情報学環教員が担当する科目に関する調整のために定例委員会が開催された。

1.5.21 WEB 発表会運営委員会

WEB 発表会運営委員会では、学際情報学府修士課程学生の修士論文研究進捗を促し、かつ、1年目終了時点での進捗状況を確認する目的で毎年度3月末から翌年度の4月にまたがる形でWEB発表会を開催している。

WEB 発表会は具体的には報告者各自が研究計画・中間報告をウェブページとして提出（アップロード）し、相互に閲覧するオンライン発表会と、実際に口頭で発表するオフライン発表会に分けられる。オンライン発表会の際には相互評価のために投票結果に基づきアイディア賞、進捗賞、プレゼンテーション賞についてそれぞれ金賞、銀賞、銅賞が与えられる。またオフライン発表会の際に参加者は、他者の報告を評価する側に回って、研究について相互に論評することが義務づけられている。

本年度は2009年1月27日に説明会を行い、2月10日に参加登録を締め切った。実際のオフライン発表会は3月19日をウェブページ提出期限とし、3月23日からオンライン上の閲覧を開始し、閲覧期間を4月9日までとした。なお、オンライン発表に対する投票は3月27日が締切りであった。

オフライン発表会は新入生進学ガイダンスの翌週、4月7日に工学部2号館92Bおよび93B教室で行われ、発表者の総数は87名であった。

1.5.22 学生・留学生委員会

学生・留学生委員会では、大学院生全般を対象としたサービスに関して、学際情報学府に在籍する大学院生（留学生を含む）の福利厚生に関する以下の業務を担当してきた。

- (1) 大学院生の勉強・研究用スペースの整備、維持
- (2) 大学院生用備品の購入、管理
- (3) 大学院生と教職員スタッフとのコミュニケーションの維持
- (4) 大学院生向け情報の提供
- (5) 大学院生奨学金および研究支援経費関係

これらのうち、(1)については、本郷キャンパス情報学環本部棟4階に加えて、工学部2号館9階に大学院生室を設け、共用の机を配置して提供している。また福武ホール学環コモンズにおいて勉強する環境を用意している。

(2)については適宜学生の希望を募り、必要と認められた場合には、共通予算で備品購入をおこなっている。特に今年度は、工学部2号館9階の備品を整備した。

(3)については、年に2～3回、院生向けの連絡会を開催し、情報の相互流通をはかるとともに、年度はじめの新生歓迎会、留学生懇親会、留学生旅行、年度末の謝恩会を開催している（新生歓迎会は在校生が、謝恩会は当該年度の修了生が企画実施）。

(4)については、教務関係の情報は上記(3)のルートのほか、適宜掲示板、学務係メールニュースでの情報配信をおこなっている。また、大学院生向けの奨学金・就職・住宅などの情報を、学務係横のスペースで閲覧できるようにしている。

(5)については、各種奨学金の付与に関して希望者を募り、適宜順位付けをして申請している。

留学生を対象としたサービスの現状に関しては、2008年度に留学生専用の窓口となる留学生支援室が設置され、2名の選任の学務担当者が配置された。この支援室を通じて積極的な留学生支援が可能となっている。さらに学生・留学生委員会と留学生の対話も「学環・学府」の企画として行われ、より具体的な要望の把握を行うことができた。IT-ASIAコースの新設に伴い留学生が増加しており、今後も支援の強化を行う予定としている。

次に課題についてであるが、大学院生全般を対象としたサービスに関しては、学際情報学府全体としてスペースはかなり充足したものの、そのスペースが全学に点在しており、大学院生と教員・スタッフおよび大学院生間のコミュニケーションのさらなる充実が望まれる。

留学生を対象としたサービスも留学生支援室の稼働によりかなり改善はされたが、留学生が飛躍的に増加しており、きめ細やかな留学生の要望の把握と必要な対策を迅速に実施することが求められている。このためには学生・留学生委員会自体の強化も検討されるべきであろう。

1.5.23 情報学環教育部委員会

大学院情報学環教育部は、2004年度（平成16年度）の社会情報研究所と大学院情報学環の組織統合により、社会情報研究所教育部を大学院情報学環に引き継いだ制度である。教育部の制度は、社会情報研究所の前身である新聞研究所設置（1949年）まで遡り、60年近い歴史をもっている。

2006年度（平成18年度）には組織統合に対応した大幅なカリキュラムの拡充・改訂を実施した。その後、2007年度から08年度にかけて、研究生へのアンケート調査、年に数回の教育部懇談会でのディスカッションなどで得られた知見をもとにして、基本的な理念からカリキュラム（時間割の変更、大学院との合併授業の導入など）、メディア編集室の設置、入学試験改革など、本格的な改革プランの策定に取り組んだ。

その成果もあり、研究生たちは「ジャーナリズム、マスメディアをめぐる実践知」「情報コミュニケーション（ICT）技術、産業をめぐる実践知」「情報、メディア、コミュニケーションをめぐる文系知」「情報、メディア、コミュニケーションをめぐる理系知」をめぐる、きわめてユニークな教育を受けつ

つ、大変活発に、自主的な学習活動を展開している。

1.5.24 福武ホール運営委員会

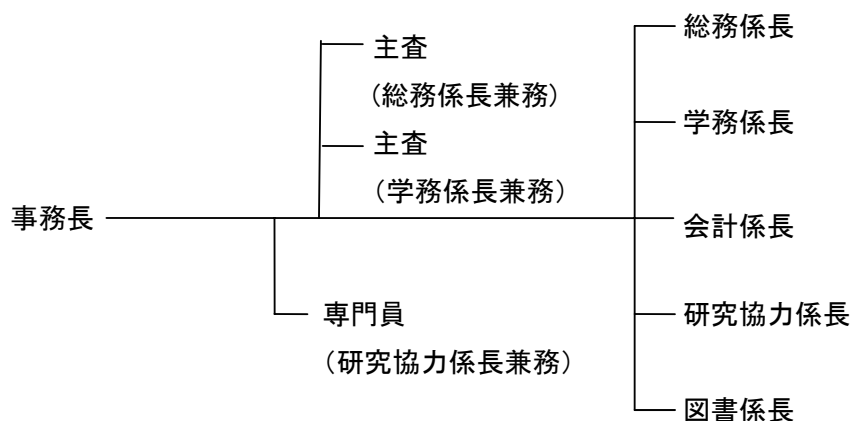
福武ホール運営委員会の最大のミッションは、2008年3月に竣工した情報学環・福武ホールを有効活用し、教育研究活動を支援することである。2008年度、当該ホール地下2Fのラーニングシアターとラーニングスタジオを利用して開催されたシンポジウムやワークショップは計131件であり、情報学環内部のみならず外部に対しても、開かれた学びの施設となっている。特にラーニングスタジオ、1F会議室、1F学環コモンズは、情報学環教員・学生に対して、授業、ミーティング、授業外学習の場として活用されている。また、当該ホール1Fに併設されているUT Cafeにおいては、様々な領域で活躍している本学の教員をゲストとして招き、毎月開催するイベントである「UTalk (ユートーク)」を継続的に実施してきた。毎回の定員は15名であるが、情報学環の教員・学生のみならず、他大学の教員や学生、企業人など多様な参加者が多数集まり、定刻を過ぎても議論が続く盛況ぶりを見せている。情報学環・福武ホールが今後も学内外に開かれた学習空間となるよう、引き続き努力する。

表 2008年度 UTalk 実施テーマ一覧

実施月	タイトル	ゲスト所属	ゲスト氏名
2008・4	歴史学と歴史小説のはざままで -豊臣秀吉と女たち-	史料編纂所	本郷和人
5	まばたき眼鏡から見える世界	先端科学技術センター	鈴木康広
6	「水」と「農業」から世界が見える	大学院新領域創成科学研究科	田中幸夫
7	脳科学に何を期待しますか？	大学院情報学環・ST 社会技術研究開発センター・理化学研究所脳科学総合研究センター	佐倉 統
8	宇宙はどのように彩られていくのか	大学院理学系研究科	左近 樹
9	どう答える？ "なぜ私が死ななきゃいけないの"	医学部附属病院	岩瀬 哲
10	(中止)	(中止)	(中止)
11	人と動物のおつきあい	東洋文化研究所	菅 豊
12	言葉のしくみ 脳・認知から離れて	大学院教育学研究科	影浦 峡
2009・1	生きている地球 -水深2000mの火山と温泉-	海洋研究所	沖野郷子
2	地形は動いている -国土という思想-	大学院情報学環・総合防災情報研究センター	須見徹太郎
3	手づくり小型衛星、宇宙に行く	工学系研究科	酒匂信匡

1.6 事務組織

図 1-6-1 事務部組織図(平成 20 年 4 月 1 日現在)



事務長	専門員	主査	係長	主任	係員	計
1	1	2	2	3	5	14

2 教育活動

2.1 概況

学際情報学府の教育は、情報学についての文理相互浸透の学際的カリキュラムとネットワーク型の教員編成による教育指導体制に最大の特色がある。学際情報学という分野が、すでに体系化された学問の修得と継承というよりも、従来の学問体系の組み換えと新しい学問の創生というところに目標を据え、そのような教育を実施しようと考えているからである。

学際性の学問論とネットワーク型の組織を引き継ぎつつ、2004年4月の組織統合にあたって、3コース制が導入された。これは、修士課程学生定員70名という規模に適合するためと、ディシプリンの基礎をもった学際性への教育効果のためと、2つの理由から導入された構成であった。現在は、2006年4月に総合分析情報学コース、2008年4月(学生受入れは同年10月)にアジア情報社会コースが設立され、5コースとなっている。

このコース制は設立当初からの学際性の目標と矛盾するものではない。むしろ高水準の学際性を備えた人材を育成するために必要な措置であった。入り口で基礎学力のある優秀な学生を採用するためにコースごとの入試を行い、出口で学力の品質管理をするためにコースごとの修了試験を行う。しかし、入試における面接でも、修了試験の口述試験でも、学際的な教員構成での審査体勢がとられているし、また入学後の学生はミニマムな選択必修科目のほかは全コースに開かれている多数の自由選択科目群から自分の研究計画と関心に合った科目を選んで、自分の学習メニューを組み上げることが可能となって

いる。

コースはあくまで学府学生が帰属するより小さな枠組みであり、研究科の専攻のようにそこに決して教員が帰属しているわけではない。教員はあくまで学環に帰属しているのであって、コースとの関わりはどのコースの学生を主として指導するかという点である。コース制は、学生が自らの学問的なアイデンティティを構築しつつ、同時に学際性へと越境していくための、バランスのよい舞台を提供しようとしているのである。

2.2 教育カリキュラム

学際情報学府の授業科目群は、(1) コース共通必修科目、(2) コース別選択必修科目、(3) コース共通選択科目の3つの科目群から構成されている。

第1のコース共通必修科目は、それぞれの学生の指導教員による個別研究指導のほか、学際情報学府の大学院生が、専門分野の視点や立場の違いを越えて、今日の情報学の様々なアプローチについての基礎知識を身につけてもらう「学際情報学概論」が主軸である。この科目には、情報学環のほぼすべての基幹・流動教員が関与し、学生は e-learning システムでの受講も可能な仕組みになっている。同時に、学際情報学府院生には、修士1年ではWeb発表会における修士1年間の研究の成果発表が、修士2年では修士論文中間発表会での発表が、また博士課程では毎年の博士課程コロキウムでの発表が、大学院での必修カリキュラムの一部として課せられている。

第2のコース別選択必修科目は、修士課程の大学院カリキュラムとして設けられている科目群で、それぞれのコースにおいて専門的な研究能力のトレーニングをしていくためのものである。この科目群は、「基礎」の4単位と「研究法」の2単位の6単位から成り、「基礎」は主として、各専門分野の基礎的方法論についてのトレーニング、「研究法」は、そのようにして習得した専門的方法論を生かした実習（調査、制作、実験、政策立案など）が分野に応じたやり方で実施されている。それぞれのコースの院生にとって、一般的に最もエネルギーを割かなくてはならない科目群であり、コースごとの特徴が最も明瞭に示されるカリキュラム編成になっている。

第3の共通選択科目群は、学府を担当しているそれぞれの教員が開講する大学院授業科目であり、形式としては一般的な大学院のゼミ科目と変わらない。但し、学際情報学府の共通選択科目の大きな特徴は、いずれも「情報」や「メディア」を中心的な対象としながらも、情報科学からジャーナリズム論までの幅広い専門家が集まっていることによる横断性にある。すなわち、ここでの共通選択科目には、自己組織情報、アジア情報政策、異文化コミュニケーション、学習環境デザイン、情報行動、映像文化、メディア表現、情報記号、情報倫理、自然言語処理、情報法、ジャーナリズム、ヒューマンインタフェース、数理言語、ユビキタスコンピューティング、知覚情報、ネットワーク経済、歴史情報、シミュレーションシステム、情報造形、視覚情報処理、医療福祉情報、身体情報認知、情報データベースなど、きわめて多様な分野が含まれている。これらの科目は、学際情報学府のカリキュラム編成においては、①情報・言語・行動系科目、②社会・制度系科目、③メディア・文化系科目、④表現・リテラシー系科目、⑤数理・システム系科目の5つの領域に分けられている。

2.3 カリキュラム支援体制

大学院学際情報学府では、上記のカリキュラムを大学院教育の基軸に据えながら、以下のような教育上の支援体制を組織し、運営している。

2.3.1 主指導教員・副指導教員の配置

学際情報学府では、指導教員の個別研究指導に加え、副指導教員による側面からの研究指導という複眼的な指導体制を整えている。情報に関する研究は、専門的であると同時に学際的な性格をもつため、既存の単一の学問分野の知識だけでは適切に対応できないことが多い。学際情報学府では、既存分野の専門的な知識や方法を十分に身につけつつ、それらを複眼的に結びつけて新しい情報研究に挑む若手研究者を効果的に育てるために、従来の指導教員による指導だけでなく、副指導教員を加えた指導体制を採用している。この体制は、これまでもそれぞれの院生の視野を広くし、より柔軟な学問的展開を可能にする点で、有益な効果を挙げてきた。

2.3.2 修士・博士 研究計画書の作成

学際情報学府の大学院生は、修士1年及び博士2年の段階で、自分の研究計画書を作成して学府に提出する。このうち修士1年の段階での研究計画書は、修士論文に向けての対象設定、おおよその研究視角を示す概要的なものであり、提出された計画書は、修士1年生全員がお互いの研究テーマについての認識を共有するための冊子にまとめられる。博士2年での研究計画書は、その学生が博士論文を執筆していくための第一歩となる。

2.3.3 ウェブ発表

ウェブ発表は、学際情報学府修士1年生が、その年度の末から翌年度初めにかけて、それまでの約1年間に進めてきた学習や研究の成果をまとめ、約1年後に提出する修士論文の構想や進捗状況について発表するものである。この発表は、学際情報学府に所属する教員と学生に対して行われるもので、各自が研究の内容・計画をウェブページにまとめて学府サーバに掲載するオンライン発表会と、それを踏まえてポスター発表形式で行うオフライン発表会から成る。

オンライン発表会は年度末から約2週間続くが、発表者は1週間の間に自分以外の発表を閲覧し、アイデアの面白さ・斬新さ、進捗度合い、プレゼンテーションの良さ等の観点から良いと思うものに投票する相互評価を行い、各項目の上位の発表は公表される。

オフライン発表会は新年度に入ってから1日を数セッションに分けて行われ、教員や在学生の他、発表者も自分の発表のないセッションでは聞き役に回り、コメントシートを提出する。

発表者は、このような中間総括と相互評価のプロセスを経ることで、修士論文に向けた残り1年間の研究をより一層充実させるための手がかりを得ることとなる。また、学際情報学府の新入生もオンライン発表を閲覧し、オフライン発表会の聞き役となることで、学府における研究の内容や修士論文に向けたプロセスについて具体的なイメージをつかむことができる。

2.3.4 修士論文中間発表会

学際情報学府では、多くの修士2年の学生が修士論文執筆に本格的に取りかかる7月上旬に修士論文中間発表会を開催している。この発表会では、その年度に修士論文を提出するすべての学生が自分の研究の進捗状況を発表しなければならないことになっており、指導教員や福指導教員だけでなく、関連分野の教員や他の学府の大学院生が発表会に参加する。教務委員会は、それぞれの教員のスケジュールを調整して、90名超に及ぶ発表者の全体の進行表を作成し、中間発表会全体を組織する。この発表会には、学府の院生は誰でも参加することができるので、修士1年の院生たちにとっては、先輩たちがどのような研究を進めているのかについて広く知る貴重な機会となっている。

2.3.5 博士課程コロキウム

学際情報学府では、博士課程に在籍している学生を対象に、毎年11月上旬に博士課程コロキウムを開催している。このコロキウムでは、博士課程3年までに在籍しているすべての学生が、博士論文執筆に向けての研究の進捗状況を発表しなければならない。教務委員会は、それぞれの教員のスケジュールを調整して、90名超に及ぶ発表者の全体の進行表を作成し、博士課程コロキウム全体を組織する。このコロキウムには、学府の院生は誰でも参加することができるので、博士課程の学生たちにとっては、他の学生たちがどのような研究を進めているのかについて広く知る貴重な機会となっている。

2.3.6 E-learning 授業 (iii online)

2.3.6.1 iii online の目標

iii online は2002年4月に始まった学際情報学府のeラーニングサイトである。iii online は、学部・研究科レベルでは東京大学初のeラーニングサービスである。

eラーニングを開始した最大の理由が、社会人大学院生の学習機会の確保である。

学際情報学府は独立大学院であるために、多種多様な学生が集まっている。2003年度までは、実践情報学コースという社会人学生をターゲットとしたコースが設けられており（現在は、社会人特別選抜枠に変更）、マスコミ関係者やシステムエンジニアなど、学生の2割程度が社会人という状況であった。

学際情報学府に入学する社会人は、銀行や製造業につとめている一般的な社会人に比べ、比較的時間に自由がきく代わりに、忙しくなる時期とそうでない時期が交互にやってくる。たとえば、広告代理店に勤めている場合、コマースの撮影などで1ヶ月間は仕事が超過密スケジュールで入るが、企画段階ではそれほど時間に制約がないという状態である。

このような状況では、講義に毎回出席することは難しくなる。iii online が始まる前は、出席しなければ自動的に欠席になり、全く講義の情報が手に入らない状態であった。2回、3回と欠席が続けば、当然講義の理解に影響が現れてくるので、教育水準の確保上、大きな問題となっていた。

通常社会人向けの大学院では授業を夜間に開講することによって、この問題を解決している。しかし、フルタイムの学生は昼間に授業が開講されることを望んでおり、学際情報学府で授業を夜間に持つことは、非現実的であった。

2.3.6.2 iii online の概要



図 2-3-1 : iii online の画面

iii online はこのような問題を解決するために、ビデオのストリーミングと掲示板を組み合わせたサービスを提供している。ビデオのアイコンを押すと、およそ 15 分×6 つにカットされた授業の映像を見ることが出来る。ストリーミングは FlashVide 形式 500kbps エンコーディングで行っている。FlashVideol 形式を選んだのは、利用者として Windows ユーザー、Mac ユーザー、Linux ユーザーが混在しているからであり、エンコーディングレートは、ブロードバンドで十分スピードがでない場合でも対応できるという観点から設定してある。

15 分にカットしたのは、90 分の映像を一気に見るのは大変だからである。利用者アンケートからも、朝 30 分、会社の休憩時間に 30 分、夜帰ってから 30 分見ると行ったような分割視聴が日常的に行われていることが明らかになっている。

ビデオは、パワーポイント連動型ではなく、カメラで撮影したものをそのまま流している。理由はパワーポイントを使う授業スタイルを教員に押しつけるのは良くないと判断したからである。OHP を使う人もいれば、ホワイトボードの方がインタラクティブにできるという教員もいる。そういう多様な授業スタイルを認めなければ、e ラーニングを導入すると、かえって授業がやりにくくなるということになりかねない。日常的に e ラーニングを展開する場合には、「e ラーニングだから」といった制約条件を減らすことが重要である。

データのアイコンを押すと、授業の資料を見ることが出来る。資料はすべて PDF ファイル形式にしてある。これも前述の通りユーザー側が多様な環境にいるためである。

アンケート調査では、実際に利用するときには、この PDF ファイルを印刷し、それをノートとして使いながら授業を聞いている。

配信年	講義名	授業者
2002	自然言語処理論	辻井 潤一
	コミュニケーション・システム	原島 博
	メディア表現論	水越伸
	情報政策論	浜田純一
	学際情報学概論	オムニバス
2003	情報リテラシー論	山内 祐平
	情報記号論	石田 英敬
	情報進化論	佐倉 統
	シミュレーション・システム	荒川 忠一
2004	学際情報学概論	オムニバス
	文化・人間情報学基礎	水越伸・山内祐平
	医療福祉情報学	山本 隆一
	社会情報システム	松浦幹太
2005	学際情報学概論	オムニバス
	ネットワーク経済論 II	田中秀幸
	学際理数情報学概論 VI	鈴木高宏
2006	学際情報学概論	オムニバス
	身体行動情報論	深代千之
	能動情報論	奈良高明
2007	学際情報学概論	オムニバス
	学習環境デザイン論	山内祐平
	歴史情報論	本郷和人

表 2-3-1 : iii online で閲覧可能な授業の一覧

2.3.6.3 iii online の評価

利用動向を確認するために、2002 年夏学期授業終了後に、iii online に利用者登録した全学生（大学院生） 130 名に対してアンケート調査を実施した。有効回答数は 62（有効回答率 47.7%）であった。このうち社会人学生の回答者は 16 名（有効回答数に占める割合 25.8%）である。

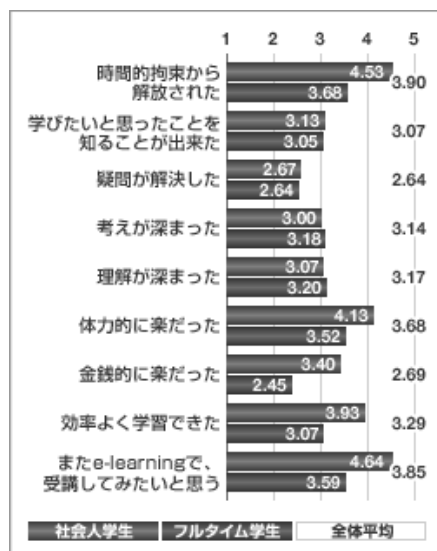


図 2-3-3 : iii online のメリット

iii online のメリットは「時間的拘束からの解放」、「体力的に楽であること」、そして「効率のよい学習」である。社会人学生にとくにこの傾向が強くみられたことが特徴的である。特に e-learning で受講してみたいという総合評価項目では、5段階スケールで 4.64 という好成績をマークしている。

この調査から、iii online が当所の目的としていた「社会人大学院生の学習機会」という目標はほぼ達成できているものと考えられる。

2.3.7 ソウル大学大学院との大学院国際共同演習授業

学際情報学府では、大学院授業の一環として、ソウル大学との間でインターネット回線とビデオ会議システムを用いた日韓国際協同演習授業－East Asia Media Study を実施している。これは、これまでの東京大学社会情報研究所とソウル大学言論情報研究所との長年の学術交流を基礎に、双方の会場をビデオ会議システムでつなぎ、両大学の教員、大学院生が、毎週、越境的に議論を重ねる授業をしていこうという試みで、8 週間から 11 週間にわたり継続的に授業を行ってきている。また、授業のうちの 1 回は、毎年開催されるソウル大－東大合同シンポジウムに接続する形で、ソウル大学でゼミ生が一堂に会し、合同授業が行われている。

授業の進め方としては、両大学をビデオ会議でつなぎ、毎回、それぞれの大学から講師が報告をし、院生が参加した討論で進行させている。原則として英語の教材を使うが、講義は英語、日本語、韓国語で行われる。担当講師や大学院生たちの発表を通じて、日本と韓国から見た東アジアのメディアと文化、

政治、社会の変化に対する認識を共有、討論している。

初年度の平成 17 年度は、情報学環本館 6 階実験室を使い、東アジアの構造変動の中で行われる日本、韓国のメディアと文化政治の変化に対して理論的、実証的に探求することを目的として、双方の大学の教員の講義を中心に授業を行った。東アジアの人々がどのように閉鎖的な民族主義から抜け出し、自己中心的な理解を越えて人間らしい社会共同体を目指して連帯できるのかということ、メディアと文化政治の歴史のおよび共時的観点から学び、探求した。

平成 18 年度は、工学部 2 号館 9 階の教室を使用し、ビデオ会議システムの性能も向上して各回支障なく授業運営をすることができた。また、授業専用の BBS を設けることによって、事前情報や知識の共有、学生同士のオンライン上の交流もスムーズに行き、授業の運営の円滑化は格段に進んだ。

同年度の授業では、前半は、ソウル大側と東大側の教員の講義を中心とし、各講義後にディスカッションを行なった。授業の後半では、ソウル大大学院生と東大大学院生の混合グループを編成し、各グループがオンライン上でディスカッションしながら、共同研究計画書をつくり、発表する時間に充てた。各グループのテーマは、「公共圏」「大衆文化」「文化政治の歴史認識」「社会と技術」であった。授業には、英語、日本語、韓国語が使われ、活発な討議の中から日本と韓国から見た東アジアのメディアと文化、政治、社会の変化に対する認識を共有することができたと言えよう。

平成 19 年度は、本学から姜尚中教授が、ソウル大からは姜明求教授が授業を担当した。本年は、とくにビデオ授業に加えて姜尚中教授は 9 月にソウル大学で集中講義を、姜明求教授は 1 月に東京大学で集中講義を行い、学生との交流を深めつつ共同授業にも専門性をもたせることを重視し、内容を一層充実させた。「交流」を目的化する授業から、相互の研究成果に基いた「専門性の交換」という方向へ大きく飛躍した年となったと言える。

平成 20 年度は、「International Seminar in Interdisciplinary Information Studies : Sociopsychological Changes in Japan and Korea in the Information Age」と題し、10 月 6 日から 12 月にかけて 8 回にわたり、同学科とのビデオ会議システムによる、両大学の教員によるオムニバス形式の講義を行なった。東大側からは、橋元良明、田中淳の両教授、ソウル大学からはイ・ジュンシク、ユン・ソクミン、カン・ナムジュンの 3 教授が講義を担当し、教員、学生を交え活発な討論が展開された。この共同演習により、日韓両社会の理解が深まると共に、今後の共同研究のあり方についても有益な意見が交わされた。

2.4 学際情報学府への進学

2000 年度に設立されて以来、2003 年度まで、大学院学際情報学府は毎年、修士課程約 50 人、博士課程約 20 人の大学院生を受け入れてきた。2004 年度の社会情報研究所との合併により、それまで人文社会系研究科社会情報学専門分野の定員であった修士課程 14 人、博士課程 7 人が統合され、2006 年度からは総合分析情報学コース、2008 年度からはアジア情報社会コースが新設されたため、学際情報学府の入学定員はさらに拡大し、現在では修士課程定員が 100 人、博士課程定員が 44 人となっている（詳しくは巻末資料参照）。

その結果、学際情報学府に在籍する大学院生数は、2000 年度の修士 52 人（修士）から出発して、01

年度が 102 人（修士）、02 年度が 139 人（修士 113 人、博士 26 人）、03 年度が 169 人（修士 128 人、博士 41 人）、04 年度が 205 人（修士 136 人、博士 69 人）、05 年度が 234 人（修士 151 人、博士 83 人）、06 年度が 279 人（修士 166 人、博士 113 人）、07 年度が 307 人（修士 177 人、博士 130 人）、08 年度が 335 人（修士 191 人、博士 335 人）と増加し続けてきた。現在、東京大学のなかで大学院情報学環・学際情報学府は、大学院生数においては教育学研究科、経済学研究科などほぼ同じ規模の組織となっている。

また、本学際情報学府の大学院生の構成についてみると、(1) 東京大学以外の他大学出身者の割合が高いこと、(2) 実践的キャリアを持つ人々や第一線で活動している社会人の割合が高いこと、(3) 外国人学生の割合が相対的に高いこと、(4) 入学者の男女比も、全体の 30～50%程度が女性とほぼ均衡がとれていることなど、きわめてハイブリッドな特徴がみられる。これらの特徴は、本学府が学生の構成という面からみても東京大学のなかできわめて新しい可能性をもった大学院組織であることを示している。

本学府への志願者についてみると、社会情報研究所との合併後の最近 4 年間では、修士課程の受入予定人員 70 人（～2005 年度）、90 人（2006 年度～2007 年度）、105 人（2008 年度～）に対し、2005 年度入学試験が志願者 178 人（2.54 倍）、06 年度入学試験が 225 人（2.5 倍）、07 年度入学試験が 148 人（1.64 倍）、08 年度入学試験が 230 人（2.19 倍）の志願者が応募している。しかも合併後では、本大学院への志願者が増加傾向にあり、今日、大学院重点化のなかで大学院生数の枠が急速に広がったために大学院入試への競争倍率が低下してきている全般的な傾向からすれば、顕著に異なる人気の高さを保っている。

2.5 修士論文及び博士論文の執筆

学際情報学府の修了者数は、修士修了者では、2001 年度が 38 人、02 年度が 40 人、03 年度が 51 人、04 年度が 57 人、05 年度が 62 人と徐々に増え、06 年度は 59 人、07 年度は 61 人、08 年度は 71 人となり、毎年約 6,70 人程度の修士修了者を輩出している。

また、博士課程の修了者についてみるならば、学際情報学府では、設立されたのが 2000 年度なので、最初の入学者が博士 3 年に達する 2004 年度に初めて 4 人の博士号取得者を輩出することになった。05 年度は 1 名だったが、06 年度は 7 人、07 年度は 3 人(他に論文博士 1 人)、08 年度は 13 人(他に論文博士 1 人)の博士号取得者を輩出するに至っている。

大学院学際情報学府では、新しい学生が修士課程に入学した段階から、入学ガイダンスでの丁寧な指導、M2 の先輩たちによる Web 発表会への参加、主指導・副指導教員体制、修士課程研究計画書の提出、基礎演習および研究法授業、Web 発表会の実施、修士論文中間発表会というように、修士論文完成に至る個々の段階で学生の研究をサポートしていく体制が完備している。また、博士課程進学後も、博士課程研究計画書や博士課程コロキウムの毎年の実施、主指導・副指導による指導というように日本の大学院教育としては珍しいほどに修士論文、博士論文の執筆をサポートする体制を整えている。このような体制のなかで、これまで多様な分野の専門的な修士論文、博士論文が書かれてきており、その一例は、別表のようなリストに示される。

(別表)

2008年度修士論文タイトル

- ・個人情報保護政策へのリスク論的アプローチ –医療分野における検証–
- ・少年犯罪をめぐるマスメディアの現実構築 –『朝日新聞』の報道から
- ・中学生の逸脱行動への親子友人関係の影響 –中学生とその親における携帯電話利用状況調査から–
- ・Open Source Movement に関する考察
- ・コンテンツの工程アーキテクチャとイノベーション –映像製作プロセスのモジュール化と経営資源–
- ・人間行動の硬直と変化～SI 開発方法論普及事例から～
- ・大都市と地方における ICT の役割 –企業立地とアウトソーシングの経済的分析–
- ・情報化による家庭／職場の領域の曖昧化と家族間コミュニケーションに関する研究
- ・同一性保持権の制限可能性
- ・明治・大正期メディア史における『日本人』・『日本及日本人』
- ・動機を語る動機 –AV女優の業務と「自由意志」の成立過程–
- ・日本の新聞が描くアメリカ・中国イメージの研究 –社説の内容分析と言説分析の手法によって–
- ・コスプレの社会学
- ・メディアの他者化言説の形成過程に関する研究 –韓国における結婚移住女性に関する時事報道番組を中心に
- ・The Global Digital Divide:The Analysis of Inequality in Technological Infrastructure and Human Capital
- ・東アジア域内経済の構造変化と台湾の位置づけ
- ・アメリカ高齢者の消費行動と主観的割引率の分析
- ・映画女優の誕生：1910年代日本映画における<女優>概念の成立
- ・『街』の意味をめぐる政治的実践 –下北沢再開発問題に関する社会学的研究
- ・ゲームにおける情報流通 –ゲームの「生態系」–
- ・パブリックを志向するメディア実践 オルタナティブ，リテラシー，政治をめぐる考察
- ・アカデミックライティングを支援する協同推敲環境の構築と評価
- ・Packaged Television 「テレビ＝放送」を脱構築する
- ・動画を対象とした描画行為の観察
- ・グローバル・ガバナンスにおける参加の規定要因と課題抽出 –世界情報社会サミット (WSIS) における市民社会–
- ・オプティカル・ドット 高速道路走行における道路勾配の可視化 –環境・知覚・行為の協応による運転制御へのデザインアプローチ–
- ・学習における適応的熟達のための「転移」論考
- ・現代日本における労働運動の感情構造 –労働組合の文化研究

- ・けん玉操作における巧みさの成立
- ・俳句創作と解釈の基礎情報学的分析
- ・報道写真の歴史社会学 —写真空間と視覚の制度—
- ・We are the robots —「形式的模倣」の情報学的分析
- ・科学小説と無線想像力 —海野十三のテキストにおける表象と 20 世紀前半日本における無線技術の社会的様態—
- ・協調学習場面で教師が行う足場はずしの過程に関する研究
- ・展示空間に生まれる偶然性に着目したアート表現 —シャボン玉が 人と空間をつなぐ—
- ・日本映画製作プロセスフレームワーク構築のための研究
- ・デジタルゲームが日常生活に与える影響とその評価
- ・ワークショップ実践家が捉える空間の利用可能性に関する研究
- ・治療家の「物語」が患者に与える影響 —整体院における、治療家-患者間のナラティブに着目した参与観察
- ・小型風車の受容に作用する心理学的・社会学的要因
- ・授業開発討議での対話を促進させる実践記録形式の研究
- ・初任教師メンタリング支援システムの開発
- ・スポーツ受容・地域の力学 —「東北楽天が仙台にいる」のか「仙台に東北楽天がいる」のか—
- ・「電子メール」の系譜 —デジタル・メディアと書くことに関するソシオ・メディア論的考察
- ・アメリカナイゼーションの二重の構造—日米韓における米軍慰問舞台の構築を通して
- ・Flagging the Foreign — non-Japanese residents, television and cultural nationalism in Japan
- ・ポピュラー文化の生産者としての芸能マネジメント企業 —吉本興業を通して—
- ・Contribution of muscle spindle to kinetics during human counter movement jump. (Computer simulation study with single musculo-tendon component model)
- ・Journalists in the Making - developments of Chinese journalism education in relation to the nation's surging market economy
- ・集合体の性質が視覚弁別に与える効果
- ・Texture Mapping for Large Scale 3D Model using Stereo Method
- ・映画において失われた空間性の再現の研究
- ・レーザープラズマ方式自由空間点群ディスプレイにおける 3次元コンテンツ制作ツールの研究
- ・両面タッチ入力可能な透明インタラクティブディスプレイの研究
- ・光源環境と対象物の同時撮影法に基づく人物モデルの MR への組み込み ～飛鳥京コンテンツへの応用～
- ・垂直方向を考慮した散策・ナビゲーションツールの提案
- ・触覚センサ埋込柔軟外装による密着センシングに関する研究
- ・全面触覚ロボットハンドによるポケット内目標物の手探りと取り出し
- ・化粧の印象効果分析

- On Contribution of Syntactic Dependencies to Word Sense Disambiguation
- 半受動遊泳型刺胞動物の形状・運動シミュレーション
- SpotLite:One-Hop Disjoint Paths の検索手法 – SpotLite:A Lightweight search method for One-Hop Disjoint Paths
- 組み込みソフトウェア開発関連の認定試験における課題と提案
- Web システム開発用フレームワークの効率的利用を支援する領域特化言語の提案と実装
- 耐タンパ性チップを用いた P2P-VPN の構築
- lMesh：モバイル網資源を効率的に活用する基盤技術の設計と実装
- リアルタイム・オペレーティングシステムにおける機能安全に関する研究
- ワイヤレスセンサーネットワークにおける高速時刻同期手法
- 都市環境記述を考慮したアクティブ REID による場所特定手法
- gTRON/eTS:A secure and flexible e-Ticket System with eTRON tamper-resistant chip
- UNDERSTANDING THE PROCESS OF PARTICIPATING IN OPEN SOURCE COMMUNITIES

2.6 学際情報学府からの就職・進学動向

修士課程修了者のうち、博士課程進学者は全修了者の 35～40%程度である。したがって、修士課程を修了した者の 6 割以上が就職することになる。一般に、理系では修士修了後に就職をするケースが多く、文系では博士課程に進学するケースが多いが、文理相互浸透の大学院組織である学際情報学府は、ちょうどその中間的な割合を示しているといえる。修士修了者の就職先は別表の通りであり（別表 修士修了者の進路状況）、シンクタンク、マスコミ、情報通信およびコンピュータ関連企業、出版社など知識集約型の企業への就職が多数を占めているところが特徴的である。

2.7 学際情報学府以外の教育活動

大学院情報学環では、大学院教育組織である学際情報学府と密接に連携しながら、コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム、教育部及びベネッセ寄附講座、電通コミュニケーションダイナミクス寄付講座、OKI ユビキタスサービス学寄附講座、ユビキタス情報社会基盤学寄附講座でも教育活動を行っている。

2.7.1 教育部

情報学環教育部は、情報、メディア、コミュニケーションについて学びたい人々のために、2年間にわたって情報学の体系的な教育を行うユニークな教育組織である。講義は、各自が所属する学部や大学院の授業などと両立できるように、おおむね夕刻（15:15 分以降）から夜間にかけて開講されている。学部、研究科という「タテ糸」で成り立つ東京大学のなかに、情報というキーワードをめぐる教育研究を「ヨコ糸」で縫い合わせてできた情報学環。教育部は、その情報学環という斬新な組織の特性を活かした、魅力的な教育研究活動の場となっている。

情報学環教育部では、毎年、前年度後期に入学試験をおこない、一学年約 50 名の教育部研究生を選抜している。大学 2 年生以上（4 月以降大学 2 年生になる見込みの人を含む）であれば、東京大学の学

生であるなしにかかわらず、社会人も含めて受験をすることができる。

情報学環教育部の歴史は古く、その起源は、1929年（昭和4年）の文学部新聞研究室にまでさかのぼる。小さな組織だった新聞研究室は、戦後まもない1949年（昭和24年）に、文系の学際的研究組織である新聞研究所へと発展した。新聞研究所は、その名のとおり、新聞をはじめとするマスメディアが巻き起こす社会情報現象やコミュニケーション変容を体系的に研究することを目的として設立されたが、同時に、マスメディアで働く記者などの実務家を育成することも目的としていた。

1992年（平成4年）、新聞研究所は社会情報研究所として改組され、マスメディアに限定しない、情報に関わるあらゆる社会現象の研究を総合的に進めていくことになった。2004年（平成16年）には、大学院情報学環と合併し、今日まで情報学の伝統を脈々と引き継ぎながら、文理融合の最先端の研究を推進し、また教育活動にも力を注いでいる。

参考として平成20年度開講科目を以下に示す。

（夏学期）

	4限 15:15～16:55	5限 17:05～18:45	6限 18:55～20:35
月			実践メディア産業論 II (広告)
火	文化・人間情報学基礎 VII (科学技術とメディアの関係を考える)	総合分析情報学基礎 B (ユビキタス情報社会基盤論)	実践情報社会論 III (ソーシャルメディア)
水	実践メディア産業論 I (出版)		実践メディア産業論 VIII (新聞)
木	文化・人間情報学基礎 VIII (モバイルとメディア表現)		
金			実践情報社会論 I (ICT 産業論・コンテンツ論)

（冬学期）

	4限 15:15～16:55	5限 17:05～18:45	6限 18:55～20:35
月	学際理数情報学基礎 B (科学技術リテラシー)	文化・人間情報学基礎 IV (ワークショップのデザ	

	向上のためのコミュニケーション)	イン)	
火	実践メディア産業論 IX (放送)	社会情報学基礎 VII (情報経済とイノベーション)	学際理数情報学基礎 A (すみやすい社会をつくる 学際理数情報学)
水		社会情報学基礎 VIII (映像から見る現代社会)	
木	特別講義 II (日本中世史を素材として歴史情報を考える)	社会情報学基礎 IX (情報法・政策)	特別演習 III
金			

なお、2004年から2008年までの教育部志願者数、受験者数、合格者数については巻末参考資料を参照していただきたい。

2.7.2 コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム

コンテンツ創造科学の目的

欧米諸国ではコンテンツは文化資源としてだけでなく経済資源としても重視され、20世紀初頭から国家戦略としてこの分野の人材育成が実施されていた。21世紀に入り、アジア諸国でも成長分野としてのコンテンツ産業振興を国家目標と掲げるなどして人材育成に注力している例も数多い。これらの国が高等教育機関から専門学校まで幅広い人材を育成しているのに対し、わが国では専門学校におけるクリエイター育成がほとんどであった。その結果、比較的国際競争力を持っていたわが国のアニメーションとゲームも、人材育成に力を入れている他の国々に激しく追い上げられている。このような世界状況の中で、先端的デジタル技術の知識を有し、国際競争力を持つ創造的コンテンツを制作し流通させる修士レベルの人材育成はわが国にとって急務である。

特に、デジタルコンテンツ分野においては、近年の情報技術の革新と連動して、作品制作における技術の比重が以前に比べて格段に高くなってきている。このため、製作者・監督者の両者において、通常のコンテンツ制作における知識のみならず技術に通暁することが強く求められてきている。また、同時に、新たな表現技術の研究開発を担う技術者の側においても、作品製作の現場における諸事情に通暁し、技術開発と作品制作の間の架け橋となることが求められている。これらの状況を総合的に評価した結果、人材養成の対象としては大きく①プロデューサー、②技術開発者の2者を掲げてはいるが、その間に広がる広範なスペクトルを包含する人材層を養成することを想定している。その結果として得られる、従来になかった種類の人材は、日本のコンテンツ産業の水準の牽引と国際競争力の強化に大きく寄与するものと考えている。

特に、人材養成の推進により、高次の知識を有する専門家を体系的に産業界に供給することを可能と

し、従来は希薄であったコンテンツ産業界と高等教育機関、さらには学会との連携の強化が実現される。同時に、これらの人材育成を行う際の教育プログラムの規範を提供できる。来日してアニメーションやゲームについて学ぶことを希望する者が多いため、海外から優れた人材が集結する国際的拠点の形成に発展しうるだろう。

養成の対象となる人材

本教育プログラムでは、3種の人材の養成を目的としている。各々の人材養成において想定する到達レベルは以下のようになっている。

- プロデューサー**： 先端技術と国際的なコンテンツビジネスの高度な専門知識を有し、実社会で研究成果を活用できる人材。
- 指導的教育者**： デジタルコンテンツ創造に関する高度な人材育成プログラムを構築できる教育者。
- 技術開発者**： 表現手法に詳しく、エンターテインメント技術の研究開発をクリエイターと共に行える技術開発者。

人材養成における手法の独自性に関して

「わが国に欠落している人材の養成：プロデューサー」

国際競争力があるわが国のコンテンツが国際市場から評価に見合った経済的報償を得る機会を逃していることが少なくないのは、国際的なビジネス・スキームを組めないためである。本プログラムでは、国際的ビジネスの知見と、先端的な技術に関する知見をもったプロデューサーを養成することで、日本のコンテンツ産業の国際競争力を強化する。

「わが国に欠落している人材の養成：指導的教育者」

わが国にはクリエイター養成機関が多数存在するが、教育者そのものを育成する機関が存在しないため、教育も経験による属人的なものになっているのが実状である。そのため、本分野では教育者が絶対的に不足している。本プログラムでは、コンテンツ創造の人材育成で指導的な立場にたつ教育者を育成することで、日本における教育水準を向上させる。

「わが国に欠落している人材の養成：技術開発者」

国際競争力をもっていたわが国のアニメーションやゲームが守勢にあるのも、制作技術の開発の立ち後れに原因がある。コンテンツ産業の知見を有した先端的エンターテインメント技術を研究開発できる技術開発者の育成が急務である。

「自然科学と人文・社会科学との融合」

東京大学では早くからデジタルコンテンツ創造に関する教育プログラムの実現に向けて検討を重ね、

産業界の協力を得て「コンテンツビジネス概論」、「メディアビジネス概論」（共に浜野保樹）、「ゲームデザイン&エンジニア論」（馬場章）などの講義を実施し、『表現のビジネス：コンテンツ制作論』（浜野保樹著）、『CG入門』（河口洋一郎著）、『記憶のゆくたて：デジタル・アーカイブの文化経済』（武邑光裕著）などの教科書を作成した。また、コンテンツ創造の競争力を向上させるためには、自然科学と人文・社会科学との融合が不可欠であることを考慮すると、人材養成機関には先端的研究の裏づけが必須である。東京大学では、コンテンツ創造に活用できる映像処理技術やバーチャルリアリティー技術やアーカイブ技術など、多くの技術開発を行い、技術者養成で実績がある。

「高等教育機関と産業界との連携」

スタジオジブリには「東小金井村塾」、プロダクション I G には押井守氏による「押井塾」などがあり、自主的な人材育成が既に実施されている。その成果が『千と千尋の神隠し』や『攻殻機動隊』の国際的成功につながっている。コンテンツ分野では、実践現場における知識が重要であるため、このような試みで既に成果をあげている専門家と連携し、広範に教育を行うことで、より実践的な人材育成が行える。また、コンテンツ産業は東京に集中するため、産業界の協力を得て継続的に先端的人材育成を行うためには東京に立地している必要がある。

「人材養成のモデル」

国際的な成功を収めたコンテンツ業界の経験知と、東京大学の技術者教育の経験を科学的に融合させ、体系的に整理した本プログラムのカリキュラムは、コンテンツ人材の育成モデルとなる。

「非ハリウッド型人材育成」

コンテンツ人材養成はハリウッドの手法を流用することが多いが、ハリウッド・モデルは表現の多様性を阻害する方向に向かうことが多い。本プロジェクトでは表現の多様性を担保するわが国のコンテンツ産業が培ってきた技法やモデルに準拠しつつ、国際的に通用する実務知識を有する人材育成を行う。

国内外の類似事例との対比

● 国内

わが国におけるこの分野の人材育成は、専門学校によるクリエイター育成が中心である。プロデューサー養成としては教育特区構想の一環としてデジタルハリウッドが、株式会社の専門職大学院としてあげられるが、Webなどの小規模作品制作のプロデューサーとディレクターの育成が主眼である。

大学としてデジタルコンテンツの関連学科を持つのは、東京工芸大学芸術学部アニメーション学科や大阪電気通信大学情報工学部デジタルゲーム学科などであるが、やはりクリエイター養成が目的である。

関連大学院として、東京大学情報学環と東京大学新領域創成科学研究科メディア環境学分野が内容的に最も近く、両者ともにプロデューサー養成を目的の一つとしている。これらの知見が活かされ、産業界との連携において拡張したものが本教育プログラムである。

その他、本学におけるメディアコンテンツに関する学部教育として、平成18年度冬学期より学部横断型教育プログラムが開始され、平成21年度より全学的な教育プログラムとして発展している。また、東京藝術大学、九州大学、立命館大学、慶応義塾大学、早稲田大学においても、本分野に力を入れてきている。

● 国外

海外では Film School と呼ばれる映画大学でデジタルコンテンツの教育が行われている事例が多く、先進諸国では、フェミス（仏）、BFI（英）、SFI（スウェーデン）、北京映画学院（中国）、北京広播学院動画学院（中国）、国立芸術学院映画演劇学科（台湾）といった国立の映画大学が存在する。米国でも政府の連邦政府資金が入った大学院大学AFIが存在する。

しかし、これらはクリエイター養成機関であって、デジタルコンテンツのプロデューサー育成を行っているのは、米国のエンターテインメントに関するMBAコースである。これらと技術に関する研究開発を併せ持つ機関として、南カリフォルニア大学（USC）があげられる。既にUSC映画・テレビ学部長とも包括的な情報交換を定期的に行うことで合意しているが、USCはあくまでもハリウッド・モデルを前提としたものであり、本教育プログラムは日本型モデルを志向している点で大きく異なる。

コンテンツ教育の実施

本教育プログラムでは、東京大学の修士課程在籍者あるいはそれと同等以上の学力水準を持つ者を対象として、毎年40名程度を目標に選抜試験を実施している。平成19年度は66名の応募者のうち38名を履修生として認定、18年度までに認定した履修生とあわせて96名に対し授業を実施した。

我々は、マネジメント能力と工学的知見を兼ね備えた人材の養成を目指している。そのため、コンテンツ分野間でのバランスを保持した履修を促すために、カリキュラムを構成する科目群は、習得すべき知識・スキルに基づき4つの科目群に分けられている。さらに、被養成者自らが描くキャリアプランに合わせた柔軟な履修選択ができるよう、講義の選択に一定の幅を設けた。科目群とその履修における制約は以下の通りである。

- (1) デジタルコンテンツ創造科学講義は、デジタルコンテンツ創造のための基礎理論や基礎知識に関する授業を主として講義形式で行うものであり、3科目（6単位）以上を履修する。
- (2) エンタテインメントテクノロジー研究は、デジタルコンテンツ創造のための科学的先端技術に関する授業を講義あるいは演習形式で行うもので、1科目（2単位）以上を履修し、「デジタルコンテンツ創造科学特論」と合計して8単位以上を履修する。（平成17年度および18年度に認定した履修生は2科目（4単位）以上を履修する。）
- (3) デジタルコンテンツ創造科学特論は、コンテンツタイプごとに作品批評や製作現場における実践的な問題に関する授業を講義あるいは演習形式で行うもので、1科目（2単位）以上を履修し、「エンタテインメントテクノロジー研究」と合計して8単位以上を履修する。（平成17年度および18年度に認定した履修生は2科目（4単位）以上を履修する。）する。
- (4) デジタルコンテンツ創造科学演習は、産業界におけるインターンシップあるいは学内で製作・マー

ケティングシミュレーションや研究指導（論文作成）を行うもので1科目（6単位）を履修する。

「デジタルコンテンツ創造科学講義」、「エンタテインメントテクノロジー研究」では、コンテンツ製作におけるマネジメントや技術に関する知識を習得し、「デジタルコンテンツ創造科学特論」では表現様式ごとに固有な知識やスキルを習得することを目的としている。そして、「デジタルコンテンツ創造科学演習」では、上記の授業で習得した知識・スキルをインターンシップや製作・マーケティングシミュレーションなどの実践的演習を通して経験知を共有することを目的としている。なお、本教育プログラムでは、大学院情報学環の他、大学院新領域創成科学研究科、大学院情報理工学系研究科、大学院人文社会系研究科、大学院工学系研究科、国際・産学共同研究センター（、先端科学技術研究センターに所属する教員、ならびに、産業界から国際的な業績をあげている専門家の協力を得て被養成者の選考、授業の実施およびカリキュラム開発を実施している。また、企業からはインターンシップの受入を通じた協力も得ている。

参考として平成20年度開講科目を以下に示す。

科目区分	科目名・タイトル名	学期	曜日・時限	単位	修了要件
	デジタルコンテンツ創造科学特別講義 a	冬	水・2	2	—*1
	デジタルコンテンツ創造科学特別講義 b	冬	金・6	2	
デジタルコンテンツ創造科学講義	コンテンツ制作理論	夏	木・2	2	3科目(6単位)以上
	コンテンツ制作技術論	夏	月・5	2	
	グローバルストラテジー論	冬	金・5-6	2	
	コンテンツ法務	冬	木・6	2	
	コンテンツ財務	夏	木・6	2	
	コンテンツ文化史	通	月・6	2	
エンタテインメントテクノロジー研究	コンピュータグラフィックス	夏	木・2	2	2期生・3期生*2 2科目(4単位)以上
	コンピュータグラフィックス	冬	木・2	2	
	コンテンツデザイン	夏	木・2	2	
	デジタル映像処理	冬	水・5	2	
	ゲームテクノロジー論	夏	水・6	2	4期生*3 1~3科目(2~6単位)以上* 3
	コンテンツ知覚心理	夏	月・3	2	
	制作展示プロデュース	通	火・6	2	
	インタフェースデザイン	夏	月・3	2	
	先端科学技術と芸術表現論	夏	水・2	2	
	検索技術と情報ビジネス	夏	金・6	2	
アートとテクノロジーの融合	冬	未定			
デジタルコンテンツ創造科学演習	インターンシップ	通年	—	6	6単位
	製作・マーケティングシミュレーション ゲームプロデュースゼミ	通年	火・6-7	6	
	製作・マーケティングシミュレーション アニメーション企画ゼミ	通年	水・6	6	
	製作・マーケティングシミュレーション フィルムプロデュースゼミ	通年	土・3	6	
	製作・マーケティングシミュレーション 展示プロデュースゼミ	通年	—	6	

	論文作成	通年	—	6	
デジタルコン	作品研究	夏	水・3	2	2期生・3期生*2 2科目(4単位)以上
	アニメーション制作理論	通	水・5	2	
テント創造科	ゲームプロデューサー論	冬	水・6	2	4期生*3 1～3科目(2～6単位) 以上
学特論	映画産業論	冬	土・4	2	
	デジタルメディア	冬	金・4	2	
修了要件単位数(修了に必要な総単位数)					20単位

*1 演習科目以外の任意の科目群(講義・研究・特論)の単位として認定する。

*2 平成17年度および18年度に認定した履修生

*3 平成19年度に認定した履修生

修了者の認定

修了認定は、各科目群の必要単位数を満たし、かつ、その合計が20単位以上の被養成者を対象に行われる。修了判定会議では、被養成者の取得単位数および履修状況などから総合的に判断した結果、平成20年度修了者として22名が認定された。なお、平成17年度修了者12名および平成18年度修了者26名、平成19年度修了者21名とあわせると、81名の修了者がゲーム開発企業、アニメーション制作企業、放送局、広告代理店などのコンテンツ業界に就職、あるいは本学に引き続き在籍し、技術開発者あるいは教育的指導者となるべく研究活動に従事している。

参考として平成19年度開講科目を以下に示す。

科目区分	科目名・タイトル名	学期	曜日・時限	単位	修了要件
	デジタルコンテンツ創造科学特別講義	夏	夏季集中	2	—*1
デジタルコン テント創造科 学講義	コンテンツ制作理論	夏	火・5	2	3科目(6単位)以上
	コンテンツ制作技術論	冬	月・5	2	
	グローバルストラテジー論	冬	金・6	2	
	コンテンツ法務	冬	木・6	2	
	コンテンツ財務	夏	木・6	2	
	コンテンツ文化史	夏	月・6	2	
エンタテインメ ントテクノロジー ー研究	バーチャルリアリティ	夏	金・2	2	2期生・3期生*2 2科目(4単位)以上
	コンピュータグラフィックス	夏	木・2	2	
	コンピュータグラフィックス	冬	木・2	2	
	コンテンツデザイン	夏	木・2	2	
	デジタル映像処理	冬	水・4	2	4期生*3 1～3科目(2～6単位)以上* 3
	ゲームテクノロジー論	夏	水・6	2	
	コンテンツ知覚心理	夏	木・3	2	
	制作展示プロデュース	通	火・6	2	
	インタフェースデザイン	夏	水・5	2	
	先端科学技術と芸術表現論	夏	月・2	2	
検索技術と情報ビジネス	冬	金・3	2		
デジタルコン テント創造科	インターンシップ	通年	—	6	6単位
	製作・マーケティングシミュレーション	通年	火・6-7	6	
	ゲームプロデュースゼミ	通年	火・6-7	6	

学演習	製作・マーケティングシミュレーション アニメーション企画ゼミ	通年	木・5	6	
	製作・マーケティングシミュレーション Web サイト企画ゼミ	通年	木・4	6	
	製作・マーケティングシミュレーション フィルムプロデュースゼミ	通年	—	6	
	製作・マーケティングシミュレーション 展示・出版プロデュースゼミ	通年	—	6	
	論文作成	通年	—	6	
デジタルコン テンツ創造科	作品研究	通年	夏・火・6 冬・火・5	2	2期生・3期生*2 2科目(4単位)以上
	アニメーション制作理論	冬	水・5	2	
学特論	ゲームプロデューサー論	冬	水・6	2	4期生*3 1～3科目(2～6単位) 以上
	映画産業論	冬	土・4	2	
	デジタルメディア	冬	金・5	2	
修了要件単位数(修了に必要な総単位数)					20単位

*1 演習科目以外の任意の科目群(講義・研究・特論)の単位として認定する。

*2 平成17年度および18年度に認定した履修生

*3 平成19年度に認定した履修生

修了者の認定

修了認定は、各科目群の必要単位数を満たし、かつ、その合計が20単位以上の被養成者を対象に行われる。平成20年2月13日に行なわれた修了判定会議では、被養成者の取得単位数および履修状況などから総合的に判断した結果、平成19年度修了者として21名が認定された。なお、平成17年度修了者12名および平成18年度修了者26名とあわせると、59名の修了者がゲーム開発企業、アニメーション制作企業、放送局、広告代理店などのコンテンツ業界に就職、あるいは本学に引き続き在籍し、技術開発者あるいは教育的指導者となるべく研究活動に従事している。

2.7.3 ベネッセ先端教育技術学講座（寄附講座）

ベネッセ先端教育技術学講座では、教育活動として以下の2点に力を入れている。

- ・学際情報学府の教育活動との有機的連携

ベネッセ先端教育技術学講座(BEAT)で行われている研究プロジェクトおよび社会還元的教育活動(公開講座、メールマガジン発行、Webサイト運用)に対する学際情報学府の大学院生の参加を奨励し、研究プロジェクトおよび社会還元的教育活動がそのままプロジェクト学習の基盤になるような工夫をしている。その中で特に研究プロジェクトに関心を持った学生については、研究プロジェクトの中で修士研究を行うなどの配慮をすることにより、先端教育技術に関する教育活動の拠点になっている。

- ・公開講座による社会還元的教育活動

一般社会に対して、先端教育技術に関する知見やノウハウの教育活動を行うため、3ヶ月に1回のペー

スで公開研究会 BEAT セミナーを開催している。昨年度開催された公開研究会は、以下の通りである。

第 1 回：あなたに「ぴったり」な学びをかなえる技術 ―教育における協調フィルタリングの可能性を考える― (2008 年 6 月 7 日)

第 2 回：プロジェクト学習が大学を変える (2008 年 9 月 6 日)

第 3 回：アートワークショップで子どもの可能性をひらく (2008 年 12 月 6 日)

第 4 回：BEAT 特別セミナー 教育工学 25 年の歴史から考えるデジタル教材の未来 (2009 年 3 月 28 日)

2008 年度はのべ 400 名を超える参加者が公開研究会に参加している。この中には、学生・大学教員に加え、教材開発を行っている社会人も数多く含まれており、デジタル時代の学習コンテンツ・システムに関する最新の知見を伝える機能を果たしている。

2.7.4 電通コミュニケーションダイナミクス寄付講座

情報学環では、株式会社電通からの寄付を受け、2007 年度から 2009 年度の予定で、電通コミュニケーションダイナミクス寄付講座を設置し、研究を行っている。寄付金額は 3 年間で 5 千万円である。

研究目的は、急速に大きな構造変化を遂げつつあるメディア環境・コミュニケーション環境を背景に、メディアや広告が担う経済価値の変化、人々のコミュニケーション行動やメディア文化の変容、メディア制度の変化、さらに、情報発信の倫理やジャーナリズム、情報通信技術と社会の関係のあり方などを、総合的な視野にたって研究することにある。メンバーは、情報学環の常勤教員のほか、外部の特任研究員から構成されている (II 資料 16 表 16-1)。

2008 年度には、2 回のシンポジウムや授業を開催するなど、着実に研究を進めている (II 資料 16 表 16-2)。研究活動については、ウェブサイト(<http://dcom.iii.u-tokyo.ac.jp/>)を通じて積極的に公開している。

2.7.5 OKI ユビキタスサービス学寄附講座

「OKI ユビキタスサービス学」寄附講座は、沖電気工業株式会社 (以下 OKI) の寄附により平成 19 年 4 月に情報学環に開設された。情報学環では、21 世紀 COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」(拠点リーダー：坂村健・教授) と呼ぶ拠点形成プログラムを進めており、既にユビキタス情報分野の世界的な研究教育拠点となっている。一方、OKI は企業ビジョンとして「ユビキタスサービスにあふれる e 社会」を掲げており、こうした東京大学における取り組みにご賛同いただき、相互に協力して本寄附講座の開設に至ることができた。

本講座の目的は、体系的な調査・分析および実践を通して、ユビキタスサービスに関する知見を深め、その実現に向けた研究開発を行うことで社会貢献を果たすことにある。そして、本講座で追求するユビキタスサービスに関する学問体系をユビキタスサービス学と呼び、本講座名に冠した。

本講座は、坂村健教授と新規に採用する数名の若手教員が中核となり、21 世紀 COE の拠点形成プログラムや大学院学際情報学府総合分析情報学コースと連携して、研究教育活動を推進している。

2.7.6 ユビキタス情報社会基盤学寄附講座

「ユビキタス情報社会基盤学」寄附講座は、凸版印刷株式会社の寄附により、東京大学大学院情報学環に平成19年10月1日に開設した。本寄附講座は、ユビキタスコンピューティングの基盤技術と、それを核とした社会イノベーションに関する研究教育の実施することを目的とし、ユビキタスコンピューティングシステムの基盤技術や、それが社会に与えるインパクトや影響の分析に取り組む。それによって、ユビキタス情報社会の基盤となる基礎学問分野を確立したいと考えています。その研究活動は、21世紀COEプログラム「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」(拠点リーダー：坂村健)と、更に教育活動においては、大学院学際情報学府 学際情報学専攻 総合分析情報学コースと密な連携をして進めていきます。平成19年度は、21世紀COEプログラムと共同で、本講座のキックオフを記念するシンポジウムを平成20年2月に開催した。

3. 研究活動

3.1 概況

研究組織としての情報学環は、異領域の出会いの場である。同じ学問領域の研究者が集まり、その集積性によってその学問領域の体系化を図り、またそれまで解決できなかった問題に突破口を開こうとする目標の立て方とやり方が存在する。しかし、情報学環は違う目標をもっており、違うアプローチを採っている。情報学環は学際情報学という新しい学問を創出するという目標をもっており、異なった学問領域の研究者に出会いの場を提供し、異種交配と相互越境というやり方によって、それを達成しようとしている。そのような研究組織は規模においてそれほど大きいものである必要はないが、しかし特有の研究組織論が必要とされる。

3.1.1 文理の相互作用と連携

伝統的に日本の大学においては、学問研究は文系と理系に大きく分けられてきたし、現在もそれが生きている。新しい分野、とりわけ学際情報学にとっては、その区分けを乗り越えて、文理連携、文理越境、文理相互浸透が必要であり、それなくして発展の展望はない。情報学環は最初からそのような文理連携の研究組織論に基づいて設立されたものである。しかも、その文理の比重がどちらかに大きく偏ることなく、バランスを取っているのが大きな特色である。

現在、情報学環では大小合わせてさまざまな文理連携型の研究プロジェクトが実施されている。なかでも最大のものが21世紀COE「次世代ユビキタス社会基盤の形成」(研究リーダー：坂村健教授、副学環長)である。その予算規模は科学研究費補助金や寄附講座などを含めた学環の研究資金全体の4分の1を占めており、運営費交付金分の金額をさえ上回っている。その研究内容は、文理連携の下に次世代ネットワーク社会を大胆に構想している。その創造性が高く評価されて採択されたものと考えられる。情報学環のスタッフ体勢は、こうした文理連携の大型研究プロジェクトを自前でカバーしていくことが

できるのである。

そして、文理連携の 21 世紀 COE は、組織の財政上、情報学環ならではの効用とメリットを発揮することになった。国立大学に対する現在の財政政策の仕組みでは、文系の資金獲得には限界があり、困難が伴う。理系が必要とするような大きな額ではないにも関わらず、文系が運営費交付金や競争的資金を新たに得るのは容易なことではない。しかし、文理連携の研究計画のもとに 21 世紀 COE という競争的資金が獲得できたことによって、結果的に文系の研究分野へ資金が流れ、これまで経済的な理由からできなかった研究活動を展開できるようになったのである。これは、文理連携で情報学を構築していくという組織論が、財務上も有益な影響を生み出していることを物語っている。こうした研究資金状況の改善によって、文系は文系の側から文理連携の企てを積極的に展開していくことが可能になったのである。内部相互補助のやり方だと言えよう。

3.1.2 流動教員制度

情報学環独特の仕組みにとりして、流動教員制度がある。これは設立当初、学内の情報関連教員を糾合し、ネットワーク組織型に新しい大学院を創設するため、学内関連部局の協力を得て作り出されたものである。これにより、情報学環に所属する教員には、基幹教員と流動教員の 2 種類が存在する。基幹教員は、情報学環に固有のポスト、すなわち基幹教員枠（部局の「採用可能数」として割り当てられているポスト）で採用されている教員である。その教員室のスペースも学環によって手当てされている。それに対して、流動教員は、流動元の部局から情報学環へ時限で振替られている流動教員枠を使って、流動元の部局よりやはり時限で配置換えになって情報学環に所属している教員である。その教員スペースは現状では情報学環として手当てすることができず、流動元部局のスペースをそのまま使用している。

この流動教員制度により、情報学環の研究組織は研究者の循環と入れ替わりの仕組みを内蔵しており、もって研究活動に常にイノベーションの条件を保障しようとしているのである。流動教員の立場からすれば、情報学環に流動教員として参加することによって、元部局とは異なった学際的な教育研究環境に入ることが可能であり、また研究所が元部局の教員にとっては大学院教育に通常の義務と権利で加わる機会が得られることとなる。こうした条件が研究者同士に新たな刺激を生み出すとともに、従来の枠を脱する糧となると見込まれている。こうした組織論による利得は、現在、大小さまざまな研究プロジェクトの活動に見て取ることができる。

3.2 大型研究プロジェクト

3.2.1 文部科学省 21 世紀 COE 「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」

現在、状況認識技術（Context-awareness）を中核とする新しい情報分野（ユビキタスコンピューティング）の研究が世界的な大きな潮流となっている。ユビキタスコンピューティングは、世界に先駆けて本拠点リーダー（坂村）が 1984 年に開始したトロンプロジェクトの技術目標に掲げたコンセプトである。こうした経緯もあり、我が国は本分野において世界を先導する技術水準を有する。しかし、学術分野・産業分野双方で世界的に活発な研究開発がなされており、本分野の重要性は現在の世界的な共

通認識となっている。そのため、本分野の研究の推進は、激しい国際競争の中で遅れをとらないためにも必須のものである。ユビキタスコンピューティングの適用分野は多岐にわたり、既に農学、医学、薬学、地理学、生物学等の諸学問分野をはじめ、災害支援や社会安全の実現、国土産業社会インフラ等の国家レベルの施策への適用も期待されており、本分野の研究レベルや技術競争力の低下は、我が国の将来の国力低下に直結する。したがって、ユビキタスコンピューティング分野の研究教育を積極的に推進することは緊急度と重要度が極めて高い。そこで、東京大学大学院情報学環が核となり、東京大学はユビキタスコンピューティング技術やそれを様々な分野に適用する研究や、当該分野の人材育成を行う教育のための拠点として、文部科学省 21 世紀 COE プロジェクトを平成 16～20 年度の 5 年計画で開始した。本拠点における研究は、基礎技術研究、応用技術研究、社会適用研究の 3 つの分野からなる。

(1) 基礎技術研究

ユビキタスコンピューティングにおける状況認識技術の核となる、超小型 RFID やセンサーネットワーク、リアルタイムシステム、組込みシステムなどの基盤情報技術の研究を実施。

(2) 応用技術研究

ユビキタスコンピューティングの状況認識技術を、他の様々な分野に適用する応用研究を実施。

(3) 社会適用研究

ユビキタスコンピューティング技術を社会基盤として適用する際の社会的課題についての研究を実施。

ユビキタス情報技術研究プロジェクトは、常勤教員 10 名、特任教員 8 名、特任研究員 1 名、RA1 名によって構成され、主にユビキタスコンピューティングの基盤技術の研究分野である。ユビキタス情報社会国際研究プロジェクトは、常勤教員 7 名、特任教員 3 名、特任研究員 1 名、RA3 名により構成され、主にユビキタスコンピューティング技術を社会に適用するとき社会的な課題、あるべきユビキタス情報社会のあり方の研究分野である。ユビキタス情報コンテンツ形成プロジェクトは、常勤教員 4 名、特任教員 1 名、RA4 名によって構成され、コンテクストアウェアな情報配信を、社会規模で実施するために必要なコンテンツ記述技術の研究分野である。更に本拠点は、世界におけるユビキタスコンピューティング分野の研究教育のハブとしての役割を果たすべく、世界中の様々な大学や企業との共同研究や共同実験の実施、関連する政府機関等との密接な連携を行い、プロジェクトを推進した。

■総括班

坂村 健・教授（拠点リーダー）

須藤 修・教授（拠点リーダー補佐）

石崎 雅人・准教授（総括調整）

越塚 登・准教授（総括調整）

■プロジェクト A:ユビキタス情報コンテンツ形成プロジェクト

馬場 章・教授（統括）
橋本 良明・教授
石田 英敬・教授
西野 嘉章・教授（総合研究博物館）
添野 勉・特任教員
大島 十二愛・RA
倉持 基・RA
松田 好史・RA
山下 大輔・RA

■プロジェクト B:ユビキタス情報技術研究プロジェクト

坂村 健・教授（統括）
原島 博・教授
辻井 潤一・教授
河口 洋一郎・教授
中川 裕志・教授（情報基盤センター）
清水謙多郎・教授（大学院農学生命科学研究科）
石崎 雅人・准教授
越塚 登・准教授
中尾 彰宏・准教授
石川 徹・准教授
大石 久和・特任教授（国土技術研究センター 理事長）
篠塚 勝正・特任教授（沖電気工業社長）
井村 亮・特任教授（日立製作所 情報・通信グループ、ミューソリユーション
事業部長）
岸上 順一・特任教授（NTT サイバーソリユーション研究所所長）
石田 忠正・特任教授（日本郵船株式会社代表取締役）
石川 雄章・特任教授
小林 真輔・特任准教授
Wesley Dean Charles Hay・特任講師
富田 啓一・特任研究員（非常勤）
神尾 真人・RA

■プロジェクト C:ユビキタス情報社会国際研究プロジェクト

吉見 俊哉・教授（統括）

西垣 通・教授
濱田 純一・教授
須藤 修・教授
佐倉 統・教授
水越 伸・准教授
林 香里・准教授
竹之内 禎・特任講師
山本 拓司・特任教員
D. ビュースト・特任教員
西 兼志・特任研究員
阿部 卓也・RA
高畑 一路・RA
中路 武士・RA

研究面においては、従来積み重ねてきた組み込みコンピュータ、ユビキタス ID アーキテクチャを核としたユビキタス技術を進化させ、ユビキタス場所情報システムの確立や ucode によるトレーサビリティ技術、セキュリティ技術の確立を行った。そして、国際標準活動に関しても積極的に参画し、国連の下部組織である ITU-T の WG において、事業推進担当者が重要な役割を担い、その結果、日本発・本拠点発の技術を世界標準にまで押し上げることに成功した。また、デジタルアーカイブ分野においても最先端の技術によるアーカイブ構築技術を確認し、さらにはユビキタス・コンピューティングとの融合を実現することができた。また、教育面においては、総合分析情報学コースが中核となってカリキュラムの充実を図り、また、世界最大規模の実証実験を通じ大学院生並びに若手研究者の育成を実施した。総数 5 千以上の RFID タグや電波マーカなどを用い、延べ数千人が参加した世界最大規模のユビキタス技術の実証実験において、若手研究者並びに大学院生らが開発した要素技術を適用し、実際に実験を行うことにより、学術的のみならず、実用的な成果を上げることができた。コード規模で十万行以上のシステムによって実現した場所情報システムは、上野動物園や東京都庁、東京ミッドタウン、京都植物園での情報提供サービスとして実用化し、現在でも運用を行っている。また、研究プロジェクトにおいて、文化資源の分類と整理のためのマニュアル作成に関与し、歴史学、社会学、工学といったそれぞれの異なる専門性を生かして一万点以上の文化資源を最終的なメタデータエレメントセットへと変換していくプロセスに学生が参画した。これは既存の研究にない未着手の領域であったが、5 年の研究期間を通じて国際学会においても発表を行いうる洗練されたアーカイブ構築プロセスを提示することができた。

さらには多数の国内外のシンポジウムを通じ文系理系を問わずあらゆる分野の人々に対して情報発信を行い、思想啓蒙から政策提言までを行った。国内においては COE シンポジウムを 20 回実施した。テーマは多岐にわたり、ユビキタスをキーワードにして、技術研究、哲学的な考察を含めた基礎理論研究、社会情報学的分析、法的・経済学的分析、ユビキタスコンテンツの構築やその活用など、あらゆる内容での議論を展開した。参加者は延べ 8000 人以上となり、1 回当たりの参加者が平均約 400 名と多

数の人々に対して情報発信を行うことができた。さらにこのシンポジウムの成果を書籍として出版し、広く一般向けに対しても情報発信に努めた。国際シンポジウムにおいても情報発信を実施した。毎年12月に開催される TRONSHOW において、国内外に本 COE 拠点が中心となって開発したユビキタス・コンピューティング技術の展示ならびにシンポジウムを実施した。参加者数は5年間で延べ5万5千人以上となり、技術系のシンポジウムでは群を抜いているといえる。EU 政府や中国政府など、海外からも多くのユビキタス関連の政策担当者も招聘し、本プロジェクトの研究成果の発信に努めた。

3.2.2 超高精細映像と生命的立体造形が反応する新伝統芸能空間の創出技術

本研究は、日本古来の伝統空間における壁、間仕切り、装飾品などを、生物的・自然的な超高精細CG からなる、繊細かつ濃密な紋様で装飾し、また、それらの空間構成要素が造形物として、情感的・美的・知的かつダイナミックに振舞う事の出来る、新しい日本の伝統芸能空間：「超高精細映像と生命的立体造形が反応する新伝統芸能空間」を生み出す事を目指している。

平成20年度においては、自然的・生物的CG アルゴリズムの開発を基礎として、実際の伝統的襖への応用、超高精細映像への応用、および、情感的・知的かつ芸術的な造形物を構築するための基礎的な方法論の構築、および、制御機構の開発を推進した。

自然的・生物的CG に関しては、流体と弾性体および流体と弾性体の相互作用の物理シミュレーション環境の実装、および、流体と弾性体の相互作用の物理シミュレーションのリアルタイムレンダリングを中心に研究を行った。また、生体情報を用いたCGの制御およびインタラクティブアートの開発を行い、国際学会等において展示発表した。

また、CGに連動して3次元的にスクリーン表面を変化させる事が出来る Gemotion screen について、これまで開発を行ってきた平面型の Gemotion Display における、「側面から見ない限り3次元の凹凸感が感じられない」問題に対する解決の一例として、球面状の Gemotion Display を試作開発し、映像投影実験を行った。

生命的立体造形に関しては、デザインされた造形物にセンサ・アクチュエーターを埋め込み、制御インターフェースを組み込み、ロボットとしての実装を開始した。具体的には、魚型のデザインに眼球カメラを埋め込み、情報処理を行い、眼球のサッケード運動と追従運動により、動くもの、光るもの等の、環境中に存在する顕著な情報に着目するシステムを構築し、SIGGRAPH 2008 Emerging Technology で展示発表を行い、さらに、アルスエレクトロニカに招待出品を行った。また、風船にカメラとアクチュエーターを組み込み、運動生成方法を試作し、SIGGRAPH Asia 2008 Emerging Technology で発表した。風船の移動運動実現に向けての問題点、および、人とのコミュニケーションに向けての問題点を整理した。また、様々なデザインに応用可能なモジュール式の触手を数点試作した。

さらに、超高精細映像に関しては、8k4kのウルトラハイビジョンにおいて、3分弱の映像の制作を行いシンポジウムにおいて発表するとともに、新伝統芸能空間の展示実験として音楽家とのコラボレーションにより、東大寺におけるコンサートにおいてCG映像の東大寺大仏殿壁面への投影を行った。湯島聖堂において、新伝統芸能空間の展示実験およびシンポジウムを行った。この展示実験により、伝統文化とバイオビューティー・メディカルビューティの原理に基づくCGとの、および、伝統文化と生き物の

ように反応するメカニカルな立体造形との、それぞれの親和性の高さが確認・実証され、広く認知されるに至った。

3.2.3 平成 20 年度科学技術試験研究委託事業「連動性を考慮した強震動・津波予測及び地震・津波被害予測研究」

東海・東南海・南海地震は、地震調査研究推進本部（以下、地震本部）によると、2008 年 1 月 1 日を算定基準とした 30 年以内の発生確率が、想定東海地震については 87 パーセント（マグニチュード 8.0 程度）、東南海地震については 60～70 パーセント（マグニチュード 8.1 前後）、南海地震については 50 パーセント程度（マグニチュード 8.4 前後）と、非常に高い値となっている。また、過去の地震記録等によれば、これら 3 つの地震は将来連動して発生する可能性が高いとされており、中央防災会議によると、東海・東南海・南海地震の同時発生による最大被害想定は、死者 2 万 5 千人、経済的被害 81 兆円との予測がなされている。こうした状況の下で推進している本プロジェクトでは、東海・東南海・南海地震の連動発生に対応した防災・減災対策等の検討に必要な情報を明らかにすることを目的としている。東京大学では、南海トラフにおける連動型巨大地震による強震動、地殻変動、津波発生・伝播を連成してシミュレーションするとともに、強震動到達までの時間猶予など緊急地震速報に生かせるように知見を提供する。

平成 20 年度においては、周期 0.3～20 秒の広帯域強震動及び地殻変動、そして津波発生・伝播を連成して高精度に評価するための、広帯域強震動－津波シミュレーションモデルを整備し、東南海地震、南海地震、東海地震の連動発生を想定した強震動と津波の高精度予測のための計算環境の準備を進めた。強震動・津波シミュレーションの有効性を確認するために、1944 年東南海地震による強震動、地殻変動、津波のシミュレーションを行い、周期 2 秒以上の成分について、観測記録との比較を行ったほか、従来の簡便な地殻変動および津波計算法の結果との比較を行った。今後、周期 1 秒以下の短周期強震動シミュレーションを実施し、2004 年紀伊半島南東沖地震など、近年の地震の高密度地震観測波形とシミュレーション結果との綿密な比較を行い、広帯域強震動シミュレーションモデルの波形再現能力を確認する。

また、「大都市大震災軽減化特別プロジェクト」等により構築された、陸域地下構造・堆積平野構造モデルと、海域構造探査モデルとを結合した、分解能 1km 以下の高分解能陸域・海域地下構造モデルを整備し、広帯域強震動－津波シミュレーションの実効環境を整備した。津波シミュレーションから求められた沿岸津波をもとに、津波遡上シミュレーションへと接続するために、海岸線形状の高精度モデル化を今後さらに進める必要がある。津波シミュレーションの精度の確認のために、湾内のモデル化が必要である。

不均質な地下構造・震源破壊様式モデルを用いた強震動・津波シミュレーションを、地球シミュレータ等のスーパーコンピュータによる大規模並列計算により高い効率で実効することのできる、超並列計算コードを開発し、地球シミュレータでの約 18,000CPU までを利用する際の並列計算の効率化に成功した。これにより、現行の 10 倍以上の規模の地震動シミュレーションの実用化に目処が得られた。また、津波計算では、地球シミュレータの約 5,000CPU を用いた並列計算の目処が得られた。一方、地球

シミュレータと同等の CPU 理論性能を持つ T2K オープンスパコンでは、地球シミュレータの 1/6 程度の実効性能しか得られておらず、今後も性能を引き出すためのコードチューニングを継続して進める予定である。

3.2.6 その他の大型研究プロジェクト

上述のように情報学環として組織的に遂行するもののほか、各教員が中心となって行う研究プロジェクトでも、以下の例（事業規模 1 千万円以上）に示すとおり、大型研究プロジェクトを積極的に展開している。（すべての外部資金による研究の状況は、IV. 外部資金獲得状況を参照のこと）

< 科学研究費補助金(金額は直接経費分)、学環教員が研究代表者となっているもの >

須藤 修 2006-2010 特定領域研究 「知識社会経済システムの共創的發展とそのガバナンスに関する研究」(須藤修、田中秀幸、後藤玲子、中島直樹) 67,500 千円

開 一夫 2006-2008 基盤研究(A) 「ヒトとロボットの原初的コミュニケーションに関する発達認知神経科学的研究」(開 一夫、石黒浩、今井倫太、板倉昭二) 37,900 千円

山内 祐平 2006-2008 基盤研究(B) 「把持状態を利用したウェアラブル展示教材の開発」(山内 祐平、奈良高明、堀田龍也) 15,700 千円

本郷 和人 2006-2009 基盤研究(B) 「歴史史料と中世都市の情報学的研究」(本郷和人、五味文彦、安田次郎、藤原良章、鋤柄俊夫、近藤成一、新田一郎、本郷恵子、高橋慎一郎、前川祐一郎、井上聡、高橋典幸、西田友広、中島圭一) 15,600 千円

原島 博 2007-2008 基盤研究(B) 「空間共有通信を軸とした 3 次元光線情報処理技術の体系化」(原島博、相澤清晴、苗村健) 11,600 千円

深代 千之 2007-2010 基盤研究(B) 「ユビキタスによるトータルウェルネスシステムの構築」(深代千之、坂村健、越塚登、金久博昭、ヘイ ディーン) 14,700 千円

澤田 康文 2007-2009 基盤研究(B) 「薬物胎盤移行と作用の PK・PD 評価に基づく胎児毒性予測システムの構築」(澤田康文、大谷壽一、堀里子、藤井知行、月森清巳) 14,400 千円

* 厚生労働科学省研究費

山本 隆一 2007-2009 厚生労働科学研究費「医療機関等が作成する書類の電子化の様式及び標

進化に関する包括的研究」 28,000 千円(=平成 19 年度)

<その他外部資金関係>

池内 克史 2008 科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業(CREST) 「油絵描画ロボットに関する研究」 33,800 千円

馬場 章 2008 科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業(CREST) 「オンラインゲームの教育目的利用のための研究」 18,135 千円

河口 洋一郎 2008 科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業(CREST) 「超高精細映像と生命的立体造形が反応する新伝統芸能空間の創出技術」 191,100 千円

古村 孝志 2008 科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業(CREST) 「地震波動伝播と津波発生伝播のシミュレーション」 11,440 千円

大島 まり 2008 科学技術振興機構 社会技術研究開発事業 「先端研究者による青少年の科学技術リテラシー向上」 15,340 千円

田中 淳 2008 国土交通省 「首都圏大規模水害における住民行動と情報戦略に関する調査研究」 28,875 千円

石川 雅章 2008 国土技術政策総合研究所 「ITを活用した合理的な事業マネジメントシステムに関する研究開発」 189,980 千円

大島 まり 2008 文部科学省 科学技術試験研究費 「次世代生命体統合シミュレーションソフトウェアの研究開発」 15,750 千円

池内 克史 2008 文部科学省 科学技術試験研究費 「大型有形文化財の高精度デジタル化ソフトウェアの開発」 32,000 千円

古村 孝志 2008 文部科学省 科学技術試験研究費 「平成 20 年度科学技術試験研究委託事業 「運動性を考慮した強震動・津波予測及び地震・津波被害予測研究」 50,000 千円

池内 克史 2008 (独)新エネルギー・産業技術総合開発機構 エネルギー ITS 推進事業 「全方位センサによる車両位置認識技術の開発」 19,828,200 円

3.3 付属センターの役割

3.3.1 社会情報研究資料センター

大学院情報学環附属社会情報研究資料センターは、1964年1月、当時の新聞研究所内に開室された「プレスセンター」が1967年6月、新聞研究所附属施設「新聞資料センター」として正式に発足し、1992年4月に新聞研究所が社会情報研究所に改組されるにあたって「情報メディア研究資料センター」と改称されたものである。2004年4月、大学院情報学環・学際情報学府と社会情報研究所の統合に伴い、「社会情報研究資料センター」と改称し、今日に至っている。

本センターは、新聞資料を中心とした各種メディア情報資料を収集・整理し、学内外の研究者の利用に供することで、社会情報学に関する研究の発展に寄与している。現在、本センターの収蔵資料は製本済原紙約20,000冊、縮刷版約8,000冊、マイクロフィルム約45,000リールに達している。これらの新聞資料は情報学環書庫のほかに、駒場キャンパス内の旧宇宙航空研究所跡地などに別置されている。

センターの閲覧室には、利用者のために各種データベース閲覧用PC3台とマイクロフィルムのデジタルデータ変換機能をもつマイクロリーダーを本年度新規に設置して利用者の便宜を図ると共に、従来のマイクロリーダーも継続利用して需要に答えている。また、本センターの定期刊行物として「社会情報研究資料センターニュース」を刊行している。

3.3.1.1 新規教育研究事業「社会情報研究資料センターの高度アーカイブ化事業」

社会情報研究資料センターは、開設から40年以上が経過し、現在・将来の研究需要に応えるための環境整備が強く求められており、特に貴重な研究資源をより有効に活用するための最新技術の導入が急務である。その必要性和緊急性に鑑み、大学本部より予算措置を得、2007年4月より5年計画で新規教育研究事業「社会情報研究資料センターの高度アーカイブ化事業」（高度アーカイブ化事業）に着手した。事前措置により2006年度後半より一部設備の改装などを行い、今年度より本格的に事業を開始した。

高度アーカイブ化事業では、1. 整理保存機能の高度化、2. 利活用機能の高度化、3. 教育研究機能の高度化、4. 情報化アーカイブ機能全般の高度化、という4つの観点の高度化理念に基づき、メディア資料アーカイブの情報学的な構造化を推進している。この具体化のための事業方針として、以下の5点を基本方針とし、課題の解決に積極的に取り組んでいる。

- ・利便性・公開性の向上
- ・既存のアナログアーカイブのデジタル化
- ・劣化マイクロフィルムの救済と貴重資料の保管システムの整備
- ・新規デジタルアーカイブの構築
- ・情報ネットワークの構築

また、本センターが取り扱う対象資料を従来の新聞を中心とした資料から拡大し、雑誌や写真など、幅広いメディア資料へと拡充するとともに、資料の受入・整理・配架・閲覧・保存という一貫したプロセス確立のため、先端技術を導入して研究環境の大幅な向上を図っている。以下に記す事項は、このうち2007年度に遂行した事業である。

3.3.1.2 閲覧室の環境整備とデジタル化対応

高度アーカイブ化事業によって最初に着手したもののひとつとして挙げられるのが、閲覧室の環境整備とデジタル化の進む研究環境への対応である。2007年度当初、ふたつの閲覧室が本センター内に存在していたが、これを「第一閲覧室」「第二閲覧室」としてそれぞれ整備を行い、大幅な整理と機材の交換、新規データベースの導入などを実施した。

特に第一閲覧室については、旧式のPCを一掃、Dell製のPC3台とデータベースサーバPCを設置し、読売新聞のデータベースを閲覧可能とした。現在、このほかにもデジタル化されたデータベースの購入を進めており、次年度以降、順次各PCから閲覧可能にする予定である。また、マイクロフィルムリーダーについても、旧来の保有機材のうち実用に耐えうるものを残し、新たにキヤノン製のマイクロフィルムリーダーを導入した。これはマイクロフィルムをjpeg画像に保管することのできる機材であり、紙利用の通減という環境問題への対処とデジタル化への対応をこれにより同時に成し遂げた。このほか、資料閲覧用大机を新たに導入し、案内の各種サイン表示も整備・増強するなど、利用者の閲覧環境の向上に努めた。

3.3.1.3 貴重資料保存書庫の設置

社会情報研究資料センターでは、旧新聞研究所所長であった小野秀雄氏のコレクションをはじめとして、数多くの貴重な資料を収蔵している。その中には明治時代初期の国家の中心的人物であった大久保利通関連の写真資料や、本学と縁の深い坪井正五郎博士（日本の人類学・考古学の礎を築いた人物）の資料を中心とした「坪井家寄託資料」などの寄託資料も多く、これらの保存環境の改善は急務と考えられる。

2007年度は、高度アーカイブ化事業の予算措置によってこの保存環境問題にも取り組み、2階書庫内に一定のスペースを区切って3室の貴重資料保存書庫を設置した。書庫内は常に一定の温度・湿度で管理されており、ログの取得によって急な環境変化にも迅速な対応がとれるように設定されている。現在、この貴重資料保存書庫内には「第一次大戦期プロパンガンダ・ポスター」「小野秀雄コレクション（かわら版・新聞錦絵ほか）」「号外コレクション」「内閣情報部宣伝資料」のほか、先述の「坪井家寄託資料」の一部と「大久保家写真資料」が保管されている。これらは研究やアーカイブ化の後、次項に述べる新展示室での一部公開などを行う予定である。

3.3.1.4 新展示室の設置

本センターには従来、貴重資料室を兼ねた展示室が情報学環本館7階に存在したが、貴重資料と展示空間を分離するだけの広さがなく、また建物の構造上、展示室への導線に問題があるなどしたため、これを有効に機能させることができなかつた。この反省をもとに、高度アーカイブ化事業では前年の事前措置による閲覧室の整備によって生じた1階の空間を利用し、閲覧室とパーティションで区切ったうえで、展示室を再編することとした。

新展示室には東京国立博物館で使用されているものと同タイプのコクヨ製展示ケースを設置し、大型

資料まで含めた多様な資料の展示を可能とした。併せて電源工事を実施、調光照明器具・紫外線防止照明を設置することにより、スクリーンの設置と併せて展示資料への負荷を避けるための工夫を行った。

新展示室は恒常的な展示施設として 2008 年度中のオープンを目標とし、次年度には展示資料の選定、21 世紀 COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」の研究成果と連携した閲覧システムの構築を行う。研究成果の社会還元が求められる今日、情報学環と本センターの存在意義を発信する施設として重要な新施設である。

3.3.1.5 新聞マイクロフィルムの PET 化・デジタル化によるバックアップ作成

本センターは約 45,000 リールに及ぶ貴重な内外の新聞マイクロフィルムを所蔵しており、これらについて段階的に劣化対策を施している。2007 年度はこのうち特に劣化が顕著に見られる TAC ベースのマイクロフィルムについて、選別と PET ベースのフィルムへの複写を行い、並行してデジタルデータを作成してバックアップ作業を行った。海外の新聞マイクロフィルムについては、早い段階から劣化の少ない PET ベースのフィルムが使用されているが、日本国内の特に 1970 年代以前に作成されたマイクロフィルムに TAC ベースのものが多く、これらは劣化が進むことによって酢酸臭を発生させ、周辺資料にも影響を及ぼすことが確認されている。

既にオンラインサービス等でマイクロフィルム収蔵分のデータを得ることのできる新聞社のデータは積極的にこれを活用することで劣化対策に代替することが可能であるが、本センターが所蔵する TAC ベースのマイクロフィルムにはそうしたサービスが 2007 年時点で行われていないものも多数存在する。そのような新聞資料の中から、2007 年度は大阪毎日新聞、東京日日新聞、毎日新聞の 1872 年 2 月～1971 年 12 月までの TAC ベースマイクロフィルム計 697 リールを PET ベースのフィルムに置き換えるとともに、デジタルスキャンによる複製データを作成した。複製データの活用可能性については、2008 年以降の課題として検討を行う。

3.3.1.6 購入資料および資料の再配置

2007 年度には、従来からの資料購入とともに、高度アーカイブ化事業の予算措置により、これまで困難であった劣化の激しい縮刷版の入れ替えを行うことができた。特に戦前期の朝日新聞の縮刷版は利用希望者が多く、劣化の度合いが著しいことから、今後も予算措置の範囲内で継続的に置き換えを進めていく予定である。このほか、海外の新聞や雑誌のうち、マイクロフィルムやデジタルデータの存在しない資料については、積極的な購入を進め、利用者の便益に資する体制を構築する予定である。

新聞・マイクロ資料の再配置については、先に述べた貴重書庫の設置に伴い、同設置箇所に置かれていたマイクロフィルムの移動・整理を実施し、併せて新聞原紙の一部移動を行った。なお、現在、大学院情報学環はスペースがきわめて狭小なため、本センターの主要な収蔵資料であるマイクロフィルムや新聞原紙に関し、必ずしも十分な保存・保管体制が整備できない状態である。特に、駒場地区の旧宇宙航空研究所跡地に別置している以下の新聞原紙資料に関しては、きわめて劣悪な保存環境に置いたままの状態にある。したがって、これらの資料の保存環境の改善は、本センターの重要な課題のひとつであり、早急に対応する必要がある。本センターでは、これらの原紙製本資料を、目白台東大病院分館の保

存施設の改修後、目白台保存施設に移動し、本センターの分館的な施設を整備していきたいと考えている。

3.3.1.7 「情報学環アーカイブズ」構築に向けての試み

情報学環では、本センターや情報学環図書室に収蔵されている資料を中心に、旧新聞研究所関連資料の整備やデジタルアーカイブ構築の研究プロジェクトが推進されている。さらに、各研究室が個別に収集してきた研究データについても、知的資源としての有用性をはじめとした多様な観点から、アーカイブ化が進められており、「高度アーカイブ化事業」ではこれらを統合的に運用可能な形に深化させていくための道筋を模索している。

既に構築されているアーカイブとしても、ジャーナリストの「森恭三アーカイブ」や新聞研究所初代所長の「小野秀雄コレクション かわら版・新聞錦絵（ニュースの誕生）アーカイブ」、さらに「第一次大戦期プロパガンダ・ポスター・アーカイブ」などがあり、さらに現在、「内閣情報部宣伝資料アーカイブ」、「近代日本号外資料アーカイブ」や「満州・中国大陸新聞アーカイブ」など、旧新聞研究所の貴重資料を基礎としたアーカイブ構築研究が進められている。

これらに加え、情報学環の多様な知的資源を網羅し、統合的に運用可能なアーカイブとして「情報学環アーカイブズ」の構築を目標とすることで、本センターの枠を越えた知識情報センターとしての役割を果たしていきたい。ここで構築されるアーカイブは無論英語や中国語、韓国語などの他言語に対応することで、広く世界のメディア研究や歴史研究、地域研究などの利用に供することを想定している。また、読売新聞データベースのような商用データベースの利用も 2007 年度より本格化したことにより、さらに幅広い利用者の希望に対応する体制を今後とも整えていく。

3. 4 総合防災情報研究センター

総合防災情報研究センターは、平成 20 年 4 月 1 日に、東京大学の大学院情報学環、地震研究所、生産技術研究所の連携により、情報の概念を核とした文理融合型の総合的な防災研究機関として設立された。分野を超えた社会情報学、地震火山学、防災工学の協働により、防災情報研究における新しい地平を切り開くとともに、東京大学の理学、工学、社会学、法学、経済学、医学など様々な分野の防災関係研究者をネットワークし、行政、マスコミ、企業、NPOとも連携することにより、防災に関する知の結節点として機能する新しいタイプの研究機関を目指している。

日本は、地理的特徴からこれからも地震、風水害、火山などあらゆる災害に襲われることは避けられない。しかも、日本列島は地震学的な活動期に入っている、あるいは地球温暖化の影響により巨大台風の発生が増加する、との指摘もある。なかでも、予想される首都直下地震や東南海・南海地震の被害は、国レベルに影響が波及しかねない。

大規模な自然災害による人的ならびに経済的な被害を軽減するために、災害危険度の判定や周知、事前の予測、災害からの避難、復旧・復興の体制作りなど「情報」のもつ役割の重要性は高まっている。総合防災情報研究センターでは、研究活動を通じて災害による被災の軽減に役立つ成果を挙げ、社会に貢献して行きたいと考えている。「情報」を核に「減災」をめざす、これが総合防災情報研究センターの

ミッションである。

総合防災情報研究センターのミッションは、①災害情報が活用される条件を提示する、②災害リスクと対応指示を伝える手段を開発する、③あるべき災害対策を具体的に提言する、④首都直下地震が、日本社会にもたらす全体像を把握する、⑤若人を守り、研究を守る大学のサービス継続管理（SCM）を構築することにある。

まだ設立 1 年目の平成 20 年度であるが、この目標に向かって、活動を開始した。その主な内容は以下の通りである。

3.4.1 災害情報研究の発信

総合防災情報研究センターの 1 年目の活動目標のひとつでもあった「廣井アーカイブス」の開発を平成 20 年度に行った。本ウェブサイトは、平成 18 年 4 月に逝去した故廣井脩教授が収集された膨大な災害に関する文献と調査・研究資料（廣井文庫）、廣井教授の論文や記事・談話、廣井先生も中核の一人であり多くの研究者が携わってきた東京大学大学院情報学環「災害と情報」研究会（旧新聞研究所・旧社会情報研究所「災害と情報」研究会）の調査研究報告書をまとめたデジタルアーカイブスである。アーカイブスは平成 21 年 4 月から一般公開しており、URL は <http://cidir-db.iii.u-tokyo.ac.jp/hiroii/index.html> である。

メニューボタンの選択により、これらの資料の閲覧・検索ができるよう設計されている。具体的には、調査・研究資料については、地図上から調査対象地域をクリックすることで調査の概要や方法、集計結果データ等の詳細情報を閲覧することもできる。また、報告書リストをタイトル・年代等により検索する選択方式も用意されている。

3.4.2 災害情報教育プログラムの実施と社会連携

災害は、国レベルで見れば数多く発生しているが、一人一人の市民から見れば、ほとんど経験せずに済む希な現象である。それだけに災害対応を経験的に身につけることは難しい。まして、災害の規模や推移は多様であり、そのすべてを経験することはできない。このこと自体は幸いなことではあるが、災害に対する基本的知識や対応行動のあり方を知ることなく、災害事態に直面することを迫られる。

科学的な知見に基づく正しい災害とその被害について学ぶ必要があるとともに、現在の科学技術の限界についても理解をしておく必要がある。適切な準備と対応を行うためには、防災教育は不可欠である。

本センターでは、これまで数多く試みられてきた防災教育の実践例を批判的に踏まえ、最先端の科学的知見に裏付けられた正確で有効な災害情報教育プログラムの開発と実施を行うことをミッションとしている。しかし、標準的な災害情報防災教育プログラムと一口で言っても、地域や地形、年齢、職種によって、その適切な内容は変わる。

本センターでは、高度な専門知識を防災に応用しうる潜在力を秘めた大学院生から、将来の日本社会を支えるトップランナーとなる学部学生、現場で災害対応に当たる防災担当者、住宅の耐震化

や避難の最終的な判断主体である一般市民まで、多様なプログラムを開発、実施していく計画であるが、1年目の今年度は、災害対応の第一線にいる、ライフライン、マスコミならびに行政を対象としたライフライン・マスコミ連携講座を開始した。具体的には、首都直下地震を対象とした一連の講座を実施し、最先端の科学的知見の共有とそれに応じた具体的な防災対策を議論した。

- 第1回ライフライン・マスコミ連携講座 「緊急地震速報」
- 第2回ライフライン・マスコミ連携講座 「首都直下地震」
- 第3回ライフライン・マスコミ連携講座 「首都直下地震と火災被害の様相」
- 第4回ライフライン・マスコミ連携講座 「長周期地震動に対する超高層ビルの揺れと対策」

ライフライン・マスコミ連携講座は、防災機関相互の横の連携を強めることを主目的としているが、同時に災害情報教育プログラムの内容を幅広くするコンテンツの充実と講師を活動に巻き込むことを通した研究者のネットワークの形成にも資する役割も果たしている。平成21年度から開始することに決まっている情報学環各コース横断型の教育プログラムである「災害情報論」ならびに防災研究者ネットワークの立ち上げに直接結びつく活動を展開することが出来た。

3.4.3 災害情報研究の推進と研究拠点としての活動

平成20年4月に始めて一般提供された緊急地震速報や「ゲリラ豪雨」と称された集中豪雨時の災害情報を対象とした災害情報研究を進めた。緊急地震速報に関しては、TBSと宮古島沖地震、茨城沖地震、岩手・宮城内陸地震を対象とした一連の共同調査を行い、認知率の変化や情報の有効性、課題を明らかにした。また、J-Alertの活用可能性と課題についての山形県庄内町をフィールドにした研究を実施した。

集中豪雨に関しては、岡崎市や金沢市などの被災地を対象にした諸機関の聞き取り調査と住民調査を行った。このほか、ミサイル誤報事例や病院機能維持のための訓練のあり方についての研究も実施した。

主な研究活動は、以下の通り。

四川地震現地調査

岩手宮城内陸地震調査（科学研究費）

緊急地震速報に関する研究（TBSとの共同研究）

地震一律波連成シミュレーション（科学技術振興機構戦略的創造研究推進事業）

南海・東南海・東海地震連動性評価研究（受託研究費）

J-Alertによる緊急地震速報放送に関する調査研究

2008年8月末豪雨等に関する調査（日本災害情報学会共同調査）

首都圏大規模水害における洪水避難と情報戦略に関する調査研究（受託研究費）

水害時の適切な避難につながる情報提供のあり方の検討（受託研究費）
美浜町 J-ALERT 誤報調査（人と防災未来センターとの共同研究）
IT 強震計に関する研究（IT 強震計コンソーシアム）

また研究拠点活動のひとつとして、災害関連学会のうち日本災害情報学会および日本災害復興学会を開催校として企画、運営した。また、日本社会情報学会の公開ワークショップ「総合防災情報研究と事業・業務継続計画」を共催した。

国際的な研究拠点へと展開するために第6回 APEC 地震シミュレーション会議（オーストラリア）など国際学会への参加に加えて、海外の有力校との交流を図った。とくに、今年度は5月に中国四川省で死者6万9197人、負傷者37万4176人、行方不明1万8379人（新華社通信：7月9日時点）という大規模地震が発生したこともあり、中国研究機関との交流が多かった。上海交通大学にて「Global Communication Forum, 2nd in Shanghai」にてキーノート・スピーチを行ったほか、台湾精華大学や中国共産党中央党校が当センターを訪問し、意見交換を行った。

4 社会との交流

情報学環教員は、以下に述べるとおり、国際的委員会や政府委員会委員、産学協同等を通じて社会との交流を進めながら、社会への貢献を積極的に行っている。

4.1 国際的委員会

情報学環教員は、IEEE 等の国際学会が開催する会議の運営委員等を通じて、国際的な研究の推進に貢献をしている。

（国際学会委員会委員：一部のみ抜粋）

相澤清晴	Associate Editor	IEEE Trans. Image Processing
相澤清晴	Associate Editor	ACM Transactions on Multimedia Computing Communications and Applications
相澤清晴	General co-Chair	MMM (Multimedia Modeling) 2008
相澤清晴	Special Session Co-Chair & Track Chair	IEEE ICME 2008
池内克史	Evaluation Committee	IEEE RAS
池内克史	Associate Editors	IEEE/IROS 2008(International Conference on Intelligent Robots and Systems)
池内克史	Advisory Committee	IAPR The 19th International Conference on Pattern Recognition(IAPR 2008)
池内克史	Member of Editorial Board	IEEE Fellow
池内克史	Administrative Committee	IEEE Robotics and Automation Society

池内克史	会長	IEEE ITS Society
石川徹	Reviewer	Cartographica
石川徹	Reviewer	Review of Urban & Regional Development Studies
須藤修	Associate Editor	Environmental Economics and Policy Studies (the official journal of the Society for Environmental Economics and Policy Studies) Springer-Verlag
須藤修	Chair of Organizing Session	The 8th IFIP Conference of e-Business, e-Service, and e-Society, I3E 2008, September 24-26, 2008, Tokyo, Japan
倉田博史	associate editor	Annals of the Institute of Statistical Mathematics
倉田博史	reviewer	Mathematical Reviews
佐藤洋一	Program committee member	IEEE TableTops and Interactive Surface 2008 (TableTop2008)
佐藤洋一	Program Committee Member	IEEE and ACM International Symposium on Mixed and Augmented Reality (ISMAR2008)
佐藤洋一	Program Committee Member	International Conference on Pattern Recognition (ICPR2008) (ECCV2008)
佐藤洋一	Program Committee Member	IEEE Conference on Computer Vision and Pattern Recognition (CVPR2008)
田中秀幸	Editorial Board Member	Journal of Socio-Informatics
林香里	Editorial Board	Journal of Ambient Intelligence and Smart Environments
林香里	Member of the advisory board	Social Science Japan Journal (SSJJ published by U. of Tokyo and Oxford Univ. Press)
山口いつ子	Advisory Board Member of "SCRIPT-ed" Journal	The AHRB Research Centre for Studies in Intellectual Property and Technology Law, The University of Edinburgh
吉見俊哉	Executive Committee	Inter-Asia Cultural Studies Journal, Routledge UK
吉見俊哉	Editorial Board	Cultural Studies Journal, Routledge UK
吉見俊哉	Associate Editor	Theory, Culture & Society Journal, Sage UK
暦本純一	Editorial Board	Journal of Ambient Intelligence and Smart Environments

4.2 政府・自治体委員会

情報学環教員は、政府・自治体委員会の委員等としても活躍し、情報通信などにかかわる政策立案等に参画することで、社会に貢献している（政府委員会委員数 70 人、地方自治体委員会委員数 14 人）。

（政府・自治体委員会委員：一部のみ抜粋）

<政府>

相澤清晴	総務省「情報通信審議会専門委員会」委員
相澤清晴	特許庁「デジタルカメラ特許動向調査委員会」委員長

池内克史	文部科学省「科学技術政策研究所」専門調査員
池内克史	内閣府「総合科学技術会議基本政策推進専門委員会」専門委員
大島まり	文部科学省 初等中等教育局「中央教育審議会」専門委員
大島まり	科学技術振興機構「国際科学技術コンテスト支援事業推進委員会」委員
大島まり	科学技術振興機構「サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト推進評価委員会」委員
大島まり	日本学術会議 連携会員
大島まり	日本原子力研究開発機構「核融合研究開発・評価委員会」委員
大島まり	国立科学博物館「日本の科学技術者展企画委員会」委員
大島まり	内閣府「原子力安全委員会原子炉安全専門審査会」審査委員
大島まり	国土交通省 総合政策局「交通政策審議会」委員
石上英一	文化庁「文化審議会文化財分科会」専門委員
石上英一	文化庁「中世城館遺跡・近世大名等墓所保存検討委員会」委員
越塚 登	総務省「ICT 国際競争力会議 基本戦略分科会」委員
越塚 登	国土交通省「神戸自律移動支援プロジェクト実証実験実施検討委員会」委員
七丈直弘	経済産業省「音楽産業のビジネスモデル研究会」委員
鈴木高広	国土交通省「サグ渋滞対策検討会」委員
須藤 修	内閣官房「IT 戦略の今後の在り方に関する専門調査会」委員
須藤 修	内閣官房「IT 新改革戦略評価専門委員会」委員
須藤 修	内閣官房「IT 新改革戦略評価専門委員会特別委員会」委員長代理
須藤 修	内閣官房「電子政府評価委員会」座長
須藤 修	内閣官房「次世代電子行政サービス基盤等検討プロジェクトチーム」座長
須藤 修	内閣官房「情報セキュリティ政策会議・情報セキュリティ基本計画検討委員会」委員長
須藤 修	内閣官房「電子政府ガイドライン作成検討会」座長
須藤 修	内閣官房「電子私書箱（仮）構想の実現に向けた基盤整備に関する検討会」委員
須藤 修	内閣府「国民生活審議会」委員
須藤 修	内閣府「国民生活審議会個人情報保護検討部会」委員
須藤 修	内閣府「総合科学技術会議 情報通信分野推進戦略プロジェクトチーム委員
須藤 修	総務省「電子自治体の推進に関する懇談会オンライン利用促進ワーキンググループ」座長
須藤 修	総務省「地方公共団体 ASP・SaaS 活用推進会議」委員長
須藤 修	総務省「地域 ICT 利活用モデル構築事業評価会」委員
須藤 修	総務省「地域情報化評価会」構成員
須藤 修	総務省「ふるさとケイタイ創出推進事業評価会」委員
須藤 修	厚生労働省「最適化計画策定評価委員会」委員
須藤 修	経済産業省「CIO 戦略フォーラム」委員
須藤 修	経済産業省「高度情報化社会における情報システム・ソフトウェアの信頼性及びセキ

ユリティに関する研究会」委員

須藤 修 経済産業省「情報大航海時代における経済・社会・文化に関する研究会」委員

須藤 修 文部科学省「科学技術・学術審議会」委員

田中 淳 国土交通省「社会資本整備審議会」専門委員

田中 淳 文部科学省「科学技術・学術審議会」専門委員

山内祐平 文部科学省「大学設置・学校法人審議会 大学設置分科会 設置計画履行状況等調査委員会」委員

山本隆一 内閣官房「IT新改革戦略評価専門調査会医療評価委員」座長代理

山本隆一 経済産業省「パーソナル情報研究会」委員

<自治体>

大原美保 千葉県「地震防災推進」アドバイザー

須藤 修 東京都「システム評価委員会」委員

須藤 修 福島県 IT 推進アドバイザー

須藤 修 高知県「電子自治体推進協議会」顧問

古村孝志 川崎市「情報化推進専門委員会」委員

溝口 勝 島根県「三瓶小豆原埋没りん検討委員会」委員

4.3 学協会活動

情報学環教員は、国内外の関係学会の活動に積極的に参加しており、会長や副会長など、学会の要職等を通じて学協会活動に貢献している。

(学協会役職：一部のみ抜粋)

池内克史 社団法人情報処理学会 財務委員

池内克史 日本学術会議連携会員

倉田博史 日本統計学会 理事

七丈 直弘 研究技術・計画学会 評議員

坂村健 日本学術会議会員

佐倉統 日本学術会議連携会員

鈴木高宏 (社)日本ロボット学会 評議員

須藤修 日本社会情報学会 (JASI) 会長

須藤修 日本社会情報学会 (JASI) 学術委員会委員

須藤修 進化経済学会 理事

須藤修 情報社会学会 理事

須藤修 情報文化学会 会長

須藤修 国際CIO学会 会長

須藤修 日本学術会議連携会員

園田茂人	日本現代中国学会 理事
園田茂人	中国社会文化学会 理事
園田茂人	アジア政経学会 理事
田中淳	日本災害復興学会 理事
田中秀幸	社会・経済システム学会 理事
田中秀幸	日本社会情報学会(JASI) 理事
橋元良明	日本マス・コミュニケーション学会 理事
原島博	日本学術会議連携会員
山本隆一	日本医療情報学会 理事長・学会長
吉見俊哉	日本学術会議 日本学術会議連携会員

4.4 セミナー・研究会・公開講座

情報学環・学際情報学府の研究・教育活動の成果を公表するとともに、その環を広げるために、下記に示すようなさまざまな公開の催しを実施した。入試説明会はたんなる入試事項の説明にとどまらないかたちで、過去の学環・学府シンポジウムの成果を引き継ぎつつ、学環・学府の全体像を示す機会となっている。概要説明から、院生紹介、主要プロジェクト紹介、鼎談などとともに、本年度も研究室や研究プロジェクトを紹介する熱帯雨林的な知識交換、共有の場「学環・学府めぐり」なども開催された。

この他、別表で一覧されているとおり、COEシンポジウムをはじめ、内外の関係者を集めた先端的な研究成果の披露の機会があった。学環の特徴でもあるさまざまなプロジェクトは、公開研究会、シンポジウムなどを通して学際情報学の研究情報を発信している。下記がその一覧（現在稼働しているもの）である。いずれも学際的なチャレンジをしている営みだといえる（学環ホームページ上に公開されたプロジェクトのみで、全てを網羅していないことを申し添えておく）。

【シンポジウム】	
2008. 4. 26-27 福武ホール	MELL EXPO 2008 ギャレス・モーレス（イギリス、BBC『キャプチャー・ウェールズ』プロジェクト） オーラン・ウォンバンデュ（タイ、チュラロンコン大学） ソフィア・ウー（台湾政治大学）、ほか

<p>2008. 5. 10 福武ホール</p>	<p>東京大学大学院情報学環・福武ホールオープニング記念シンポジウム 「世界の一元に抗して文化に何ができるか」 キドラット・タヒミック(アーティスト/フィリピン) アレキサンドロス・プシフーリス(アーティスト/ギリシャ) ウォン・イル(ミュージシャン/韓国) 藤幡正樹(アーティスト/東京芸術大学大学院映像研究科長) 北川フラム(地中美術館総合ディレクター/越後妻有アートトリエン ナーレ総合ディレクター) 鷺田清一(大阪大学総長) 西垣通(東京大学大学院情報学環・教授) PURI(韓国) 吉見俊哉(東京大学大学院情報学環・学環長) : コーディネーター</p>
<p>2008. 5. 25 福武ホール</p>	<p>学際理数情報学シンポジウム 池内克史, 河口洋一郎, 佐藤洋一, 鈴木高宏, 開一夫, 大島まり, 原 島博(東京大学大学院情報学環) 山口泰(東京大学大学院総合文化研究科) 荒川忠一, 苗村健, 廣瀬通孝(東京大学大学院工学系研究科) 有川正俊(東京大学大学院新領域創成科学研究科) 中川裕志, 小川剛史(東京大学情報基盤センター)</p>
<p>2008. 5. 30 福武ホール</p>	<p>放送倫理・番組向上機構 [BPO] ・東京大学大学院情報学環主催 シンポジウム「事件報道と開かれた司法」 濱田純一(東京大学理事・副学長) 立花隆(評論家) 友井秀和(NHK 解説委員) 渡辺興二郎(テレビ朝日報道担当取締役) 三木賢治(毎日新聞論説委員) 吉岡忍: コーディネーター</p>
<p>2008. 7. 3 福武ホール</p>	<p>電通寄付講座公開シンポジウム「オープン・クリエイションの可能性」 濱田純一(東京大学副学長) 権島榮一郎(東京大学大学院情報学環) 石崎明日香(札幌市経済局産業振興部) 附柴裕之(株式会社 GEL-Design) 石川淳(電通総研) 石崎雅人(東京大学大学院情報学環・准教授) 田中秀幸(東京大学大学院情報学環・准教授)</p>

<p>2008. 9. 20 福武ホール</p>	<p>東大情報学環・読売新聞共催連続シンポジウム「情報の海～漕ぎ出す船～」 第1回 情報の海～マストからの眺め 立花隆（ジャーナリスト/東大情報学環・特任教授） 北田暁大（東京大学大学院情報学環・准教授） 桂英史（東京芸術大学大学院准教授） 柴田文隆（読売新聞編集委員） 川邊健太郎（ヤフー・シニアプロデューサー） 吉見俊哉（東京大学大学院情報学環・学環長）：コーディネーター</p>
<p>2008. 10. 23 福武ホール</p>	<p>電通寄付講座公開シンポジウム「メディア融合のダイナミクス」 濱田純一（東京大学大学院情報学環） 上野敦史（東京大学大学院学際情報学府） 井出智明（電通総研） 浜田元久（東京大学大学院学際情報学府） 金 正勲（慶應義塾大学 DMC 機構） 小向太郎（情報通信総合研究所／東京大学大学院情報学環） 田中秀幸（東京大学大学院情報学環） 石崎雅人（東京大学大学院情報学環）</p>
<p>2008. 10. 24 工学部 2 号館 9 階 93B</p>	<p>21 世紀 COE プログラム「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」 第 18 回シンポジウム「ユビキタスと空間情報～安全・安心，保健・医療，自然・保全の視点から～」 鈴木宏（新潟大学大学院医歯学総合研究科教授） 原田豊（科学警察研究所） 神山和夫（NPO 法人バードリサーチ） 岡部篤行（東京大学大学院工学系研究科/空間情報科学研究センター） 坂村健（東京大学大学院情報学環教授）コーディネーター</p>
<p>2008. 11. 1 福武ホール</p>	<p>東大情報学環・読売新聞共催連続シンポジウム「情報の海～漕ぎ出す船～」 第2回 情報の海～沈まぬ「図書館」丸 長尾真（国立国会図書館長/東大情報学環顧問会議座長） 根本彰（東大教育学研究科・教授） 伊熊幹雄（読売新聞編集委員/東大教養学部・客員教授） 田中榮博（千代田区立千代田図書館長） 加茂竜一（凸版印刷文化事業推進本部部長） 吉見俊哉（東京大学大学院情報学環・学環長）：コーディネーター</p>

2008. 11. 28 福武ホール	建築系連続トークイベント「建築の際」第1回「都市の際」 安藤忠雄（建築家/東京大学特別栄誉教授） 吉見俊哉（東京大学大学院情報学環・学環長） 南後由和（東京大学大学院情報学環・助教）
2008. 12. 12 福武ホール	建築系連続トークイベント「建築の際」第2回「アジアの際」 隈研吾（建築家/慶應義塾大学理工学部・教授） 藤森照信（建築史家・建築家/東京大学大学院工学系研究科・教授） 姜尚中（東京大学大学院情報学環・教授） 村松一（東京大学大学院情報学環）：コーディネーター
2008. 12. 13 福武ホール	東大情報学環・読売新聞共催連続シンポジウム「情報の海～漕ぎ出す船～」 第3回 情報の海～「新聞」という船 滝鼻卓雄（読売新聞東京本社会長） 立花隆（東京大学大学院情報学環・特任教授） 林香里（東京大学大学院情報学環・准教授） 藤田幸久（読売新聞東京本社メディア戦略局次長） 武田徹（ジャーナリスト/恵泉女学園大学教授） 吉見俊哉（東京大学大学院情報学環・学環長）：コーディネーター
2008. 12. 20 福武ホール	日韓国際シンポジウム「オンラインゲームの教育利用」 なぜオンラインゲームは教育に役立つのか？ 松原仁（公立ほこだて未来大学・教授） 馬場章（東京大学大学院情報学環・教授） 坂元章（お茶の水女子大学大学院・教授） 野澤泰志（経済産業省商務情報政策局文化情報関連産業課・専門官） ウィ・ジョンヒン（ソウル中央大学・教授） ソ・スンシク（春川教育大学・准教授） ユー・ビョンチェ（文化観光部文化産業課ゲーム産業チーム・課長）
2009. 1. 29 福武ホール	シンポジウム「知の公共性をデザインする ～ 認知テクノロジーが開く知の地平を問う」 美馬秀樹（東京大学・知の構造化センター） 桜井 均（NHK・放送文化研究所） 眞木正喜（日立システムアンドサービス） 石田英敬（東京大学大学院情報学環・教授）：モデレータ
2009. 2. 14 福武ホール	シンポジウム「岩波映画の1億フレーム」 羽仁進（映画監督） 中村秀之（立教大学）

	<p>鳥羽耕史（徳島大学） 筒井武文（東京藝術大学）コーディネーター 桂英史（東京藝術大学） とちぎあきら（東京国立近代美術館フィルムセンター） 藤岡朝子（山形国際ドキュメンタリー映画祭東京事務局） 丹羽美之（東京大学大学院情報学環・准教授）：コーディネーター</p>
2009. 2. 19 山上会館	<p>21 世紀 COE プログラム「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」 第 20 回シンポジウム「ユビキタス社会におけるネット利用の国際比較—WIP データから日本的特性を探る—」 三上俊治（東洋大学社会学部教授） 遠藤 薫（学習院大学法学部教授） 木村忠正（東京大学総合文化研究科准教授） 石井健一（筑波大学システム情報工学研究科准教授） 吉井博明（東京経済大学コミュニケーション学部教授） 橋元良明（東京大学大学院情報学環教授）：コーディネーター</p>
2009. 2. 19 福武ホール	<p>建築系連続トークイベント「建築の際」第 3 回「形式の際」 青木淳（建築家） 菊地成孔（ジャズミュージシャン、文筆家） 岡田猛（東京大学大学院情報学環・教授）</p>
2009. 2. 24 福武ホール	<p>シンポジウム「コンテンツ教育の未来へ - The Content Education, Bridging to the Future-」 原島博（東京大学大学院情報学環 教授） 藤原正仁（東京大学大学院情報学環 特任助教） 研谷紀夫（東京大学大学院情報学環 特任助教） 水越伸（東京大学大学院情報学環 准教授） 角川歴彦（株式会社角川グループホールディングス 代表取締役会長兼 CEO） ミシェル・マカウ（カーネギーメロン大学 ETC 日本校プログラム所長） 金相顯（韓国文化コンテンツ振興院 人材養成チーム長）</p>
2009. 3. 5 工 2 号館 9 階 92B	<p>2008 年度 認知科学会「身体、システム、文化」研究分科会 研究会 「“文化”にエコロジカルな視点で迫れるか？」 辻誠一郎氏（東京大学新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻・教授、環境文化史） 本郷一美氏（総合研究大学院大学生命共生体進化学専攻・准教授、先史人類学・環境考古学）</p>

2009. 3. 10 福武ホール	建築系連続トークイベント「建築の際」第4回「振舞の際」 山本理顕（建築家） 野田秀樹（劇作家、演出家、俳優） 山内祐平（東京大学大学院情報学環 准教授）
2009. 3. 20-21 福武ホール	MELL EXPO 2009 畑仲哲雄（共同通信&東京大学院生） 服部寿人（チューリップテレビ） 丹羽美之（東京大学、『GALAC』編集長） 澤本嘉光（電通） 岡田朋之（関西大学） キム・ヨニ（東京大学院生） 木暮祐一（モバイル評論家）
2009. 3. 24 福武ホール	建築系連続トークイベント「建築の際」第5回「空間の際」 原広司（建築家） 松本幸夫（数学者） 暦本純一（東京大学大学院情報学環 教授）

【セミナー・講演会】	
2008. 4. 25 情報学環本館 7 階第2 演習室	東京大学情報学環 第6回『市民社会メディアと政策』研究会 『通信・放送の総合的な法体系の取り組み〜市民社会メディアの観点 から(3)』
2008. 5. 28 福武ホール	メディア研究のつどいワークショップ「苦悩する中国のジャーナリス ト 中国報道の難しさと面白さ」
2008. 6. 12 情報学環本館 7 階第2 演習室	東京大学情報学環 第7回『市民社会メディアと政策』研究会 『コミュニケーションする権利とは何か』
2008. 6. 27 工学部 2号館 9 階	吉見研究室オープンセッション「グローバルゼーションと対抗メデ アの現在—オートのメディアのジム・フレミング氏との対話」
2008. 7. 12 工学部 2号館 9 階 93B	第8回メル・プラッツ公開研究会
2008. 9. 12 赤門総合研究棟	公開ワークショップ「総合防災情報研究と事業・業務継続計画」
2008. 9. 17	講演会「テレビジョンの『（複数の）終焉』：制度と文化はテレビの

福武ホール	未来にどうかかわるか
2008. 10. 28 情報学環本館 6 階実験室	ITASIA コロキウム“Tropical Furniture and Bodily Comportment in Colonial Asia” Jordan SAND (米国ジョージタウン大学)
2008. 12. 3 福武ホール	ITASIA コロキウム ～ 脱・市場シェア主義：パワープライシングによる成熟市場における成長の実現 ～ ハーマン・サイモン博士 (サイモン・クチャー&パートナーズ会長)
2009. 1. 21 情報学環本館 2 階演習室	電通コミュニケーションダイナミクス寄付講座公開セミナー『つながるジャーナリズムの必要 ～ 林研究室メディア研究のつどい～』 寺島英弥 (河北新報社)
2009. 3. 4 東京ウィメンズ プラザ・ホール	「希望は終わらないー希望学成果報告会 2005-2008ー」
2009. 3. 20-22 日本科学未来館	「3D Digital Bayon - デジタルテクノロジーが紐解くアンコール・バイヨン寺院の秘密 - 」
2009. 3. 29 日本科学未来館	∞のこどもたちトーク&ラボ 「わくわくどきどき、それは科学者の原点」

【プロジェクト関連】	
「BEAT」ベネッセ先端教育技術学講座 [公開研究会]	
2008. 6. 7	第1回：あなたに「ぴったり」な学びをかなえる技術—教育における協調フィルタリングの可能性を考える—
2008. 9. 6	第2回：プロジェクト学習が大学を変える
2008. 12. 6	第3回：アートワークショップで子どもの可能性をひらく
2009. 3. 28	第4回：BEAT 特別セミナー 教育工学 25年の歴史から考えるデジタル教材の未来
コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム・大学院学際情報学府学際理数情報学コース	
2008. 6. 19-6. 24	第9回東京大学大学院学際情報学府 コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム 制作展 「iii exhibiton 9」
2008. 12. 4-12. 9	第10回東京大学大学院学際情報学府 コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム 制作展 「iii exhibiton10」

4.5 出版活動

2004年の社会情報研究所との統合後は、社会情報研究所で出されていた定期刊行物と情報学環・学

際情報学府の定期刊行物を統合し、新たな出版体制を整備しつつある。その中心となるのは、以下の5つの刊行物である。

- (1)研究紀要『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』(年2回刊)
- (2)調査実験紀要『同 情報学研究・調査研究編』(年1回刊)
- (3)英文紀要(オンライン論文サイト"iii Online Research Journal"への移行を検討中)
- (4)年報『東京大学大学院情報学環年報』(年1回刊)
- (5)ニューズレター『学環 学府』

これらはいずれも、情報学環にとって基幹的な出版活動であり、相互に役割を分担しながら有機的に結びついている。

表 4-5-1 情報学研究/同調査研究編の発行状況

東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究	
68号	2005年1月
69号	2005年3月
70号	2006年1月
71号	2006年3月
72号	2007年5月
73号	2008年1月
74号	2008年3月
75号	2008年8月
76号	2009年3月
情報学研究・調査研究編	
22号	2005年1月
23号	2005年3月
24号	2007年3月
25号	2009年3月

4.5.1 『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』

『情報学環紀要 情報学研究』は、2004年の情報学環と社会情報研究所との統合により、旧社会情報研究所の『社会情報研究所紀要』を改称したものである。

同紀要は、1952年に『新聞研究所紀要』として創刊されて以来、新聞学、世論研究、マス・コミュニケーション論、ジャーナリズム、メディア史、マス・メディアの制度と受容、社会的コミュニケーションの諸過程、災害や地域情報化などの政策課題、高度情報化や新しいメディア接触と情報行動などを理論的、実証的に扱う多くの論考を掲載し、半世紀以上にわたって国内外の専門研究者や学生に多くの影響を及ぼしてきた。

社会情報研究所と情報学環との統合に際し、このような歴史と定評のある研究誌としての紀要の学問的な伝統と蓄積を、情報学環での教育研究基盤のうえでさらに発展させたいと考えた。このような視点から、『情報学環紀要 情報学研究』を、これまでの伝統を維持しつつも、理工学系において発展してきた情報学の基礎理論や応用分野の研究と融合した新しい研究成果が共に公刊されていく場として位置づけた。

そのために、本紀要は、巻頭エッセイの「思考の環」、巻末の「フィールド・レビュー」をはじめ、情報学環教員の研究論文や学際情報学府博士課程院生の査読論文（博士課程在籍者の投稿論文は、外部査読者を含む複数の審査員による審査の上、掲載を許可している）などさまざまなセクションから複層的に構成されている。大学院情報学環において育まれる研究の創造的成果の主要な発表媒体として、また新たな学問的視座や調査研究の発表の場として、本紀要は内外から高い評価を得ている。

4.5.2 『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究・調査実研究編』

『情報学環紀要 情報学研究・調査実研究編』は、1992年から刊行されてきた『社会情報研究所調査研究紀要』を継承するものである。

『社会情報研究所調査研究紀要』は、同研究所におけるさまざまな社会調査、情報行動や災害情報、インターネットなどに関わる多くの調査の成果が発表されていく主要な媒体であった。これらの社会調査は、関係する研究者や学会、自治体などで高く評価されているものが多く、そのデータの価値が高く評価されていた。

このような社会情報研究所時代の伝統を生かしつつ、情報学環と社会情報研究所との統合後は、これまで主要な柱をなしてきた情報行動や災害行動の調査の成果に加え、情報工学や情報科学との融合分野での実験の成果、文理相互浸透分野でのフィールドワーク、情報教育分野での実験、デジタル・アーカイブに関する諸実践、デザイン表現論などの調査や実験、実践の成果が多分野にわたって発表される媒体となっている。

2009年3月に刊行されたNo.25には、「メディア・カニバリズムに関する『在宅時間相応配分説』再考」「国際緊急人道支援におけるクラスター・アプローチ制度の分析」「北京五輪に関する東大生、精華大生のメディア接触とその影響」「選挙時における情報行動の日韓比較」「2008年若年層におけるテレビ視聴の実態」の5本の論文が掲載された。

4.5.3 『英文紀要』

『情報学環英文紀要』は、前記の『社会情報研究所紀要』が発展していく中で研究の国際化、グローバル化に対応して独立したものであった。『英文紀要』は、基本的には研究者の個人研究論文とともに、社会情報研究所で開催された国際的なシンポジウムなどの記録を収録していた。

このような社会情報研究所時代の伝統を生かしつつ、情報学環・社会情報研究所の統合後は、情報、メディア、コミュニケーションをめぐるより広い学問分野の知見が掲載できるように体裁をあらため、和文紀要の一部に英語論文を掲載するとともに、英語のウェブサイトにも英語論文および和文論文の英訳を掲載している。

4.6 定期刊行物・ホームページ

4.6.1 定期刊行物

情報学環・学際情報学府では、日々の活動を学内外の方々に広く知ってもらうため、ニューズレター『学環学府』を年4回発行している。『学環学府』は、情報学環教職員や学生だけでなく、学内他部局や本部役員をはじめ、学環にゆかりのある学外教員、そのほか広報用として入試説明会、ホームカミングデー、学環来訪者などに随時配布している。内容は、教員へのインタビュー、研究室の活動報告、イベント予定、研究成果、受賞報告、展示会、各教員の書籍刊行情報など。2002年冬号から始まり、2008年度末までに通算25回発行した。デザイン性を高めた紙面は、情報学環・学際情報学府の特徴をよく表現しており、各方面から好評を得ている。ちなみに、2008年度の表紙は「学環」の「環」をイメージした“スパイラル”を中心に配し、様々な情報やあふれる知識が、輪を描く様に前に進んで行く様子を表すデザインとした。スパイラルにコラージュされた写真は学環・学府の「今」を表現すると同時に、中の記事へと読者を誘っている。

4.6.2 ホームページ

情報学環・学際情報学府では、主に教育・研究における活動を広く国内外に周知するために、ホームページを開設し非常に理解しやすい構造で情報を発信している。情報は、総合案内、教員・研究員、研究、教育、入学案内、刊行物・アーカイブ、付属研究施設、内部向け情報、などの項目に分け掲載されている。(URLアドレスは <http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/>)

まず、「総合案内」項目では、学環長からのメッセージとして、様々な学問分野を統合し〈学び〉の〈環〉を構造的に組み込んだ学際的な大学院組織である情報学環のミッションを紹介し、また組織や沿革などの情報を案内している。

「教員・研究員」項目では、所属する教員の専門分野、メッセージ、各個人のホームページへのリンク、メールアドレスなどが記載されている。

「研究」項目では、各教員がリードする研究プロジェクトの概要と詳細な情報へのリンクと、また情報学環の教員が主催するシンポジウムへのリンク、および、旧社会情報研究所部門研究へのリンクが掲載され、研究内容・成果に関する情報が入手できるようになっている。

「教育」項目では、学際情報学府における4つの教育コースである、社会情報学コース、文化・人間情報学コース、学際理数情報学コース、総合分析情報学コースの紹介に加えて、情報学環教育部の紹介、授業一覧と時間割、また、オンライン遠隔教育の一環として [iii-online](#) という新しい試み、そして、過去の修士論文・博士論文のリストを掲載している。[iii-online](#) では、企画された **e-learning** のシリーズ講義をこのホームページから聴講することができる。

「入学案内」では、修士課程、博士課程、教育部学生、外国人研究生のそれぞれについての入学・入試情報が掲載されている。

「刊行物・アーカイブ」では、情報学環で発行しているニューズレター、年報・紀要、研究叢書、デジタル・アーカイブへのリンクを提供している。刊行物のデジタル・アーカイブや、ニューズレター『学

環学府』の PDF ファイルをダウンロードすることもできるようになっている。

この他、「付属研究施設」や「内部向けの情報」の項目もありそれぞれの内容を記載している。

また、これらの項目に含まれる各最新情報をショートカットでアクセスするためや、あるいは、情報学環関連のイベント情報、ニュース、などを紹介する **News & Events** のリンク、そして、入試などの重要情報へのショートカットを提供する **Hot Topics** のリンクなどをトップページに備え、迅速に利用者が最新情報へアクセスできることを可能にしている。

このように、「情報」を軸に連環している「百学連携」の情報学環にふさわしい情報の発信をめざすために、インターネットという普遍的な情報通信メディアを通じた種々の研究教育活動の紹介は、我々がもっとも力を入れて推進している広報活動の一つである。

4.7 国際交流

平成 20 年度は、6 月に復旦大学新聞学院と、上海交通大学媒体与設計学院と国際交流覚書を締結した。

また 11 月 21、22 日には、ソウル大学にてソウル大学言論情報研究所と合同で “Digital Convergence and Institutional/Cultural Changes of Public Broadcasting” というテーマの国際シンポジウムが開催され、東大側がソウル大を訪問した。情報学環からの参加は吉見学環長、石川徹准教授、ジェイソン・カーリン准教授で、それぞれ研究発表を行った。さらに 12 名の大学院生も参加し発表を行った。今回のシンポジウムでは、ソウル大と東大のほか、国立台湾大学、清華大学、香港中文大学の 3 校も加わり、国際化が一層多極化した。

また、これに先立ち、10 月には真鍋祐子准教授が「80～90 年代韓国民民主化運動の展開とメディア」と題して、ソウル大学言論情報学科にて集中講義を実施した。さらに冬学期には、10 月 6 日から 12 月にかけて 8 回にわたり同学科とのビデオ会議システムを使ったオムニバス形式の講義が開講された。情報学環からは橋元良明教授ならびに田中淳教授が講義を行い両大学の学生から好評を博した。

このような国際交流協定に基づく研究交流活動に加えて、学環の教員それぞれは、積極的に海外で研究調査活動を行ったり、学会やシンポジウムに参加したりしている。また、海外からの研究者を招聘して共同研究に取り組み、多彩なシンポジウムを主催している。今後とも、組織としても、また教員個人としても、多様な国々の多様な研究機関やその他の社会における交流を深めることが課題である。

II. 資料

1 沿革

(旧社会情報研究所)

1929年 東京帝国大学文学部新聞研究室

1949年 東京大学新聞研究所

1992年 東京大学社会情報研究所に改組

東京大学大学院情報学環・学際情報学府と組織統合

(大学院情報学環)

2000年 東京大学大学院情報学環・学際情報学府

2004年 東京大学社会情報研究所と組織統合

文化・人間情報学コース、社会情報学コース、学際理数情報学コース設置

2006年 総合分析情報学コース設置

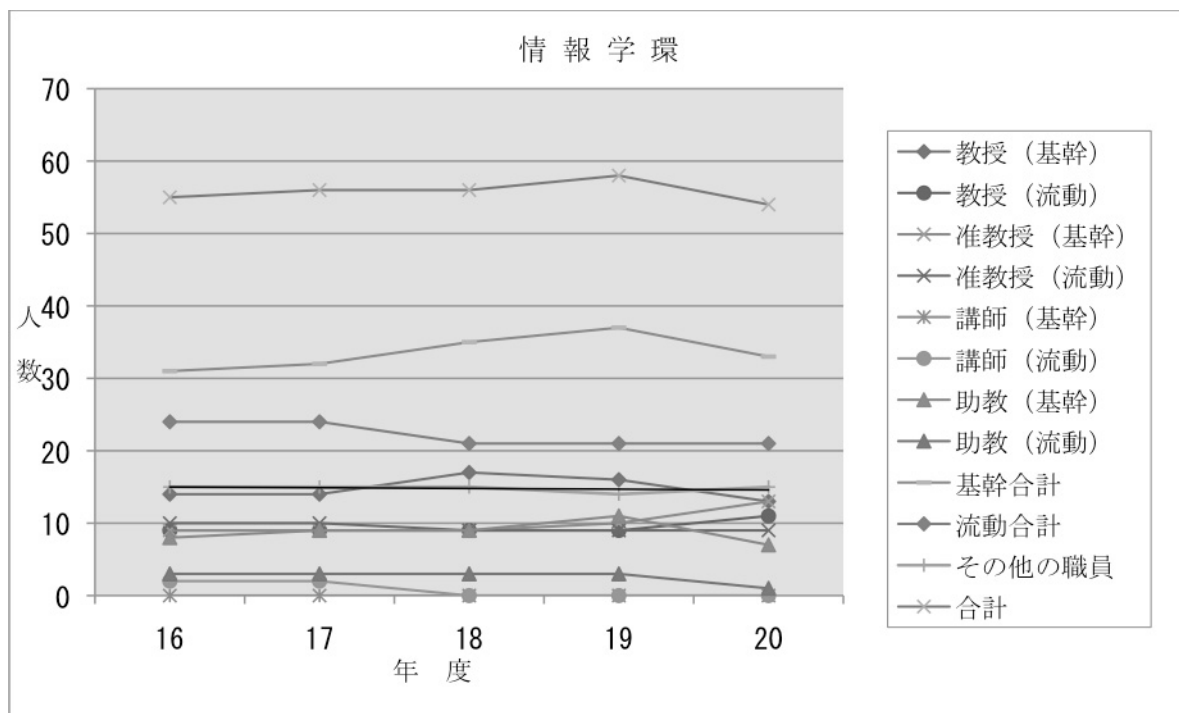
2008年 アジア情報社会コース設置

総合防災情報研究センター設置

2 学環の教員（定員）

・情報学環(平成16年4月 社会情報研究所と合併)

年度	教授		准教授 (助教授)		講師		助教 (助手)		計		その他 の職員	
	基幹	流動	基幹	流動	基幹	流動	基幹	流動	基幹	流動		
16	14	9	9	10	0	2	8	3	31	24	55	15
17	14	9	9	10	0	2	9	3	32	24	56	15
18	17	9	9	9	0	0	9	3	35	21	56	15
19	16	9	10	9	0	0	11	3	37	21	58	14
20	13	11	13	9	0	0	7	1	33	21	54	14

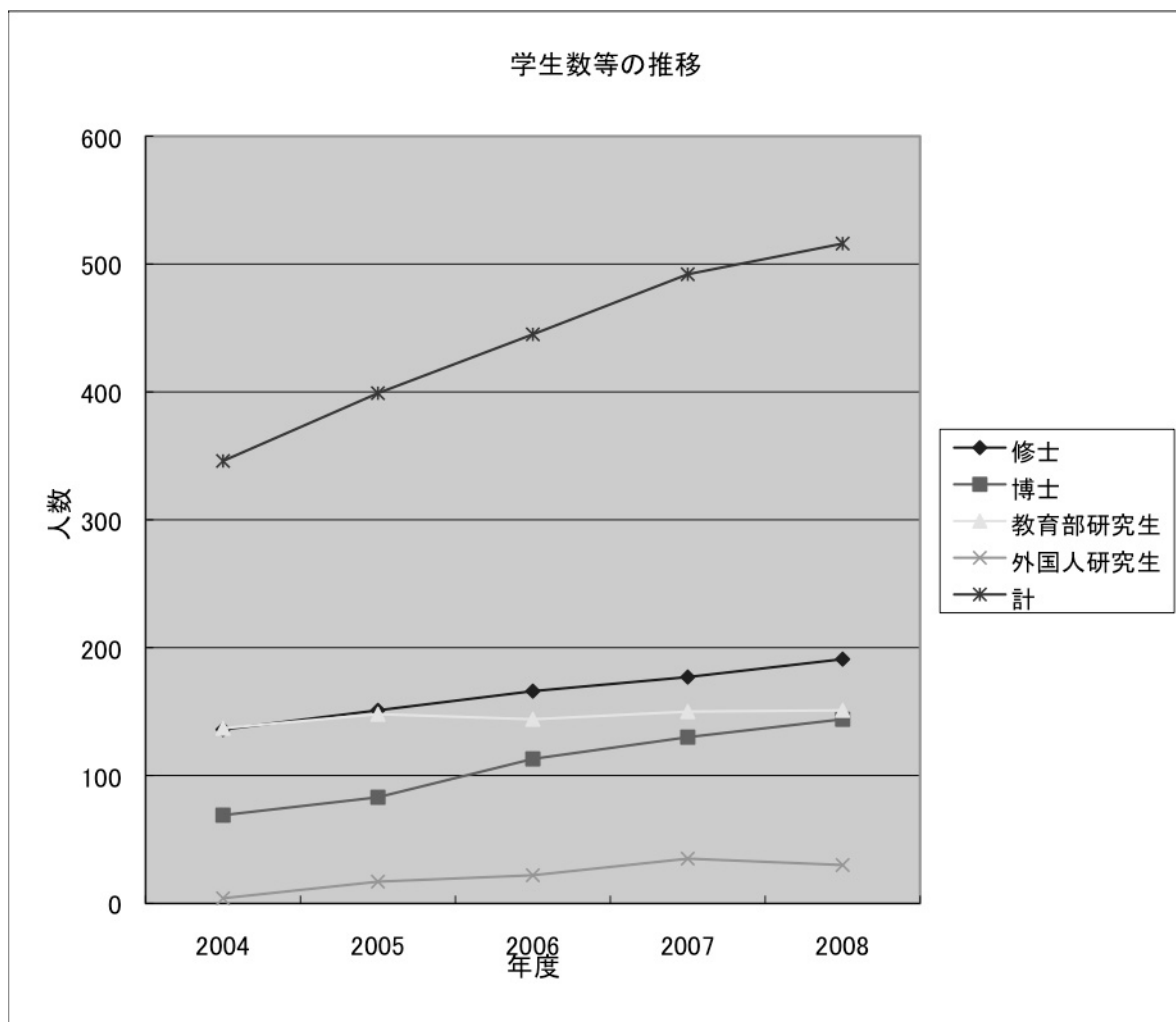


客員教員の状況

年度	職	氏名	担当授業	本務先
平成 16	客員教授	伊藤 守	社会情報学特別講義 I	早稲田大学教育学部
	客員教授	村上 由見子	文化・人間情報学特別講義 I	著述業
	客員助教授	東 浩紀	社会情報学特別講義 II	国際大学グローバル・コミュニケーション・センター
	客員助教授	永井 由美子	学際理数情報学特別講義 I (都合により取止め)	多摩美術大学美術学部
平成 17	客員教授	フリアン クラス	社会情報学特論 II	ドイツー日本研究所
	客員助教授	深尾 葉子	文化・人間情報学特論 V	大阪外国語大学外国語学部
	客員助教授	宇治橋 祐之		NHKエディンショナル
平成 18	客員教授	佐藤 哲	文化・人間情報学特論 VIII	長野大学産業社会学部
	客員助教授	魏 晶玄	文化・人間情報学特論 IX	ソウル(社)コンテンツ経営研究所
平成 19	客員教授	飯吉 透		カネキー財団知識メディア研究所
	客員准教授	奈良 高明		電気通信大学
	客員准教授	飯野 浩一	文化・人間情報学特論 IV	凸版印刷総合研究所
	客員准教授	大場 光太郎		産業技術総合研究所
	客員准教授	下畑 光夫	総合分析情報学特論 IX	沖電気
	客員准教授	荒牧 浩二		(株)日立製作所中央研究所
平成 20	客員教授	飯吉 透		カネキー財団知識メディア研究所
	客員准教授	飯野 浩一	文化・人間情報学特論 IV	凸版印刷総合研究所

3 学府の学生数

	2004	2005	2006	2007	2008
修士	136	151	166	177	191
博士	69	83	113	130	144
教育部研究生	137	148	144	150	151
外国人研究生	4	17	22	35	30
計	346	399	445	492	516



4 教育部

教育部入学試験

平成 16(2004)年度から平成 20(2008)年度入学志願者数・受験者数・合格者数

年度	受入 予定 人員	日本人 ／外国 人	志願者			受験者			合格者		
			本 学	他大学	計	本 学	他大学	計	本 学	他大学	計
平成 16(2004) 年度	約 50	日本人	90	41	131	81	40	121	44	13	57
		外国人	1	1	2	1	1	2	0	1	1
		計	91	42	133	82	41	123	44	14	58
平成 17(2005) 年度	約 50	日本人	90	47	137	79	46	125	43	12	55
		外国人	1	3	4	1	3	4	0	1	1
		計	91	50	141	80	49	129	43	13	56
平成 18(2006) 年度	約 50	日本人	81	32	113	78	30	108	48	7	55
		外国人	0	1	1	0	1	1	0	0	0
		計	81	33	114	78	31	109	48	7	55
平成 19(2007) 年度	約 50	日本人	74	36	110	72	35	107	34	16	50
		外国人	1	1	2	1	1	2	1	1	2
		計	75	37	112	73	36	109	35	17	52
平成 20(2008) 年度	約 50	日本人	55	45	100	54	44	98	40	17	57
		外国人	0	1	1	0	1	1	0	0	0
		計	55	46	101	54	45	99	40	17	57

5 コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム

■カリキュラム概要

1) デジタルコンテンツ創造科学講義Ⅰ：コンテンツ制作理論

担当：浜野保樹

本講義では、コンテンツ制作のワークフローとロジスティックスについて、理論的側面、実践的側面の両者に関して検討し、ケーススタディーを通してプロジェクト立案と遂行に必要な知識を学ぶ。

2) デジタルコンテンツ創造科学講義Ⅱ：コンテンツ制作技術論

担当：七丈直弘

本講義では、基本的な映像製作技術(CGモデリング等)について概観した後、先端的な技術の作品制作の現場への適用を、具体例を基に学ぶ。

3) デジタルコンテンツ創造科学講義Ⅲ:グローバルストラテジー論

担当:馬場 章

本講義では、グローバルな視点から、アニメ・ゲーム・コミック・映画など日本製コンテンツの海外戦略について学び、同時に海外で製作されたコンテンツの日本における受容や販売の実態についてケーススタディーを通して学ぶ。

4) デジタルコンテンツ創造科学講義Ⅳ:コンテンツ法務

担当:八代英輝

本講義では、コンテンツのプロデューサーに求められる著作権法の基礎知識を養い、コンテンツ製作に関連する権利及び権利処理を的確に行う実務知識を得る。さらに、契約に関する基本概念および将来のプロデューサーとして必要とされる海外展開及び海外取引についての基礎を学ぶ。

5) デジタルコンテンツ創造科学講義Ⅴ:コンテンツ財務

担当:逸見圭朗

本講義では、コンテンツ分野における金融に関する基礎知識を習得し、特に、資金調達に重点を置き、豊富な実例に基づいて論じる。また、昨今の複雑化するコンテンツファイナンスの動向についても学ぶ。

6) デジタルコンテンツ創造科学講義Ⅵ:コンテンツ文化史

担当:吉田正高

本講義では、コンテンツプロデューサーにとって必要不可欠であるコンテンツを見きわめる「目」を養うことを目的とし、時系列編年で戦後日本のコンテンツの歴史を概観し、多様なタイプのコンテンツをとりあげ、背景にある時代性を軸にそれぞれの関連性を論じる。

7) エンタテインメントテクノロジー研究Ⅱa:コンピュータグラフィックス

担当:西田友是

本講義では、コンピュータグラフィックスの基礎、特に、座標変換、データ構造、陰影計算、材質表現、アニメーションの基礎など、3次元CGの基礎について学ぶ。

8) エンタテインメントテクノロジー研究Ⅱb:コンピュータグラフィックス

担当:西田友是

本講義では、コンテンツ産業の基盤技術として重要な位置を占めるに至った3次元CGについて、先端技術および応用を学ぶ。

9) エンタテインメントテクノロジー研究Ⅲ:コンテンツデザイン

担当: 廣瀬通孝

本講義では、リアルな世界とバーチャルな世界とをシームレスに結合するための技術である複合現実感(MR)について学ぶ。バーチャルリアリティ(VR)技術から説き起こして、この技術がどのようにして成立してきたか、その技術的な必然性、および、具体的なリアルとバーチャルの融合技術について学ぶ。

10) エンタテインメントテクノロジー研究Ⅳ:デジタル映像処理

担当:池内克史

本講義では、コンテンツ制作の表現手法として不可欠なコンピュータビジョンの基礎知識(明るさ解析と反射率地図、物体認識それをささえる数理統計論、物体表現など)を学ぶ。

11) エンタテインメントテクノロジー研究V:ゲームテクノロジー論

担当:岩谷 徹、遠藤雅伸、馬場 章ほか

本講義では、ゲーム開発工程(プリプロダクション、プロダクション、ポストプロダクション)のうち特に企画(プランニング、デザイン)と制作の過程を中心に取り上げ、ゲームをいかに企画し、いかなる技術を用いてどのように制作するかという問題について学ぶ。

12) エンタテインメントテクノロジー研究VI:コンテンツ知覚心理

担当:佐藤隆夫

本講義では、コンテンツの企画、製作を行う場合に必要と思われる視聴覚の基本的なメカニズム、および、それを解明するための実験手法について学び、さらに、視聴覚における心理的なリアリティーなどの興味深い現象、特に視覚的な安全性に関する知識を学ぶ。

13) エンタテインメントテクノロジー研究VII:制作展示プロデュース

担当:荒川忠一

本講義では、研究発表をもとにさまざまな表現手法を議論し、作品展に向けて制作を行うほか開催に向けた企画等のマネジメントについても学ぶ。

14) エンタテインメントテクノロジー研究VIII:インタフェースデザイン

担当:苗村 健

本講義では、主に人間の感覚系に関する様々な知見と、それに基づくヒューマンインタフェースの実装・デザインについて技術的な観点から学ぶ。

15) エンタテインメントテクノロジー研究IX:先端技術と芸術表現論

担当: 河口洋一郎

本講義では、情報造形の基礎を学習するために、特に「自然界の形の造形」とメカニクな立体造形への応用に焦点を置き、その生成手法の基礎を学ぶ。

16) エンタテインメントテクノロジー研究X:検索技術と情報ビジネス

担当: 相澤清晴、松野将宏 ほか

本講義では、インターネットポータルビジネスにおける実際のコンテンツを例に、ウェブ検索技術や新しいコンテンツ創造の場として注目を集めているブログサービスなど、最先端の検索技術とサービスについて学び、それらを活用した情報ビジネスの現状と今後について学ぶ。

17) エンタテインメントテクノロジー研究XI:アートとテクノロジーの融合

担当:原島 博、大谷智子 ほか

本講義では、コンピュータに代表される情報技術とバーチャルリアリティーなどのメディア技術の進歩によって生まれた、メディアアートの発展と模索の歴史を学ぶとともに、その未来像を模索する。

18) デジタルコンテンツ創造科学演習I:インターンシップ

担当:馬場 章、藤原正仁

本演習では、講義で得た基礎理論や基礎知識を活用し、実際のコンテンツ制作現場において実務者との共同作業を通して、現場の経験知や実務を学び、新たなデジタルコンテンツ創造に結びつけることができる能力を体得する。

19) デジタルコンテンツ創造科学演習Ⅱ:製作・マーケティングシミュレーション

2008年度の製作・マーケティングシミュレーションは以下の4つのゼミから構成されている。

Ⅱa:製作・マーケティングシミュレーション ゲームプロデュースゼミ

担当:遠藤雅伸、堀聖司

本演習では、ゲームの本質的な面白さの具現化を目的として、ゲームプロデューサーのプロプリダクションへの関わり方をシミュレートし、ボードゲームによってゲームのプロトタイプ開発を学ぶ。

Ⅱb:製作・マーケティングシミュレーション アニメーション企画ゼミ

担当:七丈直弘、八巻 磐、辻本幸七

本演習では、アニメーションや映像を主体としたコンテンツ制作に関する各工程の構造および実務を知った上で、実際に自ら企画を立て、その実現に向けて様々な作業を実施することで、この分野でビジネスを推進する上で必要となる実践力を身につける。

Ⅱd:製作・マーケティングシミュレーション フィルムプロデュースゼミ

担当:馬場 章、公野 勉、堀 聖司

本演習では、実写による映像作品のプロデュースを実践的に習得する。すなわち、座学によって得られる企画立案、資金調達、制作行程管理、流通などに関する知識をもとに、地方都市をテーマとする実写映像作品の企画・制作・流通を実際に行って、実践力を身につける。

Ⅱe:製作・マーケティングシミュレーション 展示プロデュースゼミ

担当:馬場 章

本演習では、台湾で開催されるデジタルコンテンツに関する展示会における東京大学の展示のプロデュースを担当する。具体的には、作品の選定、展示の企画・運営・プロモーション、台湾側担当者との連絡・調整、スケジュール管理、展示の評価・分析など、一連の過程を通じて、理論的かつ実践的に展示プロデュースの手法を体得するとともに、国際的な感覚を養う。

20) デジタルコンテンツ創造科学演習Ⅲ:論文作成

担当:荒川忠一、苗村健、青木輝勝

新たなデジタルコンテンツを生み出すための科学技術やコンテンツに関するマーケティングや商品流通の実態と今後の展望など、デジタルコンテンツの発展につながるテーマを選択し、担当教員の個別指導のもとコンテンツ分野に関連する論文の作成を行う。

21) デジタルコンテンツ創造科学特論Ⅰ:作品研究

担当:浜野保樹、廣瀬通孝、村上存

コンテンツ作品(映画、ゲームなど)を毎回選び、その製作に参加した専門家によって製作の意図および過程について解説してもらい、様々な視点から語られる製作における重要事項を通じて、コンテンツが成立するために必要となる様々な知識を総合的に学ぶ。

22) デジタルコンテンツ創造科学特論Ⅱ：アニメーション制作理論

担当：鈴木敏夫、押井 守、石川光久、七丈直弘 ほか

日本のアニメーション製作の第一線で活躍しているプロデューサー、監督などの関係者を講師に迎え、アニメーションの種類とプロダクションの現状、国際戦略の現状と今後の課題、アニメーション関連のビジネスモデルなどについて、その実践に必要とされる知識を総合的に学ぶ。

23) デジタルコンテンツ創造科学特論Ⅲ：ゲームプロデューサー論

担当：松原健二、小沼謙太郎、馬場 章 ほか

本講義では、ゲームのビジネス、特にファイナンス、リーガル、マーケティング、プロモーションやリーテイルを中心にとりあげ、ゲーム開発におけるそれらの役割と実際を、国際的なゲーム情報の流通という視点とゲームプロデューサーの立場から講義する。

24) デジタルコンテンツ創造科学特論Ⅳ：映画産業論

担当：公野 勉

本講義では、総論として映画業界における制作・買付・配給・興行までにおよぶ産業構造を解説し、その国内外の市場実態を踏まえたコンテンツ戦略のあり方について、各論として映画製作におけるディベロップメント・撮影・ポストプロダクションの実際について学ぶ。

25) デジタルコンテンツ創造科学特論Ⅴ：デジタルメディア

担当：青木輝勝

本講義では、アニメ・ゲームに特化せず、次世代映像製作技術や TV・出版・CM・デジタルシネマ・立体映像・ケータイなどより広義なコンテンツに焦点をあて、これらの現状と今後の動向を学ぶ。

26) デジタルコンテンツ創造科学特別講義 a

担当：原島 博、大谷智子

本講義では、コンピュータがマルチメディア、インターネット、ブロードバンドへと進化して、いまや情報社会の基盤となった現在、情報メディア技術に何が起きているのかについて、10年単位、100年単位、1000年単位といった様々なタイムスケールで展望する。

27) デジタルコンテンツ創造科学特別講義 b

担当：原島 博、大谷智子

本講義では、デジタルコンテンツを支える3本柱である、コンテンツ産業、アート・表現、メディア技術について、それぞれの分野における我が国のオピニオンリーダーを迎えて、デジタルコンテンツの将来像を探ることを目的とする。

設置科目・開講時期一覧

科目番号	科目名	担当教員	単位数	開講時期	備考
S001	デジタルコンテンツ創造科学特別講義 a	原島 博 大谷智子	2	冬学期	※1
S002	デジタルコンテンツ創造科学特別講義 b	原島 博 苗村 健	2	冬学期	※1
A001	デジタルコンテンツ創造科学講義Ⅰ： コンテンツ制作理論	浜野保樹	2	夏学期	※2
A002	デジタルコンテンツ創造科学講義Ⅱ： コンテンツ制作技術論	七丈直弘	2	夏学期	※2
A003	デジタルコンテンツ創造科学講義Ⅲ： グローバルストラテジー論	馬場 章	2	冬学期	※2
A004	デジタルコンテンツ創造科学講義Ⅳ： コンテンツ法務	八代英輝	2	冬学期	※2
A005	デジタルコンテンツ創造科学講義Ⅴ： コンテンツ財務	逸見圭朗	2	夏学期	※2
A006	デジタルコンテンツ創造科学講義Ⅵ： コンテンツ文化史	吉田正高	2	通年開講	※2
B001	エンタテインメントテクノロジー研究Ⅰ： バーチャルリアリティ	舘 暲	2	夏学期	※3
B002a	エンタテインメントテクノロジー研究Ⅱa： コンピュータグラフィックス	西田友是	2	夏学期	※3
B002b	エンタテインメントテクノロジー研究Ⅱb： コンピュータグラフィックス	西田友是	2	冬学期	※3
B003	エンタテインメントテクノロジー研究Ⅲ： コンテンツデザイン	廣瀬通孝 谷川智洋	2	夏学期	※3
B004	エンタテインメントテクノロジー研究Ⅳ： デジタル映像処理	池内克史	2	冬学期	※3
B005	エンタテインメントテクノロジー研究Ⅴ： ゲームテクノロジー論	岩谷 徹 遠藤雅伸 馬場 章 各教員	2	夏学期	※3
B006	エンタテインメントテクノロジー研究Ⅵ： コンテンツ知覚心理	佐藤隆夫	2	夏学期	※3

B007	エンタテインメントテクノロジー研究Ⅶ: 制作展示プロデュース	荒川忠一 鈴木太郎	2	通年開講	※3
B008	エンタテインメントテクノロジー研究Ⅷ: インタフェースデザイン	苗村 健	2	夏学期	※3
B009	エンタテインメントテクノロジー研究Ⅸ: 先端科学技術と芸術表現論	河口洋一郎	2	夏学期	※3
B010	エンタテインメントテクノロジー研究Ⅹ: 検索技術と情報ビジネス	相澤清晴 松野将宏	2	夏学期	※3
B011	エンタテインメントテクノロジー研究Ⅺ: アートとテクノロジーの融合	原島 博 大谷智子 各教員	2	冬学期	※3
C001	デジタルコンテンツ創造科学演習Ⅰ: インターンシップ	馬場 章 藤原正仁	6	通年開講	※4
C002a	デジタルコンテンツ創造科学演習Ⅱa: 製作・マーケティングシミュレーション ゲームプロデュースゼミ	遠藤雅伸 堀 聖司	6	通年開講	※4
C002b	デジタルコンテンツ創造科学演習Ⅱb: 製作・マーケティングシミュレーション アニメーション企画ゼミ	七丈直弘 吉田正高	6	通年開講	※4
C002c	デジタルコンテンツ創造科学演習Ⅱc: 製作・マーケティングシミュレーション Web サイト企画ゼミ	青木輝勝 山田和明 各教員	6	通年開講	※4
C002d	デジタルコンテンツ創造科学演習Ⅱd: 製作・マーケティングシミュレーション フィルムプロデュースゼミ	馬場 章 公野 勉 堀 聖司	6	通年開講	※4
C002e	デジタルコンテンツ創造科学演習Ⅱe: 製作・マーケティングシミュレーション 展示プロデュースゼミ	馬場 章 藤原正仁	6	通年開講	※4
C003	デジタルコンテンツ創造科学演習Ⅲ: 論文作成	各教員	6	通年開講	※4
D001	デジタルコンテンツ創造科学特論Ⅰ: 作品研究	浜野保樹 廣瀬通孝 村上 存	2	通年開講	※5
D002	デジタルコンテンツ創造科学特論Ⅱ: アニメーション制作理論	七丈直弘 中村 仁	2	通年開講	※5

D003	デジタルコンテンツ創造科学特論Ⅲ： ゲームプロデューサー論	松原健二 小沼謙太郎 馬場 章 各教員	2	冬学期	※5
D004	デジタルコンテンツ創造科学特論Ⅳ： 映画産業論	公野 勉	2	冬学期	※5
D005	デジタルコンテンツ創造科学特論Ⅴ： デジタルメディア	青木輝勝	2	冬学期	※5

備考

※1 演習科目以外の任意の科目群(講義・研究・特論)の単位として認定する。

※2 科目番号 A001～A006 の中から 3 科目以上を選択の上、履修する

※3 科目番号 B001～B0011 の中から 1 科目 (2 単位) 以上を履修し、「デジタルコンテンツ創造科学特論」と合計して 8 単位以上を履修する。(平成 18 年度に認定した履修生は 2 科目 (4 単位) 以上を履修する。)

※4 科目番号 C001～C003 の中からいずれか 1 科目を選択の上、履修する

※5 科目番号 D001～D005 の中から 1 科目 (2 単位) 以上を履修し、「エンタテインメントテクノロジー研究」と合計して 8 単位以上を履修する。(平成 18 年度に認定した履修生は 2 科目 (4 単位) 以上を履修する。)

6 予算

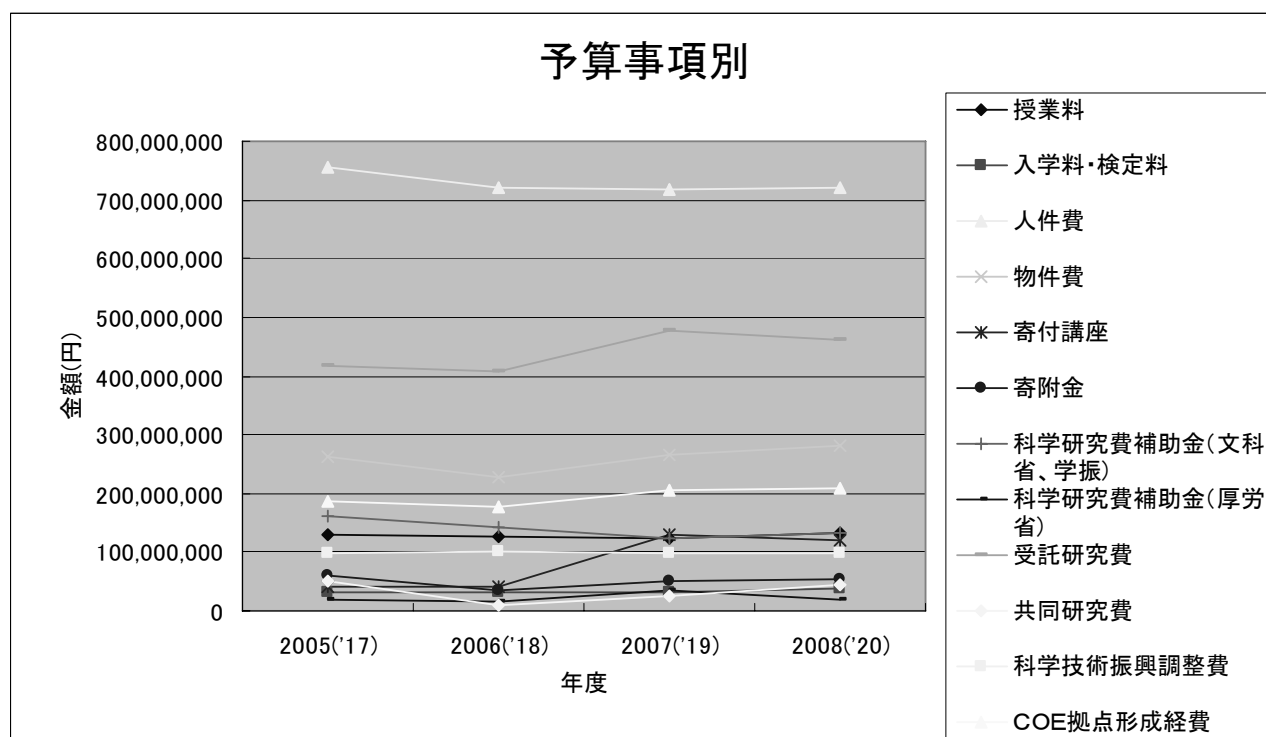
・情報学環

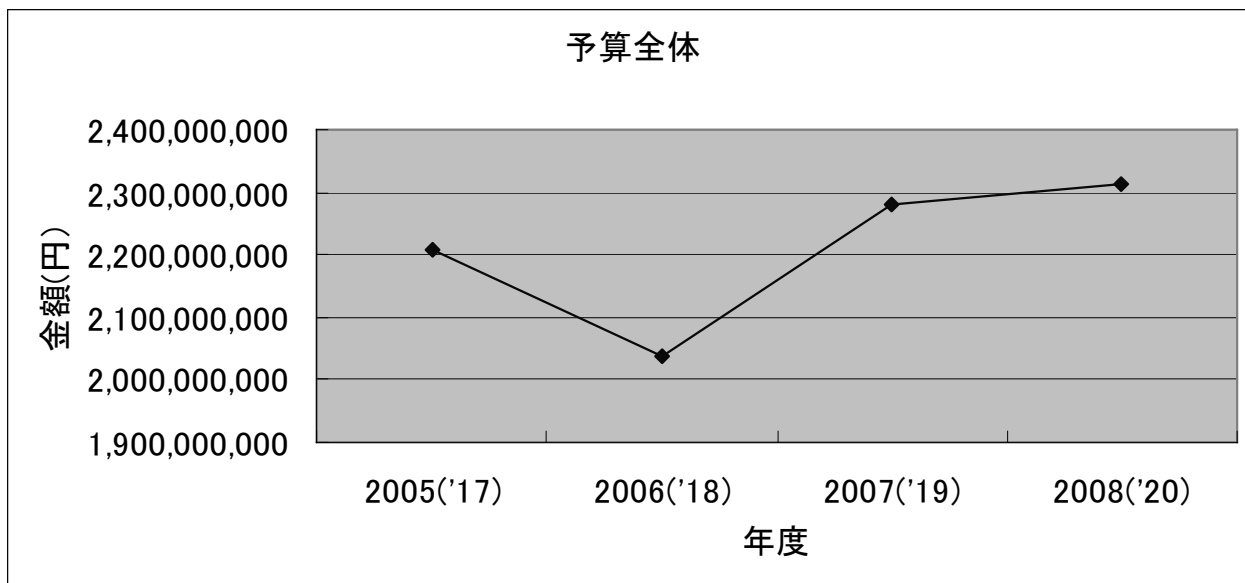
	2005('17)		2006('18)		2007('19)		2008('20)	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
授業料	—	130,079,250	—	126,550,530	—	121,873,050	—	133,786,450
入学料・検定料	—	30,056,800	—	30,227,200	—	31,936,600	—	37,380,400
人件費	—	754,176,257	—	722,514,839	—	716,814,000	—	722,395,394
物件費	—	261,876,000	—	228,921,285	—	266,379,000	—	282,180,320
寄附講座	1	40,000,000	1	40,000,000	4	129,000,000	4	129,000,000
奨学寄附金	38	60,357,398	34	35,269,141	43	51,906,345	48	53,304,328
科学研究費補助金 (文科省、学振)*	32	161,200,000	36	142,525,000	30	122,820,000	29	132,484,000
科学研究費補助金	5	18,000,000	5	17,000,000	4	33,800,000	5	17,700,000

(厚生省)								
受託研究費	22	417,571,620	16	407,165,816	17	477,480,000	20	461,522,898
共同研究費	13	49,205,030	7	10,985,000	13	26,671,000	23	44,918,683
科学技術振興調整費	1	97,204,000	1	99,998,000	1	97,999,605	1	99,499,848
COE 拠点形成経費	1	188,000,000	1	177,180,000	1	204,600,000	1	208,890,000

* 特別研究員奨励費は除く

(H19、20 物件費については、追加配分及び前年度からの目的積立金分を含む)





7 土地・建物面積

・建物

建物名	建築年度	面積 (延㎡)
学環本館	S.27	472
	S.29	26
	S.33	360
	S.58	4,171
	計	5,029
暫定アネックス	H.13	1,013
工学部 2 号館	*H18	*500
目白台西 1 号館	*H18	*492
目白台西 2 号館	*H18	*545
第 2 本部棟	*H18	*548
福武ホール	H19	*3,241

*=使用年度・使用㎡数

(福武ホール面積については全学
共用スペース分を除く)

・学外スペース

文京区本郷(フローラル)	117.71 ㎡
--------------	----------

8 入試定数と受入数

	修士		博士	
	入学定員	受入予定人員	入学定員	受入予定人員
平成 16 (2004)	70	70	30	30
平成 17 (2005)	70	70	30	30
平成 18 (2006)	85	90	36	38
平成 19 (2007)	85	90	36	38
平成 20 (2008)	100	105	44	46

9 年度別入試データ詳細

修士

	2004	2005	2006	2007	2008
志願者	157	178	225	148	230
合格者	53	75	85	79	97
入学者	47	70	80	73	93

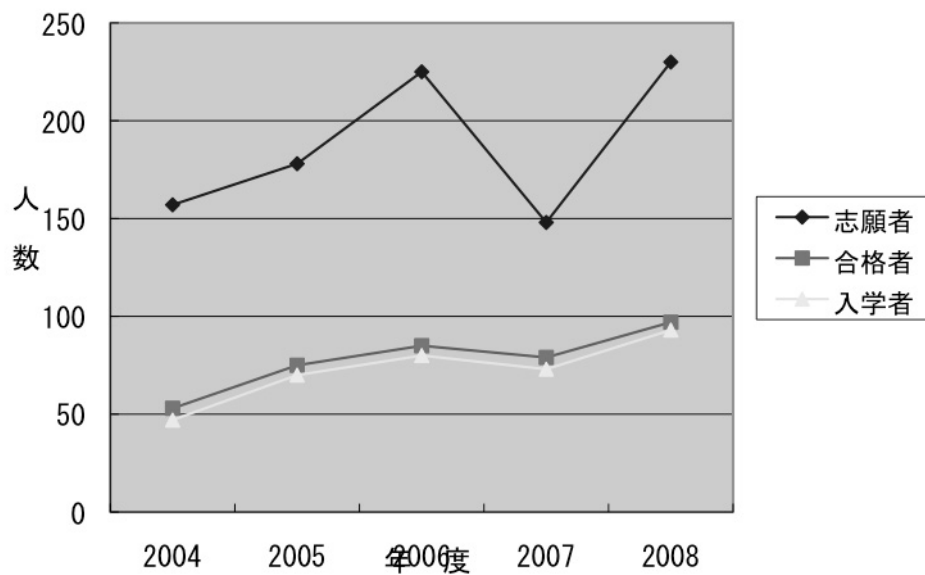
博士

	2004	2005	2006	2007	2008
志願者	34	55	62	58	64
合格者	21	25	37	36	37
入学者	21	25	37	36	35

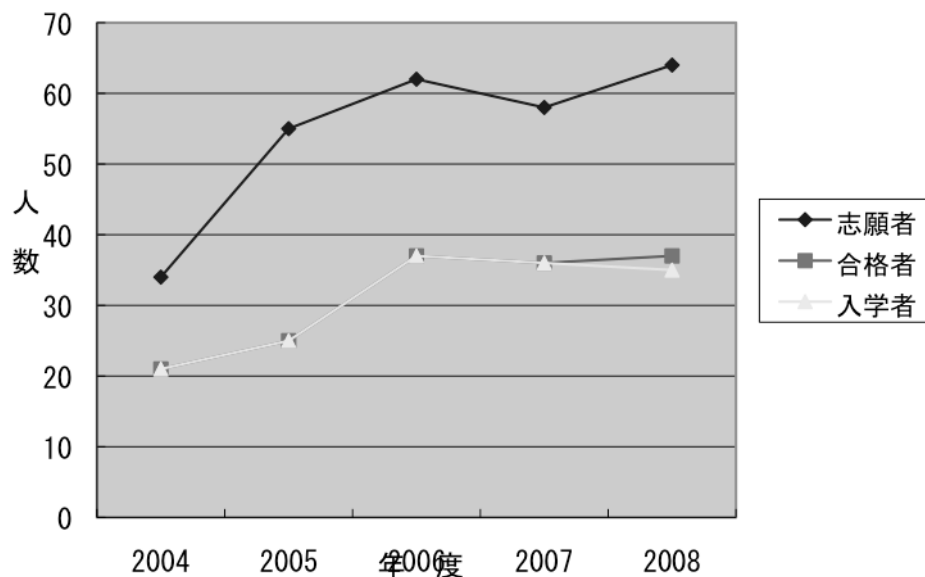
志願倍率（志願者／入学定員）

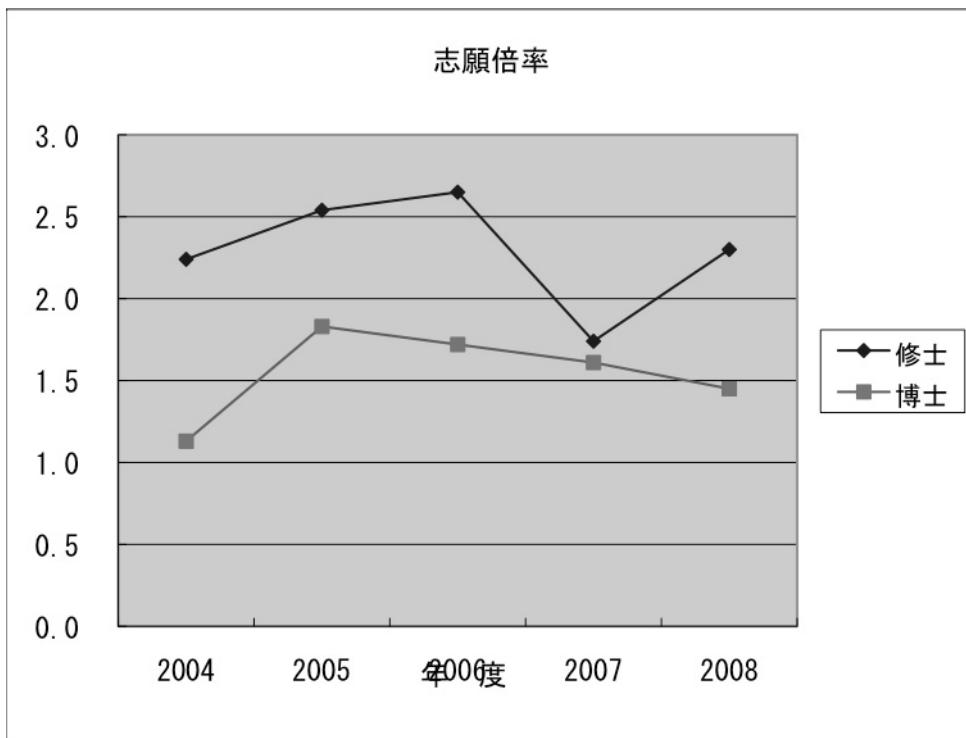
	2004	2005	2006	2007	2008
修士	2.24	2.54	2.65	1.74	2.30
博士	1.13	1.83	1.72	1.61	1.45

志願者・合格者・入学者の推移（修士課程）



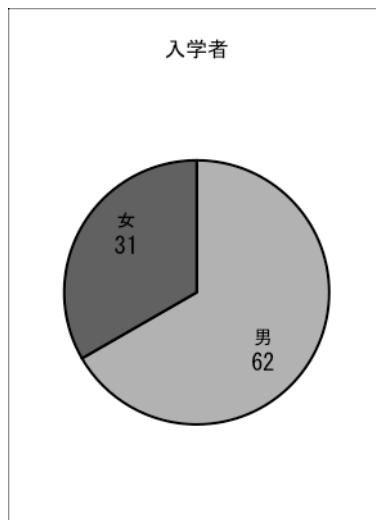
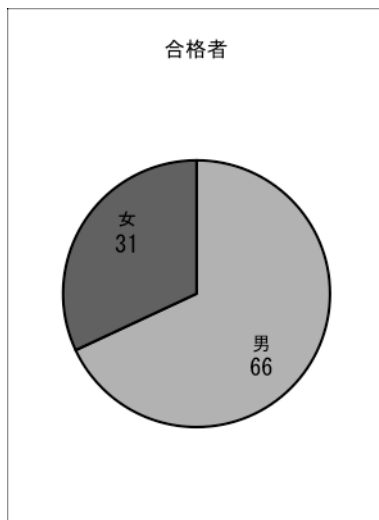
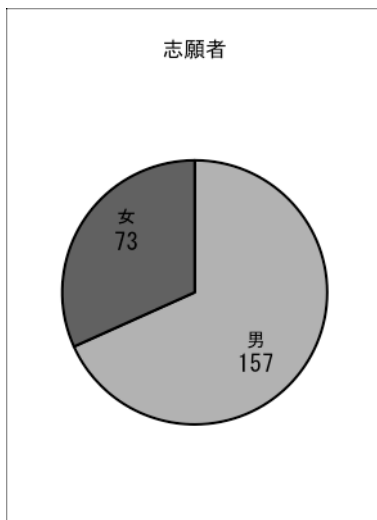
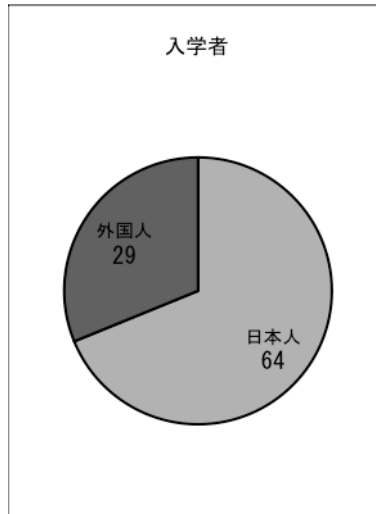
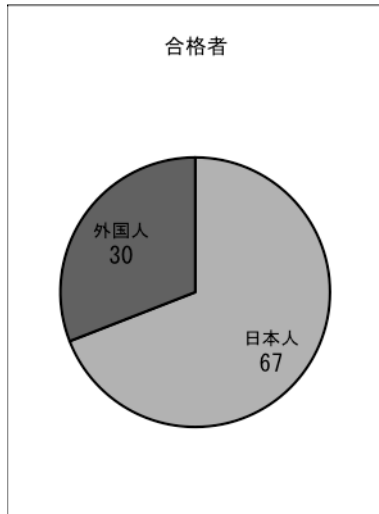
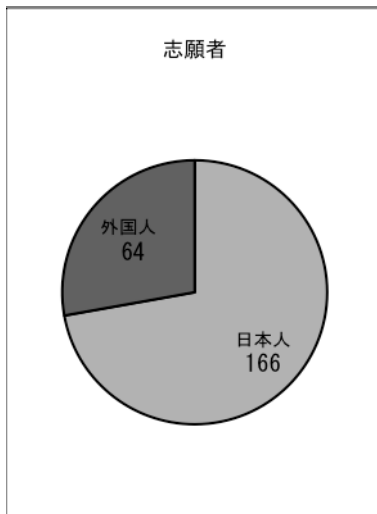
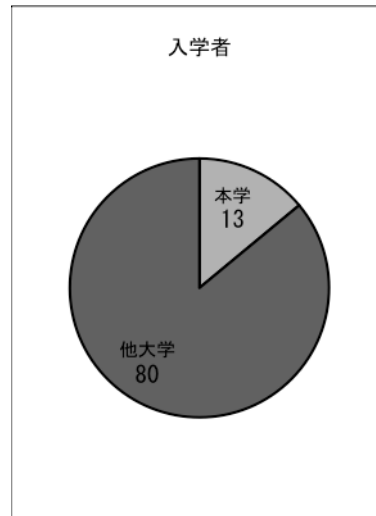
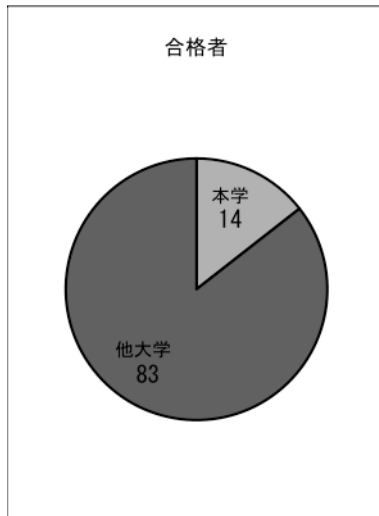
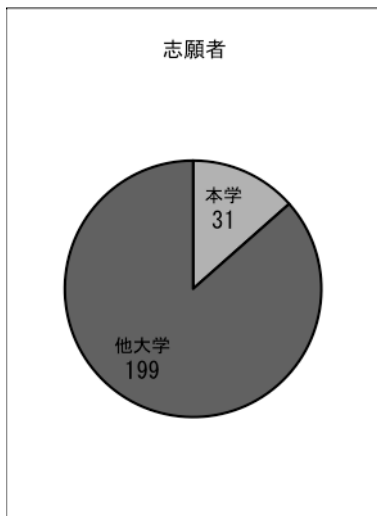
志願者・合格者・入学者の推移（博士課程）

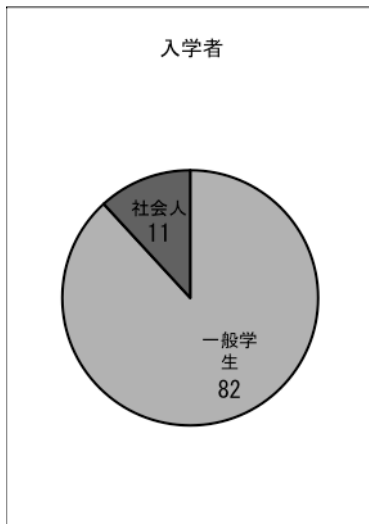
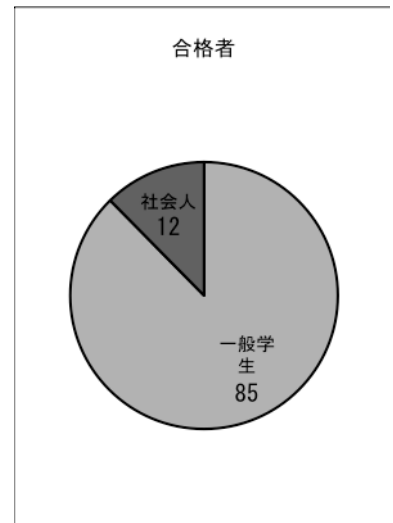
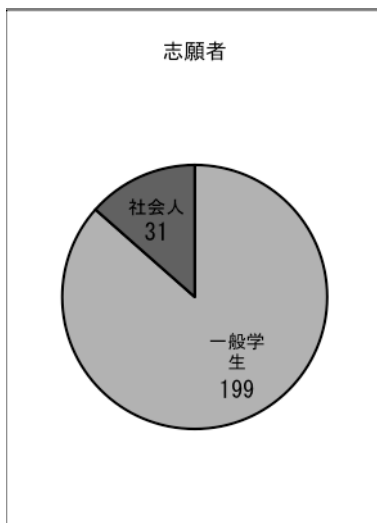




2008 年度修士入学試験詳細

志願者		合格者		入学者	
本学	31	本学	14	本学	13
他大学	199	他大学	83	他大学	80
230		97		93	
志願者		合格者		入学者	
日本人	166	日本人	67	日本人	64
外国人	64	外国人	30	外国人	29
230		97		93	
志願者		合格者		入学者	
男	157	男	66	男	62
女	73	女	31	女	31
230		97		93	
志願者		合格者		入学者	
一般学生	199	一般学生	85	一般学生	82
社会人	31	社会人	12	社会人	11
230		97		93	





2008 年度博士入学試験詳細

志願者

本学	34
他大学	30
	64

合格者

本学	23
他大学	14
	37

入学者

本学	22
他大学	13
	35

志願者

日本人	46
外国人	18
	64

合格者

日本人	26
外国人	11
	37

入学者

日本人	26
外国人	9
	35

志願者

合格者

入学者

男	42
女	22
64	

志願者

一般学生	50
社会人	14
64	

男	26
女	11
37	

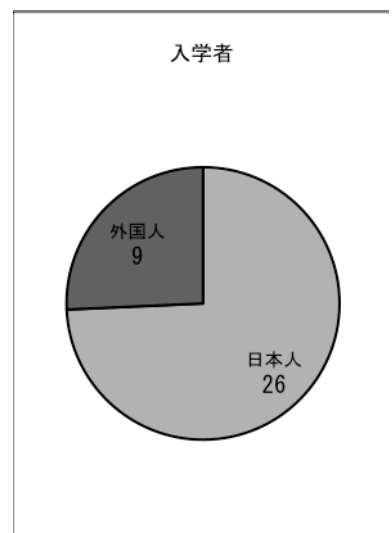
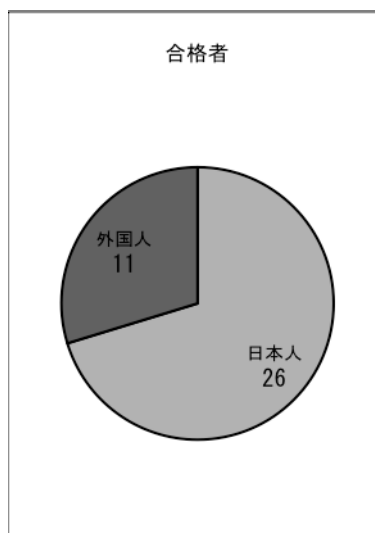
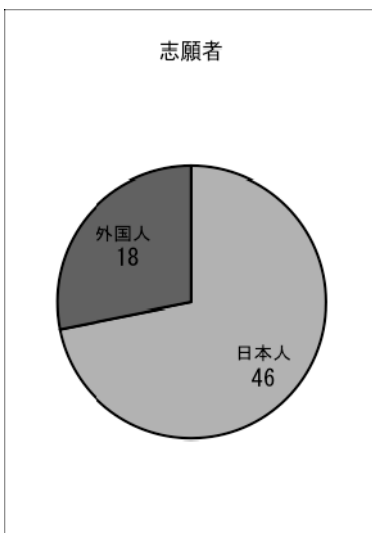
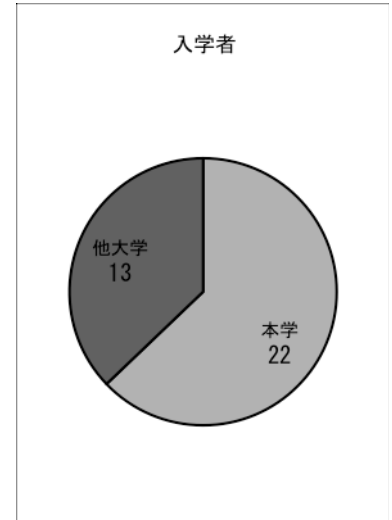
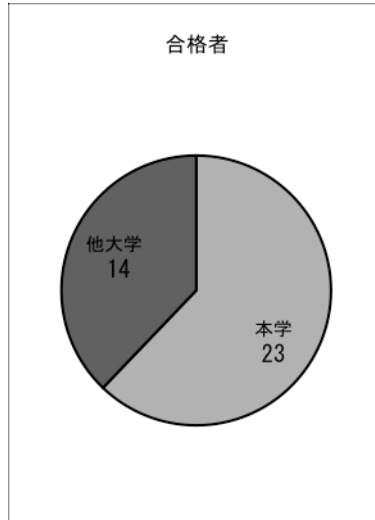
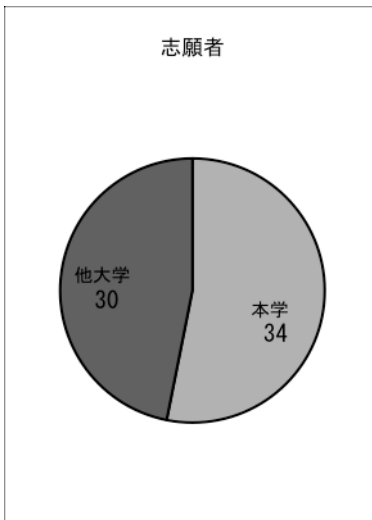
合格者

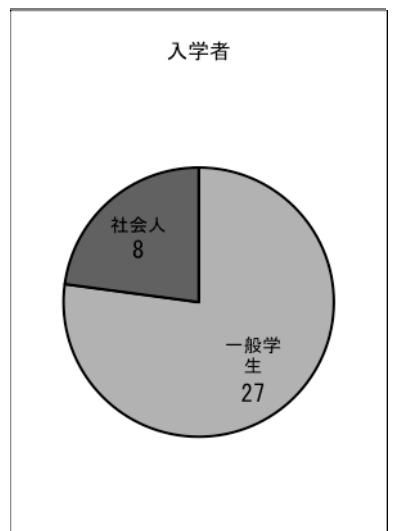
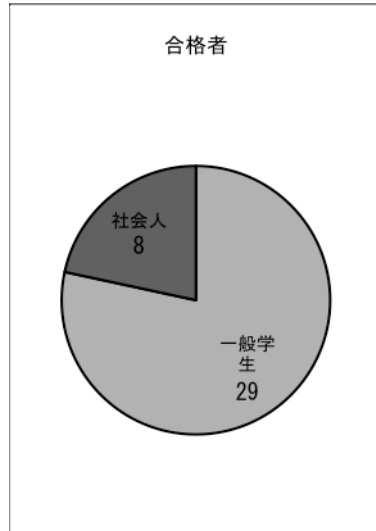
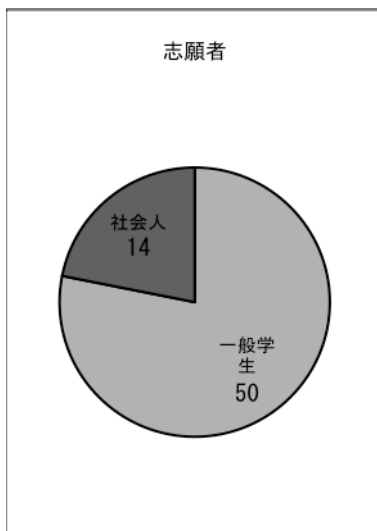
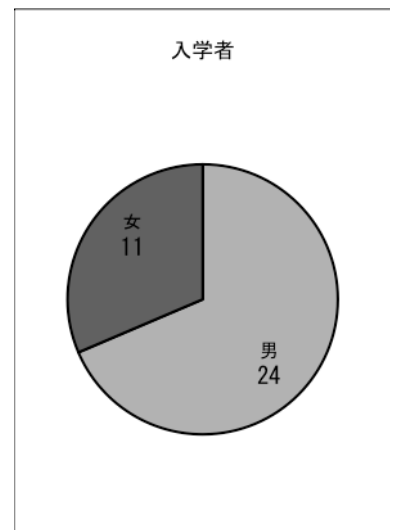
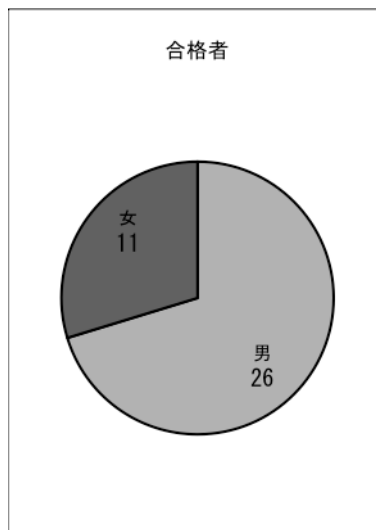
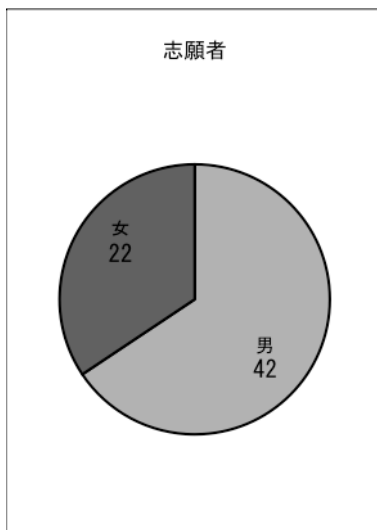
一般学生	29
社会人	8
37	

男	24
女	11
35	

入学者

一般学生	27
社会人	8
35	





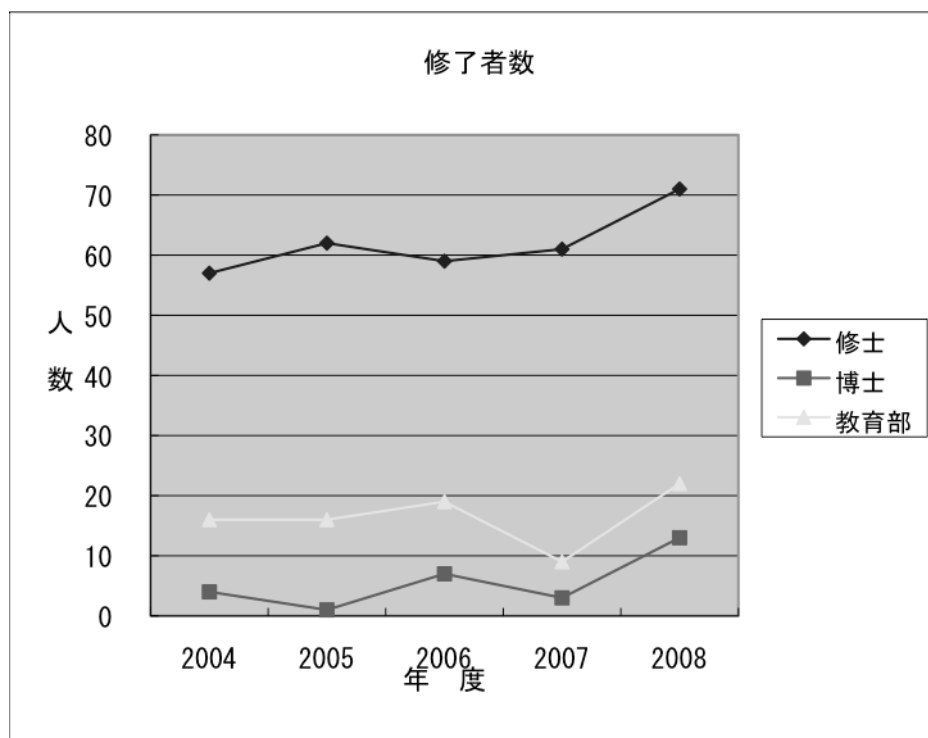
10 修了者数の推移

平成 16(2004)年度から平成 20(2008)年度修了者数

年度		修了者		
		本学	他大学	計
平成 16(2004)年度	日本人	9	6	15
	外国人	0	1	1
	計	9	7	16
平成 17(2005)年度	日本人	5	11	16
	外国人	0	0	0
	計	5	11	16

平成 18 (2006) 年度	日本人	8	10	18
	外国人	0	1	1
	計	8	11	19
平成 19 (2007) 年度	日本人	3	6	9
	外国人	0	0	0
	計	3	6	9
平成 20 (2008) 年度	日本人	17	5	22
	外国人	0	0	0
	計	17	5	22

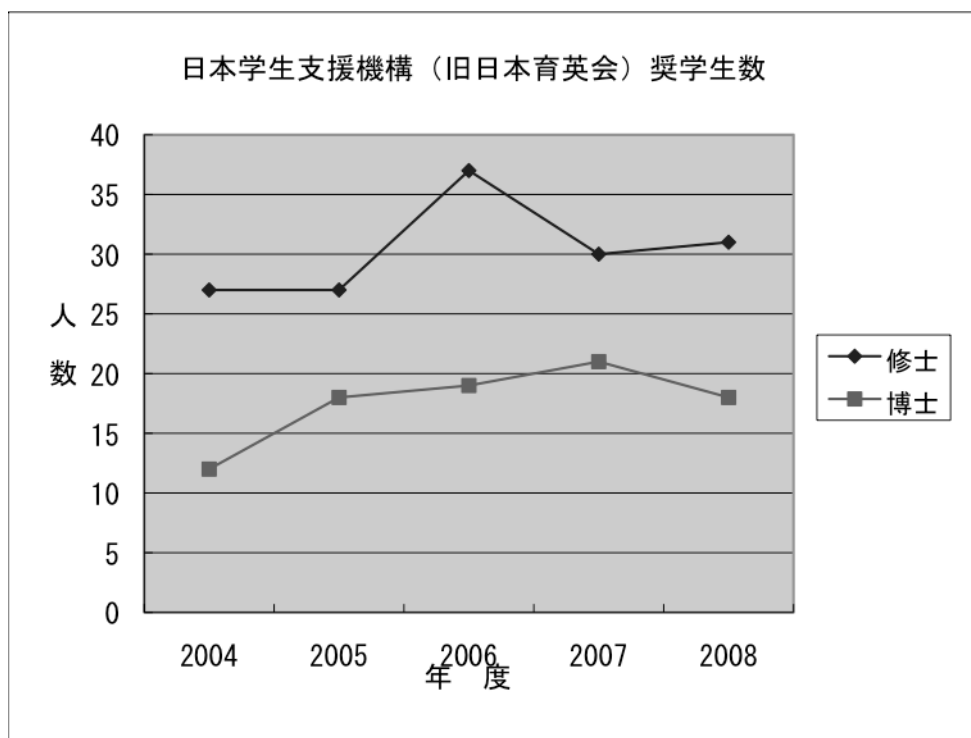
	2004	2005	2006	2007	2008
修士	57	62	59	61	71
博士	4	1	7	3	13
教育部	16	16	19	9	22



11 学生支援機構（旧育英会）奨学生数

	第一種	第二種	合計
--	-----	-----	----

	修士	博士	修士	博士	修士	博士
2004	18	12	9	0	27	12
2005	16	17	11	1	27	18
2006	21	18	16	1	37	19
2007	20	15	10	6	30	21
2008	21	15	10	3	31	18



12 日本学術振興会特別研究員数

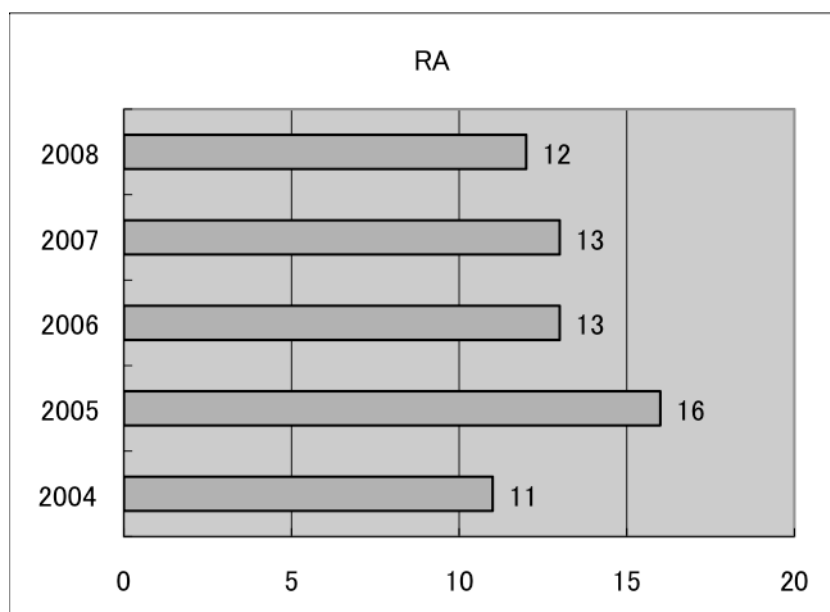
学際情報学府

	DC 1	DC 2	合計
2004	1	0	1
2005	1	0	1
2006	4	2	6
2007	1	10	11
2008	5	8	13

13 リサーチアシスタント数

	RA

2004	11
2005	16
2006	13
2007	13
2008	12

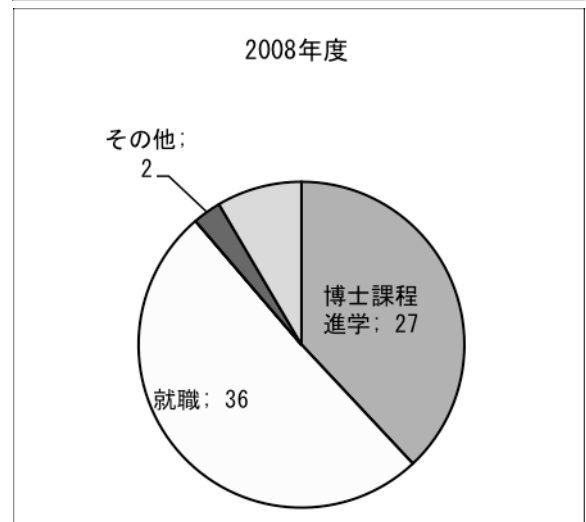
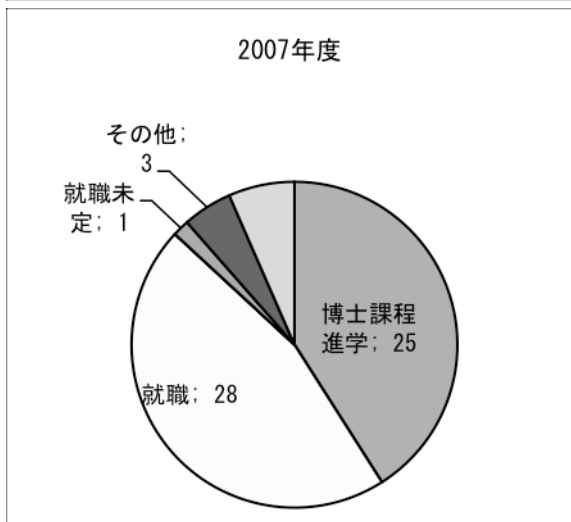
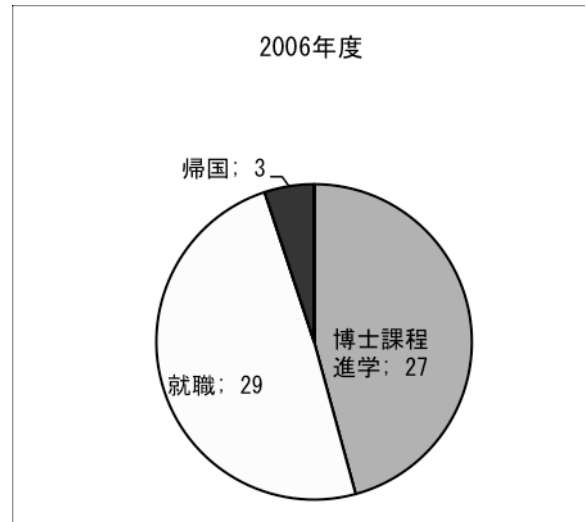
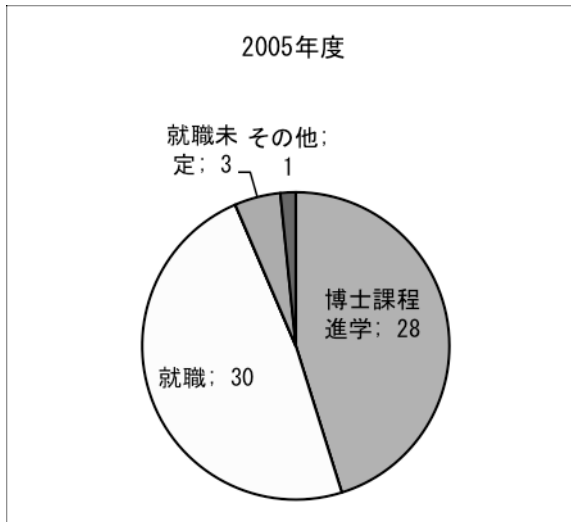


14 就職状況

学際情報学府修士課程修了者 進路状況資料 (2005年度～2008年度)

区分		2005年度	2006年度	2007年度	2008年度
博士課程進学	学際情報学府	27	25	22	25
	学内他研究科	1		2	1
	学外		2	1	1
海外留学					
就職		30	29	28	36
大学院研究生	学際情報学府				
	学内他研究科				
帰国(外国人留学生)			3		
就職未定		3		1	
その他		1		3	2

不明			4	6
合計	62	59	61	71



<就職先一覧>

2005 年度		2006 年度		2007 年度		2008 年度	
(株)三菱総合研究所	2	(株)電通	2	(株)野村総合研究所	3	(株)日本アイ・ビー・エム	3
(株)ワークスアプリケーションズ	1	(株)リクルート	2	(株)三菱東京 UFJ 銀行	2	(株)マイクロソフト	2
(株)ビービット	1	倉敷市立短期大学	1	(株)日本電信電話	1	(株)IBM ビジネスコンサルティングサービス	1

(株)takibi	1	(株)フロム・ソフトウェア	1	(株)リード エグジビション ジャパン	1	(株)NEC エンジニアリング	1
(株)東日本旅客鉄道	1	(株)コスモ・スペース	1	(株)IBM ビジネスコンサルティングサービス	1	(株)NTT ソフトウェア	1
(株)スタジオジブリ	1	(株)日本アイ・ビー・エム・サービス	1	(株)ツァイト・フォト	1	(株)NTT 東日本	1
(株)ソニー・エリクソン・モバイルコミュニケーション	1	(株)アイ・ビー・エム・システムズ・エンジニアリング	1	(株)JM	1	(株)アクセンチュア・テクノロジー・ソリューションズ	1
(株)日立製作所	1	(株)モルガン・スタンレー証券	1	(株)中日新聞社	1	(株)ソフトバンク	1
(株)楽天	1	(株)沖電気工業	1	(株)思文閣	1	(株)テレビ朝日	1
(株)ベネッセコーポレーション	1	(株)凸版印刷	1	(株)いまじん	1	(株)日本技芸	1
(株)竹中工務店	1	(株)インフォバーン	1	(株)松下電器産業	1	(株)ベネッセコーポレーション	1
(株)日本テレビ放送網	1	(株)プラップジャパン	1	(株)ソニー	1	(株)ミキハウス	1
(株)アクセンチュア	1	(株)ヒューマンルネッサンス研究所	1	(株)日立システム サービス	1	(株)モリサワ	1
学校法人駿河台学園	1	(株)野村総合研究所	1	(株)グーグル	1	(株)リサ・パートナーズ	1
(株)アイ・ティ・フロンティア	1	(株)セイコーインスツル	1	(株)ソネットエンタテイメント	1	(株)ソラン	1
(社)共同通信社	1	(株)日本総合研究所	1	(株)三菱総合研究所	1	(株)大和証券 SMBC	1
(株)ソフトバンク クリエイティブ	1	(株)日本電信電話	1	(株)内田洋行	1	台湾銀行	1
(株)日経ホーム出版社	1	(株)ゴールドマン・サックス証券	1	(株)任天堂	1	立川市役所	1
淑徳与野高等学校	1	(株)名古屋鉄道	1	(株)富士通	1	(株)テックファーム	1
(株)東芝	1	(株)NTT コミュニケーションズ	1	(株)ナブテスコ	1	東京藝術大学教育研究助手	1

(株)三井物産	1	日本生命保険相互会社	1	(株)d Space Japan	1	徳島文理大学	1
(株)野村アセットマネジメント	1	(株)アイ・エム・ジェイ	1	(株)TBS テレビ	1	(株)日本航空インターナショナル	1
(株)読売新聞	1	(株)ACCESS	1	(株)NTT コミュニケーションズ	1	日本放送協会	1
(株)博報堂DYメディアパートナーズ	1	(株)BOSCH	1	(株)トヨタ自動車	1	(株)根本特殊化学	1
(株)電通	1	フリープランナー・ライター	1	(株)パスコ	1	(株)ブーズ・アンド・カンパニー	1
自由業	2	NPO 法人日本臨床研究支援ユニット	1			(株)フォスター電機	1
特定非営利活動法人 役員	1	日本放送協会	1			(株)丸善	1
その他(就職先不明)	1					(株)朝日新聞社	1
						(株)かんぽ生命保険	1
						(株)新潮社	1
						(株)電通レーザーフィッシュ	1
						(株)日本経済新聞社	1
						(株)野村総合研究所	1

15 ベネッセ先端教育技術学講座

ウェブサイトアドレス <http://www.beatiii.jp/>

■スタッフ一覧

特任教授（非常勤） 飯吉透（カーネギー財団 上席研究員・知識メディア研究所所長）

准教授（併任） 山内祐平（東京大学大学院 情報学環 准教授）

特任助教（常勤） 北村智

特任助教（常勤） 山田政寛

特任助教（非常勤） 松河秀哉（大阪大学 大学教育実践センター 助教）

客員研究員（非常勤） 張一平（(株)ベネッセコーポレーション教育研究開発本部 Benesse 教育研究開発センター）

コーディネータ 秋山大志 ((株) ベネッセコーポレーション教育研究開発本部 Benesse 教育研究開発センター)

コーディネータ 中野真依 ((株) ベネッセコーポレーション教育研究開発本部 Benesse 教育研究開発センター)

コーディネータ 和気竜也 ((株) ベネッセコーポレーション教育研究開発本部 Benesse 教育研究開発センター)

16 電通コミュニケーションダイナミクス寄附講座

表 16-1: 電通コミュニケーションダイナミクス寄附講座構成員

濱田純一 (教授 専門分野: 情報法、情報政策)
石崎雅人 (准教授 専門分野: コミュニケーションの科学)
田中秀幸 (准教授 専門分野: ネットワーク経済)
水越 伸 (准教授 専門分野: ソシオ・メディア論)
林 香里 (准教授 専門分野: ジャーナリズム論)
山口いつ子 (准教授 専門分野: 表現の自由、サイバー法)
北田暁大 (准教授 専門分野: メディア社会学)
樺島榮一郎 (助教 専門分野: 情報経済、知的財産)
杉山幹夫 (特任研究員)
佐々木俊尚 (特任研究員)
羽野仁彦 (特任研究員)
小向太郎 (特任研究員)

表 16-2: 2008 年度の活動状況

○ 電通コミュニケーションダイナミクス寄附講座・公開シンポジウム
「オープン・クリエイションの可能性」

日時 2008 年 7 月 3 日木曜日 18:00~20:00

場所 情報学環福武ホール

発表者 樺島榮一郎 (東京大学情報学環助教)

石崎明日香 (札幌市経済局)

附柴裕之 (GEL-Design 社)

多様な人々や企業、NPOなどのネットワークがオープンに構築される点に着目して、これからの経済活動におけるクリエイションのあり方をテーマに開催されたシンポジウムである。濱田純一教授の挨拶に続いて報告に移り、最初に、樺島榮一郎助教が「イ

ンキュベータ、もしくはニッチ生存可能環境としてのインディーズ」をテーマに、音楽産業のオープン・クリエイションに関する報告を行った。次に、都市のオープン・クリエイションに関して、札幌市経済局の石崎明日香さんから「地域ブランディング政策としての札幌スタイル」をテーマに、同市の GEL-Design 社の附柴裕之さんから「オープン・クリエイションによる商品開発：「GEL-COO ま」の実例から紹介するその効果と期待」をテーマに、それぞれ報告があった。これらの報告に続くパネルディスカッションでは、石崎雅人准教授の司会の下、電通総研の石川淳さんからのプレゼンテーションの後、報告者4名に加えて田中秀幸准教授もパネラーとして参加して討論を行った。その後、フロアからの質問などに応えながら、オープン化することでクリエイションの活動が加速化される面があるのではないかなど活発な議論がなされた。

○ 電通コミュニケーションダイナミクス寄付講座・公開シンポジウム
「メディア融合のダイナミクス」

日時 2008年10月23日木曜日 18:00～20:00

場所 情報学環福武ホール

発表者 濱田純一（東京大学情報学環教授）

上野敦史（東京大学大学院学際情報学府）

井出智明（電通）

浜田元久（東京大学大学院学際情報学府）

金正勲（慶應義塾准教授）

小向太郎（電通寄付講座特任研究員）

第一部では、濱田純一情報学環教授より、「メディア融合への規範論的視角」という演題で発表があった。放送と通信の融合を考える上で、規範論があまり議論されてこなかった現状を踏まえ、日常に関する基本的情報、体系的・分析的信息、権力監視的信息、一般教養的信息などに人々が強制的にさらされる必要性を指摘した。

続いて、上野敦史さん（大学院学際情報学府）から現在の地上波テレビの問題点について、井出智明さん（電通）から新聞ビジネスの現状、浜田元久さん（大学院学際情報学府）から市民発信メディアの現状について、報告があった。

その後、濱田教授、上野さん、井出さん、浜田さんにより、市民社会におけるメディアの在り方について、ディスカッションが行われた。

第二部では、金正勲慶應義塾准教授より「融合によるメディア産業のパラダイム転換」の演題で、急激に進むアメリカにおけるメディア融合の現状について、発表があった。さまざまなメディア企業が、入り乱れ、連合を組み、新しいメディアの可能性を迫っていることを説明した。続いて、小向太郎寄付講座特任研究員より、「メディアとしてのインターネット」という演題で発表があった。IPTV やそれに関連した規制など、現在のインターネ

ットを使ったメディア技術と制度について説明が行われた。最後に、金准教授、小向研究員、田中秀幸情報学環准教授によるディスカッションが行われた。基幹メディアの存在を必要とするかどうか、現在、制定に向けて議論が進んでいる情報通信法の狙い、イノベーションを促進するという考え方の意義などについて、フロアからの質疑応答も含めて、活発な議論があった。

○ 社会情報学特論 I (コミュニケーションダイナミクス)

担当： 濱田 純一、田中 秀幸、林 香里、石崎 雅人

時限： 2008 年度夏学期木曜日 6 時限

教室： 本館 2F 講義室

概要：

急速な情報通信の技術革新やメディア産業の変化、情報のユビキタス化、人々のメディア消費行動の変化等により、社会におけるメディアやコミュニケーションのあり方は、大きな構造変革期を迎えつつある。本授業は、地域コミュニティ、Web 技術、印刷・通信・放送の融合化と法整備、ジャーナリズムに焦点を絞り、これらの分野の現状と新たな試みを見ていく。

4/17 導入 (濱田)

電通と寄付講座 (石川淳(*1))

Web2.0 時代における米国大統領選挙 (清原聖子(*2))

4/24 インターネット空間の拡張、普及による日本のメディア・情報社会の枠組みの組み替えとその帰結 (佐々木)

5/ 8 地域経済活性化の鍵としてのローカルマスメディア経営に関する考察 (井出智明(*3)、田中)

5/15 地域中小企業ネットワーク：札幌市の事例 (杉山、田中)

5/22 地域情報化施策と地域コミュニティ・経済 (田中)

6/ 5 次世代ポータルサービスの課題 (奥雅博(*4)、石崎)

6/12 印刷・通信・放送の融合化と法整備 (濱田)

6/19 印刷・通信・放送の融合化と法整備 (濱田)

6/26 印刷・通信・放送の融合化と法整備 (濱田)

7/ 3 ミニシンポジウム

7/10 消費者メディアの台頭とその影響力 (羽野、石崎)

7/17 デジタル情報環境は「ジャーナリズム」概念に新たな地平を切り開いているか (佐々木、林)

- (*1) 電通総研
- (*2) 情報通信総合研究所
- (*3) 電通メディア・マーケティング局メディアイノベーション研究部
- (*4) NTT サイバーソリューション研究所メディアコンピューティングプロジェクト

17 客員講座等

■平成16年

- 客員教授 伊藤 守
- 客員教授 村上 由見子
- 客員助教授 東 浩紀
- 客員助教授 永井 由美子

■平成17年

- 客員教授 フロリアン クルマス
- 客員助教授 深尾 葉子
- 客員助教授 宇治橋 祐之
- 客員助教授 堀田 龍也

■平成18年

- 客員教授 佐藤 哲
- 客員助教授 魏 晶玄

■平成19年

- 客員教授 飯吉 透
- 客員准教授 奈良 高明
- 客員准教授 飯野 浩一
- 客員准教授 大場 光太郎
- 客員准教授 下畑 光夫
- 客員准教授 荒牧 浩二

■平成20年

- 客員教授 飯吉 透
- 客員准教授 飯野 浩一

18 研究員（客員）等

情報学環

事項／年度	16	17	18	19	20
受託研究員	0	2	2	0	0
中国政府派遣研究員	0	1	1	0	1
客員研究員	3	1	3	6	7
外国人研究員	2	4	7	5	5
内地研究員	1	0	0	0	0
外国人研修員	7	9	8	10	9
交流研究員	2	4	4	2	2
私学研修員	0	0	1	1	0

19 学会賞など受賞者リスト

- ・暦本純一「無線 LAN アクセス・ポイントのビーコン信号を利用する位置推定技術「PlaceEngine」」日経 BP 技術賞情報通信部門、日経 BP 社
- ・岡田猛・横地早和子・難波久美子・石橋健太郎・植田一博「現代美術の創作における「ずらし」のプロセスと創作ビジョン」日本認知科学会論文賞、日本認知科学会
- ・松河秀哉, 北村 智, 永盛祐介, 久松慎一, 山内祐平, 中野真依, 金森保智, 宮下直子「データマイニングを活用した学習方略フィードバックシステムの開発」日本教育工学会論文賞
- ・岡部孝弘・佐藤洋一「近接点光源は未校正照度差ステレオにおける形状復元の不定性を解決するか？」山下記念研究賞、(社) 情報処理学会
- ・佐藤洋一「人間の視覚特性を考慮した投影画像の光学的補正」平成 19 年度電子情報通信学会論文賞、(社) 電子情報通信学会
- ・佐藤洋一・岡部孝弘・木谷クルス真実「視覚的文脈を考慮した人物動作カテゴリの教師無し学習」学生優秀論文賞、MIRU2008 実行委員長
- ・佐藤洋一・劉玉宇”The 19th ICPR paper”Best Industry-Related Paper Award, International Association for Pattern Recognition

- ・園田茂人「特別賞」第20回アジア太平洋賞
- ・岡田猛・横地早和子・難波久美子・石橋健太郎・植田一博「現代美術の創作における「ずらし」のプロセスと創作ビジョン」論文賞、日本認知科学会
- ・須藤修「総務大臣表彰」総務大臣表彰、総務省
- ・池内克史”Acquisition and Rectification of Shape Data Obtained by a Moving Range Sensor”社団法人情報処理学会平成19年度論文賞、社団法人情報処理学会
- ・池内克史”6-DOF Pose Estimation from Single Ultrasound Image Using 3D IP Models”IEEE workshop on OTCBVS best paper award, 5th IEEE International Workshop on Object Tracking and Classification in and
- ・池内克史「脚タスクモデルを用いた2足歩行ヒューマノイドロボットによる人の舞踊動作の再現」社団法人日本ロボット学会論文賞、社団法人日本ロボット学会
- ・山内祐平「情報学環・福武ホール」グッドデザイン賞、財団法人日本産業デザイン振興会
- ・鈴木高宏「SI2007 プログラム委員長としての貢献に対して」計測自動制御学会システムインテグレーション部門部門貢献表彰、計測自動制御学会
- ・R.Niiyama and Y.Kawaguchi”Gemotion screen: A generative, emotional, interactive 3D display”ASIAGRAPH 2008 best paper award, ASIAGRAPH 2008
- ・安田廉・原田隆宏・河口洋一郎「摩擦を含む粉体のリアルタイムシミュレーション」優秀研究発表賞、情報処理学会

20 論文数

年度	件数	文理融合	学環・学府内協力
1999年度以前	323	1	0
2000年度	645	48	14
2001年度	654	49	18
2002年度	916	98	53
2003年度	949	107	54
2004年度	904	122	83
2005年度	846	232	91
2006年度	982	149	24
2007年度	947	45	17
2008年度	1100	47	6
年度不明	34	0	0

注：業績DB入力データに基づく各年度の論文数(著書，分担著書，雑誌論文，国際会議論文，その他の論文，講演発表)

21 特許出願・公開数

年度	出願件数	公開
2000年度	6	0
2001年度	8	2
2002年度	5	5
2003年度	5	4
2004年度	1	2
2005年度	1	3
2006年度	1	0
2007年度	2	0
2008年度	3	0
合計	32	14

22 東京大学 21 世紀 COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」平成 20 年度の活動

■COEシンポジウム

1. 第 18 回シンポジウム「ユビキタスと空間情報～安全・安心，保健・医療，自然・保全の視点から～」

【開催概要】

日時：平成 19 年 10 月 24 日 13:30～16:30

場所：東京大学・本郷キャンパス 工学部 2 号館

主催：東京大学 21 世紀 COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」

参加者：約 100 名

【成果内容】

東京大学大学院情報学環・学際情報学府 21 世紀 COE プログラム「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」において、人間社会のあらゆる場面においてデジタル化された情報を活用するユビキタス情報社会（「いつでも・どこでも・誰でも」）およびそのための情報社会基盤の形成を目標とし、情報・技術・社会にわたる幅広い学際的学問基盤の確立を目指している。今回は、中でも「安心・安全」、「保健・医療」、「自然・保全」の各分野における空間情報とその利用に焦点を当て、データの整備や利用、実社会への応用などの問題について、専門家の方々をお招きし、講演を実施した。講演者の方々は、地理情報システムを用いた疾患の空間解析が専門の新潟大学大学院医歯学総合研究科 鈴木宏氏、犯罪行動の科学分析に関する数多くの研究をしている科学警察研究所 原田豊氏、鳥の生息環境モニタリング調査、野鳥

データベースの作成に取り組んでいる NPO 法人バードリサーチ 神山和夫氏がそれぞれ講演を行った。また、講演後のパネルディスカッションでは、ユビキタスと空間情報学の連携・融合について、今後の展望や課題を議論した。

2. 第 19 回シンポジウム「TEPS2009「ユビキタス・コンピューティングにおけるユニバーサルデザイン」」

【開催概要】

日時：平成 20 年 12 月 13 日 13：30～16:30

場所：東京ミッドタウン

主催：東京大学 21 世紀 COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」

参加者：約 300 名

【成果内容】

ユビキタス情報社会は、実世界の状況を自動認識することにより提供される情報サービスの恩恵を、いつでも、どこでも、だれでもが受けられる社会を目指している。そのためには、人とのインタフェースを司る電子機器、それらの機器から提供される情報サービスなど、あらゆる面でのユニバーサルデザイン化が不可欠である。TEPS2009 では、これまでの TRON イネーブルウェア研究会での知見を結集して、ユビキタス情報社会におけるユニバーサルデザイン実現の方法論について議論し、今後の方向性に関する議論を行った。

3. 第 20 回シンポジウム「ユビキタス社会におけるネット利用の国際比較－WIP データから日本の特性を探る－」

【開催概要】

日時：平成 21 年 2 月 19 日 14:00～16:30

場所：東京大学山上会館 大会議室

主催：東京大学 21 世紀 COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」

参加者：約 100 名

【成果内容】

本シンポジウムでは、ユビキタス社会におけるネット利用の国際比較に関する議論を行った。ワールド・インターネット・プロジェクト (World Internet Project:WIP)は、1999 年、アメリカ UCLA 情報通信政策研究センター所長 JeffreyCole 教授の主導により創始された国際共同研究企画であり、現在、アメリカ、イギリス、日本、カナダ、シンガポール、イスラエル、中国、オーストラリア、スウェーデンなど 28 カ国が参加している。その趣旨は、インターネットがどのような社会・文化的影響を人々にもたらすか、実証的調査を通じて国際比較を行うことにある。COE プログラムにおいて 2008 年 12 月に WIP としてもデータを比較共有できる調査を実施した結果をもとに議論を行った。よく言われているように日本におけるインターネット利用は、携帯を通じたものが特異に進化をとげ、利用実態としても、利用用途としても、さらには生活への影響面から見ても他の国とは異質な側面をもっている。今回

のシンポジウムでは、「共通質問項目」で実施された実証的調査データによる国際比較を試み、それに基づいて日本のネット社会の特異性について議論を深めた。ディスカッションでは、WIP調査の枠組みにとらわれず、会場の参加者も交え、日本の情報化の進展の方向性について、多角的に議論を行った。

23 国際団体役員・委員数

区分	学術的な団体の役員・委員*1	その他の団体役員・委員等*2
2006年度	11	5
2007年度	10	4
2008年度	13	1

*1 「学会・会議等役職」のうち「国際性有」かつ「学会役員委員」であるもの

*2 「団体役員・委員」のうち国際的なもの

24 政府関係委員会委員数

区分	2006年度	2007年度	2008年度
内閣官房			10
内閣府	9	7	9
総務省	13	11	7
経済産業省	7	2	8
文部科学省	15	11	9
厚生労働省	1	1	3
国土交通省	5	6	6
農林水産省	0	0	1
環境省	0	0	1
宮内庁	0	0	1
文化庁	1	1	2
特許庁	1	2	1
人事院	0	0	1
日本学術会議	4	1	6
その他	2	3	10
政府全体	58	45	75

25 地方公共団体関係委員会委員数

区分	2006年度	2007年度	2008年度
都道府県	14	8	7
市区町村	5	2	7
地方公共団体関係全体	19	10	14

26 ジャーナル編集・会議運営

区分	学会誌等編集査読*1	学術大会等運営*2
人数	29	29
うち国際的なもの	20	13

注：国内外の学会活動(学術誌編集委員，会議運営委員など) 注：2008年度のみ

*1 「学会・会議等役職」のうち「ジャーナル編集査読」であるもの

*2 「学会・会議等役職」のうち「大会組織運営」であるもの

27 定期刊行物一覧

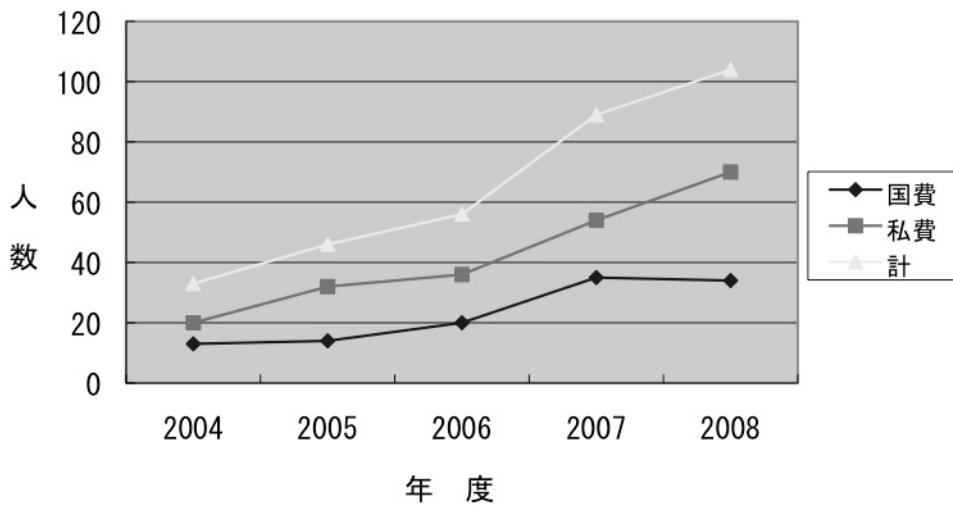
- ・『情報学研究 調査研究編』No.25 (2009年3月)
- ・『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』 No.75 (2008年8月)，No.76 (2009年3月)
- ・ニューズレター『学環学府』No.21 (2008年5月)、No.22 (2008年7月)、No.23 (2008年10月)、No.24 (2009年2月)

28 留学生数の推移

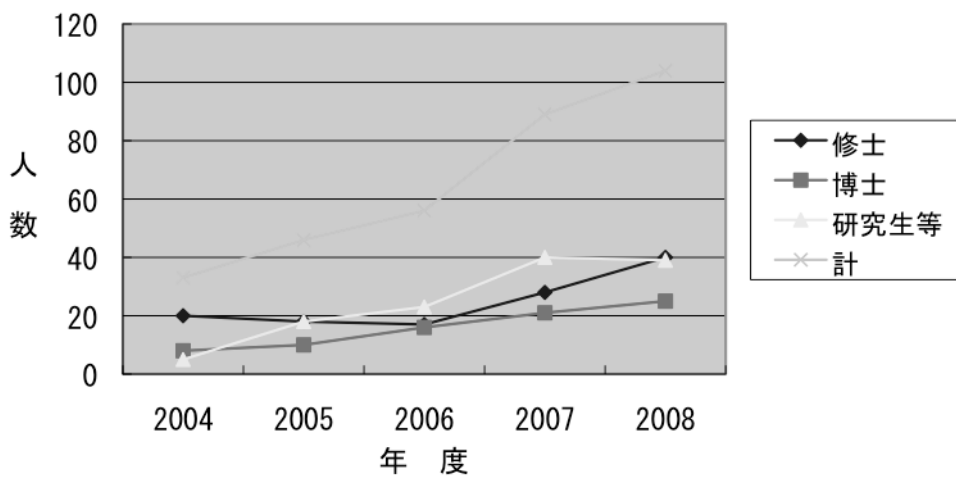
各年度5月1日現在

年度	修士		博士		外国人研究生等		教育部研究生	合計		総計
	国費	私費	国費	私費	国費	私費		私費	国費	
2004	9	11	1	7	3	1	1	13	20	33
2005	5	13	3	7	6	11	1	14	32	46
2006	5	12	7	9	8	14	1	20	36	56
2007	12	16	8	13	15	23	2	35	54	89
2008	13	27	7	18	14	24	1	34	70	104

留学生数の推移（国費・私費）



留学生数の推移（学生種別毎）



29 留学生国籍別一覧

国又は地域	国費	私費	計
アジア			
バングラデシュ	1	1	2
スリランカ		1	1
タイ	2		2
マレーシア	1	2	3
シンガポール	1		1
インドネシア		2	2
中国（香港）	2	1	3

韓国	7	17	24
中国	3	23	26
台湾		15	15
小計	17	62	79
中近東			
トルコ	1		1
イスラエル	1		1
小計	2	0	2
アフリカ			
チュニジア	1		1
コンゴ民主共和国		1	1
小計	1	1	2
オセアニア			
オーストラリア	3	1	4
小計	3	1	4
北米			
アメリカ合衆国	0	2	2
小計	0	2	2
中南米			
ブラジル	4		4
ベネズエラ	1		1
小計	5	0	5
ヨーロッパ			
イギリス	1		1
ドイツ		1	1
フランス		1	1
スペイン	1		1
スイス		1	1
チェコ	1		1
ルーマニア	1		1
ブルガリア	1	1	2
ロシア	1		1
小計	6	4	10
合計	34	70	104

(2008年5月1日現在)

Ⅲ. 個人業績編

平成 21(2009)年 3 月 31 日時点で情報学環に在籍していた教員各人の研究テーマおよび 2008 年度の研究業績を、各自が確認したデータベースの入力内容に基づき、収録しています。研究業績の分類は、データベースによって自動的に分類されたものです。各人の配列は、当時の肩書きに基づいた以下のカテゴリーの順、また同一カテゴリー内では氏名の 50 音順となっています。

1. 教授
2. 准教授
3. 講師
4. 助教
5. 科学技術振興特任准教授
6. 科学技術振興特任教員(助教)
7. 科学技術振興特任研究員
8. 研究拠点形成特任教員(助教)

安達裕之・教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績 (2008 年度)

論文・作品等

分担著書

内藤初穂・戸高一成・川瀬晃・畑野勇・安達裕之:「平賀讓—名軍艦デザイナーの足跡をたどる」, 東京大学平賀讓研究会・呉市海事歴史科学館編, 呉市海事歴史科学館, 2008 年.

講演・口頭発表

安達裕之:「日本の伝統的船舶の構造と特徴」, 東アジアの伝統船舶と造船技術, 2008.

池内克史・教授

研究テーマ(主たるもの)

文化遺産のデジタル化

世界各地の貴重な文化遺産をレーザ測定システムによって数ミリ精度で計測し、デジタルデータの形で保存するプロジェクトを進めています。これまでに鎌倉高德院の国宝阿弥陀仏像(鎌倉大仏)、奈良東大寺の国宝盧舎那仏坐像(奈良大仏)、タイ・スコタイのアチャナ仏、カンボジア・アンコールトムのパイヨン寺院などをデジタル化してきました。これらのデータは、VR(バーチャルリアリティ)のコンテンツ作成、文化遺産の破損、欠損時には修復のために、また製作当時の状態への仮想的復元といった応用など、幅広い分野での利用が期待されています。

人間行動観察学習ロボット

幼児の学習の大部分は、親の行動を見て真似ることから始まります。我々の研究室では、人間の行動を主に視覚によって観察し、これを理解して同じ行動を再現するロボットプログラムの自動生成を研究テーマとしており、主に「全身運動の獲得」と「手作業の獲得」の2つの課題について研究を進めています。

4次元仮想化都市

都市などの広域にわたる実空間の三次元モデル化を効率的に行うため、実験車両に搭載したカメラやレンジセンサおよび電子地図を利用して、要素技術となる画像・距離画像の処理手法を研究しています。また、実空間の動きを仮想空間に重畳する研究や、車両や車種を自動的に認識・判別する研究を行っています。

研究業績 (2008 年度)

論文・作品等

雑誌論文

Tetsuro Morimoto, Tohru Mihashi, Katsushi Ikeuchi: "Color Restoration Method Based on Spectral Information Using Normalized Cut", International Journal of Automation and Computing, 2008 年. 【査読有】

Katsushi Ikeuchi, Takaaki Shiratori, Shunsuke Kudoh, Hirohisa Hirukawa, Shin'ichiro Nakaoka, Fumio Kanehiro: "Robots That Learn to Dance from Observation", IEEE Intelligent Systems, 2008年.【査読有】

Ryusuke Sagawa, Katsushi Ikeuchi: "Hole Filling of a 3D Model by Flooding Signs of a Signed Distance Field in Adaptive Resolution", IEEE Transaction on Pattern Analysis and Machine Intelligence (PAMI), 2008年.【査読有】

Bo Zheng, Jun Takamatsu, and Katsushi Ikeuchi: "3D Model Segmentation and Representation with Implicit Polynomials", IEICE Transactions on Information and Systems, 2008年.【査読有】

Manoj Perera, Takaaki Shiratori, Shunsuke Kudoh, Atsushi Nakazawa, Katsushi Ikeuchi: "Task Recognition and Person Identification in Cyclic Dance Sequences with Multi Factor Tensor Analysis", The Transaction of the Institute of Electronics, Information and Communication Engineers, 2008年.【査読有】

角田哲也, 大石岳史, 池内克史: 「影付け平面を用いた複合現実感における高速陰影表現手法」, 映像情報メディア学会誌, 2008年.【査読有】

宮崎大輔, 池内克史: 「偏光の基礎理論とその応用」, 情報処理学会論文誌コンピュータビジョンとイメージメディア, 2008年.【査読有】

Atsuhiko Banno, Tomohito Masuda, Takeshi Oishi, Katsushi Ikeuchi: "Flying Laser Range Sensor for Large-Scale Site-Modeling and Its Applications in Bayon Digital Archival Project", International Journal of Computer Vision, 2008年.【査読有】

阪野貴彦, 池内克史: 「位置合せによる移動型レンジセンサのための形状補正」, 電子情報通信学会論文誌D, 2008年.【査読有】

角田哲也, 大石岳史, 池内克史: 「高速陰影表現手法を用いた飛鳥京 MR コンテンツの開発とその評価」, 映像情報メディア学会誌, 2008年.【査読有】

森本哲郎, 三橋徹, 池内克史: 「Normalized Cut 法を用いた分光情報に基づく色復元」, 映像情報メディア学会誌, 2008年.【査読有】

工藤俊亮, 小川原光一, ミティルチャヌラック, 高松淳, 池内克史: 「ロボットによる描画行為の再現」, 日本ロボット学会誌, 2008年.【査読有】

Ryo Sato, Shintaro Ono, Hiroshi Kawasaki, Katsushi Ikeuchi: "Photo-Realistic Driving Simulator using Eigen Texture and Real-Time Restoration Techniques by GPU", ITS ジャーナル, 2008年.【査読有】

大藏苑子, 川上玲, 池内克史: 「光源環境と対象物の同時撮影による屋外物体の拡散反射率測定とその評価」, 情報処理学会誌コンピュータビジョンとイメージメディア, 2009年.【査読有】

国際会議等

Shunsuke Kudoh, Koichi Ogawara, Jun Takamatsu, Miti Ruchanurucks, Kei Komachiya, Katsushi Ikeuchi: "A Robot Painter—Reproduction of Drawing Behavior by a Robot—", ASIAGRAPH 2008, 2008.【査読有】

Bo Zheng, Ryo Ishikawa, Takeshi Oishi, Jun Takamatsu, Katsushi Ikeuchi: "6-DOF Pose Estimation from Single Ultrasound Image Using 3D IP Models", IEEE Computer Society Conference on Computer Vision and Pattern Recognition Workshop on OBCTVS'08, 2008.【査読有】

Tetsuya Kakuta, Takeshi Oishi, Katsushi Ikeuchi: "Virtual Asukakyo: Development and Evaluation of Asuka-Kyo MR Contents", ASIAGRAPH 2008, 2008.【査読有】

Shintaro Ono, Ryo Sato, Hiroshi Kawasaki, Katsushi Ikeuchi: "Image-Based Rendering of Under Road Scene for Realtime Driving Simulation -Application for ITS(Intelligent Transport Systems)-", ASIAGRAPH 2008, 2008. 【査読有】

Katsushi Ikeuchi: "Four-dimensional virtual cities ", International Symposium on ITS Researches U. Tokyo ITS Center Seminar, 2008.

Tetsuya Kakuta, Takeshi Oishi, Katsushi Ikeuchi: "DEVELOPMENT AND EVALUATION OF ASUKA-KYO MR CONTENTS WITH FAST SHADING AND SHADOWING", Conference on Virtual Systems and MultiMedia Dedicated to Digital Heritage (VSMM08), 2008. 【査読有】

Tetsuya Kakuta, Lu Boun Vinh, Rei Kawakami, Takeshi Oishi, Katsushi Ikeuchi: "Detection of Moving Objects and Cast Shadows Using a Spherical Vision Camera for Outdoor Mixed Reality", 15th ACM Symposium on Virtual Reality Software and Technology(VRST 2008), 2008. 【査読有】

Sonoko Okura, Rei Kawakami, Katsushi Ikeuchi: "Simple surface Reflectance Estimation of Diffuse Outdoor Object using Spherical Images", ACCV07 Workshop on Multi-dimensional and Multi-view Image Processing, 2008. 【査読有】

Katsushi Ikeuchi: "Art and Robotics", 10th International Conference on Control, Automation, Robotics and Vision, 2008. 【査読有】

Ryota Matsuhisa, Shintaro Ono, Hiroshi Kawasaki, Atsuhiko Banno, Katsushi Ikeuchi: "Structure from Motion for omnidirectional images using efficient factorization method based on virtual camera rotation", International Workshop Computer Vision and Its Application to Image Media Processing, 2009. 【査読有】

Shintaro Ono, Jinge Wang, Katsushi Ikeuchi: "Self-vehicle localization by matching on-vehicle camera image and urban map using sequential geometric features on streets", The 4th International Joint Workshop of KAIST RCV Lab. & Univ. of Tokyo Ikeuchi Lab. on Robust Vision Technology, 2009.

Bo Zheng, Ryo Ishikawa, Jun Takamatsu, Takeshi Oishi, and Katsushi Ikeuchi: "6-DOF Pose Estimation for Single Ultrasound Image using Implicit Polynomial", The 4th International Joint Workshop of KAIST RCV Lab. & Univ. of Tokyo Ikeuchi Lab. on Robust Vision Technology, 2009.

Atsuhiko Banno, Katsushi Ikeuchi: "Omnidirectional Texturing based on Robust 3D Registration by using Panoramic Stereo", The 4th International Joint Workshop of KAIST RCV Lab. & Univ. of Tokyo Ikeuchi Lab. on Robust Vision Technology, 2009.

Rei Kawakami, Katsushi Ikeuchi: "Color estimation from a single surface color", The 4th International Joint Workshop of KAIST RCV Lab. & Univ. of Tokyo Ikeuchi Lab. on Robust Vision Technology, 2009.

Jun Takamatsu, Yasuyuki Matsushita and Katsushi Ikeuchi: "Estimating Camera Response Functions using Probabilistic Intensity Similarity", The 4th International Joint Workshop of KAIST RCV Lab. & Univ. of Tokyo Ikeuchi Lab. on Robust Vision Technology, 2009.

その他論文

川上玲, 池内克史: 「屋外環境下における大規模拡散反射物体の表面色推定」, 情報処理学会コンピュータビジョンとイメージメディア研究会, 2008 年.

ルーボンヴィン, 角田哲也, 川上玲, 大石岳史, 池内克史: 「全方位カメラを用いた屋外複合現実感におけるオクルージョンを考慮した移動物体の検出と影の除去」, 情報処理学会コンピュータビジョンとイメージメディア研究会, 2008 年.

森本哲郎, 池内克史:「Normalized Cut 法を用いた分光画像の領域分割」,「画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2008)」, 2008 年.【査読有】

肥後智昭, 宮崎大輔, 池内克史:「疎な形状を利用した多視点照度差ステレオ法反射パラメータ推定への応用」,「画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2008)」, 2008 年.【査読有】

王金戈, 小野晋太郎, 池内克史:「時系列高さ画像とそれを利用した市街地実写画像と住宅地図との位置あわせ」,「画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2008)」, 2008 年.【査読有】

大藏苑子, 川上玲, 池内克史:「全周画像を用いた屋外拡散反射物体の表面反射率の推定」,「画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2008)」, 2008 年.【査読有】

鄭波, 石川亮, 大石岳史, 高松淳, 池内克史:「3次元陰多項式を用いた超音波画像の6自由度位置推定」,「画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2009)」, 2008 年.【査読有】

中尾一貴, 岡本泰英, 大石岳史, 池内克史:「PC クラスタを用いた大規模距離画像の並列統合手法」,「画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2010)」, 2008 年.【査読有】

池内克史:「4次元仮想化都市空間」, ITS セミナーin 北海道東京大学 ITS セミナーシリーズ 4, 2008 年.

阪野貴彦:「パノラマ・ステレオを用いたロバストな3次元位置合わせによる全方向テクスチャリング」,「画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2010)」, 2008 年.【査読有】

松久亮太, 川崎洋, 小野晋太郎, 阪野貴彦, 池内克史:「因子分解法とバンドル調整による全方位画像列からの形状および位置姿勢の同時推定手法」,「画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2009)」, 2008 年.【査読有】

工藤雷太, 角田哲也, 川上玲, 大石岳史, 池内克史:「屋外の複合現実感における1枚の実画像を用いた光源推定手法」, 情報処理学会コンピュータビジョンとイメージメディア研究会, 2008 年.

Daisuke Miyazaki, Mahdi Ammar, Rei Kawakami, Katsushi Ikeuchi:「レイリー散乱による天空光の偏光解析および魚眼カメラによる太陽方向推定」, 情報処理学会コンピュータビジョンとイメージメディア研究会, 2008 年.

Manoj Perera, 工藤俊亮, 白鳥貴亮, 池内克史:「キーポーズを用いた舞踊動作の低次元化表現」, GCAD 研究発表会(第133回), 2008 年.

Manoj Perera, 工藤俊亮, 白鳥貴亮, 池内克史:「キーポーズを用いた舞踊動作の低次元化表現」, グラフィクスとCAD研究会, 2008 年.

池内克史:「古代ローマ彫像の3次元形状解析による考古学調査」, じんもんこん 2008, 2008 年.

王金戈, 小野晋太郎, 池内克史:「連続的な高さ・幅特徴量を用い市街地における車載カメラ画像と建物モデル間の対応付け」, 第7回 ITS シンポジウム, 2008 年.

松久亮太, 川崎洋, 小野晋太郎, 阪野貴彦, 池内克史:「全方向画像列を用いた車両運動の高精度推定に関する基礎研究」, 第7回 ITS シンポジウム, 2008 年.

王金戈, 小野晋太郎, 池内克史:「一次元メディアンフィルタを用いた市街地画像からの電線除去手法の提案」, 第7回 ITS シンポジウム, 2008 年.

松久亮太, 小野晋太郎, 川崎洋, 阪野貴彦, 池内克史:「全方位因子分解法を用いた車両運動の高精度推定法」, 電子情報通信学会ITS研究会, 2009 年.

王金戈,小野晋太郎,池内克史:「時系列高さ画像を用いた車載カメラ画像と建物モデル間の対応付け及びテクスチャマッピング手法の提案」, 電子情報通信学会ITS研究会, 2009 年.

浜崎佑樹,岡本泰英,大石岳史,池内克史:「大規模距離画像の並列統合手法の効率化とその評価」, 情報処理学会コンピュータビジョンとイメージメディア研究会, 2009 年.

講演・口頭発表

池内克史:「古代飛鳥を立体映像で見る」, 謎のキトラ壁画～そのメッセージと文化遺産の活用, 2008.

Katsushi Ikeuchi: "e-Monument Project", MacKay Distinguished Lecture, 2008.

池内克史: "Digital Heritage Workshop", Digital Heritage Workshop, 2008.

Katsushi Ikeuchi: 「e-Monument Project」, MSR セミナー, 2008.

Katsushi Ikeuchi: 「Art and Robots」, ロボティクスセミナー, 2008.

Katsushi Ikeuchi: 「4D Virtual Cities」, ビジョンセミナー, 2008.

Katsushi Ikeuchi: 「e-Monument Project」, グラフィックスセミナー, 2008.

Katsushi Ikeuchi: 「Art and Robotics」, ロボティクスセミナー, 2008.

池内克史: 「“文化遺産のメディアコンテンツ化『静』と『動』”」, 東京大学生産技術研究所生研公開 2008, 2008.

池内克史: 「4次元仮想化都市空間とITS」, ITS 情報通信システムシンポジウム, 2008.

池内克史: 「4次元仮想化都市空間とITS」, ITS 情報通信システムシンポジウム, 2008.

Katsushi Ikeuchi : "Digital Bayon Project", MSRA e-Heritage Workshop, 2008.

池内克史: 「ロボット研究には「ロボット魂」の検討が必要である」, CREST シンポ「ヒューマノイドはヒューマンになれるか」, 2008.

池内克史: 「ICT ロボティクス」, 日本学術会議領域シンポ, 2008.

Katsushi Ikeuchi: "Learning-from-observation: From assembly plan to dancing robot", 2008 IEEE International Conference on Advanced Robotics and Its Social Impacts(ARSO2008), 2008. 【招待講演】

Katsushi Ikeuchi: "Learning-from-observation: From assembly plan to dancing robot", IEEE International Conference on Advanced Robotics and its Social Impacts(IEEE ARSO 2008), 2008.

池内克史: 「4次元仮想化都市空間とITS」, CSIS SYMPOSIUM 2008, 2008. 【招待講演】

Katsushi Ikeuchi: "Entertainment and Art Robot: Learning from Observation Paradigm for Humanoid Robot Dancing", The 10th International Conference on Control, Automation, Robotics and Vision, 2008. 【招待講演】

池内克史: 「世界遺産の記録と復元－広島爆心地とアンコール・バイヨン寺院を例に－(仮)」, 世界遺産の記録と復元－広島爆心地とアンコール・バイヨン寺院を例に－(仮), 2009.

池内克史、小野晋太郎:「火山噴火罹災地の文化・自然環境復元—ソンマ・ヴェスヴィアーナ、指宿、ピナツポ、浅間戦略的学融合研究 2009—」, 火山噴火罹災地の文化・自然環境復元—ソンマ・ヴェスヴィアーナ、指宿、ピナツポ、浅間戦略的学融合研究 2009—, 2009.

池内克史:「デジタルヒューマン・シンポジウム 2009」, デジタルヒューマン・シンポジウム 2009, 2009.

池内克史:「デジタル時代のメディアと映像に関する総合的研究ファイナルプレゼンテーション」, デジタル時代のメディアと映像に関する総合的研究ファイナルプレゼンテーション, 2009.

新聞・報道

池内克史:「シンポ謎のキトラ壁画～そのメッセージと文化遺産の活用～」, 朝日新聞(日刊)33面, 2008.

池内克史:「大化改新と古代国家誕生」, 新人物往来社, 2008.

池内克史:「DS(ドライビングシミュレータ)施設の紹介」, NHK 教育サイエン ZERO, 2008.

池内克史:「データ提供(鎌倉大仏)」, テレビ朝日日曜ワイド「旅のススメ」, 2008.

池内克史:「データ提供(鎌倉大仏殿 CG 画像)」, フジテレビ「全国一斉!日本人テスト」, 2008.

池内克史:「表紙の明日香村関係の写真提供(建築物、Google)」, 生産研究 Vol.60, No.5, 2008.

池内克史:「バイオンデジタルアーカイブプロジェクト」, 学環学府 No.23, 2008.

池内克史:「表紙のバイオンの写真提供」, 学環学府 No.23, 2008.

池内克史:「深層拡張現実(AR) ”現実”とデジタル情報を融合」, 日経 PB 社『日経コミュニケーション』, 2008.

池内克史:「2030年への挑戦次世代産業技術高度道路交通システム⑤」, 日経産業新聞(9面), 2008.

池内克史:「テーマ「ロボット」、ロボットナイト踊りロボット映像提供」, NHK BS 熱中夜話, 2008.

池内克史:「2030年への挑戦次世代産業技術高度道路交通システム⑥」, 日経産業新聞(8面), 2008.

池内克史:「「僕の日本を紹介します」踊りロボットの映像提供」, テレビ朝日, 2009.

池内克史:「複合現実感技術による遺跡の復元—バーチャル飛鳥京プロジェクトについて—」, 社団法人日本公園緑地協会『公園緑地』Vol.69 No.5 pp.42-44, 2009.

池内克史:「「BOOK」『Digitally Archiving Cultural Objects』の書籍紹介」, 学環学府 No.24 pp.4, 2009.

池内克史:「『関西あれこれ日本一』東大寺大仏殿「大仏さま」の寺」, 産経新聞夕刊 4版10, 2009.

受賞・特許

受賞

池内克史: 社団法人情報処理学会平成19年度論文賞「Acquisition and Rectification of Shape Data Obtained by a MovingRange Sensor」, 社団法人情報処理学会, 2008年.

池内克史: IEEE workshop on OTCBVS best paper award「6-DOF Pose Estimation from Single Ultrasound Image Using 3D IP Models」, 5th IEEE International Workshop on Object Tracking and Classification in and , 2008 年.

池内克史: 社団法人日本ロボット学会論文賞「脚タスクモデルを用いた 2 足歩行ヒューマノイドロボットによる人の舞踊動作の再現」, 社団法人日本ロボット学会, 2008 年.

石上英一・教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2008年度)

論文・作品等

分担著書

石上英一: 「『日本前近代史料の国際的利用環境構築の研究』東京大学史料編纂所研究成果報告 2008-3」, 石上英一編, 東京大学史料編纂所, 2009 年.

雑誌論文

石上英一: 「『日本前近代史料の整理調査と公開』, 『日本前近代史料の国際的利用環境構築の研究』東京大学史料編纂所研究成果報告 2008-3, 2009 年.

石上英一: “『Investigation, collection and database development of pre-modern historical materials in Japan』”, 『日本前近代史料の国際的利用環境構築の研究』東京大学史料編纂所研究成果報告 2008-3, 2009 年.

石上英一: 「『八世紀の日本における東大寺と正倉院文書』, 『日本前近代史料の国際的利用環境構築の研究』東京大学史料編纂所研究成果報告 2008-3, 2009 年.

石上英一: “『Todaiji temple and Shosoin documents in the 8th century of Japan』”, 『日本前近代史料の国際的利用環境構築の研究』東京大学史料編纂所研究成果報告 2008-3, 2009 年.

その他論文

石上英一: 「『歴史の枝葉と幹根－奄美史研究から』, 『東京大学大学院情報学環紀要情報学研究』76 号, 2009 年.

石崎雅人・教授

研究テーマ(主たるもの)

医療従事者間の知識共有

裁判員裁判における裁判官から裁判員への情報提供
多人数コミュニケーションにおける談話構造と非言語行動との関係

研究業績(2008年度)

論文・作品等

雑誌論文

石崎雅人, 高梨克也:「会話・対話におけるまとまりに関する一考察」, 人工知能学会研究会資料, Vol.SIG-SLUD-A803, pp.87-92, 2008 年.

石崎雅人, 高梨克也, 榎本美香, 伝康晴:「多人数会話における情報構造と視線配布パターンの関係について」, 人工知能学会研究会資料, Vol.SIG-SLUD-A802, pp.45-50, 2008 年.

国際会議等

Yasuhiro Katagiri, Yosuke Matsuzaka, Yasuharu Den, Mika Enomoto, Masato Ishizaki and Katsuya Takanashi: "Implicit Proposal Filtering in Multi-Party Consensus-Building Conversations", The 9th Annual SIGDIAL Meeting on Discourse and Dialogue, pp.100-103, 2008. 【査読有】

Yosuke Matsuzaka, Yasuhiro Katagiri, Masato Ishizaki and Mika Enomoto: "Unsupervised Clustering in Multimodal Multiparty Meeting Analysis", The workshop on Multimodal Corpora, The 6th international conference on Language Resources and Evaluation, pp.27-31, 2008. 【査読有】

Masato Ishizaki, Yasuharu Den, and Senshi Fukashiro: "Exploring a mechanism of speech synchronization using auditory delayed experiments", The 9th Annual Conference of the International Speech Communication Association (Interspeech 2008), pp.70-73, 2008. 【査読有】

講演・口頭発表

Masato Ishizaki: "Meta-information and Conversation Structure in Multi-party Interaction", Discourse Coherence -Text and Theory (MIC 2008 Sorbonne), 2008.

石田英敬・教授

研究テーマ(主たるもの)

記号論・情報記号論の研究

記号論を情報学研究に活用する研究

言語態の研究

社会や文化の単位としての言語活動の研究

現代文学、現代思想の研究

近代ヨーロッパ文学および現代思想の研究

研究業績 (2008年度)

論文・作品等

分担著書

Hidetaka Ishida: "Les dénis de l'histoire : Europe et Extrême-Orient au XXème siècle", Pierre Bayard et Alain Brossat 編, Laurence Teper, 2008 年.

雑誌論文

石田英敬: 「公共空間の再定義のために(1)二〇〇八年の政治メディア状況」, 『世界』, Vol.No.779, No.2008 年 6 月号, pp.71-80, 2008 年. 【一般向け】

石田英敬: 「公共空間の再定義のために(2)回帰する社会」, 『世界』, Vol.No.780, No.2008 年 7 月号, pp.103-112, 2008 年. 【一般向け】

石田英敬: 「公共空間の再定義のために(3)新しい社会契約・新しい公共性」, 『世界』, Vol.No.781, No.2008 年 8 月号, pp.79-88, 2008 年. 【一般向け】

石田英敬: 「公共空間の再定義のために(4)公共空間を編み直す」, 『世界』, Vol.No.781, No.2008 年 9 月号, pp.112-121, 2008 年. 【一般向け】

石田英敬: 「<笑う>タレント知事とポピュリズム」, 『論座』, No.2008 年 9 月号, pp.57-63, 2008 年. 【一般向け】

石田英敬: 「雄弁は復権するか」, 『世界と議会』, No.2008 年 12 月号, pp.9-14, 2008 年. 【一般向け】

石田英敬: 「瀕死の『人文知』の再生のために: 教養崩壊と情報革命の現場から」, 『中央公論』, No.2009 年 2 月号, pp.52-59, 2009 年. 【一般向け】

石田英敬: 「伝えられずにはいられない」, 『Mobile Society Review 未来心理』, No.Vol. 15, pp.004-005, 2009 年. 【一般向け】

講演・口頭発表

Hidetaka Ishida: "Ecriture japonaise de Roland Barthes", Rencontre INA-Sorbonne « Empreintes de Roland Barthes », 2008. 【招待講演】

Hidetaka Ishida: "Le Malaise dans la civilisation :Réflexions sur la « modernisation sans la modernité »", Le huitième congrès international de la Société Française des Études Japonaises (SFEJ) « Modernité japonaise en perspective»:150ème anniversaire des relations franco-japonaises , 2008. 【招待講演】

石田英敬: 「知の公共性をデザインする」, 情報学環シンポジウム「知の公共性をデザインする: 認知テクノロジーがひらく知の地平を問う」, 2009.

石田英敬: 「デジタル化時代に公共圏を再定義する」, 「メディア公共圏と現代民主主義」, 2009. 【招待講演】

石田英敬: 「雄弁は復権するか: アメリカ大統領選挙にみるメディアと政治」, 明るい選挙推進協会全国研修会講演, 2009. 【招待講演】

石田英敬: 「テレビ研究とテレビアーカイブ」, NHK 放送文化研究所国際シンポジウム「映像アーカイブはテレビを拡張する」, 2009. 【招待講演】

新聞・報道

石田英敬:「「ニュースにだまされるな」, 朝日ニュースター2008年3月22日, 2008.

石田英敬:「「ニュースにだまされるな」, 朝日ニュースター2008年9月6日, 2008.

石田英敬:「「ニュースにだまされるな」, 朝日ニュースター2008年10月4日, 2008.

石田英敬:「「フラット化した社会でメディアはあり続けるか」, 『朝日新聞』2008年12月8日朝刊, 2008.

石田英敬:「「ニュースにだまされるな」, 朝日ニュースター2009年1月1日, 2009.

大島まり・教授

研究テーマ(主たるもの)

医用画像に基づく血管循環系のマルチスケール・マルチフィジックス解析

本研究は血管病変の発症, 進行に関わる流体力学的な要因を数値解析により解明することを目的としている。実際の生体内を再現したモデルや境界条件を採用するために, ここではCTやMRIなどの医用画像から抽出した血管形状モデルを用い, 末梢血管網など循環系全体の影響を考慮した境界条件を導出・適用した大規模血流解析システムを構築している。さらに血流および血管壁内での物質輸送・透過モデルを取り入れ, 悪玉コレステロールなどの病変に関わる物質の血管壁内への蓄積についても予測を行っている。

血流と血管壁の相互作用を考慮した連成解析と in vitro モデルを用いた可視化計測

本研究では脳動脈瘤の発生・成長のメカニズムの解明を目的とし, 血流によって変形する血管壁の力学応答メカニズムを考慮した数値解析を行うとともに, in vitro モデル実験による結果と比較することで評価を行っている。医用画像から再構築した脳動脈瘤モデルを対象として, 数値解析では血管壁を超弾性体とした流体構造連成解析を行い, 実験では速度3成分のデータをえられるステレオ PIV という計測手法を用い, 内部の流動構造と血管壁の挙動, およびそれらの相互作用を評価している。

共焦点 Micro PIV による微小流路内混相流の可視化計測

微小血管を流れる赤血球やマイクロ分析チップのような微小流体デバイスの内部の混相流を可視化計測するツールとして, 共焦点マイクロ PIV システムを開発している。本手法は, 流れの中にトレーサ粒子と呼ばれる微小な蛍光ビーズを混濁させ, 共焦点スキャナ・特殊な蛍光顕微鏡・高感度高速度カメラを用いて流れを撮影し, 得られた画像を PIV 解析処理を用いて速度分布を求める。共焦点マイクロ PIV を用いることで, マイクロサイズの微小領域における3次元的な流れの様子を定量的に知ることができる。

研究業績 (2008 年度)

論文・作品等

分担著書

大島まり:「続・有限要素法による流れのシミュレーション」, 日本計算工学会流れの有限要素法研究委員会編編, シュプリンガー・ジャパン株式会社, 2008年.

雑誌論文

徳田茂史,杉山聡,畝村毅,大島まり:「循環系血流解析における末梢血管網を考慮した流出境界条件のモデリング」, 日本機械学会論文集(B編), Vol.74, No.740, pp.871-878, 2008年.【査読有】

大島まり,鳥井亮,早川基治,庄島正明,高木清:「脳動脈瘤における流体力学と数値シミュレーション的アプローチ」, 脳神経外科速報, Vol.18, No.4, pp.462-470, 2008年.

大島まり:「4.章 バイオエンジニアリング, 4・2・2 計算バイオメカニクス」, 日本機械学会誌, Vol.1111, No.1077, pp.650, 2008年.

大島まり:「東京大学生産技術研究所におけるアウトリーチ活動」, 原子力 eye, Vol.154, No.8, pp.25-27, 2008年.【一般向け】

小川雄一,室伏きみ子,大島まり,井上徳之,田中丈夫,二渡論司:「座談会:東京大学生産技術研究所におけるアウトリーチ活動—その進展をいかに図るか」, 原子力 eye, Vol.154, No.09, pp.44-53, 2008年.【一般向け】

坂東佳憲,大石正道,大島まり:「弾性血管壁モデルにおける壁の変形と内部流れの PIV 計測」, 可視化情報学会誌, Vol.128, No.2, pp.61-62, 2008年.【査読有】

大島まり:「[書評]大島まり【新刊書】中山司流れ解析のための有限要素法入門, 東京大学出版会, 2008年」, 応用数理, Vol.18, No.4, pp.329-330, 2008年.

R.Torii,M.Oshima,T.Kobayashi,K.Takagai,Tayfun E.Tezduyar: "Fluid-structure interaction modeling of a patient-specific cerebral aneurysm:influence of structural modeling", Computational Mechanics, Vol.143, No.1, pp.151-159, 2008年.【査読有】

武藤昌也,大島まり,大島伸行:「高粒子体積率で存在する粒子に負荷する乱流中の流体抵抗力」, 日本機械学会論文集(B編), Vol.75, No.749, pp.61-67, 2009年.【査読有】

国際会議等

R.Torii,M.Oshima,T.Kobayashi,K.Takagai,Tayfun E.Tezduyar: "Biomechanical Factors Influencing Patient-Specific FSI Simulation of Cerebral Aneurysms", 8th. World Congress on Computational Mechanics(WCCM8), 5th. European Congress on Computational Methods in Applied Sciences and Engineering(ECCOMAS 2008), 2008.【査読有】

M.Oishi,M.Oshima,H.Kinoshita,T.Fujii,T.Kobayashi: "Investigation of Interaction Between The Flow Inside and Outside of Micro Droplet by Simultaneous Measurement Using Multicolor Confocal Micro-PIV", ISFV13, International Symposium on Flow Visualization, FLUVISU 12-12th French Congress on Visualization in Fluid Mechanics, 2008.【査読有】

H.Kinoshita,Feng-Chen Li,N.Oshima,M.Oshima,T.Fujii: "Three-dimensional visualization of microscopic fluidic structure formed in viscoelastic fluid flow", The 12th International Conference on Miniaturized Systems for Chemistry and Life Sciences, MicroTAS 2008, pp.706-708, 2008.【査読有】

M.Muto,M.Oshima,N.Oshima: "The Effects of Volume Fraction of Particle and Turbulence on Drag Force of Particle", 7th JSME-KSME Thermal and Fluids Engineering Conference, 2008.【査読有】

R.Torii,M.Oshima,T.Kobayashi,K.Takagai,Tayfun E.Tezduyar: "Fluid-Structure Interaction Analysis Of A Cerebral Aneurysm: Coupling OD Arterial Network Model With 3D Computation", ASME International Mechanical Engineering Congress & Exposition, 2008.【査読有】

M.Oshima: "Visualization and Measurement of Micro Two-Phase Flow Using Multicolor Confocal Micro PIV", Proceeding of 2008 Korea-Japan Joint Seminar on Particle Image Velocimetry, pp.73-82, 2008.【査読有】

M.Oishi,H.Kinoshita,T.Fujii,M.Oshima: "Confocal Micro-PIV Measurement of Droplet Formation in a T-shaped Microjunction", Proceeding of 2008 Korea-Japan Joint Seminar on Particle Image Velocimetry, 2008.【査読有】

その他論文

大島まり:「乱流シミュレーションと『流れの設計(TSFD)に特集に際して」, 生産研究, 2009 年.

講演・口頭発表

大島まり:「生体力学-循環器系疾患に関する血流シミュレーションと in vitro 計測-」, 東京大学機械同窓会近畿支部講演会, 2008.【招待講演】

大島まり:「生体流体力学、マイクロ流体と生化学システム」, H20 年度東大機械系研究室オープンハウス, 2008.

大島まり:「脳動脈瘤および頸動脈瘤硬化症の発症・進展予測患者個別に対応できるモデリングとシミュレーション」, Bayer Stroke Forum 2008「tPA 時代の抗血小板療法」(フロンティアセッションにて特別講演), 2008.【招待講演】

大島まり:「バレエへの誘い-美しさの謎に迫る-」, 第 12 回関東 CAE 懇話会, CAE を活用するための仕組みづくり, 2008.

大島まり:「血液の流れをシミュレーションする」, 数理の翼ワークショップ, 2008.

大島まり:「血液の流れをみる」, 第 14 回流れの不思議展, 2008.

大島まり:「脳動脈瘤治療におけるコンピュータ・シミュレーションの果たす役割」, 第 8 回東埼玉血管内治療倶楽部【大塚製薬】, 2008.

新聞・報道

大島まり:「求められる純粋な真理探究—その謎を愛そう」, 読売新聞社, 2008.

大島まり:「理系ドラマ教授が監修「ガリレオ」など科学に関心高める」, 読売新聞社, 2008.

大島まり:「Profs improve science on TV, Movies」, 読売新聞社, 2008.

岡田猛・教授

研究テーマ(主たるもの)

創造性の認知科学

芸術創作や科学的発見などの創造的認知プロセスの解明

研究業績 (2008 年度)

論文・作品等

作品

岡田猛:「behind the seen アートの舞台裏」, 東京大学駒場博物館特別展, 2008.

講演・口頭発表

岡田猛, 藤幡正樹, 石橋健太郎, 横地早和子他:「描画過程研究会の射程」, CREST21ART ディスカッション (東京大学), 2008. 【一般向け】

岡田猛:「高校生のための金曜特別講座:behind the seen アートの舞台裏」, 東京大学教養学部公開講座, 2008. 【一般向け】

岡田猛:「behind the seen 熟達者の表現を支えるもの」, シンポジウム(東京大学駒場キャンパス), 2008. 【一般向け】

受賞・特許

受賞

岡田猛, 横地早和子, 難波久美子, 石橋健太郎, 植田一博: 論文賞「現代美術の創作における「ずらし」のプロセスと創作ビジョン」, 日本認知科学会, 2008 年.

河口洋一郎・教授

研究テーマ(主たるもの)

CG によるメカニック造形研究

生き物のように反応するメカニックな立体造形技術ならびに新伝統芸能を演出するロボティックな造形研究

ジェモーション(Gemotion)によるインタラクション研究

伝統芸能との融合によるパフォーマンスアーツとして、人にインタラクティブに反応する情感的な CG 映像空間の創出、および生き物のように映像に凸凹反応するジェモーション・ディスプレイの研究

グロースモデル(Growth Model)による超高精細3D 映像研究

飛び出る 3D 立体視映像や、スーパーハイビジョン(8K×4K)による超高精細の CG 生物・物理シミュレーションによる映像生成研究

研究業績 (2008 年度)

論文・作品等

作品

J.Hirato and Y.Kawaguchi:「Animation of jellyfish with tentacles」, SIGGRAPH computer animation festival 【審査】, 2008

Yoichiro Kawaguchi: 「Hydrodynamics Ocean」, BAINS NUMERIQUES 【招待】, 2008.

Yoichiro Kawaguchi: 「Eggy Land in Gemotion Space」, ASIAGRAPH 2008 in Shanghai, 2008.

Yoichiro Kawaguchi: 「「異常なる 4 次元魚」の宇宙探査」, ASIAGRAPH 2008 in Tokyo, 2008.

Yoichiro Kawaguchi: 「Infinite 4D Fish」, SIGGRAPH 2008 Emerging Technologie 【審査】, 2008.

河口洋一郎: 「Infinite 4D Fish」, インタラクティブ東京【招待出展】, 2008.

Yoichiro Kawaguchi, Shogo Yonekura, Akiya Kamimura: 「The EGGY Robot」, SIGGRAPH Asia 2008 Emerging Technologies【審査】, 2008.

Yoichiro Kawaguchi: 「“Eggy Boy”, “4D Fish”, “Gemotion Display”」, Arc Electronica Center 【Invited Exhibition】, 2008.

河口洋一郎: 「hydrodynamicbutterflies etc.」, 東大寺世界遺産登録 10 周年記念、平城遷都 1300 年記念、布袋寅泰 SPECIAL LIVE -Fly Into Your Dream- 【映像協力】, 2008.

講演・口頭発表

安田廉、原田隆宏、河口洋一郎: 「摩擦を含む粉体のリアルタイムシミュレーション」, Visual Computing / グラフィクスと CAD 合同シンポジウム, 2008.

Ren Yasuda and Yoichiro Kawaguchi: “Real-time simulation of granular materials using Graphics Hardware”, Visual Computing / Computer Graphics, Imaging and Visualization, 2008.

Shuhei Tsuruoka and Yoichiro Kawaguchi: “Time-space rendering and the Doppler effect of light”, ASIAGRAPH 2008, 2008.

Ryo Shimada, Sejuti Rahman, and Yoichiro Kawaguchi: “Computer graphics simulation techniques of bubble and foams”, Spring Conference on Computer Graphics 2008, 2008.

Ryo Shimada, Sejuti Rahman, and Yoichiro Kawaguchi: “Simulating the Coalescence and Speration of Bubble and Foam by Particle Level Set Method, 5th International Conference Computer Graphics”, Imaging and Visualization, 2008.

Shogo Yonekura and Yoichiro Kawaguchi: “Synthetic research project for emotional primevaloid”, ASIAGRAPH2008, 2008.

Chiaki Kawakita, Masaki Emoto, and Yoichiro Kawaguchi: “A study on human impression for 3D technique on art through “Hydrodynamics Ocean” and “Cell””, ASIAGRAPH 2008, 2008.

Shogo Yonekura and Yoichiro Kawaguchi: “Development of swing-slip locomotion for no-legged primevaloids”, the 2008 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems, 2008.

河口洋一郎: 「8K 超高精細 CG 映像の魅力」, 情報処理学会グラフィクスと CAD 研究会, 2008. 【招待講演】

T.Harada, S.Koshizuka and Y.Kawaguchi: “Parallelizing Particle-based Simulations on GPUs”, ASIAGRAPH 2008, 2008.

S.Yonekura and Y.Kawaguchi: “Toward the synthesis of emotional primevaloid”, ASIAGRAPH 2008, 2008.

- Noriyuki Imamura, Shun Iwasawa, and Yoichiro Kawaguchi: "BRDF Rendering of Peacock Feathres", ASIAGRAPH 2008, 2008.
- Junsei Hirato and Yoichiro Kawaguchi: "Simulating tentacles of marine creatures", ASIAGRAPH 2008, 2008.
- R.Niiyama and Y.Kawaguchi: "Gemotion screen: A generative, emotional, interactive 3D display", ASIAGRAPH 2008, 2008.
- S.Yonekura, S.Yagi and Y.Kawaguchi: "Adaptive body use of multipede driven by coupled neural oscillators", ASIAGRAPH 2008, 2008.
- M.Emoto, M.Kanazawa and Y.Kawaguchi: "Ultra high quality computer graphics (8k) as an application of a high presence television system", ASIAGRAPH 2008, 2008.
- J.Hirato and Y.Kawaguchi: "Calculation model of jellyfish for simulating the propulsive motion and the pulsation of the tentacles", ICAT'08, 2008.
- R.Yasuda, T.Harada and Y.Kawaguchi: "Real-time simulation of granular materials using graphics hardware", CGIV'08, 2008.
- S.Yonekura, S.Yagi and Y.Kawaguchi: "Adaptive body use of multipede driven by coupled neural oscillators", ICAT'08, 2008.
- R.Shimada, S.Rahman and Y.Kawaguchi: "Simulating the coalescence and separation of bubble and foam by particle level set method", CGIV'08, 2008.
- S.Yonekura and Y.Kawaguchi: "Development of swing-slip locomotion for no-legged primevaloid", IROS'08, 2008.
- S.Yonekura, Y.Kuniyoshi, and Y.Kawaguchi: "Detection of weak signals by emotion-derived stochastic resonance", SAB'08 (LNAI 5040), 2008.
- Yoichiro Kawaguchi: "Arts of Multilayer Structure Fish Robot", ASIAGRAPH 2008, 2008.
- Fumiya Iida, Tomohiro Akagawa, Takaaki Hashimoto, Yasuhiko Imbo, Kiyoshi Takamasu, Kiyoshi Kotani, Yoichiro Kawaguchi: 「Evaluation of the interactive computer graphics that reflects cardiac vagal activity estimated in realtime」, ASIAGRAPH 2008, 2008.
- 今村紀之、原田隆宏、河口洋一郎:「境界マップを用いた高速な流体弾性体連成シミュレーション」, Visual Computing / グラフィックスと CAD 合同シンポジウム, 2008.
- 河口洋一郎:「8k 超高精細 CG 映像の魅力」, 情報処理学会研究報告—グラフィックスと CAD(CG), 2008.
- 鶴岡修平、河口洋一郎:「奥行き情報を用いた画像合成による特殊相対論的可視化とその応用」, 情報処理学会研究報告—グラフィックスと CAD(CG), 2008.
- 安田廉、原田隆宏、河口洋一郎:「粒子ベース流体シミュレーションの複雑な屈折を含む効率的な可視化」, 情報処理学会研究報告—グラフィックスと CAD(CG), 2008.
- R.Yasuda and Y.Kawaguchi: "Realtime simulation of an hourglass based on granular dynamics", SIGGRAPH Posters 2008, 2008.

河口洋一郎:「Art of Computer Creature」, 種子島西之表市市制施行50周年記念式典, 2008.【招待講演】
【一般向け】

T.Harada, I.Masaie, S.Koshizuka and Y.Kawaguchi: "Massive particles: particle-based simulation on multiple GPUs", SIGGRAPH 2008 Talks, 2008.

Yoichiro Kawaguchi: "Bio-intelligence and Ubiquitous Culture", ASIAGRAPH 2008 in Shanghai, 2008.【招待講演】

Yoichiro Kawaguchi: "The Magic of CG Animation", Conference in AYACC 2008 (Asian Youth Animation & Comics Contest), 2008.【招待講演】

Yoichiro Kawaguchi: "Art of Robotic Creatures", isAT2008, 2008.【招待講演】

新聞・報道

河口洋一郎:「特集新春インタビュー東大教授河口洋一郎さん」, NHK 鹿児島放送局, 2008.

河口洋一郎:「NHK高校講座科学はたのしい!「美」には規則があった?!～数学～」, NHK, 2008.

河口洋一郎:「CG で表現、ロボに再現」, 日経産業新聞, 2008.

受賞・特許

受賞

R.Niiyama and Y.Kawaguchi: ASIAGRAPH 2008 best paper award「Gemotion screen: A generative, emotional, interactive 3D display」, ASIAGRAPH 2008, 2008 年.

安田廉、原田隆宏、河口洋一郎: 優秀研究発表賞「摩擦を含む粉体のリアルタイムシミュレーション」, 情報処理学会, 2008 年.

姜尚中・教授

研究テーマ(主たるもの)

東北アジアにおけるコリアンネットワークの形成

東北アジアにはこの地域を覆った植民地支配と戦争、さらに内戦と冷戦構造のために、数百万人に及ぶコリアン系マイノリティが散在し、言語、文化、社会、経済、アイデンティティなどの違いがありながらも、コリアンネットワークとも言える越境的(トランスナショナル)な移動、連鎖、交流の歴史が続いてきた。本研究は、このようなコリアンネットワークの形成とその歴史を辿りつつ、それが分断された朝鮮半島の平和的な共存と統一にどのような影響を与えることになるのか、その展望を明らかにすることにある。

東北アジア共同体形成の可能性とその展望

グローバル化の進展とともに、世界の多極化が進み、地域統合や地域主義の動きが顕著になりつつあるが、本研究では、このようなリージョナリズムの可能性と展望を、東北アジア地域に即して明らかにしようとするものである。具体的には、地政学的に東北アジア地域の中心に位置する朝鮮半島の共存と統一の問題を視野に、この地域の冷戦構造の終結と冷戦以後の地域秩序の構築がどのようにしたら可能になるのか、その条件と展望を地域主義の構想を通じて明らかにすることにある。

近代日本の国民意識の形成とアジア認識

東アジアにおいて早熟的に国民国家の形成に成功し、日清戦争、日露戦争を通じて近隣アジア諸国との支配・従属関係を築いていくことになる近代日本は、その過程を通じて「日本型オリエンタリズム」ともいべき特異なアジア認識、アジア・イメージを形成していくことになった。本研究は、そのような近代日本のアジア認識の理念型的な構造とその歴史を、学問的な言説や論説、ジャーナリズムなどを素材に浮き彫りしようとするものである。

研究業績 (2008 年度)

論文・作品等

著書

姜尚中:「悩む力」, 集英社, 2008 年.

姜尚中:「姜尚中の青春読書ノート」, 朝日新聞出版, 2008 年.

分担著書

姜尚中, 中島岳志:「日本: 根拠地からの問い」, 毎日新聞社編, 毎日新聞社, 2008 年.

網野善彦、田中優子、樺山紘一、成田龍一、三浦雅士、姜尚中、小熊英二:「『日本』をめぐる: 網野善彦対談集」, 洋泉社編, 洋泉社, 2008 年.

小熊英二, 姜尚中:「在日一世の記憶」, 小熊英二, 姜尚中編, 集英社, 2008 年.

加藤紘一, 姜尚中:「創造するリベラル」, 高橋愛子編, 新泉社, 2008 年.

雑誌論文

姜尚中:「“KY”こそが正しい異文化コミュニケーション(緊急オピニオンワイドニッポンのマナー、これは許せない私のなかの『斉藤さん』)」, 週刊現代, 2008 年.【一般向け】

姜尚中:「オモニー母(新連載・第 1 回)もう一つの名前の季節に」, 青春と読書, 2008 年.【一般向け】

姜尚中:「いま問い直す、アジアの中の『日本』。(世界と日本の針路)」, 潮, 2008 年.【一般向け】

姜尚中:「東京オリンピックは必要か(新春ワイド 2008 年日本と世界はこう変わる)」, 週刊朝日, 2008 年.【一般向け】

姜尚中, 常井健一:「読書姜尚中が選ぶ『混迷の時代を生き抜く 88 冊』」, アエラ, 2008 年.【一般向け】

姜尚中, 杉田敦:「対談国境線を越えた新たな連帯の可能性(特集境界線と現代政治の再構成)」, 現代の理論, 2008 年.【一般向け】

ヴィヴィオルカミシェル, 姜尚中, 森千香子:「民主主義社会における人種主義と暴力」, 現代の理論, 2008 年.【一般向け】

姜尚中:「オモニー母(第 2 回)春の海に別れを告げて」, 青春と読書, 2008 年.【一般向け】

姜尚中:「オモニー母(第 3 回)熊本の地に立って」, 青春と読書, 2008 年.【査読有】【一般向け】

姜尚中, 中島岳志:「対談姜尚中×中島岳志『日本』をめぐる—根拠地とマルチチュード新自由主義と『東京』に反撃する」, 本の時間, 2008 年.【一般向け】

姜尚中:「ネグリを読むことの意味—インスパイアー・ザ・ネクスト(特集=アントニオ・ネグリ)」, 現代思想, 2008年.【査読有】【一般向け】

姜尚中, 栗坪良樹:「対談:三四郎、百年の孤独(特集:漱石—ロンドン、中国などで何が起こったか)」, 國文學: 解釈と教材の研究, 2008年.【一般向け】

姜尚中:「オモニー母(第4回)「玉音放送」の日に」, 青春と読書, 2008年.【一般向け】

上野千鶴子, 姜尚中:「緊急対談米大統領選、病める大国を救うのは誰かオバマとクリントン、なんて贅沢な彼の国のトップ選び」, 婦人公論, 2008年.【一般向け】

姜尚中:「歴史に残る“資源エネルギー”サミットへ。(洞爺湖サミットと日本)」, 潮, 2008年.【一般向け】

石坂浩一, 川崎哲, 姜尚中[他]:「共同提言対北政策の転換を(特集対北朝鮮—いまこそ対話に動くとき)」, 世界, 2008年.【一般向け】

澤池久枝, 姜尚中:「リレー対談(第2回)自分のいちばん大切なものから、平和を考える」, 軍縮問題資料, 2008年.【一般向け】

姜尚中:「熊本姜尚中(政治学者)「県」を超え、アジアの玄関口「九州連合」の結成を(大特集地方分権の時代に(第2弾)わが故郷を語る—あなたのふるさとを輝いていますか)」, 週刊現代, 2008年.【査読有】【一般向け】

姜尚中:「姜尚中が特別指南!「悩みの効用」サラリーマン生き方講座」, 週刊ポスト, 2008年.【一般向け】

姜尚中:「東北アジア・コモンハウス: 21世紀の日本の進路(新春学術講演会)」, 神戸大学医学部神緑会学術誌, 2008年.

姜尚中:「オモニー母(第6回)出会い」, 青春と読書, 2008年.【査読有】【一般向け】

姜尚中:「オモニー母(第7回)身を寄せ合って」, 青春と読書, 2008年.【一般向け】

五木寛之, 姜尚中:「対談五木寛之作家×姜尚中政治学者「鬱の時代」をどう生き抜くか」, 週刊朝日, 2008年.【査読有】【一般向け】

姜尚中:「オモニー母(第8回)新たな別れ」, 青春と読書, 2008年.【一般向け】

姜尚中:「オモニー母(第9回)新しいのち」, 青春と読書, 2008年.【一般向け】

姜尚中, 石田衣良:「“大きな物語”が失われた時代をどう生きるか。」, 潮, 2008年.【一般向け】

姜尚中:「中公読書室著者に聞く姜尚中『悩む力』」, 中央公論, 2008年.【一般向け】

姜尚中:「オモニー母(第10回)殺戮の年に生まれて」, 青春と読書, 2008年.【一般向け】

坂村健・教授

研究テーマ(主たるもの)

TRON (The Real-time Operating system Nucleus)

リアルタイムオペレーティングシステム(RTOS)はコンピュータ組込システム構築の際に最も中核となる基本ソフトウェアである。本研究では、RTOSの基礎研究であるリアルタイムスケジューラのアルゴリズムやアーキテクチャ設計など、基礎分野の研究から、RTOSの開発環境、応用システムまで幅広く研究をすすめている。1980年から20年以上にわたり進めているライフワーク的な研究となっており、TRONは現在、携帯電話や車のエンジン制御、デジタルカメラ、電子辞書、レーザープリンタなど多くの機器で使われており、組込システムの分野で世界でもっとも大きな実績をあげている。また、漢字のような大規模文字セットを使用する国において技術的な限界による文化制限を行わないですむ多言語コンピュータの研究も進め、その成果をふまえて構築されたBTRONでは17万字以上の文字を扱えるシステムの構築に成功している。

Ubiquitous Computing

コンピュータを身の回りのあらゆるものに埋め込み、それらをネットワークで結び、互いに協調動作させることで、人間生活をあらゆる面から支援するコンピュータシステム、ユビキタスコンピューティングの考え方や手法を、世界に先駆けて提唱した。これは、2000年以後の情報分野の学界・産業界をリードするコンセプトとして受け入れられ、このユビキタスコンピューティングに関する研究開発が世界的に盛んに行なわれるようになった。研究室では、Context-aware Computingや超小型チップのアーキテクチャ、ネットワークプロトコル、セキュリティシステム等の基礎的研究から応用システムまで幅広い研究を行い、世界的な成果を達成している。

Digital Museum

高度なデジタル技術を博物館や美術館に活用することで、新しいミュージアムの確立を提唱し「デジタルミュージアム」と名づけた。デジタル技術を駆使した、資料の収集、保存、修復、展示などの研究を行い、その成果をいかして構築した情報システムや展示システムは、東京国立博物館、国立歴史民族博物館、国立民俗学博物館、国立科学博物館、日本科学未来館といった、国内の主要な博物館での展示に採用された。この研究では複数のユーザが同時に共有できる三次元仮想空間システム:MMUD(Multi-Media Multi-User Dungeon)の研究開発を行い実用システムレベルにまで完成させた。

研究業績 (2008年度)

論文・作品等

分担著書

坂村健:「組込みシステム実践プログラミングガイド ITRON仕様 OS/T-Kernel対応」, 編, 技術評論社, 2008年.

雑誌論文

Takahide TERADA, Ryosuke FUJIWARA, Goichi ONO, Takayasu NORIMATSU, Tatsuo NAKAGAWA, Masayuki MIYAZAKI, Kei SUZUKI, Kazuo YANO, Akira MAEKI, Yuji OGATA, Shinsuke KOBAYASHI, Noboru KOSHIZUKA and Ken SAKAMURA: "Intermittent Operation Control Scheme for Reducing Power Consumption of UWB-IR Receiver", IEEE Journal of Solid-State Circuits, Vol.43, No.4, pp.964 - 973, 2008年. 【査読有】

小林真輔, 越塚登, 坂村健:「超小型チップネットワーキング技術」, 電子情報通信学会誌, Vol.91, No.7, pp.696-603, 2008年.

坂村健:「コンクリートのトレーザビリティについて」, コンクリート工学, 2009年. 【一般向け】

国際会議等

Masahiro Bessho, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, Ken Sakamura: "uNavi: Implementation and Deployment of a Place-based Pedestrian Navigation System", The 1st IEEE International Workshop on

Software Engineering for Context Aware Systems and Applications (SECASA 2008), pp.1254–1259, 2008. 【査読有】

Tetsuo Kamina, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: “Embedding Legacy Keyword Search into Queries for the Ubiquitous ID Database”, The 2nd International Conference on Network-Based Information Systems (NBIS-2008), pp.263 – 272, 2008. 【査読有】

Masahiro Bessho, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, Ken Sakamura: “Assisting Mobility of the Disabled using Space-Identifying Ubiquitous Infrastructure”, ACM ASSETS 2008, pp.283–284, 2008. 【査読有】

Keiichi Nakamura, Masato Kamio, Tetsushi Watanabe, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka and Ken Sakamura: “Reliable Ranging Technique based on Statistical RSSI Analyses for an Ad-Hoc Proximity Detection System”, The 5th IEEE Workshop on Pervasive Wireless Networking (PWN09), 2009. 【査読有】

その他論文

西山智, 岩本健嗣, 越塚登, 坂村健: 「私的空間を対象とするカメラを用いた屋内位置推定システムの提案」, マルチメディア、分散、協調とモバイル(DICOMO2008)シンポジウム, 情報処理学会, 2008年. 【査読有】

講演・口頭発表

坂村健: “ユビキタスサミット 2008 基調講演「UBI Vision」”, フィンランド技術庁(Takes)主催ユビキタスサミット 2008, 2008.

坂村健: “International RFID Seminar 2008 基調講演”, NGO 法人 RFID Lab 主催 International RFID Seminar 2008 基調講演, 2008.

坂村健: 「ESEC 特別講演「ユビキタス・コンピューティングを支える組込みシステム技術」», ESEC 特別講演, 2008. 【一般向け】

坂村健: 「開成学園講演「ユビキタス社会-いつでも、どこでも、誰でも使えるコンピュータ社会を目指して」», 開成学園講演会, 2008. 【招待講演】【一般向け】

坂村健: 「トロンプロジェクト特別講演会「トロンプロジェクトの新捗状況と2008年の展望」», トロンプロジェクト特別講演会, 2008. 【一般向け】

坂村健: 「全国美術館会議第55回総会特別講演「ユビキタス・ミュージアム」», 全国美術館会議特別講演, 2008. 【招待講演】【一般向け】

坂村健: 「仮想世界と現実世界の融合を目指して～ユビキタス・コンピューティング・その可能性と未来～」, 楽しむ科学教室, 2008. 【招待講演】【一般向け】

坂村健: 「楽しむ科学教室講演」, 楽しむ科学教室, 2008. 【招待講演】【一般向け】

坂村健: 「全視協まちづくり集会 2008 講演」, 全視協まちづくり集会 2008, 2008. 【招待講演】【一般向け】

坂村健: 「第1回グローバルみらい塾講演会「独創性からイノベーションへ」», 第1回グローバルみらい塾講演会, 2008. 【招待講演】【一般向け】

坂村健: 「タクシー問題懇談会基調講演「制度イノベーションがタクシーを変える」», タクシー問題懇談会基調講演, 2008. 【一般向け】

坂村健:「慶應義塾創立 150 年記念講演会「学問のすすめ 21」パネルディスカッション「日本のアイデンティティ」, 慶應義塾創立 150 年記念講演会, 2008.

坂村健:「OKI 講演会」, OKI 講演会, 2008. 【招待講演】【一般向け】

坂村健:「平成 20 年度 NTT 三菱総合研究所後期集合研修講演「創造性からイノベーションへ」, 平成 20 年度 NTT 三菱総合研究所後期集合研修, 2008. 【招待講演】【一般向け】

坂村健:「第 26 期情報化推進懇話会(朝食会)基調講演「イノベーション基盤としてのユビキタステクノロジー」, 第 26 期情報化推進懇話会(朝食会)基調講演, 2008. 【一般向け】

坂村健:「米国土木学会(ASCE)日本支部総会 20 周年記念講演」, 米国土木学会(ASCE)日本支部総会, 2008. 【招待講演】

坂村健:「NSRI 都市・環境フォーラム講演「持続可能都市のためのユビキタス」, NSRI 都市・環境フォーラム講演, 2008. 【招待講演】

坂村健:「土木学会「情報利用シンポジウム」特別講演」, 土木学会「情報利用シンポジウム」特別講演, 2008. 【招待講演】

坂村健:「熊本大学講演「ユビキタスイノベーションどこでもコンピュータが世界を変える」, 熊本大学講演, 2008. 【招待講演】

坂村健:「「正論」懇話会講演「ユビキタス社会の到来」, 和歌山「正論」懇話会, 2008. 【招待講演】

坂村健:「「テクノフロンティア 21 エレクトロニクスショー2008」講演「ユビキタス・コンピューティングと TRON プロジェクトについて」, テクノフロンティア 21 エレクトロニクスショー2008, 2008. 【招待講演】【一般向け】

坂村健:「ET2008 特別講演「オープンアーキテクチャの時代の T-Engine/T-Kernel」, ET2008 特別講演, 2008. 【招待講演】【一般向け】

坂村健:「“Club Willbe” Kickoff Program 2008 鼎談～大人のための教養講座～「環境と IT、最先端を学ぶ」, “Club Willbe” Kickoff Program 2008 , 2008. 【招待講演】【一般向け】

坂村健:「“食品安全と履歴とレーシング国際シンポジウム”, 食品安全と履歴とレーシング国際シンポジウム, 2008. 【招待講演】【一般向け】

坂村健:「内外情勢調査会主催研修会講演」, 内外情勢調査会主催研修会, 2009. 【招待講演】【一般向け】

坂村健:「内外情勢調査会主催研修会講演」, 内外情勢調査会主催研修会, 2009. 【招待講演】【一般向け】

坂村健:「第 1 回地域イノベーション創出シンポジウム基調講演「イノベーションとユビキタス」, 第 1 回地域イノベーション創出シンポジウム, 2009. 【一般向け】

坂村健:「関西電力監査懇話会講話「ユビキタスイノベーション」, 監査懇話会, 2009. 【招待講演】【一般向け】

坂村健:「第 1 回地域イノベーション創出シンポジウム基調講演「イノベーションとユビキタス」, 第 1 回地域イノベーション創出シンポジウム, 2009. 【一般向け】

坂村健:「関西電力監査懇話会講話「ユビキタスイノベーション」, 監査懇話会, 2009. 【招待講演】【一般向け】

坂村健:「平成 20 年度「ユビキタス社会のガバナンス」シンポジウム基調講演」, 平成 20 年度「ユビキタス社会のガバナンス」シンポジウム, 2009. 【招待講演】【一般向け】

坂村健:「新 IT 立国宣言」シンポジウムパネリスト,「新 IT 立国宣言」シンポジウム, 2009.【招待講演】【一般向け】

坂村健:「平成 20 年度「ユビキタス社会のガバナンス」シンポジウム基調講演」,平成 20 年度「ユビキタス社会のガバナンス」シンポジウム, 2009.【招待講演】【一般向け】

坂村健:「新 IT 立国宣言」シンポジウムパネリスト,「新 IT 立国宣言」シンポジウム, 2009.【招待講演】【一般向け】

新聞・報道

坂村健:「「しゃべる未来都市」ただいま実験継続中」,月刊アスキー, 2008.

坂村健:「「しゃべる未来都市」ただいま実験継続中」,月刊アスキー, 2008.

坂村健:「ユビキタス」,フジテレビ「わかるテレビ 2」, 2008.

坂村健:「実践の時代に向けて、着実に動き出した「ユビキタス」日本発の社会インフラが、アジア、欧州、米国へ広がる」,月刊 Card Wave 4 月号, 2008.

坂村健:「“アジアのラテン語”の漢字について、情報交換できる基盤を用意」,NEW MEDIA, 2008.

坂村健:「どこでもネット「ユビキタス」ー日本規格が国際標準に」,読売新聞, 2008.

坂村健:「日本「カラクリ」で遅れ、携帯低価格の時代」,毎日新聞, 2008.

坂村健:「日本発技術ユビキタス国際標準にーネット通信規格、国際機関承認へ」,読売新聞(大阪版), 2008.

坂村健:「組込システム開発技術展」,電波新聞, 2008.

坂村健:「いまこそ電子政府を目指せ」,産経新聞, 2008.

坂村健:「いまこそ電子政府を目指せ」,産経新聞(WEB), 2008.

坂村健:「初のトロン技術者認定試験を実施ー組み込みエンジニア不足の解消目的に」,毎日新聞(net), 2008.

坂村健:「インフラとしてユビキタス整備/土木学会、坂村教授招き講演」,G-Search, 2008.

坂村健:「「ユビキタス社会」へ号砲...日本の通信規格が国際標準へ」,G-Search, 2008.

坂村健:「東大、19 日から清華大でシンポ・講演ー学生交流など促進」,G-Search, 2008.

坂村健:「東邦薬品、物流センターの出荷精度が 99.9997%に、1 億円かけ導入した 800 個の「光る IC タグ」が奏功」,IT pro, 2008.

坂村健:「サマータイム反対論ー試験的廃止提案を」,毎日新聞, 2008.

坂村健:「基礎からわかるサマータイム」,読売新聞, 2008.

坂村健:「「トロン技術者認定試験」はじまる」,IT pro, 2008.

Ken Sakamura: 「VTT & Tokyo University to establish R&D partnership for Real-time Operating Systems and Ubiquitous Computing」, VTT, 2008.

坂村健: 「骨や臓器をつくりだせ、驚きの 3D 技術」, サイエンス ZERO, 2008.

坂村健: 「EXILIM PRO EX-F1 開発プラットフォームはイーソルの eGROS」, japan.internet.com, 2008.

坂村健: 「仮想世界と現実世界の融合を目指して～ユビキタス・コンピューティング・その可能性と未来～」, 楽しむ科学教室, 2008.

坂村健: 「ネットワークの未来をいかに思われますか」, S-F マガジン, 2008.

坂村健: 「人+藝術+科技=悠閒逛東京」, B Next 07, 2008.

坂村健: 「イノベーション基盤としてのユビキタス・ネットワーク」, 2008 年最近 1 年間の BRI 会員研究会レポート, 2008.

坂村健: 「MTI 近未来の物流管理を実演-電子タグ実証実験施設新装オープン「MTI 東京ラボ」」, 日本海事新聞, 2008.

坂村健: 「MTI、RFID 実証施設「Tokyo Lab」を公開、ソーター導入など機能拡張でリニューアル」, 海事プレス, 2008.

坂村健: 「MTI、RFID 実証施設「Tokyo Lab」を公開、ソーター導入など機能拡張でリニューアル」, marrine-net, 2008.

坂村健: 「ネット時代の危機管理-自己に厳しい姿勢必要」, 毎日新聞, 2008.

坂村健: 「家事・防犯・・・ロボ自在」, 読売新聞(夕刊), 2008.

坂村健: 「浮かんで消えるサマータイム-エネルギー消費、増やす可能性」, 日本経済新聞(夕刊), 2008.

坂村健: 「〈數位時代〉人+藝術+科技=悠閒逛東京」, cn YES .com, 2008.

坂村健: 「日韓 RFID 的友展現状」, ccidnet(信息化), 2008.

坂村健: 「人+藝術+科技=悠閒逛東京」, 數位時代- Taiwan, 2008.

坂村健: 「いつでも、どこでも、誰でも使えるコンピュータ社会を目指して」, 開成学園父母と先生の会だより, 2008.

坂村健: 「基調講演「イノベーション基盤としてのユビキタス」」, 1 年のあゆみ(平成 19 年度年次報告書), 2008.

坂村健: 「vtt と東京大学の協力-リアルタイム ubicom 技術」, PROSESSORI, 2008.

坂村健: 「スイスの建築家の苦悩-「鳥の巣」ができるまで」, 毎日新聞, 2008.

坂村健: 「慶應義塾創立 150 周年記念講演会「学問のすゝめ 21」(告知記事)」, 読売新聞, 2008.

坂村健: 「博士が選ぶ有望技術」, 日経ヴェリタス, 2008.

坂村健: 「TRON」, 組込みプレス, 2008.

坂村健:「「組み込み開発者をもっと報われなければならない」、トロン技術者試験に込める思い」, IT pro, 2008.

坂村健:「新市場に出遅れる日本情報機器価格二極分化」, 毎日新聞, 2008.

坂村健:「慶応 150 年記念講演会」, 読売新聞, 2008.

坂村健:「ユビキタス実験東京・銀座で参加」, 日本経済新聞, 2008.

坂村健:「精神主義に限界」, 日刊工業新聞, 2008.

坂村健:「組み込み総合技術展 ET2008 (広告)」, EE TIMES Japan, 2008.

坂村健:「TRONSHOW2009 (広告)」, EE TIMES Japan, 2008.

坂村健:「創立 150 年記念講演会「学問のすゝめ 21」東京会場「日本人のアイデンティティ」開催」, 慶応義塾 (Web), 2008.

坂村健:「宮内久男追思集「本を出せば思いは必ず伝わります」」, 宮内久男追思集, 2008.

坂村健:「理系離れ、賞で防止をーノーベル賞の意義」, 毎日新聞, 2008.

坂村健:「学問のすゝめ 21「日本人のアイデンティティ」」, 読売新聞, 2008.

坂村健:「「ユビキタス社会の到来」和歌山「正論」懇話会坂村健教授が講演」, 産経ニュース(net), 2008.

坂村健:「ユビキタス社会実現坂村健氏講演」, 産経新聞, 2008.

坂村健:「最先端テクノロジー支える組み込み技術が横浜に集結」, 日経産業新聞, 2008.

坂村健:「本公司與 ARUP 公司及坂村健教授簽訂策略聯盟之合作意向書, 並說明本公司蛻變後的定位及改變。」, Taiwan Land Coporation ホームページ, 2008.

坂村健:「空港、道路...変化に驚き五輪後の北京訪問」, 毎日新聞, 2008.

坂村健:「TRONSHOW2008-UWB 基地局を大幅に小型化、PDA 機器への搭載を可能に」, Tech-On, 2008.

坂村健:「オープンアーキテクチャ時代の T-Engine/T-Kernal」, 組み込みプレス, 2008.

坂村健:「第 1 章ソフトウェア編、Q14:組み込み Linux と μ ITRON 仕様 OS のどちらを選べばよいですか?」, 組み込みプレス, 2008.

坂村健:「第 1 章ソフトウェア編、Q23:ITRON の勉強をしたいのですが、ITRON が最初から入ったコンピュータはどこで売っていますか?」, 組み込みプレス, 2008.

坂村健:「TRONSHOW2009」, EDN Japan, 2008.

坂村健:「携帯ソフト開発費圧縮、ノキア最大で 100 分の 1」, 日本経済新聞, 2008.

坂村健:「ユーシーテクノロジー、個別ソフト開発不要ー通信用 OS、ノキアと連携」, 日経産業新聞, 2008.

坂村健:「IC タグで冠水検知」, 日経産業新聞, 2008.

坂村健:「冠水感知システム開発路面に無線タグ埋設」, 日刊工業新聞, 2008.

坂村健:「安全神話の崩れ去った跡に・・・」, 産経新聞, 2008.

坂村健:「基盤ソフト「NoTA」始動、携帯開発を大幅効率化へ」, ルートプレス 21, 2008.

坂村健:「急速に進化する超小型コンピューター、“光るタグ”で商品管理、ユビキタス関連人気」, ルートプレス 21, 2008.

坂村健:「広がるトロンの未来－交通、福祉、住宅に」, ルートプレス 21, 2008.

坂村健:「安全神話の崩れ去った跡に・・・」, 産経ニュース, 2008.

坂村健:「技術と発想常識覆す生活にエコ意識浸透」日経産業新聞賞優秀賞」15点」, 日本経済新聞社, 2009.

坂村健:「オープン時代がやってくる」, 流通研究社, 2009.

坂村健:「TRONSHOW2009」, 流通研究社, 2009.

坂村健:「実証実験が進むユビキタス ID 技術、障害物を避ける自律移動ロボットも」, 組み込みネット, 2009.

坂村健:「淘汰の風に耐え進化を多様な東京のレストラン」, 毎日新聞社, 2009.

坂村健:「街の観光情報を専用端末で配信」, 日本経済新聞社, 2009.

Ken Sakamura:「Diverse Tokyo food scene on the verge of a Big Bang」, Mainichi Japan, 2009.

坂村健:「技術と発想常識覆す生活にエコ意識浸透」日経産業新聞賞優秀賞」15点」, 日経産業新聞, 2009.

坂村健:「オープン時代がやってくる」, 月刊マテリアルフロー, 2009.

坂村健:「TRONSHOW2009」, 月刊マテリアルフロー, 2009.

坂村健:「「電脳コンクリート」IC タグで履歴管理-もの言うコンクリートの時代へ」, 日刊建設工業新聞社, 2009.

坂村健:「東京ユビキタス計画 09 一般公開実験を開始」, 日刊工業新聞社, 2009.

坂村健:「東京ユビキタス計画 09 一般公開実験を開始」, 日刊工業新聞社, 2009.

坂村健:「「ユビキタス」銀座・新宿で実験携帯型端末で観光を」, 東京新聞, 2009.

坂村健:「学問のすゝめパネルディスカッション日本のアイデンティティ」, 慶應義塾, 2009.

坂村健:「2008 年日経優秀製品・サービス賞最優秀賞受賞-「セブンプレミアム」の挑戦」, セブン & アイ HLDGS., 2009.

坂村健:「マルチコアの面倒は OS が見る」, E2 パブリッシング株式会社, 2009.

坂村健:「魅力ある世界作れるか地上波テレビの将来」, 毎日新聞社, 2009.

坂村健:「神戸てぶら観光プレスリリース」, e-LogiT(web), 物流ニュースリリース, 2009.

坂村健:「特定省電力通信+Bluetooth で屋内ナビ-神戸自律移動支援プロジェクトの今」, +D Mobile, 神尾寿の Mobile+Views, 2009.

坂村健:「地域技術革新シンポ産業技術総合研究所」, 日刊工業新聞社, 2009.

坂村健:「第1回地域イノベーション創出シンポジウム」, 独立行政法人産業技術総合研究所, 2009.

坂村健:「最前線ユニバーサル社会(上)いつでもどこでも必要な情報獲得」, 読売新聞社, 2009.

坂村健:「最前線ユニバーサル社会(下) 街歩きを楽にする携帯端末実験専用白杖と通信障害者を道案内」, 読売新聞社, 2009.

坂村健:「最前線ユニバーサル社会(下) 街歩きを楽にする携帯端末実験専用白杖と通信障害者を道案内」, 読売新聞社, 2009.

坂村健:「マルチコアの面倒は OS が見る」, E2 パブリッシング株式会社, 2009.

坂村健:「マルチコアの面倒は OS が見る」, E2 パブリッシング株式会社, 2009.

坂村健:「東京ユビキタス計画銀座・新宿の公開実験参加「銀ブラ」で新発見」, 毎日新聞社, 2009.

坂村健:「バリアフリー経路ナビ」, NHK, 2009.

坂村健:「自律移動支援プロジェクト」, サンテレビ, 2009.

坂村健:「「住基」を超える「国民」カードで」, 産業経済新聞社, 2009.

坂村健:「「住基」を超える「国民」カードで」, 産業経済新聞社, 2009.

坂村健:「制度改革で景気刺激を技術の進歩に法の壁」, 毎日新聞社, 2009.

佐倉統・教授

研究テーマ(主たるもの)

科学技術コミュニケーション

科学技術の専門家と非専門家間のコミュニケーションを、円滑化、活性化するための方法論や制度策定および科学史的・文明論的な理論枠組みの構築。

脳神経倫理(ニューロエシックス)

脳神経科学の倫理的、社会的、哲学的諸問題を考察し、教育現場や社会とのコミュニケーションなどにおける実際の問題の解決をめざす。

進化生物学史、動物行動学史

とくに日本における進化生物学、動物行動学の歴史を、諸外国の事例と比較しつつ、特徴を抽出する。

研究業績(2007年度)

論文・作品等

雑誌論文

佐倉統:「進化論を知る意味」, てら子屋, No.10, pp.58-59, 2008 年.【一般向け】

Fukushi, T. and Sakura, O.: "Exploring the origin of neuroethics: from the viewpoints of expression and concepts.", *American Journal of Bioethics*, Vol.8, pp.56-57, 2008 年.

A. Iriki & O. Sakura: "Neuroscience of primate intellectual evolution: natural selection and passive and intentional niche construction.", *Philosophical Transactions of The Royal Society, London, B (Biological Sciences)*, Vol.363, No.1500, pp.2229-2241, 2008 年.【査読有】

佐倉統:「ダーウィンと現代——特集にあたって——」, 遺伝, Vol.62, No.5, pp.18-21, 2008 年.

佐倉統:「エリートにとっての記号から生物学の象徴へ——日本におけるダーウィン像の変遷——」, 遺伝, Vol.62, No.5, pp.57-61, 2008 年.

福士珠美・佐倉統:「日本の脳神経科学研究における倫理——現状と将来展望」, *BRAIN and NERVE*, Vol.61, No.1, pp.5-10, 2009 年.

佐倉統:「科学コミュニケーションと研究の倫理」, *医薬品情報学*, Vol.10, No.3, pp.179-184, 2009 年.

佐倉統:「脳神経科学と社会」, *分子精神医学*, Vol.9, No.1, pp.52-53, 2009 年.

国際会議等

Fukushi, T. and Sakura, O.: "Public engagement in neuroscience and cohort studies for children in Japan.", *The 10th meeting of Public Communication of Science and Technology*, Malmo, Sweden., 2008.【査読有】

Sakura, O., Sena, H., Ikegaya, Y. and Isobe, T.: "The outreach activities for the 10th anniversary of Brain Research Institute (BSI), RIKEN: a case report of public communication of neuroscience in Japan. [Poster Presentation]", *The 10th meeting of Public Communication of Science and Technology*, Malmo, Sweden., 2008.【査読有】

Ohashi, S., Uematsu, Y., Ozawa, A., Yamaguchi, M., Takeuchi, K., Hashimoto, Y., Kusumi, H. and Sakura, O.: "How to design effective website for the science communication? [Poster Presentation]", *The 10th meeting of Public Communication of Science and Technology*, Malmo, Sweden., 2008.【査読有】

T. Isobe, N. Mizushima, S. Tanaka, M. Yamaguchi, T. Fukushi and O. Sakura.: "The research and neuroethical situation of BMI (Brain Machine Interface) in Japan: investigating the history of a research budget for BMI and ethical problems with BMI researchers. [Poster Presentation]", *Neuroethics Society 2008 Annual Meeting*, Washington D.C., U.S.A., 2008.【査読有】

Fukushi, T., Sakura, O., Tanaka, D., Maeda, T., Anme, T., Yamagata, Z. and Japan Children Cohort Study: "Public acceptance of neuroscience research in Japan. [Poster Presentation]", *Society for Neuroscience*, Washington D.C., U.S.A., 2008.【査読有】

Fukushi, T., Sakura, O., Tanaka, D., Maeda, T., Anme, T., Yamagata, Z. and Japan Children Cohort Study: "Pediatric neuroscience research and its ethics: public awareness in Japan. [Poster Presentation]", *Neuroethics Society 2008 Annual Meeting*, Washington D.C., U.S.A., 2008.【査読有】

その他論文

Fukushi, T. and Sakura, O.: "Ethics of neuro-modulation: possibility and necessity of neuroethics.", In: Ishihara, K. and Majima, S. (eds.), Applied Ethics: Perspectives from Asia and Beyond., Center for Applied Ethics and Philosophy, Hokkaido University, 2008 年.

佐倉統:「科学と宗教」, 聖心女子大学キリスト教文化研究所(編)『新しい人間像を求めて』, 2009 年.

佐倉統:「エリック・ラシーヌ博士研究会報告」, 平成 20 年度国際共同研究先導調査事業成果報告書『アルツハイマー病に対する脳深部刺激療法の開発と安全基準の調査』(独)新エネルギー・産業技術総合開発機構 / 日本大学, 2009 年.

講演・口頭発表

文部科学省脳科学研究戦略推進プログラム東京大学佐倉グループ(主催)牛場潤一(登壇):「脳と機械をつなぐ! ? -脳科学者といっしょに考えよう」, サイエンスアゴラ 2008, 2008. 【一般向け】

池内了・毛利衛・長谷川壽一・佐倉統・鈴木晶子(登壇):「疑似科学とメディア」, サイエンスアゴラ 2008, 2008. 【一般向け】

東京大学佐倉統研究室・日本科学未来館(主催)林和弘・長神風二・水島久光・生貝直人・須永剛司・広島麻紗子・古堅真彦・脇田玲・大和比呂志・山辺真幸・大橋正司・小沢淳ほか(登壇):「科学情報とウェブ I 科学情報の特性と効果的な情報デザイン」, サイエンスアゴラ 2008, 2008. 【一般向け】

佐倉統:「脳科学に何を期待しますか?」, UTalk, 2008. 【一般向け】

東京大学佐倉統研究室・日本科学未来館(主催)戸田孝・小泉成史・佐倉統・楠見春美(登壇):「科学情報とウェブ II 科学館・博物館の取り組みをさぐる」, サイエンスアゴラ 2008, 2008. 【一般向け】

船橋三田会(主催)慶應義塾大学工学部富田牛場研究室・東京大学情報学環佐倉研究室(協力)牛場潤一(講師):「脳と機械は融合する? 未来の科学技術を考えよう」, サイエンス・カフェ, 2008. 【一般向け】

岩瀬哲(ゲスト)・佐倉統(モデレーター):「どう答える?“なぜ私が死ななきゃいけないの”」, UTalk, 2008. 【一般向け】

佐倉統:「生物の進化から見た人間観」, 桐光学園「大学訪問授業」, 2008. 【一般向け】

佐倉統:「脳科学と社会の相互交流をめざして」, 三重県母性衛生学会主催「脳科学の進歩と脳神経倫理」, 2008. 【招待講演】

福士珠美(オーガナイザー)、佐倉統・泰羅雅登・正木信夫・高木美也子・山田真久・小泉英明(シンポジスト):「脳神経科学と社会の異文化コミュニケーション」, 「脳神経科学研究における倫理的諸問題とガバナンス」シンポジウム, 第 31 回日本神経科学大会(Neuroscience 2008/The 31st Annual Meeting of the Japan Neuroscience Society), 2008.

佐倉統:「進化から見た人間における遺伝と環境の関係」, 科学技術振興機構・社会技術研究開発センター「脳科学と社会」研究開発領域・領域架橋型シンポジウム「遺伝と環境の相互作用: 氏か素性かの先端科学」, 2008.

加藤尚武、信原幸弘(ともに講演者)、佐倉統(特定質問者):「「心・脳の哲学と倫理——脳科学と社会——」」, CBEL5 周年記念 UT-CBEL 設立記念シンポジウム, 2008.

虫明茂(座長)田口周平・植原亮・松田純・中島孝(提題者)栗屋剛・霜田求・佐倉統(指定討論者):「ワークショップ「ニューロエンハンスメントの倫理問題」」, 第 27 回日本医学哲学・倫理学会大会, 2008.

Sakura, O. (Organizer), Isobe, T., Yamaguchi, M., Ishihara, K. and Racine, E. (Presenter): "Neuroethics: East and West.", ISHPSSB off-year workshop, 2008.

Sakura, O.: "General importance and cultural localism of science communication.", The 2009 Annual Conference for Science Communication in Taipei, 2009. 【招待講演】

Sakura, O. (パネリスト): "Definition of science communication and its development in different countries. (パネルディスカッション)", The 2009 Annual Conference for Science Communication in Taipei, 2009. 【招待講演】

佐倉統: 「脳神経科学倫理」, 東北大学脳科学グローバルCOE特別講演, 2009. 【招待講演】

新聞・報道

佐倉統: 「サイエンス ZERO」, NHK, 2008.

佐倉統(協力): 「09 正月特集ダーウィン生誕 200 年」, 毎日新聞, 2009.

佐倉統: 「ダーウィン広がる再評価——脱・人間中心思想の基盤に」, 日本経済新聞, 2009.

佐倉統: 「ダーウィン生誕 200 年『種の起源』出版 150 年進化論正しく社会に還元」, 読売新聞, 2009.

佐倉統: 「点検科学技術立国(上) 頭脳海外流出変わらず閉鎖性、女性・若手を阻む」, 日本経済新聞, 2009.

佐倉統: 「ダーウィン生誕 200 年「視点・論点」」, NHK テレビ, 2009.

澤田康文・教授

研究テーマ(主たるもの)

理理融合・文理融合による、国民の安心安全を確保するための「投薬ミス予測システム」プロジェクト

情報分野の理理融合と文理融合という情報学環の特色を活かし、薬物治療に関するヒヤリハット・ミス事例を収集し、学際的に解析することで、投薬ミスを事前予測し、予防することを目指す。さらに、予測不能であった新規の要因による事例も含めて「薬物治療ヒヤリハット・ミスライブラリー」を構築し、「リスクマネジメント文化」の糧とする。

臨床事例を活用した実践的薬学教育研修システムの確立とその評価

臨床事例(教育的事例素材)の効果的な収集、その評価・体系化・加工、ならびに教育用事例を用いた薬学教育、薬剤師研修のための方法論を確立するとともに、その方法論を実行・評価する。

薬物の胎児移行性及び胎児毒性の予測と、薬物動態・動力学理論に基づくテーラーメイド・処方設計システムへの応用

ヒト胎盤を活用し、さまざまな実験系における薬物の輸送実験を行うことで、薬物の胎児移行性を in vitro において効率的かつ定量的に推測するための方法論を構築する。さらにそれらに薬物動態・動力学理論を適用し、処方設計や処方チェックの場面に最適な形で適用するための「テーラーメイド処方設計支援システム」のモジュールを開発する。

研究業績 (2008 年度)

論文・作品等

著書

澤田康文:「ヒヤリハット事例に学ぶ服薬指導のリスクマネジメント 2」, 日経 BP 社, 2008 年.

澤田康文:「薬剤師のための徹底リスクマネジメント 2」, 南山堂, 2008 年.

Karen Baxter 著, 澤田康文監訳:「ストックリー医薬品相互作用ポケットガイド」, 日経 BP 社, 2008 年.

分担著書

大谷壽一, 澤田康文他:「現場の疑問に答える皮膚病治療薬 Q&A」, 宮地良樹, 大谷道輝編, 中外医学社, 2008 年.

澤田康文, 堀里子他:「薬剤師生涯研修ガイドープロフェッショナル薬剤師になろうー」, 内山充編, 薬ゼミ情報教育センター, 2008 年.

雑誌論文

Tsuda A, Fujiyama J, Miki A, Hori S, Ohtani H, Sawada Y.: "The first case of phenytoin intoxication associated with the concomitant use of phenytoin and TS-1, a combination preparation of tegafur, gimeracil, and oteracil potassium.", *Cancer Chemother Pharmacol.*, Vol.62, No.3, pp.427-432, 2008 年.【査読有】

Tanaka M, Kobayashi D, Murakami Y, Ozaki N, Suzuki T, Iwata N, Haraguchi K, Ieiri I, Kinukawa N, Hosoi M, Ohtani H, Sawada Y, Mine K.: "Genetic polymorphisms in the 5-hydroxytryptamine type 3B receptor gene and paroxetine-induced nausea.", *Int J Neuropsychopharmacol.*, Vol.11, No.2, pp.261-267, 2008 年.【査読有】

Tsujimoto M, Kinoshita Y, Hirata S, Otagiri M, Ohtani H, Sawada Y.: "Effects of uremic serum and uremic toxins on hepatic uptake of digoxin.", *Ther Drug Monit.*, Vol.30, No.5, pp. 576-582, 2008 年.【査読有】

Tsujimoto M, Dan Y, Hirata S, Ohtani H, Sawada Y.: "Influence of SLCO1B3 gene polymorphism on the pharmacokinetics of digoxin in terminal renal failure.", *Drug Metabol Pharmacokinet.*, Vol.23, No.6, pp. 406-411, 2008 年.【査読有】

松尾律子, 田中祥子, 加納美知子, 磯野喜美子, 田中泰羽, 田浦智子, 浅田由貴, 赤嶺有希子, 沢井一, 木下正和, 須藤智美, 久野木良子, 三木晶子, 堀里子, 佐藤宏樹, 大谷壽一, 澤田康文:「クラリスロマイシンドライシロップと各種カルボシステイン製剤併用時の苦味強度における先発医薬品と後発医薬品間の違い」, *薬学雑誌*, Vol.128, No.3, pp.479-485, 2008 年.【査読有】

斉田翌美, 井上綾子, 石橋久, 富永宏治, 堀里子, 三木晶子, 大谷壽一, 小野信昭, 澤田康文:「患者を対象としたケトプロフェンテープの使用感に関する製剤間比較調査」, *薬学雑誌*, Vol.128, No.5, pp.795-803, 2008 年.【査読有】

朝比奈泰子, 本間秀彰, 堀里子, 大谷壽一, 三木晶子, 後藤輝明, 河野弘之, 澤田康文:「青汁をはじめとする健康食品の使用実態・意識調査」, *医療薬学*, Vol.34, No.7, pp.644-650, 2008 年.【査読有】

その他論文

澤田康文, 堀里子, 大谷壽一:「薬と食の相互作用(99) III.薬と食事の相性 39.プロパフェノンと食事」, *医薬ジャーナル* 44(1), 2008 年.

澤田康文, 堀里子, 大谷壽一:「薬と食の相互作用(100) III.薬と食事の相性 40.エベロリムスと食事」, *医薬ジャーナル* 44(2), 2008 年.

澤田康文, 堀里子, 大谷壽一:「薬と食の相互作用(101) III.薬と食事の相性 41.アモキシシリン水和物・クラブラン酸カリウム配合剤と食事」, 医薬ジャーナル 44(3), 2008 年.

澤田康文, 堀里子, 大谷壽一:「薬と食の相互作用(102) III.薬と食事の相性 42.ピオグリタゾンと食事」, 医薬ジャーナル 44(4), 2008 年.

澤田康文, 堀里子, 大谷壽一:「薬と食の相互作用(103) III.薬と食事の相性 43.エルロチニブと食事」, 医薬ジャーナル 44(5), 2008 年.

澤田康文, 堀里子, 大谷壽一:「薬と食の相互作用(104) III.薬と食事の相性 44.エパルレストアットと食事」, 医薬ジャーナル 44(6), 2008 年.

澤田康文, 堀里子, 大谷壽一:「薬と食の相互作用(105) III.薬と食事の相性 45.スプラタストと食事」, 医薬ジャーナル 44(7), 2008 年.

澤田康文, 堀里子, 大谷壽一:「薬と食の相互作用(106) III.薬と食事の相性 46.エピナスチンと食事」, 医薬ジャーナル 44(8), 2008 年.

澤田康文, 堀里子, 大谷壽一:「薬と食の相互作用(107) III.薬と食事の相性 47.メルカプトプリンと食事」, 医薬ジャーナル 44(9), 2008 年.

澤田康文, 堀里子, 大谷壽一:「薬と食の相互作用(108) III.薬と食事の相性 48.セフジニルと食事」, 医薬ジャーナル 44(10), 2008 年.

澤田康文, 堀里子, 大谷壽一:「薬と食の相互作用(109) III.薬と食事の相性 49.テルミサルタンと食事」, 医薬ジャーナル 44(11), 2008 年.

澤田康文, 堀里子, 大谷壽一:「薬と食の相互作用(110) III.薬と食事の相性 50.クラリスロマイシンと食事」, 医薬ジャーナル 44 (12), 2008 年.

澤田康文:「「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際(77)」, ふくおか県薬会報 21(1), 2008 年.

澤田康文:「「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際(78)」, ふくおか県薬会報 21(2), 2008 年.

澤田康文:「「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際(79)」, ふくおか県薬会報 21(3), 2008 年.

澤田康文:「「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際(80)」, ふくおか県薬会報 21(4), 2008 年.

澤田康文:「「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際(81)」, ふくおか県薬会報 21(5), 2008 年.

澤田康文:「「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際(82)」, ふくおか県薬会報 21(6), 2008 年.

澤田康文:「「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際(83)」, ふくおか県薬会報 21(7), 2008 年.

澤田康文:「「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際(84)」, ふくおか県薬会報 21(8), 2008 年.

澤田康文:「「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際(85)」, ふくおか県薬会報 21(9), 2008 年.

澤田康文:「「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際(86)」, ふくおか県薬会報 21(10), 2008 年.

澤田康文:「「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際(87)」, ふくおか県薬会報 21(11), 2008 年.

澤田康文:「「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際(88)」, ふうおか県薬会報 21(12), 2008 年.

澤田康文監修:「東大・薬剤師会「育薬セミナー」」, 市薬ジャーナル(福岡市薬剤師会会報) 137, 2008 年.

澤田康文監修:「東大・薬剤師会「育薬セミナー」」, 市薬ジャーナル(福岡市薬剤師会会報) 138, 2008 年.

澤田康文監修:「東大・薬剤師会「育薬セミナー」」, 市薬ジャーナル(福岡市薬剤師会会報) 139, 2008 年.

澤田康文監修:「東大・薬剤師会「育薬セミナー」」, 市薬ジャーナル(福岡市薬剤師会会報) 140, 2008 年.

澤田康文監修:「東大・薬剤師会「育薬セミナー」」, 市薬ジャーナル(福岡市薬剤師会会報) 141, 2008 年.

澤田康文:「ヒヤリハット事例に学ぶ一包装で薬の「色」が変わり混乱」, 日経ドラッグインフォメーション 123, 2008 年.

澤田康文:「ヒヤリハット事例に学ぶ「もったいない」の心理に要注意」, 日経ドラッグインフォメーション 125, 2008 年.

澤田康文:「ヒヤリハット事例に学ぶ口腔に薬剤が残留し潰瘍発生」, 日経ドラッグインフォメーション 127, 2008 年.

澤田康文:「ヒヤリハット事例に学ぶ外観が似た 2 種類の薬を混同」, 日経ドラッグインフォメーション 129, 2008 年.

澤田康文:「ヒヤリハット事例に学ぶワルファリン服用時の注意を誤解」, 日経ドラッグインフォメーション 131, 2008 年.

澤田康文:「ヒヤリハット事例に学ぶ薬剤の口腔内副作用に気付かず」, 日経ドラッグインフォメーション 133, 2008 年.

澤田康文:「服薬指導のリスクマネジメント」, 日経ドラッグインフォメーション 130, 2008 年.

澤田康文:「ティーエスワン服用患者、自宅残薬のフツ化ピリミジン系抗悪性腫瘍剤との併用に注意！. ヒヤリ・ハット事例に学ぶ

ティーエスワン適正使用. ティーエスワンカプセル 20・25 適正使用のお願い」, 日経ドラッグインフォメーション, 2008 年.

澤田康文:「4.ジェネリック医薬品の市販後調査と育薬」, 臨床薬理 39(3), 2008 年.

澤田康文:「Ph. D. Sawada の Rp. チェック！ 検査データの日付を勘違いしてインスリンの増量(誤処方)を指示した医師」, Rp.【レシピ】別冊 7(1), 2008 年.

澤田康文:「Ph. D. Sawada の Rp. チェック！ ゾピクロンによる苦味は持続することがあり、気になるようであれば処方変更を」, Rp.【レシピ】別冊 7(2), 2008 年.

澤田康文:「Ph. D. Sawada の Rp. チェック！ ノルバスクとクレメジンの同時食後服用によってノルバスクの血液中濃度は若干ではあるが低下する」, Rp.【レシピ】別冊 7(3), 2008 年.

澤田康文:「Ph. D. Sawada の Rp. チェック！ クラリチンの処方時に注意すべき疾患としててんかんがあり、またクラリスとクラリチンの併用の問題もある」, Rp.【レシピ】別冊 7(4), 2008 年.

澤田康文:「と食物—相性はどうか薬の吸収、分布、代謝、排泄のしくみ」, 武田薬報夏 453, 2008 年.

澤田康文:「薬と食物—相性はどうか薬と嗜好品の相互作用」, 武田薬報秋 454, 2008 年.

澤田康文:「4.ジェネリック医薬品の市販後調査と育薬」, 臨床薬理 39(3), 2008 年.

澤田康文:「医薬品のライフタイムマネジメントができる薬剤師に」, PharmaNext 54, 2008 年.

澤田康文:「薬を育てる、薬を学ぶ」, 健康秋, 2008 年.

澤田康文:「医薬品リスト「おまかせ医療」脱する好機. 私の視点」, 朝日新聞, 2008 年.

澤田康文:「Quiz 59 SNRI 中止後に処方された MAO 阻害剤」, 日経 DI クイズ服薬指導・実践篇 10, 2008 年.

井関健, 飯島康典, 木平健治, 中村敏明, 柳川忠二, 池田俊也, 後藤伸之, 藤田義人, 大谷道輝, 佐々木忠徳, 松山賢治, 佐藤博, 澤田康文, 政田幹夫:「平成 19 年度学術委員会学術第 7 小委員会報告後発医薬品に関する調査研究」, 日本病院薬剤師会雑誌 44(8), 2008 年.

佐藤宏樹, 堀里子, 三木晶子, 大谷壽一, 澤田康文:「薬剤師を対象とした教育研修コンテンツのビデオ・オン・デマンド(VOD)システムを用いた提供法の確立」, 第 11 回日本医薬品情報学会総会・学術大会(東京, 2008 年 7 月), 2008 年.【査読有】

講演・口頭発表

澤田康文: 鳥栖・三養基薬剤師会勉強会、佐賀(1 月 22 日), 2008.【招待講演】

澤田康文: 第 15 回神奈川薬物相互作用研究会、神奈川(1 月 28 日), 2008.【招待講演】

玉木啓文, 五十嵐信智, 堀里子, 佐藤宏樹, 大谷壽一, 伊藤清美, 杉山清, 澤田康文:「ABCG2 (BCRP) の輸送機能に及ぼす各種健康食品の影響」, 日本薬学会第 128 年会(神奈川, 2008 年 3 月), 2008.

永井麻理枝, 佐藤宏樹, 堀里子, 大谷壽一, 藤井知行, 武谷雄二, 澤田康文:「ヒト胎盤灌流法を用いたパロキセチン胎盤透過性の解析」, 日本薬学会第 128 年会(神奈川, 2008 年 3 月), 2008.

三木晶子, 宇野幹子, 堀里子, 佐藤宏樹, 大谷壽一, 澤田康文:「後発医薬品への変更に伴う諸問題に関する処方医へのアンケート調査」, 日本薬学会第 128 年会(神奈川, 2008 年 3 月), 2008.

Hisakazu Ohtani, Zoe Barter, Mohsen Aarabi, Tsuyoshi Minematsu, Masatoshi Makuuchi, Yasufumi Sawada, Geoffrey Tucker, Amin Rostami-Hodjegan: "Mechanistic PBPK as an aid in identifying the size of covariate effects and design of POPPK studies: An example focusing on haematocrit as a determinant of tacrolimus clearance.", The American Conference on Pharmacometrics (ACoP), (Tucson, AZ, USA, March, 2008), 2008.
江頭あゆ子, 大谷壽一, 堀里子, 三木晶子, 澤田康文:「医薬品・食品などの併用による脂溶性ビタミン摂取評価 ASP システムの構築とその運用」, 第 62 回日本栄養・食糧学会大会(埼玉, 2008 年 4 月), 2008.

大谷壽一, 佐藤宏樹, 三木晶子, 堀里子, 澤田康文:「薬剤師を対象とした、一包化調剤の実態とそれに対する意識に関する調査」, 第 11 回日本医薬品情報学会総会・学術大会(東京, 2008 年 7 月), 2008.

田中真吾, 堀里子, 佐藤宏樹, 三木晶子, 大谷壽一, 澤田康文:「医薬品のおいに関する情報の認知、収集、提供の実態～薬剤師を対象としたアンケート調査から～」, 第 11 回日本医薬品情報学会総会・学術大会(東京, 2008 年 7 月), 2008.

朝比奈泰子, 堀里子, 三木晶子, 大谷壽一, 佐倉統, 澤田康文:「健康食品の有用性・安全性事例の効率的な収集および情報提供のための調査」, 第 11 回日本医薬品情報学会総会・学術大会(東京, 2008 年 7 月), 2008.

齋藤充生、長谷川隆一、澤田康文:「医療用医薬品添付文書に対する医師及び製薬企業の意識に関する比較解析」, 第 11 回日本医薬品情報学会総会・学術大会(東京, 2008 年 7 月), 2008.

田中真吾、大谷壽一、佐藤宏樹、三木晶子、堀里子、澤田康文:「ワルファリンとアミオダロン間の持続的相互作用に関する薬物動態・動力学的モデル解析」, 第 18 回日本医療薬学会年会(北海道, 2008 年 9 月), 2008.

四百刈敦子、三木晶子、堀里子、佐藤宏樹、大谷壽一、澤田康文:「イコサペント酸エチルカプセルによるチザニジン塩酸塩後発品の色調変化」, 第 18 回日本医療薬学会年会(北海道, 2008 年 9 月), 2008.

澤田康文、堀里子、三木晶子、大谷壽一:「「おまかせ医療」からの脱却を図る手段としての医薬品情報」, 第 7 回科学技術社会論学会年次研究大会・総会(大阪, 2008 年 11 月), 2008.

朝比奈泰子、堀里子、澤田康文:「健康食品の安全確保に向けた問題点抽出のための薬剤師, 消費者を対象とした健康食品ワークショップの実践」, 第 7 回科学技術社会論学会年次研究大会・総会(大阪, 2008 年 11 月), 2008.

須藤修・教授

研究テーマ(主たるもの)

ICTの発展とそれに伴う経済システムの変容に関する研究

北アメリカ、EU、中国、日本という 21 世グローバルシステムに大きな影響力を行使する地域経済システム (Regional Economic System) の動向を比較検討しながら、ICTの発展とそれぞれの経済構造との相互作用的な関係について、またICTの発展と経済活動のグローバル化との相互作用的な関係に関して研究を行い、ネットワークを基盤にした知識創造型社会経済システムを構想する。

センサーネットワークを用いた予防医療システムに関する研究

産・官・学の連携を促しながら、センサーネットワーク、高度データマイニング、グリッド・コンピューティングを組み合わせた ICT 基盤を用いて、糖尿病を中心とした生活習慣病の予防に関する実証実験を推進し、その実験と連動させて、産・官・学・民の共創を活性化させるセンサーネットワーク基盤地域コミュニティの形成とそのガバナンスに関する制度構想の研究を進めたいと考えている。そして、電子行政および医療情報基盤について、社会基盤としての ICT プラットフォームに関する政策科学的研究を推進する。

地球環境問題と持続可能な発展に関する研究

深刻化している地球環境破壊について検討するとともに、IT及びバイオテックの動向とネットワークを基盤にした経済活動の動向を関連させながら、環境保全型(循環型)の持続可能な地域経済発展について研究を行う。

研究業績(2008 年度)

論文・作品等

分担著書

須藤修:「『次世代産業の創造と共創へ向けて』担当箇所:「情報爆発とイノベーション」(51-73 ページ)」, 次世代産業ナビゲーターズフォーラム編, 次世代産業ナビゲーターズフォーラム, 2008 年.

須藤修:『『文部科学省科学研究費補助金特定領域研究平成 20 年度成果報告書・情報爆発時代に向けた新しい IT 基盤技術の研究』担当箇所:「情報爆発時代の知識社会形成ガバナンス」B01(1-10 ページ)』, 喜連川優・安達淳編, 国立情報研究所, 2008 年

須藤修・田中秀幸・後藤玲子・中島直樹・井上創造:『『文部科学省科学研究費補助金特定領域研究平成 20 年度成果報告書・情報爆発時代に向けた新しい IT 基盤技術の研究』担当箇所:「知識社会経済システムの共創的発展とそのガバナンスに関する研究」B01-00-01(1-13 ページ)』, 喜連川優・安達淳編, 国立情報研究所, 2008 年.

須藤修、他:『『希望ある未来社会実現のために今、何をすべきか』(1-182 ページ) 担当:共同研究および編集協力』, 三菱総合研究所未来社会研究チーム編, 三菱総合研究所, 2008 年.

須藤修:「次世代電子行政サービスの実現に向けたグランドデザイン」, 基盤等検討プロジェクトチーム編, 政府 IT 戦略本部, 2008 年.

須藤修:「次期情報セキュリティ基本計画に向けた第 1 次提言」, 情報セキュリティ政策会議基本計画検討委員会編, 政府情報セキュリティ政策会議, 2008 年.

須藤修・田中秀幸・後藤玲子・中島直樹・井上創造:『『情報爆発時代に向けた新しい IT 基盤技術の研究<平成 20 年度>』 担当箇所:「知識社会経済システムの共創的発展とそのガバナンスに関する研究」(1-99 ページ)』, 喜連川優・安達淳編, 国立情報学研究所, 2009 年.

須藤修:「財団法人地方自治情報センター共同調査研究事業報告書『地方公共団体における職務情報のデータベース化とその分析及び活用方法に関する調査研究』(1-128 ページ) 担当箇所:序章」, 財団法人地方自治情報センター編, 財団法人地方自治情報センター, 2009 年.

須藤修:「提言・サービスを科学することによるイノベーションに向けて(1-10 ページ)」, 東京大学産学連携本部サービスイノベーション研究会(委員長:武市正人)編, 東京大学産学連携本部, 2009 年.

須藤修:「報告書・サービスを科学することによるイノベーションに向けて(1-60 ページ)」, 東京大学産学連携本部サービスイノベーション研究会(委員長:武市正人)編, 東京大学産学連携本部, 2009 年.

須藤修、他:『『地域情報プラットフォームで実現する自治体行財政改革』(1-232 ページ) 担当箇所:第 1 部第 2 章「地域情報プラットフォームと次世代電子行政サービスによるオープン・イノベーション」(16-39 ページ)』, 財団法人全国地域情報化推進協会編, 自治日報社, 2009 年.

須藤修、他:「国民本位の電子行政サービスの確立(1-58 ページ)」, 日本経済団体連合会 21 世紀政策研究所電子行政モデル研究会(研究主幹:須藤修)編, 日本経済団体連合会 21 世紀政策研究所, 2009 年.

雑誌論文

Osamu Sudoh: “Administrative Evolution and Open Innovation”, Journal of Socio-Informatics (JASI & JSIS) 【招待論文】, Vol.1, No.1, pp.147-160, 2008 年. 【査読有】

秋草直之・須藤修:「経済教室国民本位の電子行政」, 日本経済新聞, pp.2008 年 12 月 30 日付き朝刊, 2008 年. 【一般向け】

Osamu Sudoh: “Open Innovation and e-Government”, The Japan Journal, Vol.5, No.2, pp.27, 2008 年. 【一般向け】

須藤修:「ICT・インターネット社会と企業環境」, 『商工ジャーナル』(日本商工経済研究所), Vol.34, No.7, pp.32-34, 2008 年. 【一般向け】

須藤修・後藤玲子・山本隆一・柴崎亮介:「情報爆発時代におけるオープン・イノベーションの活性化:ITによる社会基盤の刷新」,『情報処理』(社団法人情報処理学会), Vol.49, No.8, pp.919-925, 2008年。【査読有】

林隆史・後藤玲子・田中秀幸・須藤修:「電子自治体における SOA 導入の課題と可能性」,『日本社会情報学会 2008 年論文集』(日本社会情報学会), pp.332-337, 2008年。

須藤修・田中秀幸:「新たなサービスモデルの基盤」,『経済セミナー』(日本評論社), No.11 月, pp.43-47, 2008年。【一般向け】

須藤修:「次世代電子行政構想とオープン・イノベーション」,『行政&情報システム』(行政情報システム研究所), Vol.45, No.2(517), pp.30-35, 2008年。【一般向け】

須藤修:「電子自治体による行政サービスの高度化」,『JACIC 情報』(財団法人日本建設情報総合センター), Vol.23, No.4(92), pp.5-18, 2009年。【一般向け】

国際会議等

Osamu Sudoh, Sozo Inoue, Naoki Nakashima: "eService Innovation and Sensor Based Healthcare", Makoto Oya, Ryuya Uda, Chizuko Yasunobu eds., Towards Sustainable Society on Ubiquitous Networks, Springer-Verlag【招待論文】, pp.1-14, 2008。【査読有】

Yumiko Kinoshita, Osamu Sudoh: "Network-driven Context in User-driven Innovation", Makoto Oya, Ryuya Uda, Chizuko Yasunobu eds., Towards Sustainable Society on Ubiquitous Networks, Springer-Verlag【査読論文】, pp.245-252., 2008。【査読有】

Osamu Sudoh: "Japanese Project on Next Generation e-Government and Security", The Engineering Academy of Japan and The Royal Academy of Engineering eds., Proceeding of UK-Japan Symposium : Privacy and Security in the Information Society, Organizing Committee of UK-Japan Symposium, No.Nov. 2008, pp.44-55, 2008.

その他論文

須藤修、田中秀幸:「情報経済」,『現代用語の基礎知識 2009 年版』(自由国民社), (2008 年 11 月 14 日)664-669 ページ, 2008 年。【一般向け】

須藤修:「オープン・イノベーションに不可欠の情報流通基盤」,『JACIC 情報』, (2009 年 3 月)第 93 号、1 ページ, 2009 年。【一般向け】

後藤玲子、須藤修:「電子行政の成熟評価モデルに関する調査研究」,『電気通信普及財団研究報告第 23 号』, 財団法人電気通信普及財団(編), 2009 年。

講演・口頭発表

須藤修:「オープン・イノベーションと次世代電子政府構想」, Oracle 主催『Government and Defense Summit 2008 : A Forum on IT Innovations for Government Defense』(ホテルグランドヒル市ヶ谷、2008 年 5 月 13 日), 2008。【招待講演】【一般向け】

須藤修:「電子行政の方向と課題——次世代電子政府構想」, Data Base Security Consortium 主催『第三回 DBSC セミナー』(虎ノ門パストラルホテル、2008 年 5 月 13 日)【基調講演】, 2008。【招待講演】【一般向け】

Osamu Sudoh: "Innovation in Public Service and Medical Service", International Service Availability Symposium 2008 (ISAS2008), The University of Tokyo, May 21st, 2008, 2008。【招待講演】

齊藤実、大石吉彦、辰巳昌良、浦島充佳、関口和一、須藤修:「テロとその対策の動向と国際協調」, NPO セキュアなデジタル社会を推進する会主催『デジタル社会推進シンポジウム 2008』(国連大学ウタントホール、2008年6月2日), 2008.【一般向け】

須藤修:「情報化が拓く新たな地域の未来」, 福島県高度情報化推進協議会主催『情報通信月間特別講演会』(ホテルサンルートプラザ福島、2008年6月5日)【基調講演】、2008.【招待講演】【一般向け】

須藤修:「次世代電子行政サービスと地域発展——オープン・イノベーションの基盤形成」, 財団法人全国地域情報化推進協会主催『平成20年度 APPLIC 講演会』(全国町村会館、2008年6月12日)【基調講演】、2008.【招待講演】【一般向け】

須藤修:「Future Internet and Open Innovation」, 日本社会情報学会主催『第112回定例研究会』(東京国際フォーラム、2008年6月21日), 2008.

遠藤薫、福田豊、富山慶典、島田達巳、廣松毅、須藤修、木村忠正:「討論・社会情報学の最前線とその行方」, 日本社会情報学会主催『第112回定例研究会』(東京国際フォーラム、2008年6月21日), 2008.

須藤修:「オンライン利用拡大に向けて」, 政府『オンライン利用拡大推進団第1回会合』(政府内閣府本府講堂、2008年6月24日), 2008.【一般向け】

須藤修:「次世代電子行政サービス——オープン・イノベーションの始動」, 『経営情報学会<官の情報システム特設研究会>』(明治大学駿河台キャンパス研究棟、2008年6月24日), 2008.【一般向け】

須藤修:「次世代電子サービスと社会発展」, 日本マーケティングサービス協会主催『日本マーケティングサービス協会講演会』(メルパルク東京、2008年7月4日), 2008.【招待講演】【一般向け】

野村昭文・大久保和孝・郷原信郎・須藤修・清正登喜夫:「内部統制・コンプライアンス・CSRの現状認識と今後の課題」, 社団法人日本経営協会主催『第60回 CSRコンプライアンス・ソリューション 2008』(東京ビッグサイト、2008年7月16日), 2008.【一般向け】

須藤修:「情報爆発時代における知識社会形成ガバナンス」, 文部科学省科学研究費特定領域研究「情報爆発時代に向けた新しいIT基盤技術の研究」(研究代表者:喜連川優)主催『平成20年度文部科学省科学研究費特定領域研究「情報爆発時代に向けた新しいIT基盤技術の研究」領域全体会議』(東京大学医学部鉄門講堂、2008年7月23日), 2008.

須藤修:「知識社会経済システムの競争的発展とそのガバナンスに関する研究」, 文部科学省科学研究費特定領域研究「情報爆発時代に向けた新しいIT基盤技術の研究」(研究代表者:喜連川優)主催『平成20年度文部科学省科学研究費特定領域研究「情報爆発時代に向けた新しいIT基盤技術の研究」領域全体会議』(東京大学医学部鉄門講堂、2008年7月24日), 2008.

須藤修:「オープン・イノベーションと次世代電子政府構想」, 経済団体連合会館(2008年7月29日), 2008.【一般向け】

須藤修:「オープン・イノベーションと電子政府最新動向」, 浜松市主催『はままつユビキタシティ推進フォーラム講演会』(浜松市地域情報センター、2008年7月31日), 2008.【招待講演】【一般向け】

須藤修:「電子自治体と地方行政の展開」, 自治大学校主催『自治体職員研修第1部課程第110期』(総務省自治大学校、2008年8月5日及び7日), 2008.【一般向け】

須藤修:「次期情報セキュリティ基本計画に向けた第1次提言について」, 日本経済新聞社デジタルコア主催『成熟した情報セキュリティ立国の実現に向けて』(大手町サンケイプラザ、2008年9月9日)【基調講演】、2008.【招待講演】【一般向け】

須藤修:「オープン・イノベーションと次世代電子行政構想—データ共有による新たな社会システムの構想」, LCDM 推進フォーラム主催『LCDM 推進フォーラム・オープンセミナー』(全国都市センターホテル、2008年9月10日)【基調講演】、2008. 【一般向け】

名和小太郎・正村俊之・須藤修・遠藤薫:「リスク社会における社会情報学」, 『2008年日本社会情報学会(JASI&JSIS)合同研究大会』(東京大学、2008年9月13日)、2008.

林隆史(報告者)・後藤玲子・田中秀幸・須藤修:「電子自治体におけるSOA導入の課題と可能性」, 『2008年日本社会情報学会(JASI&JSIS)合同研究大会』(東京大学、2008年9月14日)、2008.

Osamu Sudoh (Speaker), Sozo Inoue (Speaker), Naoki Nakashima (Speaker): “eService Innovation and Sensor Based Healthcare”, The 8th IFIP Conference on e-Business, e-Services, and e-Society, I3E 2008, Sep. 24, 2008, National Center of Sciences, Tokyo, Japan, 2008. 【招待講演】

Yumiko Kinoshita (Speaker), Osamu Sudoh: “Network-driven Context in User-driven Innovation”, The 8th IFIP Conference on e-Business, e-Services, and e-Society, I3E 2008, Sep. 25, 2008, National Center of Sciences, Tokyo, Japan, 2008.

須藤修:「電子自治体の構築と今後の展望」, 市町村職員中央研修所主催『電子自治体構築の情報政策②』(市町村アカデミー、2008年9月30日)、2008. 【一般向け】

須藤修:「オープン・イノベーションとSOA基盤による新たな社会発展」, 独立行政法人情報処理推進機構主催『情報月間記念式典特別行事』(ANA インターコンチネンタルホテル、2008年10月1日)、2008. 【招待講演】【一般向け】

須藤修:「次世代ネット社会とオープン・イノベーション」, 『情報文化学会第16回全国大会』(東京大学大学院情報学環福武ホール、2008年10月4日)【基調講演】、2008. 【一般向け】

須藤修:「次世代電子行政構想とオープン・イノベーション」, 社団法人行政情報システム研究所主催『平成20年度電子政府オンライン申請体験フェア』(東京国際フォーラム、2008年10月16日)【基調講演】、2008. 【招待講演】【一般向け】

須藤修:「世界から見た日本の電子自治体」, 全国地域情報化推進セミナー2008in 浜松実行委員会主催『全国地域情報化推進セミナー2008in 浜松』(アクティシティ浜松、2008年10月16日)【基調講演】、2008. 【招待講演】

須藤修:「次世代電子行政サービス構想と自治体への期待」, マイクロソフト主催『第2回電子自治体戦略会議』(東京ビックサイト、2008年10月21日)、2008. 【招待講演】【一般向け】

須藤修:「電子自治体」, 自治大学校主催『第3部課程第95期都道府県・指定都市コース研修』(総務省自治大学校、2008年10月22日)、2008.

Osamu Sudoh: “Digital Development and Sustainable Development”, Waseda University org., The 3rd International Forum : ICT, CIO, environment and e-Governance 2008, Waseda University, Nor. 7th, 2008, 2008.

Kusakabe, Sudoh, Pairash, Suhono, Magno, Tien: “Panel Discussion: Japan and ASEAN for Strengthening Partnership”, The 3rd International Forum : ICT, CIO, environment and e-Governance 2008, Waseda University, Nor. 7th, 2008, 2008.

Osamu Sudoh: “Japanese Project on Next Generation e-Government and Security”, The Engineering Academy of Japan and The Royal Academy of Engineering org., UK-Japan Symposium : Privacy and

Security in the Information Society, British Embassy Tokyo New Hall, November 11th, 2008, 2008.【招待講演】

須藤修:「日韓におけるオンライン利用促進の取組み」, 日本政府・韓国政府主催『第1回日韓電子自治体政策交流会議』(財務省三田共用会議所、2008年11月20日), 2008.【一般向け】

須藤修:「eGovの動向と次世代電子行政サービス構想」, 政府内閣官房『電子政府ガイドライン作成検討会第2回セキュリティ分科会』(金融庁、2008年11月21日), 2008.【一般向け】

須藤修:「eGov主要動向と官民連携 Cloud Computing」, 沖電気工業株式会社経営諮問委員会(沖電気本社、2008年11月26日), 2008.【一般向け】

須藤修:「次世代電子行政サービスとセキュリティーデータベース疎結合と官民連携」, Open ID ファウンデーション・ジャパン主催『第1回 Open ID Biz Day』(東京ミッドタウン、2008年12月12日), 2008.【一般向け】

須藤修:「次世代電子政府構想と Cloud Computing」, 日本社会情報学会(JASI)主催『第54回情報政策研究会』(中央大学駿河台記念館、2009年1月15日), 2008.【一般向け】

須藤修:「情報爆発時代における知識社会形成ガバナンス」, 文部科学省科学研究費特定領域研究「情報爆発時代に向けた新しいIT基盤技術の研究」(研究代表者:喜連川優)主催『文部科学省科学研究費特定領域研究「情報爆発時代に向けた新しいIT基盤技術の研究」平成20年度成果発表会』(学術総合センター、2009年1月20日), 2008.

須藤修:「知識社会経済システムの競争的発展とそのガバナンスに関する研究」, 文部科学省科学研究費特定領域研究「情報爆発時代に向けた新しいIT基盤技術の研究」(研究代表者:喜連川優)主催『文部科学省科学研究費特定領域研究「情報爆発時代に向けた新しいIT基盤技術の研究」平成20年度成果発表会』(学術総合センター、2009年1月21日), 2008.

須藤修:「ASP・SaaSとクラウドコンピューティング」, 高知県電子自治体推進協議会主催『共同アウトソーシング講演会』(高知新阪急ホテル、2009年2月3日)【基調講演】、2008.【招待講演】

須藤修:「情報セキュリティ施策の動向」, 文部科学省主催『平成20年度情報セキュリティセミナー』(文部科学省講堂、2009年2月6日)【基調講演】、2008.【招待講演】

須藤修:「国民本位の電子行政の確立」, 日本経団連21世紀政策研究所主催『電子行政の未来—ITによる行政サービスの刷新—』(経団連会館国際会議場、2009年2月16日)【基調講演】、2008.【一般向け】

須藤修、南俊行、須藤俊明、遠藤紘一、榊俊吾、後藤玲子:「ワンストップ電子行政サービスの実現に向けて」, 日本経団連21世紀政策研究所主催『電子行政の未来—ITによる行政サービスの刷新—』(経団連会館国際会議場、2009年2月16日), 2008.

須藤修、喜連川優、重木昭信、橋田浩一、佐藤洋一:「電子政府とITイノベーション」, 日本経団連21世紀政策研究所主催『電子行政の未来—ITによる行政サービスの刷新—』(経団連会館国際会議場、2009年2月16日), 2008.

須藤修:「次世代電子行政サービスの動向と自治体への期待」, マイクロソフト主催『第三回電子自治体戦略会議』(東京ステーションコンファレンスセンター、2009年2月17日)【基調講演】、2008.【招待講演】【一般向け】

須藤修:「データ共有基盤整備の必要性—次世代電子行政サービスの核心」, LCDM 推進フォーラム主催『オープンセミナー』(都市センターホテル、2009年2月18日)【基調講演】、2008.【一般向け】

須藤修:「次世代電子行政サービスと自治体」, 上海市訪日調査団講演(東京大学大学院情報学環本館、2009年2月19日), 2008.【一般向け】

須藤修:「電子自治体—今後の展望」, 総務省自治大学校講演(総務省自治大学校、2009年3月3日), 2008.

須藤修:「IT 社会基盤の革新とサービスイノベーション」, 東京大学産学連携協議会運営本部主催『サービスイノベーション』(東京大学大学院情報学環・福武ホール、2009年3月9日), 2008.【招待講演】

須藤修:「次世代電子行政サービスとイノベーション」, 国際 CIO 学会(東京大学大学院情報学環・福武ホール、2009年3月25日)【基調講演】, 2008.

須藤修:「<期待価値>と<知覚価値>の差なきサービスを」, 『LASDEC』第 38 巻第 4 号(財団法人地方自治情報センター、2008年4月)4-8 ページ, 2008.【一般向け】

新聞・報道

須藤修:「電子地方政府モデル策定」, 『東京新聞』2008年4月9日付け夕刊, 2008.

須藤修、山本隆一、マイシャル・モーリー、大井川和彦:「医療IT活用とCIOの役割を探る」, 『日本経済新聞』2008年4月15日付け朝刊, 2008.

須藤修:「サービス価値を可視化して、分りやすい行政を」, 『LASDEC』第 38 巻第 5 号(財団法人地方自治情報センター、2008年5月)4-8 ページ, 2008.

古川一夫、渡辺捷昭、須藤修、千葉光行、遠藤紘一:「先進的な電子経済・社会の構築に向けて—ICTを梃子にした行政と経済の刷新」, 『経済 Trend』(日本経済団体連合会)第 56 巻第 6 号(2008年6月), 2008.

須藤修:「国際 CIO 学会でも、電子政府の推進をテーマにした提言や講演が実施されました」, 『The Edge』2008年7月号, 2008.

須藤修:「7月からシステム統合—三菱東京 UFJ 銀緊張」, 『日本経済新聞』2008年7月3日付け朝刊, 2008.

須藤修:「次世代電子行政サービスが目指す姿」, 『CyberGovernment Link』(日立製作所、2008年8月5日), 2008.

須藤修:「技術面の課題」, 『CyberGovernment Link』(日立製作所、2008年8月15日), 2008.

須藤修:「運用や制度の課題」, 『CyberGovernment Link』(日立製作所、2008年8月25日), 2008.

須藤修:「次世代電子行政サービスの実現に向けての動き」, 『CyberGovernment Link』(日立製作所、2008年9月5日), 2008.

須藤修:「地域情報化システム技術の発展を目指した国際会議 I3E2008 の開催—第 8 回電子ビジネス・電子サービス・電子社会に関する情報処理国際連合会議」, 『情報通信ジャーナル』第 26 巻第 11 号(財団法人電気通信振興会、2008年11月号)44-45 ページ, 2008.

須藤修:「文科省と防衛省、オンライン申請システムを停止へ」, 『IT Pro』(日経BP社、2008年11月20日), 2008.

日下部元雄氏、須藤修博士、バイラッシュ博士、スホノ博士、マグノ博士、ティン博士:「日本とASEANの連携」, 『日本経済新聞』2008年12月4日付き朝刊, 2008.

須藤修:「OpenID ファウンデーションが第 1 回会合、ヤフーが今後の活用構想を講演」、『IT Pro』(日経BP社、2008 年 12 月 12 日), 2008.

須藤修:「ICT キーパーソンズ 02:Part1 電子政府に求められるサービスや機能とは」,
<http://www.ntt.com/ict/trend/article/keypersons/sudou/>, 2008.

須藤修:「ICT キーパーソンズ 02:Part2 日本が抱える ICT の課題と、その打開策とは」,
<http://www.ntt.com/ict/trend/article/keypersons/sudou/>, 2008.

須藤修:「ICT キーパーソンズ 02:Part3 日本の ICT の将来像とは」,
<http://www.ntt.com/ict/trend/article/keypersons/sudou/>, 2008.

須藤修:「センサーネットワーク—日常生活も助言可能に」,『日経産業新聞』2009 年 2 月 17 日朝刊, 2008.

須藤修:「国家 IT 戦略の専門調査会、「個人 ID」や「データ連携」が論点に」,『IT Pro』(日経BP社、2009 年 2 月 17 日), 2008.

須藤修:「今後の電子行政のあり方議論—21 世紀政策研究所、シンポジウム開く」,『日本経団連タイムズ』2009 年 3 月 4 日, 2008.

須藤修:「IT ガバナンスと CIO の役割」,『日経ビジネス』(日本経済新聞社)2008 年 12 月 22 日・29 日合併号, 2008.

受賞・特許

受賞

須藤修: 総務大臣表彰「総務大臣表彰」, 総務省, 2008 年.

鷹野澄・教授

研究テーマ(主たるもの)

IT を活用し情報で人の命と暮らしを守るという研究

地震災害など大規模災害に対して、情報通信技術(IT)を活用して情報を適切に提供して、人々の命と暮らしを守ることに研究します。

建物や大型構造物の構造物ヘルスマニタリングの研究

建物や大型構造物の劣化などの健康診断(ヘルスマニタリング)のために、IT 強震計などのセンサーを活用して技術開発や応用の研究を進めています。

緊急地震速報などの即時的地震情報システムに関する研究

気象庁の緊急地震速報を活用するためには、利用者側でどのような対策をしたらいいのか、そのハード面での対策の研究からソフト面での取り組みなどについて研究します。

研究業績(2008 年度)

論文・作品等

雑誌論文

鷹野澄:「地震災害軽減を目指したセンサネットワーク—IT 強震計による取り組みについて—」, 電子情報通信学会誌, Vol.92, No.3, pp.209-217, 2008 年.

鷹野澄:「IT 強震計が目指すもの—地震災害軽減を目指した新しいツールへの期待と課題—」, 災害情報, No.6, pp.4-6, 2008 年.

その他論文

中村功・鷹野澄・鉢嶺猛・関谷直也・天野篤・原正一郎・山本博昭:「新防災情報システムはどこまで使えるか」, 災害情報, 2008 年.

平田直・笠原敬司・酒井慎一・森田裕一・ト部卓・鷹野澄・飯高隆・鶴岡弘・五十嵐俊博・加藤愛太郎・中川茂樹・佐々木俊二・川北優子:「3. 1. 1 中感度地震観測によるプレート構造調査」, 首都直下地震防災・減殺特別プロジェクト成果報告書, 10-65, 2008 年.

鷹野澄・ト部卓・鶴岡弘・中川茂樹・平田直・酒井慎一・三浦哲・松澤暢・岡田知己・中島淳一・内田直希・中山貴史・平原聡・大見士朗・伊藤武男・中道治久・植平賢司・松島健・一柳昌義・高田真秀・山口照寛・高橋浩晃・笠原稔・須田直樹・小原一成・関根秀太郎・松村稔・針生義勝:「JGN2 の高速広域レイヤー2網を用いたリアルタイム地震観測波形データ交換システムの構築研究プロジェクトについて」, 地震学会ニュースレター, vol.19, No.6, pp10-12, 2008 年.

講演・口頭発表

鷹野澄・鶴岡弘・ト部卓・中川茂樹・一柳昌義・高田真秀・山口照寛・高橋浩晃・笠原稔・小菅正裕・渡邊和俊・内田直希・平原聡・中山貴史・伊藤武男・中道治久・山中佳子・大見士朗・三浦勉・加納靖之・須田直樹・植平賢司・内田和也・馬越孝道・八木原寛・久保篤規・坪井誠司・渡邊智毅:「SINET3 広域 L2 網による次世代全国地震データ流通基盤システムの構築」, 日本地球惑星科学連合2008年大会, 2008.

鷹野澄・池田泰久:「建物用 IT 強震計で見た耐震補強前後の RC 造建物の地震時応答変化:剛性と固有周期の変化」, 日本地球惑星科学連合2008年大会, 2008.

鷹野澄:「SINET3 広域 L2 網による次世代全国地震データ流通基盤システムの構築」, 国立情報学研究所平成 19 年度 CSI 委託事業報告交流会(ネットワーク・e-Science 系), 2008.

Takano K., N. Hirata, T. Urabe, M. Kasahara, M. Kosuga, S. Miura, T. Ito, Y. Kano, S. Ohmi, K. Uehira: "The JDxnet: Japan Data eXchange network for earthquake observation data", International Symposium: Fifty Years after IGY - Modern Information Technologies and Earth and Solar Sciences -, 2008. 【招待講演】
鷹野澄:「一般向け緊急地震速報の情報提供方法の提言」, 日本災害情報学会第 10 回学会大会, 2008.

池田泰久・鷹野澄・濱本卓司・崔井圭:「建物用 IT 強震計による耐震補強前後の振動観測:常時微動観測との比較」, 日本地震工学会大会—2008, 2008.

Toriumi S., K.Takano: "Discussion on the Framework of Onsite Earthquake Early Warning System for the IT Strong Motion Seismometer", 7th General Assembly of Asian Seismological Commission,, 2008.

Takano K., Y. Ikeda: "On the Structural Health Monitoring by the IT Strong Motion seismometer System for Buildings", 7th General Assembly of Asian Seismological Commission, 2008.

鷹野澄, 鶴岡弘, ト部卓, 中川茂樹, 一柳昌義, 高田真秀, 山口照寛, 高橋浩晃, 笠原稔, 小菅正裕, 渡邊和俊, 三浦哲, 松澤暢, 岡田知己, 中島淳一, 内田直希, 平原聡, 中山貴史, 伊藤武男, 中道治久, 山中佳子, 山岡耕春, 山崎文人, 加納靖之, 大見士朗, 三浦勉, 西上欽也, 須田直樹, 植平賢司, 内田和也, 馬越

孝道, 八木原寛, 久保篤規, 坪井誠司, 渡邊智毅, 小原一成, 関根秀太郎, 松村稔, 針生義勝:「広域 L2 網を用いた全国地震観測データ流通ネットワーク JDXnet の構築」, 広帯域ネットワーク利用に関するワークショップ(ADVNET2008), 2008.【招待講演】

鷹野澄:「大規模自然災害から大学の人と機能を護るには」, 東京大学「安全の日」安全講演会, 2008.【一般向け】

鷹野澄:「首都直下地震の想定被害を軽減するには-IT 強震計による取り組みについて」, 第2回地域防災情報シンポジウム, 2008.【一般向け】

鷹野澄:「VPLS を用いた全国地震観測データ流通ネットワーク」, 学術情報ネットワークノード担当者会議, 2008.【招待講演】

新聞・報道

鷹野澄(コメント):「気象庁の震度速報より早い? 「P2P 地震情報」が注目される理由」, R25, 2008.

鷹野澄(引用):「産業春秋」, 日刊工業新聞, 2008.

田中明彦・教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績 (2008 年度)

論文・作品等

著書等

田中明彦:「ポスト・クライシスの世界」, 日本経済新聞出版社, 2009 年.

分担著書

田中明彦:「対日関係」, 中国総覧編集委員会編, ぎょうせい, 2008 年.

田中明彦:「日本の国際政治学第 1 巻学としての国際政治序章日本の国際政治学—「棲み分け」を超えて」, 日本国際政治学会編, 有斐閣, 2009 年.

雑誌論文

田中明彦:「なぜ G8 サミットが重要なのか」, FORESIGHT, No.2008 年 7 月号, pp.27 頁, 2007 年.【一般向け】

田中明彦:「世界は中国と共存できるか」, 中央公論, No.8 月, pp.26-37 頁, 2008 年.【一般向け】

田中明彦:「政治家や外交官にもすすめたい『経国美談』」, FORESIGHT, No.2008 年 9 月号, 2008 年.【一般向け】

田中明彦:“Can the World Coexist with China?”, Janan Echo, 2008 年.【一般向け】

田中明彦:「金融危機の「未成熟大国」への影響を注視せよ」, FORESIGHT, No.2008年11月号, pp.27頁, 2008年.【一般向け】

田中明彦:「『第20回アジア・太平洋賞』受賞作の講評大賞『台湾の政治』」, アジア時報, No.11月, pp.33-34頁, 2008年.【一般向け】

田中明彦:「『第17回アジア・太平洋賞』受賞作の講評特別賞『不平等国家中国』」, アジア時報, No.11月, pp.36-37頁, 2008年.【一般向け】

田中明彦:「国際政治は地球環境を解決できるか」, imidas SPECIAL 世界と日本の地勢を読み解く時事力, pp.28-29頁, 2008年.【一般向け】

田中明彦:「第30回サントリー学芸賞選評」, 第30回サントリー学芸賞, 2008年.【一般向け】

田中明彦:「アメリカ大統領選挙後の世界と日本」, 経団連クラブ会報 2008, 2008年.【一般向け】

Akihiko Tanaka: "Trilateral Strategic Dialogue: a Japanese Perspective", The National Bureau of Asian Research, pp.33-39, 2008年.

その他論文

田中明彦:「東亜区域合作的政治過程与日本的東亜政策」, 東亜一体化的進展及其区域合作的経路, 2008年.

Akihiko Tanaka: "The Yasukuni Issue and Japan", EAST ASIA, 2008年.

Akihiko Tanaka: "Japanese Domestic Politics and East Asian Policy", 亜太研究論壇, 2008年.

講演・口頭発表

田中明彦:「東アジア共同体:経緯と問題点」, 東アジア共同体構想の現在, 2008.【招待講演】

田中明彦:「現代東アジアの国際政治:理論的課題と政策展望」, 清華大学における東大ウィーク, 2008.【一般向け】

田中明彦:「アジアのなかの日本」, 「神奈川 21世紀の会」第58回講演会(横浜), 2008.【招待講演】

Akihiko Tanaka: "Visions and Tasks for Trilateral Cooperation: Korea, China and Japan", The First Trilateral Cooperation Forum, Jeju Island, Korea, 2008.【招待講演】

田中明彦:「グローバリゼーションとその衝撃」, 同志社大学アメリカ研究所創設50周年記念国際シンポジウム(京都・同志社大学), 2008.【招待講演】

Akihiko Tanaka: "Election Politics in the US, Taiwan and South Korea and Their Strategic Implications(チエアー)", East Asian Security Roundtable Series: "Election Year, Domestic Factors, and Security Dynamics in East Asia", Beijing, 2008.【招待講演】

Akihiko Tanaka: "Domestic Politics in Japan", East Asian Security Roundtable Series: "Election Year, Domestic Factors, and Security Dynamics in East Asia", Beijing, 2008.【招待講演】

Akihiko Tanaka: "Nationalism in Japan", East Asian Security Roundtable Series: "Election Year, Domestic Factors, and Security Dynamics in East Asia", Beijing, 2008.【招待講演】

田中明彦:「日本のすがた(パネルディスカッション)」, 東京大学・読売新聞環境シンポジウム「2050 その時地球は」(東京大学安田講堂), 2008.

田中明彦:「アジア地域の原子力利用と日本の貢献(基調講演)」, 原子力平和利用と核不拡散にかかわる国際フォーラム(東京・学士会館), 2008.【招待講演】

田中明彦:「Chinese and Japanese Perspectives on Regional Cooperation(チエアー)」, Regional Cooperation in the Yellow Sea Basin: Mapping a West Coast Golden Belt(インチョン・韓国), 2008.【招待講演】

田中明彦:“Important Steps for Strengthening Regional and International Institutions”, Asia’s Strategic Challenges: In Search of a Common Agenda, Tokyo, 2008.【招待講演】

Akihiko Tanaka: “A Japanese View on the Collaborative Research in Humanities and Social Sciences among East-Asian Countries”, International Symposium on Research Policy, Seoul 2008(ソウル), 2008.【招待講演】

田中明彦:「世界の平和と発展に協力する外交」, 平成 20 年度官民幹部合同セミナー(神奈川県三浦郡葉山町), 2008.【招待講演】

Akihiko Tanaka:「Japan’s Soft Power and Its Limitations」, Power of Knowledge and Knowledge of Power: Soft Power & Asia-Europe Partnership(ソウル), 2008.【招待講演】

田中明彦:「安全保障:9.11 後の国際安全保障の新たなスキーム」, 世界的課題に立ち向かう日本とメキシコ日墨修好通商航海条約締結 120 周年記念シンポジウム(東京大学小柴ホール), 2008.

田中明彦:「米大統領選挙後の世界と日本」, 経団連クラブ第 431 回会員昼食会(東京), 2008.【招待講演】

田中明彦:「米国時期政権の外交政策の見通しと日米の課題」, アメリカはどう変わるのか—米国次期政権の経済・外交政策の課題と日米関係(東京), 2008.【招待講演】

田中明彦:「米新政権とアジア」, 霞山会午餐会(東京), 2008.【招待講演】

田中明彦:「東アジアの国際政治と日本」, DIJ フォーラム(東京), 2008.【招待講演】

田中明彦:「最近の国際情勢と日本外交」, 第 99 回平成クラブ講演会(名古屋), 2008.【招待講演】

Akihiko Tanaka: “The U.S.–Japan Partnership: an Agenda for Change”, The U.S.–Japan Partnership : an Agenda for Change, New York, 2008.【招待講演】

Akihiko Tanaka:「Prospects for Security Cooperation」, Multilateral Security Architecture in East Asia, Princeton, 2008.【招待講演】

田中明彦:「日本の国際安全保障活動」, 第一回安全保障シンポジウム(東京), 2008.【招待講演】

新聞・報道

田中明彦:「コラム」, 中央日報, 2008.

田中明彦:「一つに向かう地域を俯瞰激動の30年から針路探る」, 毎日新聞, 2008.

田中明彦:「緊密な韓米日関係確認の機会」, 中央日報, 2008.

田中明彦:「衝突と共感」, 中央日報, 2008.

田中明彦:「「21世紀の会」友好関係の構築を「アジアのなかの日本」田中・東大教授が講演」, 毎日新聞, 2008.

田中明彦:「始動する福田外交」, 中央日報, 2008.

田中明彦:「環境、世界の共通課題に」, 読売新聞, 2008.

田中明彦:「環境シンポジウム「2050その時地球は」環境、世界の共通課題に」, 読売新聞, 2008.

田中明彦:「北京五輪と中国の責任感」, 中央日報, 2008.

田中明彦:「「温暖化」で指導力発揮」, 中国新聞, 2008.

田中明彦:「日本の問題解決力重要に」, 信濃毎日新聞, 2008.

田中明彦:「日本の采配近隣外交前進へ道筋」, 静岡新聞, 2008.

田中明彦:「多国間外交存在感示す」, 河北新聞, 2008.

田中明彦:「民主主義国同士は戦争はしない?」, 中央日報, 2008.

田中明彦:「福田首相退陣談論給油継続説得力が必要」, 読売新聞, 2008.

田中明彦:「対立あおる善悪二元論」, 東京新聞, 2008.

田中明彦:「早い開催が望まれる韓日中首脳会談」, 中央日報, 2008.

田中明彦:「米大統領選座談会揺らぐ米、「変革」選ぶ」, 日本経済新聞, 2008.

田中明彦:「第20回アジア・太平洋賞特別賞不平等国家中国印象論を超える入門書」, 毎日新聞, 2008.

田中明彦:「日米中の対話を提言オバマ政権めぐりNYでシンポ」, 朝日新聞, 2008.

Akihiko Tanaka:「Obama victory opens door to broader relations」, THE JAPAN TIMES, 2008.

田中明彦:「シンポジウム「オバマ政権と日米関係」信頼強化へ日米中の対話不可欠」, 朝日新聞, 2008.

田中明彦:「コラム 20世紀の大恐慌の教訓」, 中央日報, 2009.

田中明彦:「経済教室・米国の”変革”(上) — どうなる世界の枠組み G20など「拡大 G8」柱に」, 日本経済新聞, 2009.

田中淳・教授

研究テーマ(主たるもの)

災害情報論

災害による被害を軽減するために求められる災害情報の要件を、住民や市町村等利用者側の意志決定過程に関する実証研究の知見に基づき、実証的・理論的に解明し、具体的な提言に結び付けている。災害期の

警報や避難勧告等、復旧・復興期の生活再建情報、事前の防災意識向上や防災教育など、各段階での課題を対象とする。

災害弱者対策

阪神・淡路大震災で高齢者や障害者に被害が大きかったことやハリケーン・カトリーナにおける人種や所得によって被害が異なったように、災害による影響は社会集団によって差違が生じる。この際は、地震や火山噴火、あるいは爆発と行った外力による被害の程度に留まらず、避難のしやすさや生活再建の円滑さなど長期的な側面を持つ。災害の過程で生じる社会格差の視座から、研究を進めている。

集合行動論

20世紀初頭に誕生した集合行動論は、パニックや都市暴動、社会運動など多様な創発的社会行動を理論的に分析してきた。ある意味、災害の社会学的研究もまたその流れをくんでいる。日常の制度や組織、役割など社会秩序が、災害により修正を余儀なくされるためである。災害研究の理論的バックグラウンドとして、集合行動論ならびにその批判的研究として登場した集合行為論の研究を行っている。

論文・作品等

著書

吉井博明・田中淳:「災害危機管理論入門」, 弘文堂, 2008年.

田中淳・吉井博明:「災害情報論入門」, 弘文堂, 2008年.

田中淳・サーベイリサーチセンター:「社会調査で見る災害復興」, 弘文堂, 2009年.

雑誌論文

田中淳:「都市型水害への自治体対応」, 自治体危機管理研究, Vol.Vol.2, pp.17-25, 2008年.

国際会議等

Atshushi Tanaka: "Disaster and Information - What can we do for the survivors?", 2008 GC Forum in Shanghai, China, 2008.

講演・口頭発表

田中淳:「災害情報に求められる時間的・空間的解像度」, 第2回巨大災害研究セミナー, 2008.【招待講演】

田中淳:「総合防災情報研究と事業・業務継続計画について」, 社会情報学会(公開ワークショップ「総合防災情報研究と事業・業務継続計画」, 2008.

田中淳:「災害を受けた人間の心理と行動モデル」, 土木学会・市民の視点で地震防災を考える小委員会, 2009.【招待講演】

新聞・報道

一般:「災害と情報」, NHK, 2008.

西垣通・教授

研究テーマ(主たるもの)

基礎情報学

生命情報から社会情報、機械情報にわたる情報学の基礎的な検討。マトウラーナ／ヴァレラのオートポイエーシス論、ホフマイヤーの生命記号論、ルーマンの理論社会学、グレイザーズフェルドのラディカル構成主義などを批判的に摂取しつつ、情報メディア思想を理論的に検討する。

インターネット社会論

基礎情報学の応用として、21世紀インターネット社会における諸問題(企業組織、オンライン共同体、情報倫理、サイバースペース心理など)を理論的かつ実践的に検討する。

研究業績(2008年度)

論文・作品等

著書

西垣通:「続基礎情報学」, NTT出版, 2008年.

西垣通:「コズミック・マインド」, 岩波書店, 2008年.

分担著書

西垣通:「自然と人工の世界(『岩波講座「哲学」第9巻、科学／技術の哲学』」, 伊藤邦武、野家啓一ほか編, 岩波書店, 2008年.

西垣通:「システム理論(『歴史学事典第15巻、コミュニケーション』)」, 樺山紘一編, 弘文堂, 2008年.

雑誌論文

西垣通:「心と脳の情報学」, 大航海, No.69, pp.52-59, 2008年.【一般向け】

その他論文

西垣通:「意味作用の情報哲学」, ログスドン, 2008年.【一般向け】

講演・口頭発表

西垣通:「ネット社会のゆくえ」, 日本経団連フォーラム21, 2008.【招待講演】【一般向け】

西垣通:「言語と意識と情報」, 言語処理学会第15回年次大会, 2008.【招待講演】

新聞・報道

西垣通:「近代人と異なる「ネット人格」」, 産業経済新聞, 2008.

西垣通:「小説でみせる情報社会の行方」, 日本経済新聞, 2008.

西垣通:「フェルメールと私」, 朝日新聞, 2008.

西垣通:「ネット情報真偽は」, 読売新聞, 2008

橋元良明・教授

研究テーマ(主たるもの)

情報行動に関する社会心理学的分析

メディア利用やコミュニケーション行動などが、社会変化に伴ってどのような変容を遂げているのか、そうした情報行動のパターンを規定する要因は何か、等について社会心理学的観点から実証的に分析している

メディアの効果、とくに青少年に及ぼす影響の研究

テレビやインターネットなどが社会生活や世論形成過程、青少年の精神的発達に及ぼす影響、携帯電話などの新しいコミュニケーション・ツールが対人関係、家族関係に及ぼす影響などを調査等の実証的手法で分析している。

言語的コミュニケーションの了解・伝達過程、変容に関する研究

言語的コミュニケーションに関し、おもに語用論的視点から了解・伝達構造を研究している。また、日本人の言語行動が、社会システムの変化とどのようにかかわっているか、あるいはマスメディアや新しいメディア・ツールの普及によってどのような影響をこうむっているのかに関する研究をおこなっている。

研究業績 (2008 年度)

分担著書

橋元良明:「よくわかるメディア・スタディーズ」, 伊藤守編, ミネルヴァ書房, 2009 年。

雑誌論文

橋元良明:「青少年にとってテレビの何が問題なのか」, 『月刊民放』, Vol.2009, No.2, pp.12-16, 2009 年。【一般向け】

橋元良明:「メディア・カニバリズムに関する「在学時間相応配分説」再考」, 『東京大学大学院情報学環紀要調査研究編』, Vol.25, pp.1-11, 2009 年。【査読有】

橋元良明、小笠原盛浩、江暉、河井大介:「北京五輪に関する東大生、精華大生のメディア接触とその影響」, 『東京大学大学院情報学環紀要調査研究編』, Vol.25, pp.29-72, 2009 年。【査読有】

橋元良明、石井健一他:「選挙時における情報行動の日韓比較—日本参議院議員選挙と韓国大統領選挙におけるメディア利用と投票行動の関連」, 『東京大学大学院情報学環紀要調査研究編』, Vol.25, pp.73-122, 2009 年。【査読有】

橋元良明、吉田暁生:「2008 年若年層におけるテレビ視聴の実態」, 『東京大学大学院情報学環紀要調査研究編』, Vol.25, pp.123-151, 2009 年。【査読有】

その他論文

橋元良明:「ポータルサイトにおけるニュース報道の日韓米比較—日本の現状」, 韓国 Konkuk University 編『ポータルサイトにおけるニュース報道の日韓米比較』(原題はハングル), 2008 年。

橋元良明:「6 章動画、ケータイサイトの利用状況」「8 章インターネットが対人関係に及ぼす影響」, 橋元良明編『2008 年インターネット利用に関する実態調査—東京 23 区住民の現況』, COE 報告書, 2009 年。

講演・口頭発表

橋元良明: “ニュース流通環境—日本の現状”, 韓国言論学会シンポジウム「ニュース流通環境におけるメディア間エコシステムに関する国際セミナー—日韓米 3 カ国のマーケットと規制環境を中心に」, 2008. 【招待講演】

新聞・報道

橋元良明: 「携帯ニュースの読まれ方」, 朝日新聞(大阪版), 2008.

橋元良明: 「北京オリンピックに関する情報情報行動の日中比較(日経との共同調査研究のデータ紹介およびコメント)」, 日本経済新聞, 2008.

橋元良明: 「日曜フォーラム激論! 若者とニュース番組(司会)」, NHK 教育放送, 2009.

橋元良明(編著): 「メディア・コミュニケーション学」, 大修館書店, 2008 年.

濱田純一・教授

研究テーマ(主たるもの)

情報法にかかわる研究

個別テーマとして近年取り組んできたのが、情報化ないしインターネットがもたらす法制度の変容に関する研究である。情報に関する法は、通常の物財に関する法と異なり、複製や移転の容易さなどの特質から法的にも固有の扱いを必要としている。また情報は、表現の自由や情報をめぐる自由・権利などの精神的諸価値と密接に結びついており、特有の法体系を構成している。こうした諸特質に基礎を置く情報法の体系構成を目指して、個別テーマについての研究を蓄積してきている。

情報政策にかかわる研究

情報政策は、メディアや通信システムをはじめ、情報技術政策や文化政策にも及ぶ射程の広い政策領域である。実務上個別的にはさまざまな情報政策が、地方や国のレベルで策定されてきたが、必ずしも総合的な体系性をもって行われてきたわけではない。これらの諸政策に総合的な展望を与え、またこうした政策に固有の政策形成過程や政策手法を分析することを研究の目標としており、「情報政策論」の授業と連動させながら、個別事例の検討を通じて、情報政策に関する研究の体系化に取り組んでいる。

社会情報学ないし情報学にかかわる研究

社会情報学あるいは情報学は、いま発展途上にある学問領域であり、学際性を共通の特質とする。これまで、基本的に社会科学の領域に足場を置く社会情報学の研究を主にすすめ、とりわけ情報を社会的文脈の中に置くことの意義を分析しつつ成果を積み重ねてきた。情報学は、より広く自然科学分野にも及ぶ学問領域であるが、たとえば生命や遺伝の仕組みなどは社会システムの構造とアナロジー可能な側面を有しており、情報という視点からそうした共通の枠組みを引き出すことにより、諸学問分野の連携を生み出す研究をすすめている。

研究業績(2008年度)

原島博・教授

研究テーマ(主たるもの)

ヒューマンコミュニケーションメディア

コンピュータと映像・音響技術を結び付けたメディア技術が広く普及し、人とコンピュータの関係は大きく変わりつつある。これに伴い、感性情報の処理、現実世界と仮想世界の境界に挑む複合現実感技術、空間を対象とした情報処理・アート・デザイン・インタフェース、人に優しいメディア環境などの話題が注目されるようになってきた。この研究では、その目指す方向、技術課題、メディア社会に与える光と影の問題を論ずるとともに、人間主体の「ヒューマンコミュニケーションメディア」へ至る道を総合的に検討している。

次世代インタラクティブメディアと感性空間の創出

ヒューマンコミュニケーションメディアにおいて、人とコンピュータをより密接な関係として構造化することは重要である。また、そのための技術課題も多く存在する。本研究では、より人間に近い関係にあるインタラクティブメディア環境の実現に向けて、インタフェースやコンテンツといったハードおよびソフト技術の融合と新たな感性空間の創出を目指している。

顔画像処理と感性コミュニケーション

人の顔・表情や身振り・手振りは、感性的な対人コミュニケーションの基本であり、その研究は将来の情報システムや通信システムにおけるヒューマンインタフェースの設計に大きなインパクトを与えるものと予想される。本研究では、画像処理並びにコンピュータグラフィックスの手法を駆使して、顔・表情画像や身振り・手振り画像の動的な分析と合成を行い、併せて、各種の心理学実験を通じて、顔・表情や身振り・手振りによる感性コミュニケーションモデルを構築することを目的としている。また、心理学者などとの共同研究を通じて「顔学」なる学際的な新分野の開拓を目指している。

研究業績 (2008 年度)

馬場章・教授

研究テーマ(主たるもの)

日本近世経済史

日本近世の度量衡をはじめとする計量制度、三貨を中心とする貨幣制度を文献資料と現物資料の連関に注目して実証的に解明する。

デジタルアーカイブズ科学

文化資源のデジタル化の理論と方法について研究する。

コンテンツ創造科学

デジタルコンテンツ、とりわけ電子的なゲームの面白さの解明とそれを構造化した制作理論の構築、およびシリアスゲームについて研究する。

研究業績 (2008 年度)

論文・作品等

講演・口頭発表

馬場章:「新しいテレビゲームの時代」, 東京大学第 81 回五月祭公開講座, 2008. 【招待講演】【一般向け】

藤原正仁・馬場章:「南カリフォルニア大学におけるゲームの産学連携」, 特定非営利活動法人産学連携学会第 6 回大会, 2008.

馬場章、中野綾子、松永典子、松尾羊一:「パネルディスカッション」, 日本放送作家協会主催東アジア放送作家カンファレンス, 2008. 【招待講演】【一般向け】

市川森一、榎戸耕史、馬場章:「茨城の文化力」, 第 23 回国民文化祭・いばらき 2008 開幕直前イベント, 2008. 【招待講演】【一般向け】

Baba Akira: “Structure of Fun in Digital Games”, DAICE: Digital Art International Campus Exhibition, 2008. 【招待講演】

Baba Akira: “Business and Technology of Digital Games”, DAICE: Digital Art International Campus Exhibition, 2008.

Baba Akira: “Study of Serious Games”, DAICE: Digital Art International Campus Exhibition, 2008.

馬場章、日野晃博:「ゲームは遊び方、使い方によってさまざまな用途に役立つ～教育コンテンツ機能を生かした展開事例とその将来性～」, NHK 日本賞クロスメディア・フォーラム「Meet the Experts」, 2008.

馬場章:「テレビゲームは教育の敵か、味方か」, 玉川大学大学祭(コスモス祭), 2008. 【招待講演】【一般向け】

Baba Akira: “Change of Digital Game Culture in Japan”, The World Game Culture Conference in Korea 2008, 2008. 【招待講演】

Baba Akira: “The Utilization of Online Games for History Education”, International Symposium “Online-Games for Education: Why are Online Games Useful for Education?”, 2008. 【招待講演】

馬場章:「歴史教育におけるオンラインゲームの活用」, オンラインゲームの教育利用～なぜオンラインゲームは教育に役立つのか? 日韓国際シンポジウム, 2008.

馬場章:「世界と日本のゲーム産業と文化」, 財団法人総合研究開発機構地方シンクタンク・ワークショップ & 財団法人福岡アジア都市研究所シンポジウム「ゲーム産業の拠点を目指す福岡の挑戦」, 2009. 【招待講演】

新聞・報道

馬場章:「ゲームの教育と研究の役割—ゲームの明るい未来のために—」, 2008CESA ゲーム白書, 2008.

馬場章:「感情暴走不安な親『ゲーム脳』科学的に批判も」, 読売新聞, 2008.

馬場章:「新教育の森:子どもとゲーム番外編日常化した遊び、どう向き合うか◇教育効果あり、学校で活用を—馬場章さん」, 毎日新聞, 2008.

馬場章:「テレビゲームのメディア宣言」, 東京MXテレビ『ガリレオチャンネル』, 2008.

馬場章:「ゲームの教育と研究の役割—ゲームの明るい未来のために—」, テレビゲームのちょっといいおはなし・5, 2008.

馬場章:「第 21 回東京国際映画祭『Blue Symphony—ジャック・マイヨールの愛した海』プレミア上映会 & ティーチン」, 六本木 TOHO シネマズスクリーン 2, 2008.

馬場章:「第 35 回日本賞のイベントにレベルファイブの日野晃博社長、東大の馬場章教授が登場」, ファミ通.com, 2008.

馬場章:「ゲームとアカデミーの素敵なカンケイ」, IT media +D Games, 2008.

馬場章:「ゲーム研究のフロンティア(馬場章教授インタビュー)」, Multi-Media Mix Magazine 『STUDIO VOICE』, 2008.

馬場章:「『ゲームに夢中で』機能回復」, 朝日新聞, 2009.

馬場章:「ゲームで社会問題を解決高い教育効果、進む研究や開発」, 産経新聞, 2009.

古村孝志・教授

研究テーマ(主たるもの)

地震とその揺れの可視化

大地震による強い揺れの発生と、平野での増幅現象

研究業績(2008 年度)

論文・作品等

分担著書

Furumura, T. and B.L.N.Kennett: "A scattering waveguide in the heterogeneous subducting plate, Advances in Geophysics, Scattering of Short-Period Seismic Waves in Earth Heterogeneity", H Sato and M. Fehler 編, Elsevier, 2008 年.

雑誌論文

Furumura, T. Hayakawa, M. Nakamura, K. Koketsu, and T. Baba: "Development of long-period ground motions from the Nankai Trough, Japan, earthquakes: Observations and computer simulation of the 1944 Tonankai (Mw8.1) and the 2004 SE Off-Kii Peninsula (Mw7) Earthquakes", Pure Appl. Geophys, Vol.165, No.3, pp.585-607, 2008 年.【査読有】

Sokolov, V. and T. Furumura: "Sokolov, V. and T. Furumura, Comparative Analysis of Two Methods for Instrumental Intensity Estimations Using the Database Accumulated During Recent Large Earthquakes in Japan", Earthquake Spectra, Vol.24, No.2, pp.513-532, 2008 年.【査読有】

古村孝志:「地球シミュレータによる地震の強い揺れと津波の予測・災害軽減」, 計算工学, Vol.13, No.2, pp.14-17, 2008 年.

古村孝志:「関東平野で成長する長周期地震動」, Japan Geoscience Letters, Vol.4, No.2, pp.14-17, 2008 年.【査読有】

古村孝志:「大地震により生まれる長周期地震動のコンピュータシミュレーション」, 岩波科学, Vol.78, No.10, pp.1-7, 2008 年.【一般向け】

古村孝志:「地震波伝播と強震動の大規模並列 FDM シミュレーション」, スーパーコンピューティングニュース, Vol.10, pp.35-63, 2008 年.【査読有】

古村孝志:「地震国日本の巨大地震への備え」, 月刊消防フェスク, No.326, pp.2-5, 2008 年.【査読有】【一般向け】

古村孝志:「大地震の強震動シミュレーション」, 自然災害科学, Vol.27, No.3, pp.252-272, 2008 年.【査読有】

国際会議等

T. Furumura: "New research project for the next Nankai trough mega thrust earthquakes – Disaster mitigation research", 2008 ASC meeting, 2008.

Furumura, T. and T. Saito: "Large-scale Parallel 3D FDM Simulation of Seismic Wave Propagation Using Highperformance Computers", Second international symposium for "Integrated Predictive Simulation System for Earthquake and Tsunami Disaster", 2008.

Furumura, T.: "Simulation of Strong Ground Motion Due To the 1995 Kobe Earthquake by Using the Earth Simulator", International Symposium on Structures, 2008.

T. Furumura: "An integrated simulation of seismicwave and tsunami generation and propagation", APRU Research Symposium 2008 Earthquake Hazards around the Pacific Rim, 2008.【査読有】

Furumura, T. and T. Saito: "An integrated simulation of seismicwave and tsunami", 5th APEC Cooperation Earthquake Simulation Workshop, 2008.

その他論文

古村孝志:「岩手・宮城の2つの地震とその揺れの広がりがた」, なみふる, 2008 年.【一般向け】

講演・口頭発表

古村孝志:「関東地区の強震動予測—想定される大地震とその影響」, 日本材料学会関東支部会, 2008.【招待講演】

古村孝志:「次の南海地震の被害軽減に向けて—龍馬の故郷を地震・津波から守れ—」, 南海・東南海・東海地震連動性評価ミニシンポジウム(高知), 2008.【招待講演】

古村孝志:「地震により生まれる長周期地震動とその予測」, KKE Vision 2008, 2008.【招待講演】

古村孝志:「大地震発生とその強い揺れに備えて」, 第3回石灰石鉱業技術セミナー, 2008.【招待講演】

古村孝志:「地震津波予測精度の向上と防災施策への活用」, 東海・東南海・南海地震の連動性評価研究シンポジウム, 2008.【招待講演】【一般向け】

古村孝志:「南海・東南海地震の被害軽減に向けて—巨大地震に立ち向かう名古屋—」, 南海・東南海・東海地震連動性評価ミニシンポジウム(名古屋), 2008.【招待講演】

古村孝志:「次の南海地震の被害軽減に向けて—南海地震・津波被害に備える水の都大阪—」, 南海・東南海・東海地震連動性評価ミニシンポジウム(大阪), 2008.【招待講演】【一般向け】

新聞・報道

古村孝志:「「堆積層で津波巨大化地震で変形東大が「明治三陸」解析」, 読売新聞, 2008.

古村孝志:「「中国・四川大地震「阪神」と同じ内陸直下型」, 読売新聞, 2008.

古村孝志:「巨大津波の原因解明」, 東京大学新聞, 2008.

古村孝志:「岩手・宮城地震震源地近く短周期多かった地震波」, 毎日新聞, 2008.

古村孝志:「家屋「危険判定」6.5% 同規模震災下回る」, 朝日新聞, 2008.

古村孝志:「同じ震度被害にズレ全半壊今回 0.01% 中越は 31%」, 朝日新聞, 2008.

古村孝志:「中国四川の地震の長周期地震動再現」, TBS, News I, 2008.

古村孝志:「岩手宮城内陸地震の揺れの特徴」, フジテレビ・ニュース, 2008.

古村孝志:「太平洋プレート内部で発生キラーパルス弱く建物被害少ない?」, 産経ニュース, 2008.

古村孝志:「家屋被害に影響の長周期少ない＝古村東大教授が地震波形分析」, 時事通信, 2008.

古村孝志:「岩手北部地震「短周期」地震波形が影響「震度と被害にズレ」指摘も」, 日本経済新聞, 2008.

古村孝志:「住宅被害は軽微家屋倒壊の周期波含まず?」, 静岡新聞, 2008.

古村孝志:「巨大地震の原因は「やわらかい海底」だった」, Newton, 2008.

古村孝志:「岩手沿岸北部の地震に関する解説」, 毎日・朝日・読売・産経・日経・ほか(計 28 件), 2008.

古村孝志:「東北で相次いだ震度6強“メカニズム”に潜むもの」, テレビ朝日、報道ステーション, 2008.

古村孝志:「同じ6強なのに…被害の違いなぜ?」, フジテレビ、スーパーニュース, 2008.

古村孝志:「“激しい揺れ” 専門家はどう見る」, NHK ニュース7, 2008.

古村孝志:「また震度6強東京で“長時間”」, NHK ニュース9, 2008.

古村孝志:「岩手沿岸北部の地震の揺れ」, テレビ東京、ワールドビジネスサテライト, 2008.

古村孝志:「“倒壊ゼロ”の理由小刻みな揺れ」, フジテレビめざましテレビ, 2008.

古村孝志:「本当に使える災害マニュアル」, 女性セブン, 2008.

古村孝志:「震度6強岩手北部の地震倒壊家屋ゼロの理由は?」, TBS みのもんたの朝ズバッ!, 2008.

古村孝志:「長周期地震動にそなえる」, NHK 首都圏ネット, 2008.

古村孝志:「南海トラフ巨大地震に挑む」, 中部日本放送, 2008.

古村孝志:「Earthquake Early Warning System in Japan」, NHK 国際放送 What, 2008.

古村孝志:「防災の日特別番組」, CBS 名古屋放送, 2008.

古村孝志:「Tokyo tries to gird for major quake」, The Japan Times, 2008.

古村孝志:「7月の地震でみられた「異常震域」とは?」, Newton, 2008.

古村孝志:「地震、「東海・東南海」後に「南海」なら、四国西岸、津波被害大きく」, 日本経済新聞, 2008.

古村孝志:「大都市の長周期地震動軟弱な堆積層が揺れを増幅」, 読売新聞, 2009.

溝口勝・教授

研究テーマ(主たるもの)

農地情報のリアルタイムモニタリングによる安全な食料供給システムの開発

フィールドサーバと呼ばれるセンシングロボットを世界の農地に設置し、リアルタイムで農作物生産現場の画像や気象・土壌データをインターネット経由で集めています。これらのデータを利用して、生産者と消費者をつなぐ安全な食料の安定供給システムを開発したいと考えています。

節水型農業技術の開発

稲作には水田が必須とされていますが、最近東南アジアでは間断灌漑(適度に水田を乾燥させたり、水を張ったりすること)により、イネの大幅な単収増加をもたらす低投入持続的稲作技術:SRI(System of Rice Intensification)が注目されています。この技術のポイントは土壌水分のモニタリングです。フィールドサーバと組み合わせて、間断灌漑のタイミングを解明し、水資源節約とイネ生産量向上を狙っています。

ジャスインタイム農業システムの開発

自動車業界では、必要な物を必要な時に必要なだけ適切に生産するカンバン方式と呼ばれる生産システム(Just In Time:JIT)が世界を制覇しています。しかし、農業分野ではこの生産方式がありません。地上観測・気象予測・作物栽培データなどの農業情報を縦横無尽に活用して、生産性・安全性・収益性に留意した農作物生産方式を目指しています。

研究業績(2008年度)

論文・作品等

雑誌論文

Hamamoto, S., Tokida, T., Mizoguchi, M., Miyazaki, T.: 「Dense gas flow in volcanic ash soil: effect of pore structure on density-driven flow」, Soil Science Society of America Journal, 2008年。【査読有】

小島悠揮・登尾浩助・溝口勝:「土壌水分減少法、茎熱収支法、および熱収支バルク法による蒸散量・蒸発散量推定精度の評価」, 明治大学農学部研究報告, 2008年。【査読有】

Mochizuki H, Mizoguchi M, Miyazaki T: 「Effects of NaCl concentration on the thermal conductivity of sand and glass beads with moisture contents at levels below field capacity」, SOIL SCIENCE AND PLANT NUTRITION, 2008年。【査読有】

溝口勝・大政謙次・大西亮一:「農業農村情報研究の現状と展開方向」, 農業農村工学分野における情報化, 2008年。【一般向け】

溝口勝:「フィールドサーバによる農地情報モニタリング」, 農業農村工学分野における情報化, 2008年。【一般向け】

国際会議等

Masaru Mizoguchi, Shoichi Mitsuishi, Tetsu Ito, Kazuo Oki, Seishi Ninomiya, Masayuki Hirafuji, Tokihiro Fukatsu, Takuji Kiura, Kei Tanaka, Hitoshi Toritani, Hiromasa Hamada, and Kiyoshi Honda: "Real-time monitoring of soil information in Asia using Field server", Monsoon Asia Agro-Environmental Research Consortium (MARCO) Workshop, 2008.【査読有】

Masaru Mizoguchi, Shoichi Mitsuishi, Tetsu Ito, Seishi Ninomiya, Masayuki Hirafuji, Tokihiro Fukatsu, Takuji Kiura, Kei Tanaka, Hitoshi Toritani, Hiromasa Hamada, and Kiyoshi Honda: "Real-time monitoring of soil information in Asia using Field server", Proceedings of International Symposium on Geoinformatics for Spatial Infrastructure Development in Earth and Allied Sciences, 2008.【査読有】

Koshi Yoshida, Masaru Mizoguchi and Kazuo Oki: "Possibility of Just In Time Agriculture System by using Plant Growth Model:A case of cabbage field in Tsumagoi, Japan", Proceeding of SWAT-SEA conference, 2008.【査読有】

Honda, K.; Shrestha, A.; Chinnachodteeranun, R.; Mizoguchi, M.; Shimamura H.; Kameoka. T: "Spinach Field Monitoring for Bridging Thai Producer and Japanese Consumer under Sensor Asia", Proceeding of SICE Annual Conference, The University Electro-Communications, Japan, 2008.【査読有】

講演・口頭発表

溝口勝・三石正一・伊藤哲・二宮正士・平藤雅之・深津時広・木浦卓治・田中慶・鳥谷均・濱田浩正・本多潔:「フィールドサーバによる農地土壌水分のリアルタイムモニタリング」, 2008 土壌水分ワークショップ, 2008.

三石正一・飯山一平・溝口勝:「デカゴン土壌水分センサーの簡易キャリブレーション法」, 2008 土壌水分ワークショップ, 2008.

片町健太郎・伊藤大輝・溝口勝:「センサネット技術による面的な土壌水分測定手法の開発」, 2008 土壌水分ワークショップ, 2008.

宮崎毅・西村拓・鈴木香織・関勝寿・溝口勝:「インドネシア国東カリマンタンの熱帯雨林における土壌水分モニタリング」, 2008 土壌水分ワークショップ, 2008.

小島悠揮・三石正一・溝口勝:「フィールドサーバによる高冷地畑の冬期モニタリング」, 平成 20 年度農業農村工学会, 2008.

溝口勝:「データ統合・解析システム(DIAS)における土壌物理研究の展開」, 第 50 回土壌物理学会シンポジウム, 2008.

小島悠揮・沖一雄・登尾浩助・溝口勝:「ALOS/PALSAR を用いた高冷地キャベツ畑の広域土壌水分量の推定」, 第 50 回土壌物理学会シンポジウム, 2008.

小淵敦子・溝口勝・西村拓・井本博美・宮崎毅:「酸欠状態におかれた森林土壌の強熱減量および撥水性」, 第 50 回土壌物理学会シンポジウム, 2008.

北本朝展, Laure FRACHET, Mark MATEO, 溝口勝, 木浦卓治, 二宮正士, 深津時広, 平藤雅之, 鳥谷均, 安川雅紀, 絹谷弘子, 喜連川優:「農場環境センシングと e-agriculture」, 情報とシステム 2008, 2008.

森也寸志, 登尾浩助, 溝口勝, 落合博之:「地球型惑星における表層「土壌」改良のための溶液輸送技術」, 宇宙利用シンポジウム, 2008.

小島悠揮・溝口勝:「フィールドサーバによる高冷地キャベツ畑土壌の IT モニタリング」, 2009 土壌水分ワークショップ, 2008.

溝口勝:「データ統合・解析システム(DIAS)におけるフィールドサーバの役割」, 電子情報通信学会総合大会, 2008.【招待講演】

吉見俊哉・教授

研究テーマ(主たるもの)

戦争とメディア:両世界大戦期におけるプロパガンダと情報流通に関する歴史社会学的研究

本研究は、20世紀における戦争とメディアの緊密な関係を視野に収めつつ、情報学環が社会情報研究所の時代から受け継いできた重要な2つの戦時プロパガンダ関係の資料のコレクションについてのデジタル・アーカイブの構築を大きな目的としている。これらの2つのコレクションとは、①第一次大戦宣伝ポスター約660枚、及び、②内閣情報部の満州・フィリピンにおける宣伝資料の2つであり、いずれも日本国内では例を見ない貴重なものである。吉見研究室において組織された研究チームは、社会情報研究所時代から、これらの資料の修復と保存状態の改善に努め、上記資料を広く公開すべくデジタル・アーカイブの構築を進めてきた。このような基礎作業の上に立って、本研究では、これらの資料を関連諸資料と結びつけ、それらについて総合的に分析する学際的研究を、アーカイブそのものに組み込む仕方で展開している。

20世紀後半の東アジアの都市大衆文化における「アメリカ」の受容と反発

本研究は、冷戦期を通じた東アジアでのアメリカ的価値の受容や反発について、文化的な次元から比較歴史研究を進めるものである。その際、とりわけ米国の軍事的・経済的・文化的影響が大きな意味を持った日本本土、沖縄、韓国、台湾、フィリピンなどに焦点を当て、映画、テレビ、マンガ、音楽などから都市空間や基地文化までの大衆文化のレベルでの変化を、一方では政治的な次元と文化・メディア的次元の関係を精密に見据えながら、他方では東アジア全域を射程に収めて明らかにする。とりわけ本研究では、戦後日本及び東アジアの大衆意識のなかでの「アメリカ」の存在、アメリカ的文化商品の受容の過程を、韓国、台湾、フィリピンなどを中心に東南アジアまでの横断的な広がりの中で、また文化と軍事・経済的な覇権の構造を結びつけて明らかにしようとしている。

多言語対話型のデジタル百科全書の構築を通じた情報知の構造化

本研究は、デジタル・アーカイブの諸技術を基盤にしつつ、情報知を中核にした新しい多言語対話型の百科全書の構築とその大学教育のなかでの応用的展開を目指している。すなわちまず、情報学環教員が中核的に関与してきた『情報学事典』(弘文堂)、『社会情報学ハンドブック』(東京大学出版会)などの出版物のデジタルデータを、百科全書構築の実験素材として利用し、これらのデータを基礎にユビキタス社会における大学教育のモデルを示す知識形成実験を進めている。同時に、英国の Theory, Culture and Society 誌を中心とした New Encyclopedia Project、及び National Singapore 大学、Seoul National 大学などと協力しつつ、情報・言語の基礎理論、知覚情報、ジャーナリズム、メディア文化、情報行動、情報経済、情報法・政策などの中核的な諸領域についての知の対話的生成とその構造化を可能にするプラットフォーム作りを進めている。

研究業績(2008年度)

論文・作品等

著書

吉見俊哉:「ポスト戦後社会」, 岩波書店, 2008年。

吉見俊哉:「都市のドラマトウルギー(文庫版)」, 河出書房新社, 2008年。

吉見俊哉:「Cultural Studies(韓国語版)」, Dongguk University Press, Seoul, 2008年。

分担著書

大野秀俊・吉見俊哉:「シュリンキング・ニッポン」, 大野秀俊編, 鹿島出版会, 2008 年.

雑誌論文

吉見俊哉:「大衆天皇制の終わり」, 中央公論, Vol.124, No.4, pp.162-169, 2008 年.【一般向け】

小宮山宏・吉見俊哉:「知の構造化がめざすもの」, 丸善ライブラリーニュース, No.156, pp.1-3, 2008 年.【一般向け】

講演・口頭発表

Shunya Yoshimi: "Tokyo Colonized: Considering the Spatial Continuities from the Imperial City to the Commercial City", Contested Spatialities Conference, Harvard University, 2008.【招待講演】

Shunya Yoshimi: "Encyclopedic Convergence for New University Education", Convergence Technology Center, Seoul National University, 2008.【招待講演】

吉見俊哉: "What means "Various Perspectives" in American Studies in Japan", アメリカ学会(南山大学), 2008.【招待講演】

Shunya Yoshimi: "Can the Computer Rewrite Japanese Intellectual History?", Digital Archive and the Future of Transpacific Studies, Cornell University, 2008.【招待講演】

吉見俊哉:「東京大学における分野横断的な教育プログラムへの取組み:メディア・コンテンツ教育を例に」, 第2回学際融合教育シンポジウム(大阪大学), 2009.【招待講演】

暦本純一・教授

研究テーマ(主たるもの)

Human Computer Interaction

Ubiquitous Computing

Reality Sensing

研究業績(2008 年度)

論文・作品等

雑誌論文

Jun Rekimoto: "Organic Interaction Technologies: from Stone to Skin", Communications of ACM, Vol.51, No.6, pp.38-44, 2008 年.【査読有】

暦本純一:「インタラクション技術の新展開:位置情報から LifeLog へ」, 日本ヴァーチャルリアリティ学会誌, Vol.13, No.3, pp.22-26, 2008 年.【査読有】

国際会議等

Takashi Miyaki and Jun Rekimoto: "Sensoromy: Envisioning Folksonomic Urban Sensing", Ubicomp 2008, 2008. 【査読有】

Nobuyuki Kasuya, Takashi Miyaki, and Jun Rekimoto: "Activity-based Authentication by Ambient Wi-Fi Fingerprint Sensing", Ubicomp 2008, 2008. 【査読有】

Jun Rekimoto: "BrightShadow: Shadow Sensing with Synchronous Illuminations for Robust Gesture Recognition", ACM CHI 2008, 2008. 【査読有】

その他論文

岩崎健一郎, 味八木崇, 暦本純一: 「Expressive Typing: 本体内蔵型加速度センサによる打鍵圧センシングとその応用」, 第 16 回インタラクティブシステムとソフトウェアに関するワークショップ WISS2008, 2008 年. 【査読有】

新聞・報道

デザイン: 「その先のインタラクションへ: 都市のセンシングとコンピュータの皮膚」 (未来技術報告), AXIS, 2008.

技術者: 「実世界指向インターフェース」, 技術評論社, 2008.

一般・技術者: 「近未来インターフェースで実生活を変える: PlaceEngine を生んだ暦本純一」, リクナビ Next Tech 総研(リクルート), 2008.

一般: 「アマデウスたち: 暦本純一 無機質なマシンに情緒を宿す」, 週刊ダイヤモンド, 2008.

一般: 「無線 LAN で位置推定」, 日経産業新聞, 2008.

技術者: 「【CEATEC】無線 LAN による新しい位置情報測定技術を世に広める」, PC Online, 2008.

受賞・特許

受賞

暦本純一: 日経 BP 技術賞情報通信部門「無線 LAN アクセス・ポイントのビーコン信号を利用する位置推定技術「PlaceEngine」」, 日経 BP 社, 2008 年.

石川徹・准教授

研究テーマ (主たるもの)

空間の認知, 環境の心理

空間とは, その中で生活・行動する人間にとって, 身近でありかつ欠くことのできない存在ですが, われわれはいったいどのように周りの空間をとらえているのでしょうか. 私たちが周辺についての知識を獲得し, 頭の中に記憶し, その知識を利用する一連のプロセスと, 得られた知識 ("頭の中の地図") の構造について, とく

に興味をもって研究をおこなっています。また、私たちはどのような景観・景色を好ましいと思うのかなどといった、空間における人間の心理的・感情的側面も、重要な研究課題のひとつです。

空間情報の利用と表現

視覚化という方法は、空間的(および非空間的)現象を表現するのに適した方法ですが、その一方で、地図やグラフの理解はそう単純ではないこともわかっています。また、認知や学習のスタイル・好みにも個人差があり、たとえば、視覚的な方法を好む人と、言語的な方法を好む人がいます。このような利用者の属性や目的に応じて効果的に空間の情報を提示する方法はあるのでしょうか。とくに、ユビキタスネットワークを代表とする新しい情報技術とそれを利用する人間の認知・行動の問題(ユビキタス都市における空間行動)に関心をもっています。

ユビキタス空間情報社会基盤の構築

最近の情報通信技術の発達により、いつでも・どこでも・誰でもが必要な情報を状況に応じて取得できる環境、いわゆるユビキタスネットワークが発達を遂げていますが、それと同時に、近年、地理空間情報および場所情報システムが社会的注目を集めており、ユビキタスコンピューティングの技術を空間・都市にも展開していこうという動きが盛んになりつつあります。このような背景のもと、自律移動支援や公物管理業務の情報化など、空間分野でのユビキタスの応用に関心を持っています。

研究業績 (2008 年度)

論文・作品等

雑誌論文

Toru Ishikawa, Mika Kiyomoto: "Turn to the left or to the west: Verbal navigational directions in relative and absolute frames of reference", *Geographic Information Science (Lecture Notes in Computer Science)*, Vol.5266, pp.119-132, 2008 年。【査読有】

その他論文

石川徹:「場所・モノ・事象に対する共通識別子「Uコード」を用いた、建設分野における公物管理業務の情報化および業務支援システムの調査研究」, 財団法人日本建設情報総合センター(JACIC)平成 19 年度助成研究成果報告書, <http://www.jacic.or.jp/kenkyu/10/10-10.pdf>, 2008 年。【一般向け】

講演・口頭発表

Toru Ishikawa, Mika Kiyomoto: "Turn to the left or to the west: Verbal navigational directions in relative and absolute frames of reference", *GIScience 2008: 5th International Conference on Geographic Information Science*, Park City, Utah, US, 2008.

Toru Ishikawa, Saya Nakata, Yasushi Asami: 「A cognitive analysis of peoples preferences concerning dwelling unit plans」, *Workshop on the Analysis of Housing and Urban Environments*, Institute of Geographical Sciences and Natural Resources Research, Chinese Academy of Science, Beijing, China, 2008.

Toru Ishikawa: "Spatial information science: A field connecting people, geography, and information", *Japan-Korea Symposium on Digital Convergence and Institutional/Cultural Changes of Public Broadcasting*, Seoul National University, Korea, 2008.

石川徹:「場所・モノ・事象に対する共通識別子「Uコード」を用いた、建設分野における公物管理業務の情報化および業務支援システムの調査研究」, 財団法人日本建設情報総合センター(JACIC)第 6 回研究助成事業成果報告会, 2008.

石川徹:「ISO/TC211 における標準化」, TRONSHOW 2009—uID セッション、進むユビキタス ID 技術の国際標準化, 2008.【一般向け】

新聞・報道

Toru Ishikawa, Hiromichi Fujiwara, Osamu Imai, Atsuyuki Okabe: 「Technology: Map Test」, The Atlantic, June 2008, p. 22, 2008.

伊東乾・准教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2008)

大原美保・准教授

研究テーマ(主たるもの)

病院向け災害対応 eラーニングシステム構築パッケージの開発

災害時に防災拠点となる病院においては、来るべき災害に備えて日頃から職員の災害対応力を向上させておく必要がある。本研究では、病院内イントラネットを活用して医師・看護師・事務職員等の災害対応力を高めるための eラーニングシステム構築パッケージの開発を行っている。病院側は、あらかじめ病院特性やハザードに応じて用意されたコンテンツを組み合わせることで、独自の教材をカスタマイズすることができる。

緊急地震速報時の対応行動学習ツールの開発

2007年10月から緊急地震速報の一般向け提供が開始されている。緊急地震速報は、受信した際に適切な対応行動を行うことで人的・物的被害を大幅に軽減することができるが、揺れまでの数秒から数十秒の猶予時間を有効活用するためには事前のイメージトレーニングが必須である。本研究では、緊急地震速報時に行うべき対応行動の学習ツールとして「緊急地震速報時の対応行動レファレンス Web」の開発を行っている。

研究業績(2008年度)

論文・作品等

分担著書

土木学会:「これからの安全・安心—災害情報を生かす—」, 大原美保編, 土木学会叢書, 2008年.

大原美保他:「長く暮らすためのマンションの選び方・育て方」, 日本建築学会編, 彰国社, 2008年.

雑誌論文

目黒公郎・大原美保:「大地震時に効果的な救急医療を実施するために―首都直下地震時の予想重症患者数―」, 救急医療 Update ―現状と展望―, 医歯薬出版株式会社, Vol.226, No.9, pp.673-680, 2008 年.

大原美保・目黒公郎:「首都直下地震時における病院への重症者搬送数の推計」, 生産研究, Vol.60, No.6, pp.33-38, 2008 年.

大原美保・江島潤一郎・目黒公郎:「IT強震計を用いた生研建物モニタリングシステムによる 2007 年度の観測報告」, 生産研究, Vol.60, No.6, pp.285-290, 2008 年.

大原美保, 橋田要一, 原田賢治, 塚田博明, 赤塚健一, 小山富士雄, 宮崎早苗, 目黒公郎:「医師・看護師向けの地震時の初動対応 e ラーニングの開発と学習効果の評価」, 生産研究, Vol.60, No.6, pp.280-284, 2008 年.

大原美保, 橋田要一, 矢作直樹, 小山富士雄, 目黒公郎:「災害拠点病院における医師・看護師向け災害対応 e ラーニング・コンテンツの開発と学習効果の評価」, 地域安全学会論文集, Vol.No.10, pp.427-434, 2008 年.【査読有】

目黒公郎・大原美保:「人口減少社会における活断層対策の展望」, 活断層研究, No.28, pp. 89-94, 2008 年.

国際会議等

M. Ohara, Y.Kitsuta, N. Yahagi, F. Koyama and K. Meguro: "A Study on the Use of e-Learning System for Increasing Emergency Response Capacity of Doctors and Nurses in Hospitals", The 14th World Conference on Earthquake Engineering, Beijing, China, Vol.14, pp.CD-ROM, 2008.【査読有】

M. Ohara and K. Meguro: "A Study on the Effect of Land Use Control by Active Fault Zoning in Japan," The 14th World Conference on Earthquake Engineering, Beijing, China, Vol.14, pp.CD-ROM, 2008.【査読有】

M. Ohara, Y.Kitsuta, N. Yahagi, F. Koyama, S. Miyazaki and K. Meguro: "Development of e-Learning Contents for Increasing Emergency Response Capacity of Doctors and Nurses in Key Disaster Hospitals", Proceedings of the Seventh International Symposium on New Technologies for Urban Safety of Mega Cities in Asia, Beijing, China, Vol.7, pp.CD-ROM, 2008.【査読有】

講演・口頭発表

富田瑠璃美・大原美保・目黒公郎:「緊急地震速報時の対応行動レファレンス Web の開発」, 第 63 回土木学会年次学術講演会講演概要集, 2008.

江島潤一郎・佐藤芳仁・大原美保・目黒公郎:「ポータブル起振器を用いた木造住宅の耐震診断法の検討―仕口ダンパーによる補強効果の検証―」, 第 63 回土木学会年次学術講演会講演概要集, 2008.

佐藤芳仁・江島潤一郎・大原美保・目黒公郎:「ポータブル起振器を用いた木造住宅の耐震診断法の検討」, 第 63 回土木学会年次学術講演会講演概要集, 2008.

大原美保・富田瑠璃美・目黒公郎:「緊急地震速報時の対応行動学習ツールの開発」, 日本災害情報学会第 10 回研究発表大会, 2008.

大原美保:「災害状況イメージーションのすすめ」, 第 20 回奥村組技術セミナー, 2008.【招待講演】【一般向け】

新聞・報道

大原美保:「緊急地震速報を最大限に活かすには?①～④」, ラジオ「サロン・ド・防災」, FM サルース, 2008.

大原美保:「対応能力超える病院続出首都直下地震、重症者集中」, 共同通信社, 2009.

大原美保:「東京湾北部地震発生なら拠点病院限界超す患者」, 東京新聞, 2009.

大原美保:「首都直下地震、重症患者、殺到の恐れ東大准教授ら分析、病院の能力以上に」, 日本経済新聞, 2009.

大原美保:「首都直下地震重症者、病床の5割超に10災害拠点病院」, 毎日新聞, 2009.

JASON G. KARLIN・准教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2008)

北田暁大・准教授

研究テーマ(主たるもの)

日本メディア史の実証的研究

広告、映画、新聞など近代のコミュニケーション文化において重要な役割を果たしてきたメディアを、歴史社会学的な手法で分析している。その成果を公刊したものとして、『広告の誕生』(2000年、岩波書店)、『<意味>への抗い』(2004年、せりか書房)などがある。

若者のコミュニケーション研究

現代若者たちのコミュニケーションの変容を、「保守化」傾向や「バックラッシュ」などの現象とあわせ、メディアの果たす役割に着目しつつ分析している。その成果を公刊したものとして、『広告都市・東京』(2002年、廣済堂出版)、『嗤う日本の「ナショナリズム」』(2005年、NHK出版)などがある。

理論社会学、コミュニケーション理論についての基礎的研究

「行為の同定問題」、「行為(者)責任の生成メカニズム」など社会学基礎論にかかわるテーマについて、政治哲学、倫理的行為論なども射程に入れつつ、考察を加えている。その成果を公刊したものとして『責任と正義』(2003年勁草書房)がある。

研究業績(2008年度)

論文・作品等

著書

樋口陽一、杉田敦、西原博史、北田暁大ほか:「対論憲法を／憲法からラディカルに考える」, 法律出版社, 2008年.

北田暁大、大澤真幸:「歴史の〈はじまり〉」, 左右社, 2008年.

分担著書

北田暁大、東浩紀ほか:「思想地図 vol.1 日本」, 北田暁大、東浩紀編, NHK出版, 2008年.

岩崎稔、上野千鶴子、北田暁大、小森陽一ほか:「戦後日本スタディーズ 3 80・90年代」, 岩崎稔、上野千鶴子、北田暁大、小森陽一編, 紀伊国屋出版, 2008年.

北田暁大、東浩紀ほか:「思想地図 vol.2 ジェネレーション」, 北田暁大、東浩紀編, NHK出版, 2008年.

雑誌論文

北田暁大:「ケータイと繋がり」, 神奈川大学評論, No.61, pp.43-57, 2008年.

講演・口頭発表

北田暁大:「現代若者のナショナリズム」, 明治学院大学国際学部附属研究所公開セミナー, 2008.【一般向け】

倉田博史・准教授

研究テーマ(主たるもの)

Euclid 距離行列の順序構造

p 次元空間に n 個の点を与えられたとき、各点間の距離を $n \times n$ 非負対称行列の形で表現出来ることは明らかである。この逆が成立するとき、すなわち、 $n \times n$ 非負対称行列が与えられたときに、それを相互距離として持つ n 個の点がある次元の Euclid 空間に存在するとき、その非負対称行列を Euclid 距離行列と呼ぶ。統計学では、多次元尺度構成法などで用いられる概念である。本研究では、Euclid 距離行列の順序構造を調べている。近著については、業績欄を参照のこと。

多変量確率分布の Principal Points

平均は、確率分布を1つの点で要約する量として最も自然なものであろう。平均は最小2乗値でもある。より一般に、確率分布を複数個(k 個)の点で要約しようとするならば、どのような点の集合が選ばれるべきか。この問いに対する一つの答として、principal points (主点)があり、これは最小2乗原理を応用することによって得られる。本研究では、複数個の確率分布の混合として得られる多変量確率分布の principal points の性質を調べている。最近の研究として、H. Kurata "On principal points for location mixtures of spherically symmetric distributions" (Journal of Statistical Planning and Inference, 近刊)と H. Kurata, T. Hoshino and Y. Fujikoshi "Allometric extension model for conditional distributions" (Journal of Multivariate Analysis, 近刊)がある。

群不変性統計理論

群論特に変換群や不変積分の概念を統計学に応用することにより、不変検定、共変推定、確率不等式などの分野を中心に数多くの有用な事実が導かれてきた。これらは群不変性統計理論と呼ばれる。本研究では、「群によって誘導される順序(group induced ordering)」の概念を用いて、ある種の相関行列の性質を議論している。H. Kurata, "Inequalities associated with intra-inter class correlation matrices" (Journal of Multivariate

Analysis, 2004), H. Kurata, "One-sided tests for independence of seemingly unrelated regression equations" (Journal of Multivariate Analysis, 2004).

研究業績 (2008 年度)

論文・作品等

雑誌論文

Hiroshi KURATA, Takahiro HOSHINO and Yasunori FUJIKOSHI: "Allometric extension model for conditional distributions", Journal of Multivariate Analysis, Vol.99, No.9, pp.1985-1998, 2008 年. 【査読有】

Hiroshi KURATA: "On principal points for location mixtures of spherically symmetric distributions", Journal of Statistical Planning and Inference, Vol.138, No.11, pp.3405-3418, 2008 年. 【査読有】

Masahiro HACHIMORI, Hiroshi KURATA and Tadashi SAKUMA: "Determining the minimum rank of matroids whose basis graph is common", Electronic Notes in Discrete Mathematics, Vol.31, pp.137-142, 2008 年. 【査読有】

越塚登・准教授

研究テーマ(主たるもの)

Ubiquitous Computing

Sensor Network

Operating System

研究業績 (2008 年度)

論文・作品等

雑誌論文

小林真輔, 越塚登, 坂村健: 「超小型チップネットワーク技術[招待論文]」, 電子情報通信学会誌, Vol.91, No.7, pp.595-603, 2008 年.

国際会議等

Masahiro Bessho, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, Ken Sakamura: "Assisting Mobility of the Disabled using Space-Identifying Ubiquitous Infrastructure", ACM ASSETS 2008, 2008. 【査読有】

Masahiro Bessho, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, Ken Sakamura: "uNavi: Implementation and Deployment of a Place-based Pedestrian Navigation System", First IEEE International Workshop on Software Engineering for Context Aware Systems and Applications (SECASA 2008), 2008. 【査読有】

Tetsuo Kamina, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: "Embedding Legacy Keyword Search into Queries for the Ubiquitous ID Database", the 2nd International Conference on Network-Based Information Systems (NBIS-2008), 2008. 【査読有】

Keiichi Nakamura, Masato Kamio, Tetsushi Watanabe, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka and Ken Sakamura: "Reliable Ranging Technique based on Statistical RSSI Analyses for an Ad-Hoc Proximity Detection System", The 5th IEEE Workshop on Pervasive Wireless Networking (PWN09), 2009. 【査読有】

その他論文

藤原亮介、水垣健一、中川樹生、宮崎祐行、前木陽、緒方祐次、小林真輔、越塚登、坂村健:「UWB-IRを用いた相対位置検出システムの開発」, 電子情報通信学会全国大会 B-20-58, 2008 年.

西山智, 岩本健嗣, 越塚登, 坂村健:「私的空間を対象とするカメラを用いた屋内位置推定システムの提案」, マルチメディア、分散、協調とモバイル(DICOMO2008)シンポジウム予稿集, 2008 年. 【査読有】

越塚登:「ユビキタスとは」, 建設関連月報「ユビキタスで変わる我が国のインフラ」, 2008 年.

越塚登:「国際標準化へのチャレンジ」, 建設関連月報「ユビキタスで変わる我が国のインフラ」, 2008 年.

講演・口頭発表

越塚登:「Ubiquitous ID プロジェクトの進展」, 第3回 RFID ソリューション Expo, 2008. 【招待講演】【一般向け】

越塚登:「T-Kernel と ITRON の現状」, トロン協会 ITRON/T-Kernel オープンセミナー, 2008. 【招待講演】

越塚登:「ユビキタス社会の製品トレーサビリティ:住宅設備・建材への適用と将来展望【招待講演】」, KKEVISION, 2008. 【招待講演】【一般向け】

Noboru Koshizuka: "Ubiquitous ID Architecture: Its Technologies and Applications", Session #2 "Can smart cards and tags create Ubiquitous Network Society?", the 8th IFIP Conference on e-Business, e-Services, and e-Society (I3E2008), 2008. 【招待講演】

越塚登:「ユビキタス情報社会の到来:ICTが変える私たちの社会、生活、医療【招待講演】」, 日本歯科医療管理学会関東支部第14回学術大会「ユビキタス社会と歯科医院」, 2008. 【招待講演】

Noboru Koshizuka: "Ubiquitous Computing Technologies for Product Qualification", Workshop on Identification of Automation Components, Oct. 27, 2008, Karlsruhe, Germany, 2008. 【招待講演】

越塚登:「組込みシステムの現状と展望」, 職業能力開発大学校電子情報技術科担当指導員研修, 2008. 【招待講演】

越塚登:「「建設共通パスとは何か?」(パネルセッション「建設共通パス」)」, TRONSHOW 2009, 2008. 【一般向け】

越塚登:「「ユビキタス ID 技術の国際標準化:イントロダクション」(パネルセッション「進むユビキタス ID 技術の国際標準化」)」, TRONSHOW 2009, 2008. 【一般向け】

越塚登:「食品物流:電子タグを使った効率化」, 電子タグ・通い容器の活用に関するセミナー(東京会場), 2008. 【招待講演】【一般向け】

越塚登:「食品物流:電子タグを使った効率化」, 電子タグ・通い容器の活用に関するセミナー(大阪会場), 2009. 【招待講演】【一般向け】

Noboru Koshizuka: 「Future Ubiquitous Information Society with Ubiquitous ID Technologies」, JICA 平成 20 年度「電気通信標準化コース」研修会, 2009. 【招待講演】【一般向け】

越塚登: 「ユビキタスと ICT の未来」, 石川県IT塾, 2009. 【招待講演】【一般向け】

佐藤洋一・准教授

研究テーマ(主たるもの)

時系列フィルタと識別器の統合による人物三次元追跡手法の提案

従来の画像を手掛かりとした時系列フィルタによる人物追跡では、色ヒストグラムや輪郭の類似性など、比較的単純な画像特徴を利用するものが多く、照明変動や複雑背景下における人物追跡では必ずしも十分ではなかった。本研究では、画像から人物の顔を検出する AdaBoost 学習に基づく識別器を、時系列フィルタの枠組みに統合し、頑健かつ高精度に人物頭部を追跡する手法を提案した。本手法では、複数の識別器を人物とカメラとの関係に基づいて適応的に用いることで、頭部の向きを変えつつ移動する人物を追跡できる点を特徴としている。視野を共有した複数のカメラを用い、人物頭部を三次元追跡する実験により、本手法の有効性を確認した。

拡散光源を用いた物体の見えの標準化

任意光源環境下における物体の見えは周波数領域で定義される部分空間を用いて精度良く表現できることが従来研究により示されている。この部分空間は、任意照明下での顔認識や画像合成の研究分野において有効に利用されてきた。しかしながら、複雑な形状や反射特性を持つ実物体を対象とした場合、部分空間を張る基底画像を準備することは容易ではない。本研究では、点光源ではなく面積を持った拡散光源を用いて物体表面の見えを観察することにより、物体表面の反射特性の周波数帯域に制限をかけて不十分なサンプリングに起因するエイリアシングの問題を回避して基底画像を獲得する手法を提案する。拡散光源の利用により、複雑な反射特性を持つ物体表面に対しても、物体表面の持つ周波数帯域に左右されず、球面調和関数のサンプリング定理に基づき基底画像を獲得することが可能となる。

人間の視覚特性を考慮した投影画像の光学的補正

実世界内のさまざまな場所にプロジェクタで画像を投影するとき、不均一な反射特性を持つ被投影面や環境光などの影響により、正しい色で表示可能な画像のコントラストが制限されてしまうという問題がある。これに対して本研究では、観測者に知覚されにくいような色成分と輝度成分の変動を積極的に利用して、よりコントラストの高い画像を表示することを可能にする手法を提案する。提案手法では、画素ごとに、原画像の色成分を厳密に表示可能な輝度の範囲を求めたのち、人間の視覚特性に関するモデルに基づいて、色成分と輝度成分が許容しうる誤差を計算する。こうして得られた各画素の輝度範囲、および、色成分と輝度成分の許容誤差を考慮し、かつ、原画像から観測画像への変換が隣接画素間で過度に変化しないようにして、観測画像のコントラストを最大化するような光学的補正を行う。本稿では、提案手法のアルゴリズムを説明し、さまざまな被投影面を用いた実験により提案手法の有効性を示す。

研究業績 (2008 年度)

論文・作品等

雑誌論文

Shiro Kumano, Kazuhiro Otsuka, Junji Yamato, Eisaku Maeda, Yoichi Sato: "Pose-Invariant Facial Expression Recognition using Variable-Intensity Templates", International Journal of Computer Vision, Vol.83, No.2, pp.178-194, 2008 年. 【査読有】

Kris M. Kitani, Yoichi Sato, Akihiro Sugimoto: "Recognizing overlapped human activities from a sequence of primitive actions via deleted interpolation", International Journal of Pattern Recognition and Artificial Intelligence, Vol. 22, No. 7, pp.1343-1362, 2008 年. 【査読有】

梶原慎太郎, 小池英樹, 福地健太郎, 佐藤洋一: 「回転型円形テーブルトップシステムにおける大規模情報の視覚化および対話手法」, 情報処理学会論文誌, Vol. 49, No. 7, pp.2518-2527, 2008 年. 【査読有】

Kris M. Kitani, Yoichi Sato, Akihiro Sugimoto: "Recovering the Basic Structure of Human Activities from Noisy Video-Based Symbol Strings", International Journal of Pattern Recognition and Artificial Intelligence, Vol. 22, No. 8, pp.1621-1646, 2008 年. 【査読有】

鈴木直彦, 平澤宏祐, 田中健一, 小林貴訓, 佐藤洋一, 藤野陽三: 「人物動線データ群における逸脱行動人物検出及び行動パターン分類」, 電子情報通信学会論文誌, Vol. D, No. 6, pp.1550-1560, 2008 年. 【査読有】

杉村大輔, 小林貴訓, 佐藤洋一, 杉本晃宏: 「行動歴に基づく人物存在確率の利用による人物三次元追跡の安定化」, 情報処理学会論文誌 コンピュータビジョンとイメージメディア, Vol. 1, No. 2, pp.100-110, 2008 年. 【査読有】

木谷クリス真実, 佐藤洋一, 杉本晃宏: 「ノイズを考慮した人物行動の文法の教師なし学習」, 情報処理学会論文誌 コンピュータビジョンとイメージメディア, Vol. 1, No. 2, pp.86-99, 2008 年. 【査読有】

熊野史朗, 大塚和弘, 大和淳司, 前田英作, 佐藤洋一: 「変動輝度テンプレートによる頭部姿勢と表情の同時推定」, 情報処理学会論文誌 コンピュータビジョンとイメージメディア, Vol. 1, No. 2, pp.50-62, 2008 年. 【査読有】

菅野裕介, 佐藤洋一: 「顔変形をとまなう3次元頭部姿勢の単眼推定」, 情報処理学会論文誌 コンピュータビジョンとイメージメディア, Vol. 1, No. 2, pp.41-49, 2008 年. 【査読有】

劉玉宇, 佐藤洋一: 「音と映像の相関を用いた画像分割による話者領域の切り出し」, 情報処理学会論文誌 コンピュータビジョンとイメージメディア, Vol. 1, No. 2, pp.32-40, 2008 年. 【査読有】

岡部孝弘, 佐藤いまり, 于瓊, 佐藤洋一: 「照明変化にとまなう輝度変化の類似度に基づく物体形状復元」, 情報処理学会論文誌, コンピュータビジョンとイメージメディア, Vol. 1, No. 3, pp.1-11, 2008 年. 【査読有】

Gabriel Pablo Nava, Yosuke Yasuda, Yoichi Sato, Shinichi Sakamoto: "On the in situ estimation of surface acoustic impedance in interiors of arbitrary shape by acoustical inverse methods", Acoustical Science and Technology, Vol. 30, No. 2, pp.100-109, 2008 年. 【査読有】

国際会議等

Daisuke Sugimura, Yoshinori Kobayashi, Yoichi Sato, Akihiro Sugimoto: "Incorporating Long-Term Observations of Human Actions for Stable 3D People Tracking", In Proc. IEEE Workshop on Motion and Video Computing (WMVC2008), pp.1-7, 2008. 【査読有】

Hideki Koike, Masataka Toyoura, Kenji Oka, Yoichi Sato: "3-D Interaction with Wall-Sized Display and Information Transportation using Mobile Phones", Proc. Workshop on designing multi-touch interaction techniques for coupled public and private displays (AVI2008 workshop), 2008. 【査読有】

Gabriel Pablo Nava, Yosuke Yasuda, Yoichi Sato, Shinichi Sakamoto: "An inverse method to estimate the acoustic impedance on the surfaces of complex-shaped interiors", 15th International Congress on Sound and Vibration, 2008. 【査読有】

Shiro Kumano, Kazuhiro Otsuka, Junji Yamato, Eisaku Maeda, Yoichi Sato: "Combining Stochastic and Deterministic Search for Pose-Invariant Facial Expression Recognition", Proc. British Machine Vision Conference (BMVC2008), 2008. 【査読有】

Yuyu Liu, Yoichi Sato: "Finding Speaker Face Region by Audiovisual Correlation", Proc. ECCV workshop on Multicamera and Multi-modal Sensor Fusion Algorithms and Applications (M2SFA2 2008), 2008. 【査読有】

Kris M. Kitani, Takahiro Okabe, Yoichi Sato, Akihiro Sugimoto: "Discovering primitive action categories by leveraging relevant visual context", Proc. International Workshop on Visual Surveillance (in conjunction with ECCV2008), 2008. 【査読有】

Yuyu Liu, Yoichi Sato: "Recovering Audio-to-Video Synchronization by Audiovisual Correlation Analysis", Proc. International Conference on Pattern Recognition (ICPR2008), 2008. 【査読有】

Yusuke Sugano, Yasuyuki Matsushita, Yoichi Sato, Hideki Koike: "An incremental learning method for unconstrained gaze estimation", Proc. European Conference on Computer Vision (ECCV2008), Vol. Part III, No. LNCS 5304, pp. 656-667, 2008. 【査読有】

Michihiro Kobayashi, Takahiro Okabe, Yoichi Sato: "Detecting video forgeries based on noise characteristics", Proc. Pacific-Rim Symposium on Image and Video Technology (PSIVT2009), pp. 306-317, 2008. 【査読有】

Takahiro Okabe, Yuhi Kondo, Kris M. Kitani, Yoichi Sato: "Recognizing multiple objects via regression incorporating the co-occurrence of categories", Proc. Pacific-Rim Symposium on Image and Video Technology (PSIVT2009), pp. 497-508, 2008. 【査読有】

その他論文

池田聖, 岡部孝弘, 佐藤智和, 阪野貴彦, 向川康博, 山崎俊太郎, 佐藤洋一: 「The 11th IEEE International Conference on Computer Vision (ICCV2007)報告」, 情報処理学会コンピュータビジョンとイメージメディア研究会, 2007-CVIM-162-59, 2008年.

小林貴訓, 佐藤洋一: 「分散センサ情報の統合によるエリア内人物追跡と動線推定」, 情報処理学会コンピュータビジョンとイメージメディア研究会, 2008-CVIM-163-30, 2008年.

松井壮介, 岡部孝弘, 佐藤洋一: 「近赤外画像を用いた低照度シーンにおける画質改善」, 情報処理学会コンピュータビジョンとイメージメディア研究会, 2008-CVIM-165-31, 2008年.

熊野史朗, 大塚和弘, 大和淳司, 前田栄作, 佐藤洋一: 「パーティクルフィルタと勾配法の組み合わせによる頭部姿勢変動に頑健な表情認識手法」, 画像の認識・理解シンポジウム (MIRU2008), pp. 1300-1305, 2008年.

鷺見和彦, 日浦慎作, 福井和広, 内田誠一, 佐藤洋一, 佐藤真一: 「PRMU グランドチャレンジ 2008—今後 10 年間に挑戦すべき課題を探る—」, 画像の認識・理解シンポジウム (MIRU2008), pp. 3, 2008年. 【査読有】

木谷クリス真実, 岡部孝弘, 佐藤洋一, 杉本晃宏: 「視覚的文脈を考慮した人物動作カテゴリの教師無し学習」, 画像の認識・理解シンポジウム (MIRU2008), pp. 28-33, 2008年. 【査読有】

岡部孝弘, 近藤雄飛, 木谷クリス真実, 佐藤洋一: 「カテゴリの共起を考慮した物体認識」, 画像の認識・理解シンポジウム (MIRU2008), pp. 217-222, 2008年. 【査読有】

小林理弘, 岡部孝弘, 佐藤洋一: 「ノイズ特性にもとづく映像の改ざん検出」, ノイズ特性にもとづく映像の改ざん検出, 1274-1279, 2008年. 【査読有】

Yuyu Liu, Yoichi Sato: "Recovering audio-to-video synchronization by audiovisual correlation analysis", 画像の認識・理解シンポジウム (MIRU2008), p. 935-940, 2008 年. 【査読有】

受賞・特許

受賞

助教(佐藤(洋)研) 岡部孝弘, 准教授佐藤洋一: 山下記念研究賞「近接点光源は未較正照度差ステレオにおける形状復元の不定性を解決するか?」, (社)情報処理学会, 2008 年.

准教授佐藤洋一: 平成 19 年度電子情報通信学会論文賞「人間の視覚特性を考慮した投影画像の光学的補正」, (社)電子情報通信学会, 2008 年.

准教授佐藤洋一, 助教(佐藤(洋)研) 岡部孝弘, 大学院学生木谷クルス真実: 学生優秀論文賞「視覚的文脈を考慮した人物動作カテゴリの教師無し学習」, MIRU2008 実行委員長, 2008 年.

准教授佐藤洋一, 大学院学生(佐藤(洋)研) 劉玉字: Best Industry-Related Paper Award「The 19th ICPR paper」, International Association for Pattern Recognition, 2008 年.

特許

Toshiyuki Namba, Hiroaki Sekiyama, Keisuke Okamoto, Yoshihiro Oe, Yoichi Sato, Yoshihiro Suda, Takahiro Suzuki,

Daisuke Yamaguchi, Shiro Kumano, Kenichi Horiguchi: 「Inattentive state determination device and method of determining inattentive state」, 特願 PCT/IB2008/002739, 2008 年 10 月.

七丈直弘・准教授

研究テーマ (主たるもの)

知識形成プロセスの分析

企業等においては、組織を単位として知識生産がおこなわれていくが、現在では組織間でのコラボレーションによる知識生産の効率化が重要視されてきている。特にR&Dに焦点を当て、研究者が果たす知識生産における2つの側面(生産と媒介)を定量的に求め、知識生産に与える影響を解析する。

コンテンツ分野における能力形成プロセスの分析

コンテンツ分野においては、突出した才能をもった個人が生産物の品質を大きく規定すると考えられてきた。しかし、個人の能力形成のマイクロ分析を進めることにより、個人が置かれた環境が持つ効果(embeddedness)が定量的にわかりつつある。本テーマでは、才能をもつに至った個人の能力形成プロセスの分析を行い、制度面での含意を得ることを目標とする。

研究業績 (2008 年度)

論文・作品等

国際会議等

Aujain Eghbali; Naohiro Shichijo; Yasunori Baba: "Determinants of the Japanese Development in Humanoid and Partner Robots: Technology Push or Market Pull", Pacific Northwest Regional Economic Conference: Spirit of Innovation Forum, 2008. 【査読有】

S.Liu; N. Shichijo; Y. Baba: "Location Strategy of Japanese Multinationals on R&D investment to China: Evidence from Patent Data", 3rd SMU EDGE Conference, Singapore Management University, 2008. 【査読有】

Naohiro Shichijo: "Necessity of multilateral cooperation in animated cartoon education – To send asian content to the world –", Asia/Pacific Regional Seminar on Animation Culture and Industry for Promotion of Cultural Diversity, 2008.

Naohiro Shichijo: "Approach toward content-related research in University of Tokyo", Asia/Pacific Regional Seminar on Animation Culture and Industry for Promotion of Cultural Diversity, 2008.

S.Liu; N. Shichijo; Y. Baba: "Location Strategy of Japanese and US Multinationals on R&D Activities in China: Evidence from Patent Data", 8th Global Conference on Business & Economics, 2008. 【査読有】

Silvia Rita Sedita, Yasunori Baba, Naohiro Shichijo: "How Do Collaborations with Universities Affect Firms' Innovative Performance The Role of "Star Consulting Scientists" in the Advanced Materials Field", Strategic Management Society, 28th Annual International Conference, 2008. 【査読有】

講演・口頭発表

七丈直弘:「キャラクターライセンスビジネスの挑戦: ~キャラビズにイノベーションは起きるか?~」, 東京大学キャラビズ研究プロジェクトキックオフスペシャルレクチャー, 2008. 【一般向け】

七丈直弘:「アニメーション meets ロケーション~風景、キャラクター、ストーリー」, 第6回文化庁全国フィルムコミッション・コンベンション, 2008. 【一般向け】

七丈直弘:「アニメーション制作においてロケーションが果たす機能と今後の展開」, ジャパン・アニメラボ・マーケット 2008, 2008. 【一般向け】

七丈直弘:「キャラクタービジネスにおける新たな収益モデルの可能性」, ライセンシングアジア 2008, 2008. 【一般向け】

七丈直弘:「ビジネスコンテンツ利用の現状と課題」, 「コンテンツ市場のさらなる拡充に向けた調査~ネットビジネスにおけるコンテンツ制作~」報告会, 2009. 【一般向け】

七丈直弘:「アニメとロケツーリズムにおける可能性~聖地巡礼と観光資源~」, 東京国際アニメフェスティバル 2009, 2009. 【一般向け】

鈴木高宏・准教授

研究テーマ (主たるもの)

超柔軟マニピュレータに関する研究

本研究では、従来の弾性の存在を前提とした柔軟系モデルでは扱えない、より柔軟な非弾性的柔軟系の運動を解析し、その特性を利用して新たなマニピュレーションの可能性を拓くことを目的としている。このような系を超柔軟系と呼んでいるが、例えばひもや糸、ワイヤー、テザー、ファイバー等のような要素はその例として考えられ、これらを利用することで従来より格段に軽量かつコンパクトな機構が実現できる。こうした超柔軟系を用いた従来にない新たなロボット マニピュレーションについて研究を行っている。

メカトロニック人工食道の開発

食道のただ一つの重要な機能は蠕動による咀嚼物の嚥下である。そのため、これは機械的機構で代替することが可能であると考えられ、それにより食道癌 手術等における多大な外科的侵襲を低減することができる。本研究では、スクリュウ搬送機構を利用したメカトロニック人工食道の開発を行っている。現在、試作実験機において、様々な粘度の対象物について搬送実験を行い、その有効性を確認している。

人間-自動車-交通流系の動的挙動と制御

CCR サステナブル ITS プロジェクト(sITS)に参加し、その1テーマとして研究を行っている。ITS 環境の普及段階においては、自動運転車と人間の運転する手動運転車の混在が予想される。本研究では、そうした混在交通流の動的挙動を解析し、安全性や効率を向上させる制御法を提案する。

研究業績 (2008 年度)

論文・作品等

国際会議等

T.Suzuki: "Human Driver Model for Universal ITS Platform and Next-Generation Vehicle-Traffic Control", International Symposium on ITS Researches, 2008.

T. Suzuki, T. Kinoshita and S. Gunji: "Analysis and Control of 3R Underactuated Manipulator", SICE Annual Conference 2008, 2008.【査読有】

T. Suzuki, M. Mori, T. Yuki, Y. Kunii and M. Kuwahara: "Calibration and Evaluation of Lane-Change Model on Highway from Microscopic & Macroscopic Viewpoints", ITS World Congress 2008, 2008.【査読有】

講演・口頭発表

結城, 森, 鈴木, 國井, 桑原:「免疫ネットワークを用いた分散型協調回避システムのマイクロ・マクロ両視点からの評価」, 日本ロボット学会学術講演会, 2008.

森, 結城, 貴志, 河合, 奥住, 鈴木, 國井:「ドライバモデルを含むマイクロ交通シミュレーションによる合流部錯綜状況の再現」, 自動車技術会秋季学術講演会, 2008.

宮田, 栗山, 竹田, 國吉, 鈴木:「ODE と Wii ボードを用いた受動歩行インタラクティブ・アート」, 第9回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(SI2008), 2008.

竹田, 宮田, 鈴木:「超柔軟系動力学モデルにおける分割数と力学パラメータの関係」, 第9回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(SI2008), 2008.

市川, 仲谷, 中村, 新谷, 鈴木:「柔軟管を用いたメカトロニック人工食道の開発」, 第9回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(SI2008), 2008.

結城, 森, 鈴木, 國井, 桑原:「免疫ネットワークを用いた車両協調システムによる錯綜状況の回避」, 第7回 ITS シンポジウム 2008, 2008.

森, 結城, 貴志, 河合, 奥住, 鈴木, 國井: 「車両錯綜状況下における個人特性を考慮したパラメータ同定」, 第 7 回 ITS シンポジウム 2008, 2008.

結城, 森, 鈴木, 國井: 「免疫ネットワークを用いた車両間協調によるリスク回避システムの構築」, 第 14 回ロボティクスシンポジウム, 2009.

受賞・特許

受賞

鈴木高宏: 計測自動制御学会システムインテグレーション部門部門貢献表彰「SI2007 プログラム委員長としての貢献に対して」, 計測自動制御学会, 2008 年.

ROGER DALE SMITH・准教授

研究テーマ (主たるもの)

研究業績 (2008 年度)

田中秀幸・准教授

研究テーマ (主たるもの)

産業技術のイノベーション・システムに関する研究

技術的限界に直面した産業においては、それを乗り越えるために不確実性の高い技術の方向性を明らかにするような焦点化が求められる。市場メカニズムは、そのような焦点化の機能が全般的に弱いため、従来は、国家のイニシアティブによって、企業の境界を越えたイノベーションの取り組みが進められてきた。しかしながら、近年、最先端の技術限界を突破するためには、必ずしもドメスティックな企業間協力だけでは対応が困難になってきており、それに伴い、国家でもなければ企業でもない非営利の中間組織がグローバルに展開することで、新たなイノベーション・モデル形成する例が生まれつつある。以上のような問題意識の下、産業技術のイノベーションにおける、市場、国家、企業、そして中間組織の機能などについての研究を進めている。

情報セキュリティ・マネジメントのインセンティブ設計に関する研究

情報システムのネットワーク化の進展によって、情報セキュリティは相互依存性が高まっている。相互依存的な環境下では、ある主体の情報セキュリティ水準は自らの管理努力だけではなく、ネットワークで接続された相手方のセキュリティ・マネジメントの影響も受けるようになる。こうした相互依存性は、外部効果を通じて市場の失敗をもたらすことになり、何らかの制度的な手当が必要となる。このような情報セキュリティを巡る組織の境界の変容に対して、いかなるインセンティブ設計があり得るのかなどについての研究を進めている。

地域情報化に関する研究

現在進められている電子自治体の取り組みは、行政内部の業務プロセスを抜本的に変えるのみならず、従来、行政の外側にあった主体との関係にも大きな変化をもたらす。具体的には、地域住民、地域企業やNPOとの相互関係を深めることで、新たな地域づくりが実現しつつある。電子自治体を契機として展開する地域

情報化の中で、行政の境界がどのように変容し、いかなる制度が求められるかなどについての研究を行っている。

研究業績 (2008 年度)

論文・作品等

雑誌論文

Tanaka, Hideyuki. and Takeshi Okamoto: "Effects of Information Communication Technology on Urban and Rural Service Sectors: An Empirical Analysis of Japanese Economic Geography", IFIP International Federation for Information Processing, Vol.286, pp.265-277, 2008 年.【査読有】

田中秀幸:「電子自治体政策と地域 IT 企業の振興に関する研究」, 社会経済システム, No.29, pp.27-34, 2008 年.【査読有】

須藤修,田中秀幸:「新たなサービスモデルの基盤」, 経済セミナー, No.643, pp.43-47, 2008 年.

その他論文

林隆史,後藤玲子,田中秀幸,須藤修:「自治体における SOA 導入の課題と意義」, 2008 年日本社会情報学会 (JASI・JSIS)合同研究大会論文集, 332-337, 2008 年.

岡本健志, 中野邦彦, 田中秀幸:「地域 SNS におけるネットワークの遷移」, 2008 年日本社会情報学会(JASI・JSIS)合同研究大会論文集, 168-173, 2008 年.

劉いく立, 田中秀幸:「東アジアにおける海外直接投資と ICT 産業の域内貿易に関する分析」, 2008 年日本社会情報学会 (JASI・JSIS)合同研究大会論文集, 98-103, 2008 年.

須藤修・田中秀幸:「情報経済」, 現代用語の基礎知識 2009, 664-669, 2009 年.

石黒正輝, 村瀬一郎,松浦幹太,田中秀幸:「情報セキュリティ対策と企業価値向上の関係」, The 2009 Symposium on Cryptography and Information Security, 2009 年.

田中秀幸, 中野邦彦, 岡本健志:「地域SNSでの知識流通に関する一考察」, 第4回人工知能学会知識流通研究会, <http://www4.atpages.jp/sigksn/conf04/index.html>, 2009 年.

講演・口頭発表

田中秀幸,杉山幹夫:「自治体のブランディング政策と地域企業ネットワーク」, 日本経済政策学会第 65 回全国大会, 2008.

田中秀幸:「IT ガバナンスの構築と危機管理対応の重要性」, 藤沢市トップマネジメント研修, 2008.【招待講演】【一般向け】

田中秀幸:「地域情報化の推進」, 財団法人全国市町村研修財団市町村職員中央研修所ブラッシュアップ女性リーダー研修, 2008.【招待講演】【一般向け】

田中秀幸:「地域の元気と情報化」, 長野県生涯学習センターICT 講座 II, 2008.【招待講演】【一般向け】
杉山幹夫, 田中秀幸:「自治体のブランディング政策と地域企業ネットワークの比較研究」, 社会経済システム学会第 27 回全国大会, 2008.

岡本健志, 田中秀幸: 「情報通信産業における市場間のネットワーク分析」, 社会経済システム学会第 27 回全国大会, 2008.

田中秀幸: 「コンテンツ産業政策に関する一考察」, 社会経済システム学会第 27 回全国大会, 2008.

田中秀幸: 「東アジアにおける ICT 製造業の相互依存関係」, 総務省情報通信政策研究所 BBL セミナー, 2008. 【招待講演】【一般向け】

田中秀幸: 「地域情報化の推進」, 財団法人全国市町村研修財団市町村職員中央研修所ブラッシュアップ女性リーダー研修, 2009. 【招待講演】【一般向け】

杉山幹夫, 田中秀幸: 「自治体のブランディング政策と地域の中小企業ネットワークに関する地域間比較」, 進化経済学会第 13 回全国大会, 2009.

中野邦彦, 岡本健志, 田中秀幸: 「地域 SNS における友達とコミュニティの形成要因分析」, 進化経済学会第 13 回全国大会, 2009.

田中秀幸: 「地域の元気と希望がいっぱい」, 第 4 回地域 SNS 全国フォーラム, 2009. 【招待講演】【一般向け】

中尾彰宏・准教授

研究テーマ(主たるもの)

オーバーレイネットワーク基盤構築技術の研究

オーバーレイネットワークの研究分野では、現在そして新しい将来のインターネットを支える様々なネットワークサービスやネットワークの仕組みを、インターネット内に埋め込まれた実験基盤(オーバーレイネットワークテストベッド)を用いることで実証実験し、性能評価や問題発見などを行うことを目的とする。本研究テーマでは、このような実証実験を広域で可能にする実験基盤の構築やノードの高度化技術の研究を目的とする。

オーバーレイネットワークを用いた経路制御技術の研究

オーバーレイルーティング(Overlay Routing)と呼ばれる、インターネットの可用性を向上したり様々なデータ通信の特性(QoS)を最適化する技術の研究を進めている。

サステナブル・ネットワーク・サービス基盤技術の研究

インターネット上に実装されたネットワークサービスへの DoS アタックや DDoS アタックなどの脅威に対し、サーバの仮想化とプロセスのマイグレーションを利用してサステナブルなサービスを実現するための基盤技術を研究開発し可用性を向上する研究を進めている。

研究業績(2008 年度)

論文・作品等

国際会議等

Masahiro Yoshida, Satoshi Ohzahata, Akihiro Nakao, and Konosuke Kawashima: "Controlling File Distribution In Winny Network Through Index Poisoning", IEEE ICOIN 2009, 2008. 【査読有】

K. Tutschku, T. Zinner, A. Nakao and P. Tran-Gia: "Re-sequencing Buffer Occupancy of a Concurrent Multipath Transmission Mechanism for Transport System Virtualization", Proceedings of Kommunikation in verteilten Systemen 2009 (KIVS 2009), Kassel, Germany, Mar. 2009., 2008. 【査読有】

K. Tutschku, T. Zinner, A. Nakao and P. Tran-Gia: "Network Virtualization: Implementation Steps Towards the Future Internet", Proceedings of the Workshop on Overlay and Network Virtualization at KIVS 2009, Kassel, Germany, Mar. 2009., 2008. 【査読有】

Akihiro Nakao, Kengo Sasaki, Shu Yamamoto: "A Remedy for Network Operators against Increasing P2P Traffic: Enabling Packet Cache for P2P Applications", IEICE Transactions on Communications 2008 E91-B(12):3810-3820;doi:10.1093/ietcom/e91-b.12.3810 (2008), 2008. 【査読有】

Kurt Tutschku, Akihiro Nakao: "Towards the Engineering of Dependable P2P-based Network Control - The Case of Timely Routing Control Messages", IEICE Transactions, Vol.E92-B, No.01, pp.-, (January 2009), 2008. 【査読有】

Yufeng Wang, Akihiro Nakao: "Research issues and overview of incentive-compatible topology evolution in autonomous overlay networks", The 3rd ChinaGrid Annual Conference 2008 (2008), 2008. 【査読有】

Yufeng Wang, Akihiro Nakao: "On socially-inspired cooperative and efficient overlay network evolution based on group selection pattern", IEEE Bionetics 2008., 2008. 【査読有】

Yufeng Wang, Akihiro Nakao: "On novel economic-inspired centrality measures in weighted networks", IEEE APSCC 2008 (2008), 2008. 【査読有】

Yufeng Wang, A. Nakao: "On evolution of cooperative overlay network based on group selection mechanism", The 9th International Conference for Young Computer Scientists (2008), 2008. 【査読有】

Akihiro Nakao, Ryota Ozaki, Yuji Nishida: "Building a Flexible Overlay Network Testbed with a Hosted Virtual Machine Monitor", ComSys 2008 (November 2008), 2008. 【査読有】

Akihiro Nakao, Ryota Ozaki, Yuji Nishida: "CoreLab: An Emerging Network Testbed Employing Hosted Virtual Machine Monitor", ACM ROADS 2008 (December 2008), 2008. 【査読有】

Yuichiro Hei, Aki Nakao, Toru Hasegawa, Tomohiro Ogishi, Shu Yamamoto: "AS Alliance: Cooperatively Improving Resilience of Intra-Alliance Communication", ACM ROADS 2008 (December 2008), 2008. 【査読有】

Soon Hin Khor and Aki Nakao: "AI-RON-E: Prophecy of One-hop Source Routers", IEEE Globecom 2008 Next Generation Networks, Protocols, and Services Symposium (GC'08 NGNPS) (December 2008), 2008. 【査読有】

John Russell Lane and Akihiro Nakao: "Best-Effort Network Layer Packet Reordering in Support of Multipath Overlay Packet Dispersion", IEEE Globecom 2008 Next Generation Networks, Protocols, and Services Symposium (GC'08 NGNPS) (December 2008), 2008. 【査読有】

John Russell Lane and Akihiro Nakao: "Path Brokering for End-Host Path Selection: Toward a Path-Centric Billing Model for a Multipath Internet", ACM ReArch 2008 (December 2008), 2008. 【査読有】

Kenji Leibnitz, Masayuki Murata and Akihiro Nakao: "Biologically-Inspired Path Selection Scheme for Multipath Overlay Networks", The 1st International Symposium of Applied Sciences on Biomedical and Communication Technologies (ISABEL) 2008 (2008), 2008. 【査読有】

John Russell Lane and Akihiro Nakao: "End-Host Path Monitoring and Selection Supporting Packet Dispersion on Multipath Overlay Networks", The 3rd International Conference on Future Internet

Technologies (CFI08) Seoul KyoYuk MunHwa Hoekwan Hotel, Seoul, Korea, June 18–20, 2008 (2008), 2008. 【査読有】

Soon Hin Khor and Aki Nakao: “Overfort: Combating DDoS with peer-to-peer DDoS puzzle”, IEEE International Symposium on Parallel and Distributed Processing, 2008 (IPDPS 2008), 2008. 【査読有】

その他論文

R. Ozaki, A. Nakao: 「Evaluating KVM for Router Virtualization」, In Proc. of SACSIS 2008, poster presentation (Jun. 2008), 2008 年.

K. Tutschku, T. Zinner, A. Nakao, P. Tran-Gia: 「The Case for Network Virtualization: Concurrent Multipath Transmission within Routing Overlays」, University of Wuerzburg, Institute of Computer Science, Research Report Series, Report No. 449, October 2008., 2008 年.

R. Ozaki, A. Nakao: 「Analysis of Network I/O Performance in KVM」, In Proc. of IPSJ SIG Technical Report, OS-107-15, pp.111-118 (Jan. 2008), 2008 年.

講演・口頭発表

中尾彰宏: 「Planetlab Research Activities」, ITRC 第 23 回研究会, 2008. 【招待講演】

中尾彰宏: 「新世代ネットワーク+JGN2plus (Overlay の概要)」, ITRC 第 23 回研究会, 2008. 【招待講演】

中尾彰宏: 「PlanetLab Applications and Federation」, ITRC 第 23 回研究会, 2008. 【招待講演】
AkihiroNakao : “PlanetLab Status in Asia”, CFI 2008 , 2008. 【招待講演】

中尾彰宏: 「オーバーレイネットワーク・ネットワーク仮想化の研究動向」, インターネットアーキテクチャ研究会 (IA), 2008.

Akihiro Nakao: “Overlay / Network Virtualization / Planet Lab”, 2nd China-Japan ICT Forum, 2008. 【招待講演】

AkihiroNakao : 「PlanetLab and JGN2 Japan」, FIRE (FIREWORKS) launch symposium, 2008. 【招待講演】

中尾彰宏: 「広域サステナブル・ネットワークング」, CREST シンポジウム, 2008. 【招待講演】

中尾彰宏: 「ネットワークの仮想化」, 電子情報通信学会, 2008. 【招待講演】

Akihiro Nakao: “Network Virtualization ”, WWRF 2008, 2008. 【招待講演】

AkihiroNakao : “NICT activities on Future Internet”, WWRF 2008, 2008. 【招待講演】

受賞・特許

特許

屏雄一郎, 大岸智彦, 中尾彰宏: 「パス選出装置, 及び, コンピュータプログラム」, 特願, 2008 年 09 月.

中尾彰宏, 富田優子, 山本周: 「経路検索方法およびシステム」, 特願, 2009 年 03 月.

丹羽美之・准教授

研究テーマ(主たるもの)

テレビ研究

テレビがこれまで放送してきたドラマやドキュメンタリー、ニュースやスポーツ、ワイドショーやバラエティ、アニメやCMなどの分析を通して、テレビ文化やテレビ・ジャーナリズムの歴史を研究している。

ドキュメンタリー研究

ビデオカメラでフィールドワークを行う、映像を用いて社会を記録し批評する、映像を撮りながらメディアについて学ぶなど、ドキュメンタリー制作の理論・実践について総合的に研究している。

アーカイブ研究

戦後日本を代表する記録映画会社「岩波映画製作所」の作品約4000本をはじめ、時代を記録した貴重な科学映画、産業映画、ドキュメンタリー映画をアーカイブ化し、その利活用の方法について研究している。

研究業績(2008年度)

論文・作品等

著書

金井明人・丹羽美之:「映像編集の理論と実践」, 法政大学出版社, 2008年.

講演・口頭発表

丹羽美之:「社会に開かれたメディア研究のために」, 国際シンポジウム『メディア文化研究を社会に開く—批判的知の実践に向けて』, 2008.

丹羽美之:「放送アーカイブの理論的構図を考える」, 日本マス・コミュニケーション学会 2008年度春季研究発表会, 2008.

丹羽美之:「メディアと市民運動の連携」, 国際シンポジウム『メディア文化研究を社会に開く—批判的知の実践に向けて』, 2008.

丹羽美之:「Crisis & Practice」, MELL EXPO 2009, 2008.

林香里・准教授

研究テーマ(主たるもの)

システムとしてのマスメディアにおけるジャーナリズムという活動の諸相の検討

マスメディアは、近代、テクノロジーの発展とともに拡大し、近代のシステムとなった。他方で、ジャーナリズムも、権力を監視し、それと対峙する近代民主主義において必要とされた営為である。この2つは20世紀には表裏一体となって発展してきた。21世紀に入り、テクノロジーの一層の発達とともにこの2つの合致が自明ではなくなった。それによるジャーナリズム活動の変遷を見極めていく。

各国のジャーナリズム制度ならびに言説の国際的比較分析

欧米や東アジア諸国のジャーナリズム研究者と共同で、ジャーナリズムの制度および以下のようなテーマでの言説の比較分析を行っている。

- 1) 1980年韓国光州事件の表象
- 2) 各国の公共放送のニュース番組の比較
- 3) 西欧、日本のいける「中国」のイメージについて

メディア産業における非正規雇用、フリーランスの労働環境について

近年のネット産業の台頭、ならびに経済環境の悪化による広告収入の減少という二つの波の中で、マスメディア産業はさまざまな側面からコストカットを余儀なくされている。こうした経済環境および技術環境の変動のなかで、各企業は人件費の削減を進めている。激動するマスメディア産業を取り巻く環境においてもっとも弱い立場の非正規雇用者、派遣技能労働者、フリーランスの処遇について実態を調査するとともに、制度的整備の可能性を研究する。

研究業績 (2008年度)

論文・作品等

分担著書

林香里: 「「記者クラブ的なもの」の害毒—日本では「ジャーナリスト」という職業がなぜ根付かないのか」『市民が広げる議会公開傍聴を閉ざす議会とメディアの欺瞞』, 今井一編, 現代人文社, 2008年.

雑誌論文

林香里: 「マスメディア・ジャーナリズムを支配する「最大多数の最大幸福」の最大不幸: 職業倫理の検討とその刷新の可能性」, 論座, No.7月号, pp.26-31, 2008年.

林香里: 「ジャーナリズムの正統「くらし」に宿る—現代社会の権力の監視、そして倫理のために」, 新聞研究, No.7月号, pp.28-32, 2008年.

林香里: 「「メディア産業の「フリーランス」労働」」, 世界, pp.134-144, 2008年.

林香里: 「「ケアのジャーナリズム」試論」, 現代の理論明石書店, No.2009年新春号, pp.130-143, 2009年.

国際会議等

Kaori Hayashi, Lin I-Hsuan: "Images of "Journalists" in Japan and East Asia. ", The IAMCR Stockholm, Sweden. Journalism Section on July 24, 2008. , 2008. 【査読有】

その他論文

林香里: 「「潮流 NHK 問題はもうたくさん！」」, 論座 3月号, 2008年. 【一般向け】

林香里: 「「潮流優雅で感傷的な日本の「公共性」議論」」, 論座 4月号, 2008年. 【一般向け】

- 林香里: 「「潮流「わかりやすさ」によって失われる熟慮と成熟の機会」, 論座 5 月号, 2008 年. 【一般向け】
- 林香里: 「「潮流脱文脈化される情報、到来する言論の「自己責任」時代」, 論座 6 月号, 2008 年. 【一般向け】
- 林香里: 「「潮流「トップ屋」からの宿題」, 論座 8 月号, 2008 年. 【一般向け】
- 林香里: 「「産科医無罪」をどう報じたか」, あらたにす新聞案内人, 2008 年. 【一般向け】
- 林香里: 「「潮流「論座」さん、さようなら。」, 論座 9 月号, 2008 年. 【一般向け】
- 林香里: 「なぜ取り上げない「自民党総裁を選ぶ人たち」, あらたにす新聞案内人, 2008 年. 【一般向け】
- 林香里: 「1 等空佐の懲戒免職と「国民の知る権利」, あらたにす新聞案内人, 2008 年. 【一般向け】
- 林香里: 「スクープした新聞、された新聞」, あらたにす新聞案内人, 2008 年. 【査読有】【一般向け】
- 林香里: 「視点「政府は歴史認識を語れ」, 朝日新聞視点 2008 年 11 月 20 日, 2008 年. 【一般向け】
- 林香里: 「「テロ」という言葉のインパクト」, あらたにす新聞案内人, 2008 年. 【一般向け】
- 林香里: 「「犯罪報道」への拭いきれぬ不信」, あらたにす新聞案内人, 2008 年. 【一般向け】
- Kaori Hayashi: "Why not counter Tamogami's viewpoint, Mr.Aso?", Herald Tribune, Dec.23, 2008. p.22., 2008 年. 【一般向け】
- 林香里: 「【回顧・展望】「メタボ・メディア」にあえて苦言を呈す」, あらたにす新聞案内人, 2009 年. 【一般向け】
- 林香里: 「オバマ大統領も言い違えた」, あらたにす新聞案内人, 2009 年. 【一般向け】
- 林香里: 「「中川番」記者からも説明がほしい」, あらたにす新聞案内人, 2009 年. 【一般向け】
- 林香里: 「「新聞記者は会社官僚制の中で埋没だから新しいニーズを掬えない」, J-CAST ニュース年末年始特別連載『新聞崩壊』第 9 回, 2009 年. 【一般向け】
- 林香里: 「ドイツの銃乱射事件と報道」, あらたにす新聞案内人, 2009 年. 【一般向け】

講演・口頭発表

- 林香里: 「「民主主義と成熟メディア社会」, 第 109 回平成 20 年秋季東京大学公開講座「成熟」2008 年 9 月 27 日(土), 2008. 【一般向け】
- 立花隆、滝鼻卓雄、武田徹、林香里: 「情報の海～「新聞」という船」, 東大情報学環・読売新聞共催連続シンポジウム「情報の海～漕ぎ出す船～」, 2008. 【一般向け】
- Kaori Hayashi: "Japan's Public Broadcasting System: An Instrument for National Interests or a Forum for Civil Society?", Media in East Asia. Lund University., 2009. 【招待講演】

新聞・報道

- 林香里: 「特集・名古屋タイムズ休刊にあたって。」, 名古屋タイムズ, 2008 年 10 月 16 日., 2008.
- 村松泰雄(朝日新聞論説主幹)・林香里: 「2008 年朝日新聞新聞週間特集」, 朝日新聞 2008 年 10 月 11 日, 2008.

原田至郎・准教授

研究テーマ(主たるもの)

情報社会のガバナンスに関する研究

ICT に依存する情報社会のガバナンスについて、特に技術的側面とそれを支える制度および専門家に着目した研究

クメール文字やその他の文字のコンピュータ処理に関する技術的・制度的研究

クメール文字やその他の文字のコンピュータ上での利用に関する技術的研究開発、およびその標準化をめぐる制度的研究

アジアの人々の価値観・政治意識に関する研究

アジア・バロメーター・プロジェクトの調査結果などに基づいた分析

研究業績 (2008 年度)

講演・口頭発表

HARADA Shiro: "Historical Review of the Issues Related with the Encoding of Khmer Script for Computers", Awarding Ceremony, Royal Embassy of Cambodia in Japan, 2008. 【招待講演】

原田至郎: 「講演」, ラ・サール高等学校東京大学見学会, 2008. 【一般向け】

原田至郎: 「アジア・バロメーターの対外情報基盤構築」, AsiaBarometer Project Series, Vol.7, pp.4-14, 2008 年.

開一夫・准教授

研究テーマ (主たるもの)

発達認知神経科学: 乳幼児を対象とした脳機能計測

人間の認知活動の根源的部分を解明するため、近赤外分光法(NIRS)や高密度脳波計(HD-EEG)を用いて、安全かつ低拘束で、乳幼児の脳活動を計測している。これらの脳活動計測によって得られたデータを、視線計測や行動実験を重ね合わせることで生後間もない乳児の脳機能がどのように発達していくのかを分析する。

さらに、ヒト乳児で得られた脳活動計測の結果を、チンパンジー等大型霊長類での脳活動計測結果と比較する研究にも着手している。

人工物・メディアの発達の認識過程に関する研究

TVやゲームが若年齢の子どもにどういった影響を与えるのか(与えないのか)を明確にするため、行動実験・質問紙調査・脳活動計測実験を行っている。

アンドロイドロボットの認知科学

外見が人間と酷似したロボットを、人間がどのように認知するのかという疑問に答えるため、認知科学的手法を用いた実証的研究を行っている。なお、本研究は、大阪大学・ATRとの共同研究として実施している。

研究業績 (2008 年度)

論文・作品等

雑誌論文

Ueno, A., Hirata, S., Fuwa, K., Sugama, K., Kusunoki, K., Matsuda, G., Fukushima, H., Hiraki, K., Tomonaga, M., & Hasegawa, T.: "Auditory ERPs to Stimulus Deviance in an Awake Chimpanzee (Pan troglodytes): Towards Hominid Cognitive Neurosciences", PLoS ONE, Vol.3, No.1, pp.e1442, 2008 年。【査読有】

Mugitani, R., Kobayashi, T., & Hiraki, K.: "Audiovisual matching of lips and non-canonical sounds in 8-month-old infants", Infant Behavior & Development, Vol.31, No.2, pp. 311-315, 2008 年。【査読有】

国際会議等

Dan, N., Hiraki, K., Matsuda, G., Fukushima, H., Matsunaka, R., & Miyazaki, M.: "Infant", Proceedings of the 16th international conference on infant studies, 2008. 【査読有】

Miyazaki, M., & Hiraki, K.: "Two-year-olds", Proceedings of the 16th international conference on infant studies, 2008. 【査読有】

Matsunaka, R. & Hiraki, K.: "What do infants look the most to regulate their behavior", Proceedings of the 16th international conference on infant studies, 2008. 【査読有】

Tenenbaum, E. Blossom, M. & Matsunaka, R. Hiraki, K. & Morgan, J.: "Read my lips: Japanese and American Infants", Proceedings of the 16th international conference on infant studies, 2008. 【査読有】

前田幸男・准教授

研究テーマ (主たるもの)

内閣支持率の研究

新聞社等が報道している世論調査の集計結果の検討を中心に、マクロ・レベルにおける内閣支持率の変動およびマイクロ・レベルにおける個人の内閣支持について基礎的な研究を行っている。

性役割分業と政治参加・政治的態度の研究

社会科学研究所が大阪商業大学と共同で行っている日本版総合社会調査 JGSS のデータを利用して、性・性役割分業と政治行動との関係を検討している。

データ・アーカイブの研究

社会科学研究所附属日本社会研究情報センターに設置されている SSJDA の運営上の基礎的研究になるが、諸外国のデータ・アーカイブについて歴史および現状について研究している。最近は米国センサス個票の保存および公開用マイクロ標本データの提供方法について調査を行っている。

研究業績 (2008 年度)

論文・作品等

分担著書

前田幸男:「バランスのとれた働き方」, 佐藤博樹・(財)連合総合生活開発研究所編, エイデル研究所, 2008 年.

雑誌論文

前田幸男:「海外におけるリモート集計システムをめぐる動向」, エストレーラ, Vol.175, pp.18-27, 2008 年.

前田幸男:「アメリカ合衆国におけるセンサス・マイクロ・データの保存と提供」, 統計, pp.21-28, 2008 年.

前田幸男:「JGSS-2005 にみる性別役割分業と自発的社会奉仕活動—政治参加との比較の観点から—」, 日本版 General Social Surveys 研究論文集 JGSS で見た日本人の意識と行動, Vol.8, pp.27-40, 2009 年.

講演・口頭発表

前田幸男:「インターネット調査と郵送調査の比較研究」, 統計関連学会連合大会(日本統計学会), 2008.

前田幸男:「内閣支持の認知枠組【ポスター発表】」, 日本政治学会, 2008.

新聞・報道

前田幸男:「政権交代へ高まる機運」, 共同通信社, 2008.

前田幸男:「政権交代へ流れ加速」, 共同通信社, 2008

真鍋祐子・准教授

研究テーマ(主たるもの)

現代韓国におけるナショナリズムとツーリズム

メディア研究の視座より韓国民主化運動を読み直す

朝鮮民族統一観の構築に関する宗教社会学的研究

研究業績(2008 年度)

論文・作品等

分担著書

真鍋祐子:「昔ばなしで親しむ環境倫理～エコロジーの心を育む読み聞かせ～」, 小長谷有紀編, くろしお出版, 2009 年.

講演・口頭発表

真鍋祐子:「現代韓国の民衆運動—光州事件から盧武鉉政権まで」, 第 8 回東洋文化研究所公開講座, 2008. 【一般向け】

新聞・報道

真鍋祐子:「光州事件とは何だったのか?」, 角川映画『光州5・18』パンフレット、角川映画『光州5・18』公式サイト URL:<http://may18.jp/>, 2008.

真鍋祐子:「〈光州事件〉とは何だったのか問いかける名もなき人びとの 10 日間」, エイガ. ドット. コム URL:<http://eiga.com/movie/53376/critic>, 2008.

真鍋祐子:「映画『光州5. 18』のメッセージ」, 角川映画『光州5. 18』公式サイト URL:<http://may18.jp/>, 2008.

水越伸・准教授

研究テーマ (主たるもの)

ソシオ・メディア論

メディアを情報技術の側からだけでなく、人間や社会の営みの側からもとらえるメディア論の構築。そのために「批判的メディア実践」という方法論を生み出しつつある。

メディア史

19 世紀後半から 20 世紀半ばにかけての電氣的メディア、電子的メディアをめぐる技術と社会のダイナミズムについての歴史的研究。

メディア・リテラシー

メディア・リテラシーについての理論と実践に関する総合的な研究。

研究業績 (2008 年度)

論文・作品等

著書

水越伸(単著):「新版デジタル・メディア社会(中国語での翻訳出版)」, 武漢大学出版社, 2009 年.

分担著書

水越伸・阿部純:「武蔵大学ケータイ・ワークショップ:メディア・リテラシーの展望」(『ICT 教育のデザイン』所収), 水越敏行・久保田賢一編, 日本文教出版, 2008 年.

水越伸:「メディアと社会」(『現代用語の基礎知識 2009』所収), 自由国民社編, 自由国民社, 2008 年.

雑誌論文

水越伸:「放送局のメディア・リテラシー活動:公共的役割の具体化に眼目」, 民間放送, Vol.4 月 13 日号, pp. 第4面, 2008 年.【一般向け】

水越伸:「Reconsideration of a one-way communication with mobile-phone: The uses of the collaborative reflection” on media literacy」, Enhancing ICT in Education for global society, pp..228-235, 2008 年.【査読有】

作品

水越伸、阿部純:「ケータイ記者になる!」, 関西大学総合情報学部, 2008.

水越伸、鳥海希世子、阿部純、飯田豊:「Keitai Trail! in 南海放送」, Keitai Trail! in 南海放送, 2008.

水越伸、鳥海希世子、阿部純:「文京あいうえお画文～写真で物語るまちの思い出～」, 文の京・大いなる学びシリーズ, 2009.

水越伸:「ワークショップ型セミナー「テレビって何? ～テレビ・パズルで遊ぼう!～」」, ろっぽんワークショップ, 2009.

講演・口頭発表

水越伸(コーディネーター):「ギャレス・モーレス、ナナタン・ウォンバンデュ、呉翠珍のパネルディスカッション」, MELL EXPO 2008, 2008.【一般向け】

水越伸、阿部純:「武蔵大学ケータイ・ワークショップ:メディア・リテラシーの展望」, MELL EXPO 2008, 2008.【一般向け】

水越伸、鳥海希世子、阿部純、土屋祐子:「表現を編みあげる文化的プログラム」, 人工知能学会第22回大会オーガナイズドセッション「市民の表現活動を編みあげる情報技術」, 2008.

Shin Mizukoshi: “Communal Keitai: expressing potential/possible form of media communication”, Digital Youth in East Asia Academic Conference, 2008.【招待講演】

KiyokoTORI UMI, Jun ABE, Shin MIZUKOSHI, : “Media Exprimo”, International Seminar: Dialogue between Chendai and Today, 2008.

水越伸:「新しいメディア・リテラシーのとらえかた」, 第13回NIE全国大会, 2008.【招待講演】【一般向け】

水越伸:「なぜローカル民放にメディア・リテラシーが必要か」, 中国地区民放懇話会, 2008.【招待講演】【一般向け】

水越伸:「学校では教えてくれないメディア表現とリテラシー」, 第10回メル・プラッツ公開研究会, 2008.【一般向け】

水越伸、下村健一、砂川浩慶:「出前授業講師座談会」, 出前授業講師座談会, 2009.【一般向け】

水越伸:「メディア研究からみたコンテンツ」, 東京大学大学院情報学環(コンテンツ創造教育研究コア/コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム)シンポジウム「コンテンツ教育の未来へ-The Content Education: Bridging to the Future-」, 2009.【招待講演】

水越伸:「今、なぜメディアリテラシーか?」, ろっぽんプロジェクト社内勉強会, 2009.【一般向け】

水越伸(パネリスト):「民放連メディアリテラシー実践プロジェクト報告会」, 民放連メディアリテラシー実践プロジェクト報告会, 2009.【招待講演】【一般向け】

水越伸(講演、WS):「ワークショップ型セミナー「テレビって何? ～テレビ・パズルで遊ぼう!～」」, 第1回ろっぽんワークショップ, 2009.【招待講演】【一般向け】

水越伸(司会):「禁止された遊び」, MELL EXPO 2009, 2009.【一般向け】

水越伸、沼晃介、飯田豊:「南海放送ケータイ・トレール!」, MELL EXPO 2009, 2009.【一般向け】

新聞・報道

水越伸(ラジオ出演):「ラジオ開局55周年特別番組」, 南海放送, 2008.

水越伸ほか:「南海放送メディアリテラシー実践プロジェクト「ラジオとケータイ、ウェブを連動—クロスメディアの取り組み開発」」, 民間放送, 2009.

水越伸ほか:「ラジオの時代高校生と一緒につくる」, 朝日新聞夕刊, 2009.

柳原大・准教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2008)

山内祐平・准教授

研究テーマ(主たるもの)

情報通信技術を利用した学習環境のデザイン

教育の情報化が急速な勢いで進んでいるが、学習は空間／活動／共同体／人工物の微妙なバランスの中で発生する複雑な事象である。インターネットなどの情報通信技術を学びの場に導入する際に、様々な要因をどうデザインすれば適切な学習環境を構成できるかを、実践研究の中で明らかにする。

研究業績(2008年度)

雑誌論文

山内祐平:「高等教育におけるNHKアーカイブス活用に関する研究:映像探索システム“MEET VideoExplorer”の開発」, 映像情報メディア学会誌, Vol.62, No.1, pp.12-14, 2008年。【査読有】

国際会議等

Hisamatsu, S., Kitamura, S., Yamauchi, Y. & Hida, N.: “Development of a Museum Exhibition System Combining Interactional and Transmissional Learning”, World Conference on Educational Multimedia, Hypermedia and Telecommunications 2008, pp.. 5877-5884, 2008. 【査読有】

Tsubakimoto, M., Mochizuki, T., Nishimori, T., Sato, T., Oura, H., Nakamura, Y., Ohno, T., Watanabe, S., Henrik, J., Matsumoto, K., Wada, H., Miyatani, T., Nakahara, J. & Yamauchi, Y.: “The Impact of Making a Concept Map for Constructive Reading with the Critical Reading Support Software “eJournalPlus””, World Conference on E-Learning in Corporate, Government, Healthcare, and Higher Education 2008, pp..506-514, 2008. 【査読有】

その他論文

山内祐平:「教育実践研究における妥当性境界-教育実践のモデル化を事例として-」, 日本教育工学会第24回大会講演論文集, 2008年.

山内祐平、椿本弥生、西森年寿、望月俊男、久松慎一、林一雅、大浦弘樹、中原淳:「映像探索システム MEET VideoExplorer の授業における評価」, 日本教育工学会第 24 回大会講演論文集, 2008 年.

受賞・特許

受賞

山内祐平: グッドデザイン賞「情報学環・福武ホール」, 財団法人日本産業デザイン振興会, 2008 年.

山口いつ子・准教授

研究テーマ(主たるもの)

ユビキタス時代の情報法における基底的価値とエンフォースメントに関する比較制度研究

これまで進めてきた表現の自由、メディア法、サイバー法及び知的財産法をめぐる憲法学的考察を基盤として、今後のネット上のコミュニケーション特性を方向付けるであろう「ユビキタス化」による社会変容という文脈の下で、情報の自由、規制及び保護をめぐる法のエンフォースメントに際して諸利益間の調整のあり方が問われている幾つかの問題領域に着目し、主に日米欧の議論を取り上げて比較制度分析の観点から検討を加える作業を通じて、こうした利益調整において考慮されるべき、情報や情報通信技術をめぐる法の基底にある価値原理や、対立する諸利益の間のバランスを図るための論理技術を探求していく。

より具体的には、現在、情報の自由、規制及び保護に関する以下の三つの作業を柱として、本研究を進めている。

第一に、情報の自由の理論的基礎として、表現の自由を憲法で保障することのそもそもの意義や根拠を問いつける原理論に着目し、この自由が複数の価値の組み合わせによって支えられているという価値構造や、自由の限界を根拠付ける論理について、考察を行っている。

第二に、こうした従来の法における表現活動ないし情報流通の「自由」と「規制」のバランスが、今日、新たな情報通信技術の発達の下で問い直されている状況を、マス・メディアの報道・取材の自由、通信と放送の融合化、プライバシー・個人情報保護、著作権などの個別の争点を取り上げながら、検討している。

第三に、財産としての情報の保護のあり方をめぐって、とりわけ、「知的財産権」と「自由な情報流通」とが衝突する場面に着目し、そこでの両者の調整—つまりは、情報の「保護」と「自由」との調整—における均衡にかかわる課題に取り組んでいる。

研究業績 (2008 年度)

論文・作品等

その他論文

山口いつ子:「情報法の価値と理論」, 博士(社会情報学)学位授与論文, 2009 年.

講演・口頭発表

山口いつ子:「知的財産権と自由な情報流通との調整のあり方をめぐる憲法学的考察—情報技術に関する法における基本原理の探求」, 特許庁特許審査第一部研究会, 2009. 【招待講演】

山本隆一・准教授

研究テーマ(主たるもの)

医療情報の安全性確保とプライバシー保護に関する研究

医療情報の可用性、完全性、機密性の適切な確保と、情報主権者の権利としてのプライバシーと教育・研修・研究・公益目的の利用を調和させるための技術的課題および制度や運用を中心とする人的要素の課題についての研究。

広域分散診療情報データベースへの知識発見手法の応用

電子カルテが普及した際に構成されると予想される広域分散診療情報データベースをモデル化し、随時蓄積される診療情報に対して動的な知識発見手法の適応についての研究

医療における公開鍵基盤の応用に関する研究

公開鍵基盤を医療ドメインに応用するにあつての、資格属性の取り扱いなどの問題の解決と国際的な調和に関する研究

研究業績(2008年度)

論文・作品等

雑誌論文

山本隆一:「パラダイムシフトが起きた医療のIT化に学会として明確なビジョンを示していく」, INNERVISION 別冊 IT VISION, No.15, pp.24, 2008年.

山本隆一:「我が国の医療IT化におけるレセプトオンラインの位置づけを考える」, 新医療, Vol.35, No.3, pp.84-86, 2008年.

山本隆一:「遠隔画像診断のセキュリティ」, 映像情報 Medical, Vol.40, No.4, pp.395-397, 2008年.

山本隆一:「診療情報の外部保存」, 映像情報 Medical, Vol.40, No.9, pp.772-775, 2008年.

須藤修・山本隆一:「情報爆発時代におけるオープン・イノベーションの活性化:ITによる社会基盤の刷新」, 情報処理, Vol.49, No.8, pp.919-925, 2008年.

山本隆一:「個人情報保護法は病院に何をもたらしたか」, 新医療, Vol.35, No.10, pp.80-82, 2008年.

講演・口頭発表

山本隆一:「ヘルスサービスリサーチにおける学術交流、連携、協力に向けて」, 日本病院管理学会シンポジウム, 2008.【招待講演】

山本隆一:「個人情報保護－医療情報システムの安全管理に関するガイドラインの改定について(第2版)－」, CyberRad 2008, 2008.【招待講演】

Ryuichi Yamamoto: "IT Reform Strategy of Healthcare System in Japan", The Government Leaders Forum-Asia, 2008.【招待講演】

山本隆一:「IT化で変わる日本の医療」, 健康と医療フォーラム 2008 第3回患者本位の医療とITの役割, 2008. 【招待講演】【一般向け】

山本隆一:「医療情報のセキュリティとプライバシーガイドラインの変遷と今後」, 第28回医療情報学連合大会, 2008. 【招待講演】

Ryuichi Yamamoto: "IT Reform Strategy and Security Guidelines of Healthcare System in Japan", Pan Pacific E-Health Summit, 2008. 【招待講演】

新聞・報道

山本隆一:「健康と医療フォーラム 2008 第3回患者本位の医療とITの役割」, 日本経済新聞, 2008.

荒木淳子・助教

研究テーマ (主たるもの)

知識労働者のキャリア開発

企業で働く個人、とりわけ、研究開発者や金融専門職、コンサルタントといった知識労働者のキャリア開発を促す学習環境に関する研究。こうした知識労働者のキャリア開発では、領域における専門性の確立が重要視される。これまでのキャリア開発研究では、キャリア開発がなされる学習環境については十分研究されてこなかった。そこで、ネットワークやコミュニティの観点から、知識労働者のキャリア開発が促される環境について研究を行う。

大学における新しいキャリア教育のデザインに関する研究

文部科学省を中心として、学校(初等中等教育、高等教育)におけるキャリア教育が推進されている。これらのキャリア教育は進路指導や就職支援といった性格が強いものである。しかし、社会人大学院の発達や産学連携の流れを踏まえれば、大学におけるキャリア教育には、こうした就職支援的なものに留まらず、社会人が働きながらキャリアを磨くことを支援するものであることが望まれる。そこで、大学における新しいキャリア教育のデザインについて研究を行う。

研究業績 (2008 年度)

大東誠・助教

研究テーマ (主たるもの)

レガシー情報システムのビュー統合・検索統合に関する研究

インタラクティブ 3次元情報視覚化

多面的情報検索理論に基づく3次元情報アクセス空間の自動構築

研究業績 (2008 年度)

小笠原盛浩・助教

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2008年度)

論文・作品等

雑誌論文等

小笠原盛浩:「インターネットのメディア信頼性形成モデルに関する実証分析」, マス・コミュニケーション研究, No.73, pp.113-130, 2008年.【査読有】

橋元良明, 小笠原盛浩, 江暉, 河井大介:「北京五輪に関する東大生、清華大生のメディア接触とその影響」, 東京大学大学院情報学 環情報学研究調査研究編, No.25, pp.29-72, 2009年.

橋元良明, 石井健一, 木村忠正, 金相美, 小笠原盛浩, 金仁培:「選挙時における情報行動の日韓比較—日本参議院議員選挙と韓国大統領選挙におけるメディア利用と投票行動の関連」, 東京大学大学院情報学環情報学研究調査研究編, No.25, pp.73-122, 2009年.

講演・口頭発表

小笠原盛浩, 関谷直也, 高橋奈佳, 齋藤さやか:「2007年参議院選挙の政治イメージ形成に対する多メディア環境の影響」, 日本マス・コミュニケーション学会 2008年度秋季大会, 2008.

樺島榮一郎・助教

研究テーマ(主たるもの)

コンテンツ産業の経済学的分析

新聞、テレビなど既存の大メディアから、音楽や映画、ゲームなどの既存メディア、ネット上の掲示板やWikiまで、あらゆるコンテンツ産業に共通する経済特性に関する研究を行う。これを起点に、デジタルコンバージョン化やそのほか技術変化に伴う産業構造の変化の予測、それぞれのコンテンツ産業の特色や、コンテンツ制作時にかかる経済的圧力の違いなどについての知見を得る。

著作権および著作権関連制度の経済学的分析

コンテンツ産業をビジネスとして成り立たせているのは、コンテンツに権利を設定する著作権および著作権に関連した制度に他ならない。特に著作物の創造や、流通・マネジメントの技術革新に対応した変化を促進する観点から、適切な著作権および著作権関連制度の在り方についての研究を行う

創造の多様性と進化の速度を向上させる条件・環境についての研究

Wikipedia や掲示板の書き込みを収録した書籍、音楽のインディーズ、漫画・アニメ・ゲーム・フィギュアなどにおける大規模な見本市的空間に関連した創作などに見られるように、著作者と消費者の相互作用による著

作物の形成の重要性が高まっている。こういったオープンな相互作用による創造環境に着目し、多様性と技術革新の速度を向上させる条件・環境・制度に関する研究を行う。

研究業績 (2008 年度)

論文・作品等

講演・口頭発表

榊島栄一郎:「コンテンツ産業の発展段階の視点から考察する CGM の産業組織」, 日本社会情報学会第 23 回全国大会, 2008.

榊島栄一郎:「音楽産業のオープン・クリエイションインキュベータ、もしくはニッチ生存可能環境としてのインディーズ」, 電通寄附講座コミュニケーション・ダイナミクス公開シンポジウムオープンクリエイションの可能性, 2008. 【招待講演】【一般向け】

榊島栄一郎:「コンテンツ産業の進化とインディーズ」, 電通社内セミナー, 2008. 【招待講演】【一般向け】

杉原周治・助教

研究テーマ(主たるもの)

基本権競合論

研究の目的は、これまで主として刑法学や民法学で論じられてきた競合の考え方を憲法学の領域に応用して、新たに「基本権競合論」という理論を織り成すことを主眼とする。基本権の領域では、しばしば、ある一つの事実関係に複数の基本権の構成要件が同時にかかわる状況が生じうるが、わが国の憲法学は、こうした問題に対してこれまでなんらの解決策も講じてこなかった。基本権競合論とは、まさにこのように、複数の基本権が重なり合う複雑な状況を解決するための理論である。本研究は、右理論の内実を、基本権における「真正な」または「不真正な」競合、「法条競合」、「規範的・規範論理的特別関係」、「補充関係」、「吸収関係」、「受け皿的機能」、「保護補完機能」、「補充機能」そして「観念的競合」といったタームを用いて、これを明らかにしていく。

研究業績 (2008 年度)

論文・作品等

雑誌論文

杉原周治:「職業の自由と表現の自由□ドイツにおける職業の自由と意見表明・プレスの自由の基本権競合をめぐる議論」, 東京大学大学院情報学環紀要情報学研究, No.73, pp.1-29, 2008 年.

竹内文乃・助教

研究テーマ(主たるもの)

疫学研究(大気汚染)

微笑粒子状物質(PM)による大気汚染が心筋梗塞や脳梗塞といった動脈硬化性疾患に影響するかどうか、大規模な疫学研究データを解析することで検討している(統計解析を担当)

疫学研究(小児の環境と健康)

妊婦および小児の環境ホルモンや化学物質への曝露が妊娠や性比の決定、精神・身体発達などどのように影響するか、全国6万人の妊婦を登録して追跡することで検討を行う(統計解析を担当)

研究業績(2008)

辻本篤・助教

研究テーマ(主たるもの)

組織論

リスクマネジメント論

研究業績(2008年度)

論文・作品等

分担執筆

Akira Ishikawa ,Atsushi Tsujimoto,Junpei Nakagawa,Hiromichi Yasuoka,Tetsuro Saisho,Hideto Maeda,Yoshisuke Yamakawa,Akito Sudo:「CREATIVE MARKETING FOR NEW PRODUCT AND NEW BUSINESS DEVELOPMENT」, Akira Ishikawa ,Atsushi Tsujimoto 編, World Scientific Publishing Co.Pte.Ltd, 2008年.

その他論文

辻本篤:「組織学習－組織の知識を共有する－①/「組織学習の連載に当たって」,『OHM』第95巻,第4号, 2008年.【一般向け】

辻本篤:「組織学習－組織の知識を共有する－②/「組織学習の系譜－生成期－」,『OHM』第95巻,第5号, 2008年.【一般向け】

辻本篤:「組織学習－組織の知識を共有する－③/「組織学習の系譜－成長期－」,『OHM』第95巻,第7号, 2008年.【一般向け】

辻本篤:「組織学習－組織の知識を共有する－④/「組織学習の系譜－隆盛期①－」,『OHM』第95巻,第8号, 2008年.【一般向け】

辻本篤:「組織学習—組織の知識を共有する—⑤/「組織学習の系譜—隆盛期②—」,『OHM』第95巻,第9号,2008年。【一般向け】

辻本篤:「組織学習—組織の知識を共有する—⑥/「システム思考—個人と組織の関係性分析・・・」,『OHM』第95巻,第10号,2008年。【一般向け】

辻本篤:「組織学習—組織の知識を共有する—⑦/「学習ループと“情動”」,『OHM』第95巻,第11号,2008年。【一般向け】

辻本篤:「組織学習—組織の知識を共有する—⑧/「自己マスタリーの形成プロセス—Ⅰ—」,『OHM』第95巻,第12号,2008年。【一般向け】

辻本篤:「組織学習—組織の知識を共有する—⑨/「自己マスタリーの形成プロセス—Ⅱ—」,『OHM』第96巻,第1号,2008年。【一般向け】

辻本篤:「組織学習—組織の知識を共有する—⑩/「プロジェクトチームの感情と価値観の醸成」,『OHM』第96巻,第2号,2008年。【一般向け】

南後由和・助教

研究テーマ(主たるもの)

戦後日本における建築家の有名性の生産・流通・消費に関する研究

都市・空間論、メディア論、芸術・技術社会学が交差する観点から、戦後日本における建築家の有名性が、建築家、国家、クライアント、ユーザーによって歴史的にいかにかに表象され、建築物として空間化してきたのかを分析している。なかでも建築家の職能運動の変遷、建築ジャーナリズムの系譜、一般紙誌における建築家の表象、クライアントの属性と地理的分布に関する研究を重点的に行っている。

アンリ・ルフェーヴル、シチュアシオニストの都市・建築論に関する理論的・実践的研究

理論的研究として、1950～70年代におけるアンリ・ルフェーヴルの空間論とコンスタントの都市・建築プロジェクト「ニューバビロン」が建築界に与えた影響を分析している。実践的研究として、社会学と建築学を越境して、現代の建築家との協働のリサーチ・プロジェクトを精力的に展開している。その他、今日的な都市の事例分析として、グラフィティ／落書きのフィールドワークを行っている。

研究業績(2008)

論文・作品等

分担執筆

南後由和:「「新しい社会学者と建築家の協働のかたちを描く」『1995年以後——次世代建築家の語る現代の都市と建築』pp360-369, 藤村龍至編, エクスナレッジ, 2008年。

飯田豊・南後由和:「「ポスト・ヤンキー文化——暴走族から走り屋へ、落書きからグラフィティへ」『ヤンキー文化論序説』pp204-219, 五十嵐太郎編, 河出書房新社, 2008年。

雑誌論文

南後由和:「戦後日本の都市空間における建築家とクライアントの結びつき——丹下健三・磯崎新・黒川紀章を事例とした見取図」, 日本都市学会年報, No.41, pp.81-89, 2008年.【査読有】

南後由和:「有名性と「界」の形成——建築家の事例分析に向けて」, ソシオロギス, No.32, pp.216-234, 2008年.【査読有】

南後由和:「郵便配達夫シュヴァルの理想宮——シチュアシオニストが愛した建築」, d/SIGN, No.16, pp.44-48, 2008年.

南後由和:「コンスタントのニューバビロン×建築界(2)」, SITE ZERO/ZERO SITE, No.2, pp.82-109, 2008年.

その他論文

藤村龍至・南後由和・ドミニクチェン:「議論の場を設計する——Live Round About Journal」, 新建築, 2008年3月号, pp24-25, 2008年.

柄沢祐輔・南後由和・藤村龍至:「特集批判的工学主義に向けて」, 建築雑誌, 2008年6月号, pp28-37, 2008年.

南後由和:「企業と大学研究室を越境した都市リサーチ」, 新建築, 2008年7月号, p39, 2008年.

南後由和:「建築家によるリサーチのリサーチ」, JA, 71号, pp10-11, 2008年.

南後由和:「状態としての建築——際の操作性」, Review House, 2号, pp60-61, 2008年.

南後由和:「ヴィジュアルな廃墟」, d/SIGN, No.16, pp42-43, pp84-85, pp90-91, pp100-101, pp114-115, 2008年.

南後由和:「超家族を許容する都市住居の原型」, 新建築住宅特集, 2009年3月号, p102, 2008年.

講演・口頭発表

南後由和:「建築論としてアンリ・ルフェーヴルを読む」, Cultural Typhoon, 2008.

迫慶一郎・大山顕・山梨知彦・北典夫・東浩紀・南後由和・藤村龍至:「グローバル社会における「建築的思考」の可能性第1夜——「タワーマンション」とグローバル・シティ」, 建築夜学校 2008、日本建築学会, 2008.【招待講演】

中村竜治・岩佐明彦・芝田義治・関谷和則・若林幹夫・南後由和・藤村龍至:「グローバル社会における「建築的思考の可能性」第2夜——「ショッピング・モール」とローカル・シティ」, 建築夜学校 2008、日本建築学会, 2008.【招待講演】

五十嵐太郎・石上純也・南後由和・長谷川祐子:「講演・シンポジウム」, diploma × kyoto, 2008.【招待講演】

新聞・報道

岸田省吾・小野良平・南後由和:「座談会変容続ける本郷キャンパス」, 東京大学新聞, 2008.

原田隆宏・助教

研究テーマ(主たるもの)

Computational Mechanics

Mainly fluid simulation.

Computer Graphics

Physically based simulation.

研究業績 (2008 年度)

米倉将吾・助教

研究テーマ (主たるもの)

情動ロボティクス

ロボットが人間のように感情・情動を持つようになるためには、何が必要なのか。
また、そもそもロボットが感情や情動を持っているとはどういう事なのか。
現象論、進化論、脳科学を出発点として、エモーショナルなロボットの構成を試みている。

思いやり共感システム

誰かの悲しみを敏感に感じ取りそっと寄り添ったり、
自然や芸術の美しさを感じたり、その感動を誰かと共有したり、
このような夢のようなシステムをつくり出すために必要な
脳型情報処理システムを構築する事を試みている。

身体性知能

非限定的状況においても適応創発的に対応する事の出来るシステムを構築するために、
アフォーダンス・ゲシュタルト・価値システム・身体性を軸として知能の創発、
行動の創発のための構成論に取り組んでいる。

研究業績(2008 年度)

論文・作品等

作品

Yoichiro Kawaguchi, Shogo Yonekura, Akiya Kamimura: 「The EGGY Robot」, SIGGRAPH Asia 2008 Emerging Technologies, 2008.

国際会議等

Shogo Yonekura, Yasuo Kuniyoshi, and Yoichiro Kawaguchi: "Detection of weak-signals by emotion-derived stochastic resonance", the tenth International Conference on the SIMULATION OF ADAPTIVE BEHAVIOR (SAB'08), LNAI, Vol.5040, pp.352-361, 2008. 【査読有】

S. Yonekura and Y.Kawaguchi: "Toward the synthesis of emotional primevaloid", ASIAGRAPH, Vol.2, No.1, pp.37-42, 2008. 【査読有】

S.Yonekura, S.Yagi and Y.Kawaguchi: "Adaptive body use of multipede driven by coupled neural oscillators", ASIAGRAPH, Vol.2, No.2, pp.140-145, 2008.【査読有】

12. S.Yonekura, S.Yagi and Y.Kawaguchi: " Adaptive body use of multipede driven by coupled neural oscillators", ICAT, pp.161-166, 2008.【査読有】

13. S.Yonekura and Y.Kawaguchi: "Development of swing-slip locomotion for no-legged primevaloid", IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems (IROS), pp.2441-2446, 2008.【査読有】

新聞・報道

河口洋一郎:「東大・河口洋一郎研「表現科学知のサバイバル」展が開催中～将来のロボットは奇妙な生物型?」, Robot Watch, 2009.

中村仁・特任講師 (科学技術振興)

研究テーマ (主たるもの)

「キャリア」と呼ばれる国家公務員のキャリアパスに関する研究

国家公務員の中でもいわゆる「キャリア」に焦点を当て、これまで部内均衡を保ってきたと言われていたモデルが省庁再編後どのように変容しているかを研究

国内ファッション産業に対する産業政策に関する研究

繊維産業の中でも「川下」と呼ばれるアパレル産業に焦点を当て、産業振興に行政がどのような関与を行っているか、また効果的な支援はどのような政策であるかを研究

コンテンツ産業政策の政策形成過程

国内のコンテンツ産業に対する産業政策の政策形成過程を研究

研究業績 (2008 年度)

論文・作品等

雑誌論文

豊田雄彦、中村仁:「シラバスデータベースシステムの開発とその活用についての提案」, 自由が丘産能短期大学紀要, No.41, pp.95-104, 2008 年.【査読有】

中村仁:「「一般職」における能力開発」, 能力開発 21, Vol.30, No.1, pp.8-11, 2009 年.【査読有】【一般向け】

中村仁:「プロフェッションと能力開発」, 能力開発 21, Vol.30, No.2, pp.2-6, 2009 年.【一般向け】

中村仁:「非営利公益団体の法人格取得と内部統治に関する一考察」, 東京大学大学院情報学環紀要情報学研究, Vol.76, pp.45-63, 2009 年.

中村仁:「業界による能力開発ーファッション産業を例としてー」, 能力開発 21, Vol.30, No.3, pp.2-6, 2009 年.【一般向け】

その他論文

中村仁:「就職試験の分析と学生支援のあり方」, 2007 年度自由が丘産能短期大学研究助成研究報告書, 2008 年.

中村仁:「コンテンツ産業政策における俯瞰的視点からの一考察」, 情報社会学会 2008 年度年次研究発表大会ショートペーパーセッション要旨集, pp.5-6, 2008 年.【査読有】

中村仁:「キャリア官僚における「部内均衡」と呼ばれる人事慣行に関する一考察」, 2008 年度日本政治学会研究大会プログラム・報告要旨集, pp.80, 2008 年.

中村仁:「ファッション産業と行政とのかかわりに関する一考察」, 第 23 回服装社会学研究部会報告要旨集, pp.4-5, 2008 年.

中村仁:「ベンチャー企業の事業戦略に関する事例研究-ファッション産業と行政との関わり-」, 東京大学大学院工学系研究科学際先端工学専攻・学習院大学大学院政治学研究科「オーラルヒストリー春の学校 2008 成果報告集」, pp.54-68, 2008 年.

講演・口頭発表

陸川和男、相原博之、高山晃、七丈直弘、吉田正高、中村仁:「キャラクターライセンシングビジネスの挑戦: ~キャラビズにイノベーションは起きるか?~」, 東京大学キャラビズ研究プロジェクト主催キックオフスペシャルレクチャー, 2008.

中村仁:「コンテンツ産業政策における俯瞰的視点からの一考察(再掲)」, 情報社会学会 2008 年度年次研究発表大会, 2008.

Jin NAKAMURA: "Description of UT CHARABIZ research project", University of Tokyo Satellite Seminar, Asia/Pacific Regional Seminar on Animation culture and Industry for Promotion of Cultural Diversity, 2008.【招待講演】

中村仁:「キャリア官僚における「部内均衡」と呼ばれる人事慣行に関する一考察(再掲)」, 2008 年度日本政治学会研究大会, 2008.

中村仁:「ファッション産業と行政とのかかわりに関する一考察(再掲)」, ファッションビジネス学会第 23 回服装社会学研究部会, 2008.

新聞・報道

中村仁:「「アニメが見る未来~コンテンツが拓く未来~」開催」, 『学環学府』, 東京大学大学院情報学環・学際情報学府, No.22, 2008 年 7 月, pp.4, 2008.

中村仁:「「ハリウッド映画に見る最新映画ビジネス戦略」開催」, 『学環学府』, 東京大学大学院情報学環・学際情報学府, No.22, 2008 年 7 月, pp.4, 2008.

中村仁:「「キャラクターライセンシングビジネスの挑戦: ~キャラビズにイノベーションは起きるか?~」開催」, 『学環学府』, 東京大学大学院情報学環・学際情報学府, No.22, 2008 年 7 月, pp.4, 2008.

木村達央、中村仁:「「顧客が主人公の時代に一番対応できたのがマルキュー」木村ジャパンイメージーション社長が東大で講演」, 『織研新聞』, 織研新聞社, 2008 年 11 月 28 日, pp.3, 2008.

中村仁:「視点- 東大講義」, 『織研新聞』, 織研新聞社, 2008 年 12 月 16 日, pp.5, 2008.

木村達央、中瀬雅通、中村仁:「木村ジャパンイマジネーション社長、中瀬三陽商会会長が東大で講演」、『SC JAPAN TODAY』, 第 415 号, 2009 年 1 月 1 日, pp.109, 2009.

吉田正高・特任講師 (科学技術振興)

研究テーマ(主たるもの)

コミックのデジタル・アーカイブ

印刷状況が劣悪であった昭和20年代～30年代を中心とした児童向けコミックのデジタル・アーカイブ作製と、その歴史資料としての活用に関する研究

近世江戸における鎮守の研究

近世江戸の各所に設置されていた信仰施設である鎮守について、特に地域住民の意識を通して、都市文化史の視点から考察する研究

コンテンツ文化史

戦後国内におけるコンテンツの発展と歴史について、当該時期の政治・社会状況を考慮しながら、コンテンツ分野(コミック、アニメーション、ビデオゲームなど)の枠を超えた文化史的な視点から、統合的に考察をする研究

研究業績 (2008 年度)

掘聖司・特任助教 (科学技術振興)

研究テーマ (主たるもの)

作品制作を中心とした錯視的映像表現に関する研究

コンピュータ・グラフィクスを使用し制作した複数の異なった視点移動の映像を、ひとつの画面内に部分的に合成することによって生じる視覚の競合を利用した錯視的映像作品の制作。切り抜き合成用に使用する動画素材にも視点移動する三次元形状のシルエットを用いることでさらに視覚の競合が助長される。

大谷智子・特任助教 (特別教育研究)

研究テーマ (主たるもの)

コンテンツ創造における色知覚の研究

映像コンテンツ創造の研究領域において、情報の受け手側である人間の特性を考慮した基礎研究。

研究業績 (2008)

研谷紀夫・特任助教（特別教育研究）

研究テーマ（主たるもの）

Digital Archive Digital Heritage における情報統制手法の確立

文化資源をデジタル化して公開する Digital Archive や Digital Heritage における、メタデータやオントロジなどの情報統制手法の確立を行う。

近代メディア表象論国葬におけるメディア表象を中心として

近代におけるメディア表象を、近年では特に明治以降の国葬を対象としたメディア表象について研究する。

研究業績（2008 年度）

論文・作品等

著書

研谷紀夫:「デジタルアーカイブの「資料基盤」における統合化モデルの構築」, 勉誠出版, 2009 年.

分担著書

研谷紀夫:「デジタル時代のアーカイブ」, 小川千代子編, 岩田書院, 2008 年.

雑誌論文

研谷紀夫:「デジタルネットワーク上の文化情報資源で活用する人名典拠情報の JAPAN/MARC 形式への適応の試みとその可能性」, TP&D フォーラム 2008 実行委員会, TP&D フォーラムシリーズ整理技術・情報管理等研究論集, Vol.18, pp.17-32, 2008 年.【査読有】

研谷紀夫:「海外における Digital Cultural Heritage—MLA 連携と統合化が鍵を握る、次世代の Digital Cultural Heritage」, 日本工業出版, 画像ラボ, Vol.19, No.4, pp.1-6, 2008 年.【一般向け】

研谷紀夫:「戦前期における博覧会及び帝国・帝室博物館の目録形式の変遷」, アートドキュメンテーション学会, アートドキュメンテーション研究, Vol.15, pp.19-32, 2008 年.【査読有】

研谷紀夫:「～小川一眞と国葬写真帖～異なる版の相互比較より写真帖編集の経緯とその編集観点を探る試み～」, 日本写真芸術学会誌, Vol.17 巻, No.2 号, pp.31-48, 2008 年.【査読有】

研谷紀夫:「デジタルネットワークにおける歴史的人名・組織情報の現状とその利活用モデル」, 情報知識学会誌, Vol.18, No.2, pp.93-98, 2008 年.

研谷紀夫:「図書館における電子化時代の文書管理」, 情報科学技術協会, 情報の科学と技術, Vol.58, No.11, pp.554-559, 2008 年.

倉持基研谷紀夫馬場章:「岩倉家所蔵歴史写真の研究-岩倉具視肖像湿板写真に関する基礎報告-」, 写真芸術学会誌, Vol.17 巻, No.2 号, pp.61-68, 2008 年.【査読有】

その他論文

研谷紀夫川島隆徳:「ネットワーク文化情報資源で活用する人名典拠情報とその共同構築のためのオントロジエディタ」, 情報処理学会,情報処理学会シンポジウムシリーズ vol.2008,人文科学とコンピュータシンポジウム論文集 2008, 2008 年.

講演・口頭発表

研谷紀夫:「文化資源電子情報化メディアと人名・組織典拠情報」, TP&D フォーラム 2008, 2008. 【招待講演】

藤原正仁・特任研究員 (特別教育研究)

研究テーマ (主たるもの)

デジタルコンテンツ分野における人材育成に関する研究

インターンシップとキャリアに関する研究

就労形態の多様化に関する研究

研究業績 (2008 年度)

その他論文

藤原正仁:「変容する日本のゲーム産業と人材マネジメント」, デジタルコンテンツ制作の先端技術応用に関する調査研究報告書, 財団法人デジタルコンテンツ協会, 2008 年. 【一般向け】

講演・口頭発表

藤原正仁・馬場章:「南カリフォルニア大学におけるゲームの産学連携」, 産学連携学会第 6 回大会, 2008.

藤原正仁:「ゲーム産業におけるプロデューサーのキャリア発達」, 日本キャリアデザイン学会第 5 回研究大会, 2008.

Masahito Fujihara:「Career Development in the Japanese Game Industry」, DAICE: Digital Art International Campus Exhibition, 2008. 【招待講演】

藤原正仁:「コンテンツ産学連携教育の意義: インターンシップとキャリア発達」, コンテンツ教育の未来へ-The Content Education: Bridging to the Future-, 2008.

藤原正仁:「ゲーム教育・研究とキャリア」, 財団法人デジタルコンテンツ協会 3 月度セミナー, 2008. 【一般向け】

松野将宏・特任助教 (特別教育研究)

研究テーマ (主たるもの)

スポーツを核とした地域活性化に関する研究

プロスポーツの存在は、その経済波及効果の観点から都市におけるビッグビジネスであるとされている。本研究では、地域における行政や財界、地域住民の連携を通じた組織間学習やソーシャルキャピタルの蓄積と応用といった視点から新たな「地域づくり・まちづくりの核」と位置づけて、地域活性化メカニズムを解明していく。

日本版 LLP 制度を活用した技術移転メカニズムに関する研究

平成 17 年 8 月より施行された有限責任事業組合 (LLP) 法により、人的資源を活用した共同事業化による創業促進が期待されている。本研究では、事例データを用いて、日本版 LLP 制度による技術移転メカニズムを分析し、新たな技術移転パースペクティブを提示する。技術系 LLP の技術移転モデルを分析枠組として、技術特性、不確実性、資源補完性、複雑性、LLP の組織・制度的要因を分析指標とし、技術移転を促進するメカニズムを分析する。

研究業績(2008 年度)

論文・作品等

雑誌論文

松野将宏:「日本版 LLP 制度を活用した技術移転」, JAPAN VENTURES REVIEW, Vol.11, pp.41-50, 2008 年. 【査読有】

松野将宏:「基調講演「スポーツを核とした地域づくり」公開シンポジウム「スポーツの交流と地域づくり」」, 東北都市学会研究年報, Vol.7, 8, pp.65-101, 2008 年.

講演・口頭発表

松野将宏:「産学官連携における不確実性のマネジメント—LLC を活用したオープン・イノベーション—」, 日本ベンチャー学会, 2008.

添野勉・特任助教(研究拠点形成)

研究テーマ (主たるもの)

メディア史

メディア論

アーカイブ研究

研究業績 (2008 年度)

論文・作品等

その他論文

添野勉・山本拓司:「「UT[3]情報学環収蔵資料「第 1 幕」小野秀雄コレクションと坪井家寄託資料」資料紹介」, 東京大学大学院情報学環社会情報研究資料センターニュース, 2009 年. 【一般向け】

講演・口頭発表

添野勉:「写真の時代を駆けて～成沢玲川とその時代」, 信州龍馬会(上田商工会議所), 2008.【招待講演】
【一般向け】

添野勉:「国家・文化・国土の視覚情報形成～視覚イメージの生産と人的資源ネットワーク:1880-1920」, 情報文化学会第16回全国大会, 2008.

D.ビュースト・特任助教(研究拠点形成)

研究テーマ(主たるもの)

近代性、グローバル化とナショナリズムの諸問題(日本・東アジアを中心に)

文化とアイデンティティの政治学(文化政策を含めて)

近代思想とその人文・社会科学への影響(解釈学を中心に)

研究業績(2008年度)

山本拓司・特任助教(研究拠点形成)

研究テーマ(主たるもの)

近代日本における身体文化の形成

概要説明 主に日本をフィールドとしながら、社会の近代化の過程における、体操やスポーツ等の身体文化および大衆文化の関係について研究を行っている。

東京大学情報学環所蔵 戦時宣伝資料のデジタル・アーカイブの作成について

概要説明 情報学環が所蔵する戦時宣伝資料(第一次世界大戦期の欧米プロパガンダポスターおよび日中戦争～第二次世界大戦にかけての日本側プロパガンダ・パンフレット、戦時号外コレクション)の整理とデジタル・アーカイブの作成を行い、それら戦時宣伝資料のメディア史においてもつ意義について研究を行っている。

研究業績(2008年度)

講演・口頭発表

山本拓司:「戦前期日本のスポーツと明治神宮外苑」, 第18回日本スポーツ社会学会大阪大会, 2009.

七邊信重・特任助教(受託研究)

研究テーマ(主たるもの)

オンラインゲームの教育目的利用のための研究——教室談話の分析・考察から

近年、Nintendo DS や Wii をはじめとするデジタルゲームの教育利用に、世界的に関心が集まり、日本でも学校での教育利用が行われるようになってきている。しかし、ゲームを用いた授業で生徒の学習が行われるプロセスを、実証的データに基づいて考察した研究は多くない。筆者は、歴史オンラインゲーム『大航海時代 Online』(株式会社コーエー)を使用した授業における教師と生徒との教室談話のデータを用いて、ゲームを使った授業と生徒の学習の連関について探究を行っている。

サブカルチャーの文化産業論的研究——オタク現象の構造連関分析を中心に

ポスト高度成長期に出現した「オタク」と呼ばれるアニメやマンガのコアなファンは、メディアを媒介に独自のシーンや文化を形成している。そしてこのサブカルチャーシーンは、コミックマーケットに象徴的に見られるように、日本のポピュラー文化産業の通底部で、優れた人材を育成し革新的な文化的コンテンツを産業界に供給している。筆者の関心は、従来の社会科学で十分に探究されてこなかった、日本のオタク・サブカルチャーと産業界との複雑で潜在的な相互連関を解明する点に向けられている。

現在は、文化社会学や組織論、社会心理学における集団・組織・文化・制度についての理論枠組とそれらに基づいて蓄積された先行研究に依拠しつつ、ゲームを事例とした分析をおこなっている。具体的には、1980年代以降の日本の家庭用ゲーム産業の興隆・停滞・縮小・再生と、PCゲーム企業やアマチュア制作のデジタルゲーム(Key『CLANNAD』や 07th Expansion『ひぐらしのなく頃に』等)の活況の社会的・歴史的な背景、両者の構造連関等を、定性的データの分析・考察から探究している。

研究業績(2008年度)

論文・作品等

一般向け講演等

Hichibe, Nobushige and Akira Bab: ““Serious Games” in JAPAN”, Serious Games Summit 2008 (Game Developers Conference 08), 2008. 【招待講演】

雑誌論文

七邊信重:「同人・インディーズゲーム制作を可能にする「構造」——制作・頒布の現状とその歴史に関する社会学的考察」, コンテンツ文化史研究, Vol.1, 2008年.

講演・口頭発表

七邊信重:「同人ゲームの全体像——同人ゲームの過去・現在・未来」, 日本デジタルゲーム学会 2008年9月公開講座, 2008.

七邊信重:「「ひぐらし／うみねこのなく頃に」に見るコンテンツとコミュニティ」, 日本デジタルゲーム学会 2008年10月公開講座, 2008.

七邊信重:「同人ゲーム制作の現状と課題——中間報告」, ゲーム産業の現状と課題に関する研究会, 2008.

小林真輔・特任准教授(研究拠点形成)

研究テーマ(主たるもの)

センサーネットワーク

小型で無線通信可能なセンサーネットワークの研究。ハードウェアからソフトウェアまでのトータルアーキテクチャの研究を行っている。

組み込みシステム

組み込みシステムのハードウェア並びにソフトウェアの研究

研究業績 (2008 年度)

論文・作品等

雑誌論文

Nakagawa, T.; Ono, G.; Fujiwara, R.; Norimatsu, T.; Terada, T.; Miyazaki, M.; Suzuki, K.; Yano, K.; Ogata, Y.; Maeki, A.; Kobayashi, S.; Koshizuka, N.; Sakamura, K: "1-cc Computer: Cross-Layer Integration With UWB-IR Communication and Locationing", IEEE Journal of Solid-State Circuits, Vol.43, No.4, pp.964-973, 2008 年。
【査読有】

国際会議等

Masahiro Bessho, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: "uNavi : Implementation and Deployment of a Place-Based Pedestrian Navigation System", First IEEE International Workshop on Software Engineering for Context Aware Systems and Applications (SECASA 2008), 2008. 【査読有】

その他論文

小林真輔, 越塚登, 坂村健: 「超小型チップネットワーキング技術」, 電子情報通信学会学会誌, vol.91, no.7, 2008 年.

下畑光夫・特任准教授 (寄付講座)

研究テーマ (主たるもの)

ユビキタスサービス学の研究

RFID やモバイルネットワークといったユビキタスの要素技術は着実に開発が進んでおり、次にはその技術を活用したサービス(ユビキタスサービス)の普及が期待されている。本研究はユビキタスサービス普及に向けて、技術的、社会的、制度的課題について基礎学問的アプローチから明らかにすることを目的としている。また、事業化、ビジネス化といった実践的方法論まで取り組みたいと考えている。

シニア観光客に対するユビキタス観光情報サービスの研究

モバイル機器を用いたユビキタス観光情報サービスは数多くの実証実験がなされているが、商用レベルに至っているものはほとんどない。本研究では、モバイル機器への親和度が低いとされるシニアを対象を絞り、調査分析を行い、ユビキタス観光情報のあるべき姿を探り出す。

研究業績 (2008 年度)

北村智・特任助教 (寄付講座)

研究テーマ (主たるもの)

研究業績 (2008 年度)

論文・作品等

雑誌論文

Kitamura, S.: "FtF and mobile email personal networks and loneliness: Focusing on the interaction effects of sociability and personal networks", *Journal of Socio-Informatics*, Vol.1, No.1, pp.71-86, 2008 年。【査読有】

国際会議等

Yamada, M., Shimada, N., Kitamura, S., Miyake, M., Tateno, Y., Yamaguchi, E., Harrison, R., Akiyama, T., Nakano, M., Ohfusa, J., Nagaoka, T., Yamauchi, Y., & Nakahara, J.: "The development and evaluation of mobile language learning application for listening comprehension in English: Towards a successful design of mobile language learning application", *World CALL2008*, 2008。【査読有】

Hisamatsu, S., Kitamura, S., Yamauchi, Y., & Hida, N.: "Development of a museum exhibition system combining interactional and transmissional learning", *World Conference on Educational Multimedia, Hypermedia and Telecommunications 2008*, 2008。【査読有】

講演・口頭発表

北村智: 「「つながりメディア」としての学術コミュニティ: 日本教育工学会における研究キーワードの関係構造の分析」, 日本教育工学会第 24 回全国大会, 2008。

松河秀哉, 北村智, 山内祐平, 中野真依, 金森保智, 宮下直子: 「相関ルールを用いた誤答パターンの分析」, 日本教育工学会第 24 回全国大会, 2008。

北村智: 「協調学習研究における理論的前提と分析方法の整合性: 相互作用による学習と標本の相互独立性」, 日本教育工学会第 24 回全国大会, 2008。

受賞・特許

受賞

松河秀哉, 北村智, 永盛祐介, 久松慎一, 山内祐平, 中野真依, 金森保智, 宮下直子: 日本教育工学会論文賞「データマイニングを活用した学習方略フィードバックシステムの開発」, 2008 年.

別所正博・特任助教 (寄付講座)

研究テーマ (主たるもの)

研究業績(2008 年度)

論文・作品等

国際会議等

Masahiro Bessho, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, Ken Sakamura: "uNavi: Implementation and Deployment of a Place-based Pedestrian Navigation System", The 1st IEEE International Workshop on Software Engineering for Context Aware Systems and Applications (SECASA 2008), pp.1254-1259, 2008. 【査読有】

Masahiro Bessho, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, Ken Sakamura: "Assisting Mobility of the Disabled using Space-Identifying Ubiquitous Infrastructure", ACM ASSETS 2008, pp.283-284, 2008. 【査読有】

味八木崇・特任助教 (寄付講座)

研究テーマ (主たるもの)

ヒューマンコンピュータインタラクション

実世界センシング

ユビキタスコンピューティング

研究業績 (2008 年度)

論文・作品等

国際会議等

Takashi Miyaki and Jun Rekimoto: "Sensonomy: Envisioning Folksonomic Urban Sensing", Ubicomp 2008 Workshop Programs, pp.187-190, 2008. 【査読有】

Nobuyuki Kasuya, Takashi Miyaki, and Jun Rekimoto: "Activity-based Authentication by Ambient Wi-Fi Fingerprint Sensing", Ubicomp 2008 Adjunct Programs, pp.16-17, 2008. 【査読有】

講演・口頭発表

岩崎健一郎, 味八木崇, 暦本純一: 「Expressive Typing: 本体内蔵型加速度センサによる打鍵圧センシングとその応用」, 第 16 回インタラクティブシステムとソフトウェアに関するワークショップ WISS2008, 2008.

山田政寛・特任助教 (寄付講座)

研究テーマ (主たるもの)

研究業績 (2008 年度)

湧田雄基・特任助教 (寄付講座)

研究テーマ (主たるもの)

Human Behavior Recognition Using Ubiquitous sensors

主に歩行者をターゲットとして, 使用者に取り付けたセンサや都市空間に配置されたセンサ(ユビキタスセンサ)からの情報を利用し, 利用者の位置, 状態または行為を推定することを研究目標とする. こうした利用者の情報を活用し, よりリッチなサービスの提供を実現する.

ロボットによるイベント認識のための概念構造の自立的構造化

本研究では, ロボットによる自由度が高くかつロバストな実環境における現象理解と解釈(イベント認識)を実現するためのロボット自身が保有する概念構造を自立的に獲得し構造化するためのアーキテクチャの構築を行う. なお, 本研究は, 文部科学省科学研究費補助金による援助を受けて実施する.

ネットワークロボットを用いた睡眠を中心とする生活パターン管理・調整支援

本研究では, 人の日常生活を観測可能な画像センサを搭載したロボットおよびウェアラブル型の生体センサをワイヤレスネットワークでリンクすることにより, 人の生活パターンを管理・調整することが可能なシステムを構築した. 提案システムでは, 脈波が取得可能な生体センサおよび画像認識による人状態推定手法を組み合わせることで, 日常生活の中の人の行動を推定することが可能である. また, 生体リズムの動的変動特性に注目し, 人の活性度および活動パターンを調整する手法について提案した.

なお, 本研究は, 文部科学省科学研究費補助金の援助により実施した.

研究業績 (2008 年度)

論文・作品等

国際会議等

Yuki Wakuda, Masahiro Kojima, Kosuke Sekiyama and Toshio Fukuda: "Dynamic Description of Event on Desktop Environment Based on Cognitive Ontology", IEEE, The SICE Annual Conference 2008, Tokyo, pp.115-120, 2008. 【査読有】

Yuki Wakuda, Kosuke Sekiyama and Toshio Fukuda: "Cognitive Ontology: A Concept Structure for Dynamic Event Interpretation and Description from Visual Scene", IEEE 9th International Symposium on Distributed Autonomous Robotic Systems 2008 (DARS2008), pp.123-134, 2008. 【査読有】

講演・口頭発表

湧田雄基, 関山浩介, 福田敏男: 「Cognitive Ontology を用いた動画イベントの動的な解釈と記述手法」, ロボティクスメカトロニクス講演会 2008 (Robomec2008), 2008.

滝田啓介・特任研究員（寄付講座）

研究テーマ（主たるもの）

ユビキタス・コンピューティングを活用した応用サービスの技術・制度・ビジネスモデル研究

ユビキタス・コンピューティング応用サービスに関する以下の内容を行う。

①技術開発・実証実験②制度研究・調査③ビジネスモデル検討・提案

研究業績（2008 年度）

論文・作品等

滝田啓介: 「ucode による食の安全・安心の実現～フードチェーンの管理手法～」, TRONSHOW 2009, 2008. 【一般向け】

石川雄章・特任教授

研究テーマ（主たるもの）

新技術の社会への実装（イノベーション・モデル）

ITをはじめとする新しい技術を社会に実装する際には、多くの場合、技術というよりはむしろ、多様なステークホルダーとの調整や既存の社会システムの見直し等が課題となる。こうした解題に対応しつつイノベーションを実現するためには、ステークホルダーの把握、共通目標の設定、コアメンバーの任命とチームの結成、権利と責任の適正な分担、検討プロセス及び場の設計、といった幅広い領域にわたる戦略的な取り組みが必要となる。

21世紀COEプログラム「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」では、ユビキタス技術の現場への適用をテーマに、政府、自治体などの取り組みを通じて、実証的にこのテーマにアプローチしている。

ITガバナンス（公的セクターにおける枠組みとCIOの役割）

ITガバナンスとは「企業が競争優位構築を目的に、IT戦略の策定・実行をコントロールし、あるべき方向へ導く組織能力」（「企業のITガバナンス向上に向けて」（通商産業省 1999）とされているが、公的セクターにおいてもIT戦略の策定・実行をコントロールすることは重要な課題である。特に、公的セクターは民間セクターとは異なる評価基準、行動制約があり、また社会的な制度設計という特別な機能を有する。こうしたことを前提に、COBITなどの標準的なITガバナンスのフレームワークを参考に、自らの県でのCIOの経験などを踏まえて、公的セクターにおけるITガバナンスの枠組みとCIOの役割について研究している。

社会的合意形成

新しい技術・制度の社会への導入など、社会的に大きな影響をあたえる行為を行う際には、事前に関係者の合意を得たうえで進めることが望ましく、こうした活動を怠った場合には、最悪の場合、社会的な反発を招く恐れもある。その一方で、こうした活動を行う組織は社会的に確立しておらず、また方法論も制度として十分ではない。このため、社会的合意形成を支援するNPO法人PI-Forum(ピー・アイ・フォーラム)の活動を通じて、実証的に社会的合意形成の意義、方法、知恵、事例などを研究している。

研究業績 (2008 年度)

論文・作品等

講演・口頭発表

石川雄章:「交通と情報社会～情報化による交通事業の新たな展開」, JREA平成20年度特別講演会, 2008. 【招待講演】【一般向け】

石川雄章:「ITを活用した業務改善の取り組み」, 東京都講演会, 2008. 【招待講演】【一般向け】

石川雄章:「Ea-sy method ～簡単で効率的な業務改善の方法～」, JACIC講演会, 2008. 【招待講演】【一般向け】

須美徹太郎・特任教授

研究テーマ (主たるもの)

研究業績 (2008 年度)

論文・作品等

分担著書

須見徹太郎:「「風水害に関する制度」、災害危機管理論入門」, 吉井博明・田中淳編, 弘文堂, 2008 年.

須見徹太郎:「「河川情報」、災害情報論入門」, 田中淳・吉井博明編, 弘文堂, 2008 年.

雑誌論文

須見徹太郎:「情報で人の命を救うには?」, 会計検査資料, No.517, pp.34-35, 2008 年. 【一般向け】

須見徹太郎:「水害と情報」, 消防研修, No.85, pp.42-56, 2009 年.

その他論文

宇田川真之、田中淳、須見徹太郎:「平成 20 年 7 月美浜町における防災無線のミサイル着弾誤放送と住民の対応—電話(RDD)調査によるアンケート結果より—」, 日本災害情報学会第 10 回研究発表会予稿集, 2008 年.

須見徹太郎:「<土砂ダム>考」, 日本災害情報学会第 10 回研究発表会予稿集, 2008 年.

須見徹太郎他:「2008 年 8 月末豪雨災害等に関する調査報告」, 災害情報 No.7, 2008 年.

講演・口頭発表

須見徹太郎:「地形は動いている—国土という思想—」, UTalk, 2008. 【一般向け】

新聞・報道

須見徹太郎:「日本災害情報学会豪雨調査団の調査について」, NHK 名古屋放送局, 2008.

須見徹太郎:「金沢豪雨情報伝達を調査災害情報学会市の避難指示を評価」, 読売新聞金沢版, 2008.

須見徹太郎:「浅野川氾濫情報伝達が間に合わず」, 読売新聞金沢版, 2008.

大石岳史・特任講師

研究テーマ (主たるもの)

大規模文化遺産のデジタルコンテンツ化

大規模な文化遺産を 3 次元的に記録し, コンテンツ化する研究を行っている. 主に幾何形状のモデル化に従事しており, レーザレンジセンサを用いて計測された複数の距離画像を位置合わせ, 統合する手法の開発を行っている. 現在はカンボジア・アンコール遺跡群のバイヨン寺院を対象としてプロジェクトを進めている.

研究業績 (2008 年度)

ヘイ ウェスリー ディーン・特任講師

研究テーマ (主たるもの)

ユビキタス・トータルウェルネスシステム

高齢化社会が問題となっているが, 人間の QOL という観点からは, 自力で移動できるということが最低限保障されていなければならない。それは、脳の高次機能を中心とした呼吸循環系能力と筋・骨格系能力の維持と活性化であるが、これらの機能は、通常の社会生活を過ごすだけでは維持できない社会となっているのである。そこで、本研究では、行ってきた基礎研究を基に、通常の運動を気楽に行うことだけで、データを自動的に収集して、トータルに身体健康状態を維持・管理するシステムの構築をめざす。

反動動作を用いた跳躍における左右不均衡の影響

身体運動における左右不均衡は、パフォーマンスに大きく影響すると考えられている。本研究の目的は、1.

反動動作でのパフォーマンス、仕事量および運動能率に対する左右不均衡の影響を評価すること、2. バイオフィードバックトレーニングが、左右不均衡を減少させることやパフォーマンスおよび運動能率を改善することに及ぼす影響を調べることの2つである。

研究業績 (2008 年度)

松田剛・特任助教

研究テーマ (主たるもの)

研究業績 (2008)

水島希・特任助教

研究テーマ (主たるもの)

Brain-Machine Interface 研究開発における倫理的諸問題への対処システム構築

文部科学省脳科学研究戦略推進プログラムにおいて佐倉統分担研究者の担当する「Brain-Machine Interface の脳神経倫理的および法的枠組みに関する研究」のうち、BMI 研究開発プロジェクト内部において、どのような倫理問題対処システムを構築すべきかを検討し、試行する。特に現在は、研究倫理コンサルテーション(ベンチサイド倫理コンサルテーション)窓口を設置し、研究のあらゆる段階で生じる倫理課題への迅速な対処を試行している。

フェミニズム科学批評による脳神経科学分析

先端科学技術領域である脳神経科学において、フェミニズム科学批評の立場から諸課題を抽出する。

研究業績 (2008)

その他論文

水島希: 「Nicole Le Douarin 先生を囲むセミナーに参加して」, 神経科学ニュース, No.5, pp.35-37, 2008 年.

齋藤竜彦・特任研究員

研究テーマ (主たるもの)

研究業績 (2008)

横地早和子・特任研究員

研究テーマ (主たるもの)

熟達化と創造性の心理学

これまで主に職人や芸術家など、もの作りに携わっている人たちの「創造のメカニズム」や「熟達者になっていくプロセス」などの研究を進めてきました。熟達化の心理学と創造性の心理学をつなぎながら「創造的熟達とは何か」「創造的な熟達者はどんな特徴を持っているか」そして「創造的に生きる姿とはどういうものなのか」について、人間が持つ創造というすばらしい能力と、ポジティブに生きる力への希望と信頼を持って研究を進めていきたいと思っています。

研究業績(2008 年度)

論文・作品等

分担著書

横地早和子:「心理学実験・レポートの書き方ー心理学基礎演習 Vol. 1.」, 西口利文・松浦均編, ナカニシヤ出版, 2008 年.

その他論文

横地早和子:「アートの営み≡研究の営み」, 日本発達心理学会ニューズレター, 2008 年.

講演・口頭発表

岡田猛・横地早和子:「現代アーティストの創作プロセスを探るー創造的熟達と類推的ずらしに着目してー」, シンポジウム「behind the seen 熟達者の表現を支えるもの」, 2008.

横地早和子・石橋健太郎・山原麻紀子・中西紗織:「本物の中で学ぶー芸術教育における学びの意味と可能性ー」, 日本教育心理学会第 50 回大会自主シンポジウム, 2008.

受賞・特許

受賞

岡田猛・横地早和子・難波久美子・石橋健太郎・植田一博: 日本認知科学会論文賞「現代美術の創作における「ずらし」のプロセスと創作ビジョン」, 日本認知科学会, 2008 年.

IV. 外部資金獲得状況

平成 21 (2009) 年 3 月 31 日時点で情報学環に在籍していた教員各人が関係する外部資金の状況を、情報学環研究協力係のデータをもとに、収録しています。

1. 科学研究費補助金交付一覧
2. 寄附講座
3. 受託研究受入一覧
4. 奨学寄付金受入一覧
5. 共同研究受入一覧
6. その他外部資金

1. 平成20年度科学研究費補助金交付一覧

研究種目	研究課題	研究代表者	直接経費	間接経費
特定領域	わが国における火山罹災地の複合的資料による歴史的文化・自然景観の復元	馬場 章	4,400	0
特定領域	知識社会経済システムの共創的発展とそのガバナンスに関する研究	須藤 修	14,500	0
特定領域	電子化診療情報の患者への提供のあり方に関する調査研究	山本 隆一	4,700	0
若手(B)	スポーツを核とした地域活性化に関する研究:仙台市を事例として	松野 将宏	200	60
若手(B)	50年代のカストリ雑誌に関する文化史的研究-GHQ撤退以降の時期を中心に-	吉田 正高	1,500	450
若手(B)	大学研究者が産業競争力向上に果たす役割の定量分析:知識の生産と流通	七丈 直弘	1,200	360
若手(B)	ネットワーク文化情報資源で活用する人名典拠情報に関する研究	研谷 紀夫	2,000	600
若手(B)	方向感覚のトレーニング:地理的スケールでの空間的思考とその訓練可能性	石川 徹	800	240
若手(B)	ネットワークロボットを用いた睡眠を中心とする生活パターン管理・調整支援	湧田 雄基	1,600	480
若手(B)	病院向け災害対応 E-ランニングシステム構築パッケージの開発	大原 美保	1,400	420
基盤(A)	日本前近代史料の国際的利用環境構築の研究	石上 英一	8,200	2,460
基盤(A)	ヒトとロボットの原初的コミュニケーションに関する発達認知神経科学的研究	開 一夫	7,100	2,130
基盤(A)	デジタル茶室の花鳥風月的な時空間創出技術	河口 洋一郎	8,200	2,460
基盤(A)	美術創作プロセスの解明に基づく創造性教育支援	岡田 猛	11,400	3,420
基盤(B)	把持状態を利用したウェアラブル展示教材の開発	山内 祐平	3,800	1,140
基盤(B)	センサネット技術を利用した寒冷地土壌表層における面的な水循環変動プロセスの解明	溝口 勝	2,700	810
基盤(B)	空間共有通信を軸とした3次元光線情報処理技術の体系化	原島 博	4,900	1,470
基盤(B)	薬物胎盤移行と作用のPK・PD評価に基づく胎児毒性予測システムの構築	澤田 康文	3,500	1,050
基盤(B)	混雑状況下における人物追跡にもとづく行動解析	佐藤 洋一	4,100	1,230
基盤(B)	テレビ・コンテンツ分析の情報記号論的研究と批評プラットフォームの制作	石田 英敬	8,200	2,460
基盤(C)	成熟後および発育期における運動習慣が小脳シナプスの機能と運動スキルに及ぼす影響	柳原 大	900	270
基盤(C)	情報セキュリティの相互依存性に関する経済分析	田中 秀幸	1,300	390
基盤(C)	地殻・マントル不均質性の定量化と、広帯域強震動シミュレーションモデルの構築	古村 孝志	1,300	390
萌芽研究	低投入持続的稲作技術SRIの信憑性を確認するための土壌物理学的実証研究	溝口 勝	900	0
萌芽研究	投薬ミス事例ライブラリーに基づく「事故疫学」確立と事前予測法の開発	澤田 康文	1,700	0
特別研究員奨励費	メディア研究と実践の有機的結合に向けてーポピュラー音楽/映像をめぐるメディア史ー	溝尻 真也	500	0
特別研究員奨励費	Self-helpの歴史社会学ー近代日本社会における〈自己の技法〉の構築と変容	伊佐 栄二郎	900	0
特別研究員奨励費	近代日本音楽におけるメディアと子どもに関する歴史社会学的研究	周東 美材	500	0
特別研究員奨励費	<広告制作者>の歴史社会学:近現代日本のメディア論的主体形成に関する研究	加島 卓	900	0
特別研究員奨励費	合衆国の対アジア文化政策ーアメリカナイゼーションとVOAのラジオ放送に着目してー	市川 紘子	900	0

特別研究員奨励費	現代的アメリカ映画の視聴覚的様式分析—表象技術と文化形態に関するイメージ論的研究	中路 武士	900	0
特別研究員奨励費	複合現実感技術による飛鳥京の復元	角田 哲也	900	0
特別研究員奨励費	自然災害発生後の国際緊急援助におけるガバナンスの研究	地引 泰人	500	0
特別研究員奨励費	乳幼児期における行動制御の発達プロセスおよびメカニズムの解明	森口 佑介	700	0
特別研究員奨励費	文化資源における三次元デジタルデータの利活用	鎌倉 真音	500	0
特別研究員奨励費	アジア太平洋地域主義 —その歴史、理論、可能性の検討	保城 広至	700	0
特別研究員奨励費	ナショナリズムの知識人の社会学	新倉 貴仁	500	0
特別研究員奨励費	メディア表現におけるコミュニケーション・デザインの実践と思想の研究	平口(鳥海) 希世子	400	0
特別研究員奨励費	大規模文化財モデルをインタフェースとしたオンラインデータベースシステム	岡本 泰英	600	0
特別研究員奨励費	日韓メディア文化交流の歴史-戦後日韓におけるテレビ文化の形成	金 ソンミン	500	0
特別研究員奨励費	社会的参照行動のメカニズム—情動・感情刺激の処理と行動調整の間	松中 玲子	500	0
特別研究員奨励費	「創造的表現のための鑑賞」を促す美術展示及び教育プログラムの開発	縣 拓充	500	0
特別研究員奨励費	アクティブRFIDタグネットワークによるユビキタス情報基盤の構築	中村 圭一	600	0
特別研究員奨励費	メディア政策 文化政策 電気通信政策 情報産業政策	HADL,Gabriele	700	0
特別研究員奨励費	現代日本における情報通信分野の産官連携とイノベーションモデルに関する研究	JARVIS, S	700	0
特別研究員奨励費	公共空間の政治経済—日本の大都市の民・官協働における新しい公共空間に関する考察	DVORAK, G. E.	1,200	0
特別研究員奨励費	戦後日本における「南洋」の記憶に関する研究	DIMMER, C.	500	0
研究成果データベース	データベース20世紀・21世紀年表	田中 明彦	6,100	0
学術図書		研谷 紀夫	1,700	0
若手研究(スタートアップ)	社会的・認知的存在感を高める外国語コミュニケーション学習システムの開発と評価	山田 政寛	1,370	411
若手研究(スタートアップ)	情報通信技術利用が社会生活に与える影響に関するマルチレベル分析による実証的研究	北村 智	1,010	303
			125,280	23,004

東京大学 大学院情報学環・学際情報学府 年報

平成22年1月 発行
編集兼発行者 東京大学大学院情報学環・学際情報学府
東京都文京区本郷7丁目3番1号
郵便番号 113-0033
電話：03-5841-5905 Fax:03-5841-5916
Email: tosyo@iii.u-tokyo.ac.jp

印刷・製本 株式会社 創志企画
東京都新宿区榎町73番
郵便番号 162-0806
電話:03-3267-5503 Fax:03-3235-1666
Email:soshi@kind.ocn.ne.jp
